

接触場面における日本語非母語話者の言語調節に
関する研究

—相手言語接触場面と第三者言語接触場面の比較—

**A Study on Non-Native Japanese Speakers' Language
Management in Contact Situations : Comparison of
Partner and Third-Party Language Contact Situations**

学籍番号 : B6G23502

氏 名 : 陳 新

文教大学大学院言語文化研究科
2019年度博士学位請求論文

氏名 陳 新

論文題目 接触場面における日本語非母語話者の言語調節に関する
研究—相手言語接触場面と第三者言語接触場面の比較—

英文題目 A Study on Non-Native Japanese Speakers' Language
Management in Contact Situations : Comparison of Partner
and Third-Party Language Contact Situations

主査教授 川口 良

本研究は中国語を母語とする日本語学習者（CNS）が、日本語母語話者との相手言語接触場面（以下、相手場面）と、非母語話者との第三者言語接触場面（以下、第三者場面）において、「コミュニケーションの達成」と「良好な人間関係の構築」という方向性に沿って行う言語調節について明らかにし、その仕組みの解明を目指すことを目的としている。分析視点としては、本研究は、CNS の接触場面における言語調節の仕組みを研究全体の縦糸として据え、その諸相を具体的に捉えるための横糸を、「スピーチレベル管理」、及び話者交替の際に起こる「発話の重なり」の2つの側面に求めることとした。分析に用いたデータは、中国人上級学習者（CNS）16名と友人関係及び初対面関係にある日本語母語話者（JNS）13名、韓国人上級学習者（KNS）7名、ドイツ人上級学習者（GNS）2名、マレーシア人上級学習者（MNS）1名、合計10名の日本語非母語話者との2場面各14組による自由会話、合計28組560分の会話である。

本研究は全7章からなっている。以下に各章の概略を述べる。

第1章では、本研究の理論的背景を説明し、研究目的及び分析視点を述べ、本研究の概要を示した。

第2章では、本研究に関する先行研究を「第三者言語接触場面」、「スピーチレベル管理」、「発話の重なり」から概観し、問題の所在と得られた示唆を明らかにし、本研究の課題を以下の2点に設定した。

研究課題 1 相手場面と第三者場面において、CNS のスピーチレベル管理は、親しい友人と初対面の相手に対して、それ

それぞれのような選択基準によってなされるか。

研究課題 2 相手場面と第三者場面において、親しい友人と初対面の相手に対する CNS による発話の重なり及び重なり後の談話展開には、どのような特徴があるか。

第 3 章では、本研究で扱うデータの特徴、収集方法及び分析方法について述べた。なお、「スピーチレベル」と「発話の重なり」の分析項目については、SPSS 統計解析ソフトを用い、統計的な検定処理 (χ^2 検定) を行った。本研究の方法論によって得たデータをもとに実証的に論じたものが、第 4 章と第 5 章である。

第 4 章では、本研究の 1 つ目の分析対象である「スピーチレベル管理」の結果を示している。主な結果は以下の通りである。

まず、両場面ともに、CNS は「日本語のルール」に従って「親疎」という相手との人間関係を考慮し、「対友人」会話には非デスマス形を、「初対面」会話にはデスマス形を基調として選択する。一方、「初対面」会話、「対友人」会話ともに、CNS のスピーチレベル・シフトには相手が日本語母語話者か非母語話者かによって差が見られた。「対友人」会話では、相手場面の方が第三者場面よりデスマス形へシフトする傾向が強く、同じ「親しい友人」であっても、相手が日本語母語話者である場合には丁寧であろうとする CNS の意識が推測された。さらに、デスマス形へのシフトの状況を発話機能によって分類し、分析した結果、相手場面では情報内容を持たず、ほとんど無意識に発せられる「あいづち」の場合にデスマス形へシフトする傾向があるのに対して、第三者場面では、「重要部分の明示・強調」のような状況で談話の展開を明確にするためにスピーチレベル・シフトを行う傾向があることが分かった。

次に、「初対面」会話では、第三者場面の方が相手場面より非デスマス形へシフトする傾向が強く、同じ「初対面の相手」であっても、相手が非母語者である場合には丁寧であろうとする CNS の意識が下がることが推測された。さらに、非デスマス形へのシフトの状況を発話機能によって分類して分析し、次の結果が得られた。CNS は、第

三者場面においては「聞き手領域」に関わる発話や「聞き手の情報要求に応じる」発話が非デスマス形へシフトしやすいのに対して、相手場面においては「話し手領域」に関わる発話や「話し手自身に向けられた」発話が非デスマス形へシフトする傾向がある。これらのことから、CNSは、非母語話者には「心的距離の短縮」と「情報伝達」を優先するのに対して、母語話者には、待遇的意味に配慮して母語話者に「へりくだる姿勢」を見せる可能性が示唆される。以上の結果から、CNSのスピーチレベル・シフトには、言語外的要因として、相手が日本語母語話者である場合にはより丁寧であろうとする「学習者独自のルール」が存在することが指摘される。

第5章では、本研究のもう1つの分析対象である「発話の重なり」について分析した。主な結果は以下の通りである。

まず、「親しい友人」と「初対面の相手」に対するCNSによる「発話の重なり」は、相手が日本語母語話者か非母語話者かにかかわらず、相手に関心を示し、会話を円滑にかつ協働的に進行させるための手段として使われることが多く、好意的な人間関係の確立に貢献していることが明らかになった。一方、CNSによる「発話の重なり」の場面差に注目すると、話者間の親疎関係を問わず、相手場面での重なりは「発話冒頭」、「発話終了付近」において多く生起し、「発話途中」においては、「協調的な割り込み」が有意に多いのに対して、第三者場面での重なりは「発話途中」に多く生起し、「支配的な割り込み」が有意に多かった。このことから、CNSは相手との親疎関係にかかわりなく、相手場面では、相手が母語話者であることを意識して、言いたいことよりも話者交替規則や協調的な対人関係を優先するのに対して、第三者場面では、話者交替規則や対人関係よりも自分の言いたいことを率直に表出することを優先することが推測される。

次に、「発話の重なり後の談話展開」について、CNSによる「発話の重なり」が現れた後、話者間の親疎関係を問わず、相手場面では、会話参加者は相手を気づかう配慮が相互に強く働き、円滑な会話成立を優先するが、第三者場面では、対人関係への配慮よりも積極的な自

己表現を志向し、さらに、その重なりをきっかけに、互いに相手の発話を踏まえて談話を展開し、対称的な会話が成立していた。以上のように、CNS の発話の重なり及び、その後の談話展開においては、話者間の親疎関係を問わず、第三者場面の方が相手場面より、強い自己表現意欲と積極的な会話参加の姿勢が観察された。

第 6 章では、上記の第 4 章と第 5 章の分析に基づき、総合的に考察した。日本語非母語話者は、相手場面では、相手が母語話者であることを強く意識して、目標言語の言語規範と対人関係に配慮しつつ円滑な会話成立を優先する言語調節を行う。それに対して、第三者場面では、目標言語の言語規範や対人関係よりも、明瞭な自己表現や会話への積極的な参加を志向した言語調節を行う。さらに、第三者場面における非母語話者の積極的な会話参加や協働してコミュニケーションを維持しようとする会話の様相から、「非母語話者の日本語」を一つの「正当なバリエーション」と新たに位置づけることを提言し、日本語教育への示唆を述べた。

第 7 章では、今後の課題について述べた。

本研究の中核となる第 4 章は、投稿論文①「中国人上級学習者の相手言語接触場面と第三者言語接触場面におけるスピーチレベル管理について」(文教大学大学院『言語文化研究科紀要』第 5 号、2019 年、pp.33-58) をもとに加筆修正したものである。また、第 5 章は、投稿論文②「中国語を母語とする日本語上級学習者の割り込み発話に関する一考察」(文教大学大学院『言語文化研究科紀要』第 3 号、2017 年、pp.21-50)、投稿論文③「会話における発話の重なり後の談話展開について」(文教大学言語文化研究所『言語と文化』第 31 号、2019 年、pp.89-113) 及び口頭発表①「会話における割り込み後の談話展開に関する一考察」(『社会言語科学会第 40 回大会発表論文集』、2017 年、pp.142-145)、口頭発表②「中国人上級学習者の相手言語接触場面と第三者言語接触場面における発話の重なりについて」(『2018 年度日本語教育学会春季大会予稿集』、2018 年、pp.99-104) をもとに加筆修正したものである。

目 次

第 1 章 研究の理論的背景及び研究目的	1
1. はじめに	1
1.1 日本社会の現状と接触場面の重要性	1
1.2 本研究における接触場面の捉え方	2
1.3 第三者言語接触場面の重要性	4
1.4 本研究における「言語調節」の位置づけ	8
1.4.1 本研究における「言語調節」の再定義	8
1.4.2 「言語調節」の方向性	9
2. 研究目的及び分析視点	10
3. 研究の概要	12
第 2 章 先行研究及び研究課題	13
1. 第三者言語接触場面に関する先行研究	13
1.1 言語面の調節に関する先行研究	13
1.2 心理面の調節に関する先行研究	20
1.3 まとめ	20
2. 「スピーチレベル管理」に関する先行研究	21
2.1 母語場面におけるスピーチレベル管理に関する研究	21
2.2 接触場面におけるスピーチレベル管理に関する研究	26
2.2.1 相手言語接触場面におけるスピーチレベル管理に関する研究	26
2.2.2 第三者言語接触場面におけるスピーチレベル管理に関する研究	
.....	28
2.3 まとめ	29

3. 「発話の重なり」に関する先行研究	30
3.1 母語場面における「発話の重なり」に関する研究	30
3.2 接触場面における「発話の重なり」に関する研究	34
3.3 まとめ	37
4. 第2章のまとめ及び研究課題	38
第3章 研究方法	40
1. 本研究が収集するデータについて	40
1.1 自由会話	40
1.2 参加者間の人間関係	41
1.3 日本語非母語話者の日本語能力	42
2. 調査参加者	43
3. 調査方法と会話情報	46
4. 分析方法	47
4.1 文字化の方法	47
4.2 分析項目	52
第4章 相手場面と第三者場面における「スピーチレベル管理」について	53
1. 「スピーチレベル」に関連する用語について	53
1.1 先行研究における「スピーチレベル」の関連用語の整理	53
1.1.1 スピーチレベル	55
1.1.2 スピーチスタイル	56
1.1.3 待遇レベル	57
1.2 本研究における「スピーチレベル」の捉え方	58

2. 本研究における「スピーチレベル」の分析方法	59
3. 「対友人」会話における「スピーチレベル管理」	64
3.1 基本的スピーチレベルの選択及びその選択基準	64
3.2 デスマス形へのシフト要因の分析	66
3.2.1 発話機能によるデスマス形へのシフトの分類	66
3.2.2 発話機能によるデスマス形へのシフト要因	69
3.3 「対友人」会話における CNS のスピーチレベル管理のメカニズム	76
4. 「初対面」会話における「スピーチレベル管理」	78
4.1 基本的スピーチレベルの選択及びその選択基準	78
4.2 非デスマス形へのシフト要因の分析	80
4.2.1 発話機能による非デスマス形へのシフトの分類	80
4.2.2 発話機能による非デスマス形へのシフト要因	82
4.2.2.1 情報の受信を示す時	82
4.2.2.2 情報の整理を表す時	89
4.2.2.3 感情の表出を行う時	94
4.2.2.4 あいづちを打つ時	97
4.3 「初対面」会話における CNS のスピーチレベル管理のメカニズム	98
5. 第 4 章のまとめ及び考察	99
第 5 章 相手場面と第三者場面における「発話の重なり」について	102
1. 「発話の重なり」の分類基準の整理	102
1.1 先行研究における「発話の重なり」の分類	102
1.2 本研究における「発話の重なり」の分類	105

2. 「対友人」会話における「発話の重なり」	111
2.1 「発話の重なり」の相手場面と第三者場面の比較	111
2.1.1 「発話の重なり」の位置による出現率	111
2.1.2 「発話冒頭における同時発話」	113
2.1.3 「発話終了付近における同時発話」	114
2.1.4 「発話途中における同時発話」	115
2.1.4.1 「協調的な割り込み」	117
2.1.4.2 「支配的な割り込み」	124
2.1.5 まとめ	129
2.2 発話の重なり後の相手場面と第三者場面の談話展開	130
2.2.1 重なり後の談話展開	130
2.2.2 支障なく両者の発話が続行する	133
2.2.3 重ねられた話者が中断発話を再開する	136
2.2.4 重ねた話者がターンを取って話題を転換する	139
2.2.5 競合的に各自のフロアを継続する	141
2.2.6 まとめ	143
2.3 2節のまとめ	144
3. 「初対面」会話における「発話の重なり」	145
3.1 「発話の重なり」の相手場面と第三者場面の比較	145
3.1.1 「発話の重なり」の位置による出現率	145
3.1.2 「発話冒頭における同時発話」	147
3.1.3 「発話終了付近における同時発話」	148
3.1.4 「発話途中における同時発話」	150

3.1.4.1 「協調的な割り込み」	152
3.1.4.2 「支配的な割り込み」	161
3.1.5 まとめ	162
3.2 発話の重なり後の相手場面と第三者場面の談話展開	164
3.2.1 重なり後の談話展開	164
3.2.2 支障なく両者の発話が続行する	166
3.2.3 重ねられた話者が中断発話を再開する	169
3.2.4 重ねた話者がターンを取って話題を転換する	173
3.2.5 まとめ	175
3.3 3節のまとめ	176
4. 第5章のまとめ及び考察	177
第6章 総合考察	181
1. 日本語非母語話者の言語調節	181
2. 「非母語話者の日本語」の新たな位置づけ	185
3. 日本語教育への示唆	187
第7章 今後の課題	190
参考文献	192
付録	209

第 1 章 研究の理論的背景及び研究目的

本章では、まず 1 節において本研究の理論的背景を説明し、2 節で研究目的及び分析視点を述べ、3 節で研究の概要を説明する。

1. はじめに

ここでは、本研究の理論的背景及び研究意義について説明する。まず、1.1 で日本社会の現状と接触場面の多様性について述べる。1.2 で本研究における接触場面の捉え方について、1.3 で第三者言語接触場面に注目する重要性について、検討する。最後に、1.4 で本研究における言語調節の位置づけを述べる。

1.1 日本社会の現状と接触場面の多様性

法務省入国管理局 HP¹の統計によると、2018 年末現在の日本国内に居住する在留外国人は 2,731,093 人、独立行政法人日本学生支援機構の外国人留学生在籍状況調査結果²によると、2018 年 5 月 1 日現在の留学生数は 298,980 人で、過去最高であるという。また、2020 年度を目途にした文部科学省の「留学生 30 万人計画」³や、経済連携協定（EPA）⁴に基づいた外国人看護師・介護福祉士の受け入れなどを考えると、日本における外国人の存在が強まりつつあると言えよう。

このような社会背景においては、地域社会、職場、学校などにおいて、異なる母語と背景を持つ人同士の接触が日常化してきており、日本語母語話者と非母語話者との接触はもちろん、日本語を共通語とし

¹ http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00081.html
(2019 年 5 月 12 日検索)

² https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student/data2018.html
(2019 年 5 月 12 日検索)

³ 「留学生 30 万人計画」とは、日本を世界により開かれた国とするために、アジア、世界の間のヒト・モノ・カネ、情報の流れを拡大する「グローバル戦略」を展開する一環として、2020 年を目途に 30 万人の留学生受入れを目指すものである。

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/07/08080109.html (2019 年 5 月 12 日検索)

⁴ 経済連携協定（EPA）とは、貿易の自由化に加え、投資、人の移動、知的財産の保護や競争政策におけるルール作り、様々な分野での協力の要素等を含む、幅広い経済関係の強化を目的とする協定である。

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/fta/> (2019 年 5 月 12 日検索)

た非母語話者同士の接触も当然増加していることが予測される。例えば、日本語教育場面における日本語母語話者でない教授者と学習者、あるいは学習者同士のインターアクション場面をはじめとして、地域の外国人のネットワークにおけるボランティア活動やアルバイト、職場などで、非母語話者同士の日本語使用が頻繁に行われている場面もある。グローバル化の急速な進展につれて、日本国内の非母語話者が参加する接触場面はますます多様化していると言える。

1.2 本研究における接触場面の捉え方

接触場面に関しては、従来、母語話者と非母語話者間の接触が最も典型的な接触場面とされており（ファン 2006）、第二言語習得や日本語教育の立場から研究が盛んに行われてきた。これらの研究の多くは、非母語話者の言語行動と母語話者との違いに注目し、母語話者の規範を絶対視し、目標言語規範を学習者に習得させていこうとするものであった。さらに、その場面における言語問題は、学習者の言語能力の不足を理由として結論付けるものが多かった（田 2009、劉 2012、など）。

しかし、川口・角田（2005）などによると、そもそも「母語話者」や「日本語の言語規範」などをどのように定義するかは非常に難しい問題である。岡崎（2007）などは、日本語母語話者の規範を教え込み、非母語話者（外国人）を母語話者（日本人）に近づけようとする日本語教育は、日本語学習という名の下に非母語話者に対して日本語・日本語文化への同化を要請するものであると批判している。真田編（2006）は「母語話者と非母語話者の接触場面において見出される言語問題は、本来母語場面に限定されるべき日本語の規範が接触場面にももち込まれるために発生する」（p.54）と指摘している。また、ファン（2010）は、ポスト近代社会⁵の接触場面においては、個々の母語場面では観察できない多くの言語規範が存在し、その言語規範には

⁵ 大野（2000）によれば、「ポスト近代社会」とは、「平成期（一九八九～現在）の、グローバル化に出現しつつある情報化やテクノロジー化や消費文化（Consumer Culture）に伴う社会的＝文化的なパターンである」（p.5）。

「不一致性 (norm discrepancy)」、「多様性 (norm variability)」、「変動性 (norm mobility)」という特徴があると述べている。このように、ますます多様化、かつ複雑化している異文化接触場面に着目すると、「接触場面での基底規範が常に日本語母語規範にあるという一元的な見方も一層不適切になってくる」(加藤 2010 : p.13) のであり、非母語話者(学習者)を日本語母語話者に近づけようとして、母語話者のみの言語規範を教え込むような形式にはやはり限界があるのではないかと思われる。さらに、加藤(2010)は「母語話者のみの言語規範を言語教育の対象としていこうとするこれまでの言語教育の姿勢はもはや非現実的であるばかりか、将来的に相互理解のために活用されうる日本語自体の衰退も導きかねない」(p.4)とも述べている。

また、接触場面における非母語話者の参加、特にその非母語話者による規範からの逸脱については、従来、インターアクションに障害をもたらす問題として否定的に評価されることが多かった。しかし、近年、日本における外国人の増加により、日本語非母語話者と共生し、非母語話者との対等な関係を重視する意識が高まりつつあり、「接触場面で生起する問題はすべて非母語話者に原因がある」ということに対して疑問が提起されており、非母語話者の参加を「否定的な評価」から「肯定的な評価」へと見直す提唱もなされている(大平 2001、岡崎 2002、川口・角田 2005、村岡 2006、八木 2007、川口・角田 2010、芝原 2012、川口 2015、など)。大平(2001)は、このような「問題としてのノンネイティブスピーカー性」⁶という視点を批判し、ノンネイティブスピーカーの「逸脱」と見なされる行為は、コミュニケーションの参加者の相互行為的実践に協働的に構築されるものとしている。また、村岡(2006)は、接触場面で生起する問題(規範からの逸脱)について、「問題を物珍しさ、新しいもの、自分の持っていないものなどと評価したり、再評価することによって、その問題を素材にしてインターアクションの量を増やしていくことが、接触場面では起

⁶ 「問題としてのノンネイティブスピーカー性」とは、ノンネイティブスピーカー性を規範からの逸脱として捉える見方である。

きることがある」(p.112)と述べて、肯定的に評価している。さらに、接触場面に参加する非母語話者を、インターアクションの障害としてではなく、その「外来性をインターアクションを促進させるリソースとして」(p.113) 肯定的に捉える可能性が論じられている。

以上を踏まえて、本研究では、接触場面を、「非母語話者の日本語」を「母語話者の日本語」に近づけることを目的とする場面としてではなく、「異なる母語を個人的属性の一つと考え、接触場面を、日本社会という言語共同体において一人ひとりがその言語資源、すなわちリソースを活用しながらコミュニケーションを行う場面」(川口 2015 : p.5) として捉えることにする。

1.3 第三者言語接触場面の重要性

Fan (1994)、ファン (1999、2006、2016、など) は、接触場面で実際に使われる言語と参加者の使用言語との関係によって、接触場面を、相手言語接触場面 (Partner Language Contact Situation)、第三者言語接触場面 (Third-party Language Contact Situation)、共通言語接触場面 (Cognate Language Contact Situation) の3つの場面に細分化させている。相手言語接触場面は、参加者のどちらかが相手の言語を用いてインターアクションを行う場面である。第三者言語接触場面は、参加者の双方が自分の言語ではなく第三者の言語でインターアクションを行う場面である。共通言語接触場面は、接触場面でありながら参加者はそれぞれ自分の言語でインターアクションを行う場面である。さらに、ファン (2006) は、接触場面のタイポロジーを次の表 1 のようにまとめている。

表 1 接触場面のタイポロジー

接触場面の種類	参加者	接触言語	従来 の 概念
相手言語接触場面	La 話者の参加者 A Lb 話者の参加者 B	La または Lb 相手の言語を使用	NS-NNS 場面
第三者言語接触場面	La 話者の参加者 A Lb 話者の参加者 B	La と Lb 以外の 第三言語 Lc を使用	NNS-NNS 場面
共通言語接触場面	La 話者の参加者 A Lb 話者の参加者 B	La と Lb の共通性に より、A は La、 B は Lb を同時使用	NS-NS' 場面

(ファン 2006: p.129 より)

注) 表 1 に示す La は参加者 A の母語、Lb は参加者 B の母語を指す。

以上のファンの一連の研究による接触場面の 3 分類は、接触場面研究を次の段階に移行させた重要な理論であり、日本語を取り巻く環境の多様性を顕在化させたという点で画期的なものである(村岡 2016、尹・春口 2017) と言えよう。

現在、日本における外国人居住者が増加するにつれて、地域社会、学校などにおいて、非母語話者同士が日本語を用いる第三者言語接触場面が顕在化してきた。例えば、筆者が所属している大学においても、中国人留学生、韓国人留学生、ドイツ人留学生など、様々な母語を持つ留学生が日本語を共通語としてコミュニケーションを取ることも日常的なものになっている。このような場面で、日本語が第三者言語として使われる理由について、筆者自身の経験から説明する。1 つは「コミュニケーションの輪を広げたい」ということである。中国人同士でも、ほかの外国人がいる場合には、相手が会話に参加できるように、日本語で話している。同様に、他国の留学生同士が会話をしている時に、自分が無視されず、その会話に参加できるように、相手には日本語で話してほしいと考える。したがって、異なる母語と文化を持つ人々が同時にコミュニケーションを取る場合、共通語としての日本語を使うのが一番望ましいと考えられる。もう 1 つの理由は、ファン

(2011) が述べたように、「他の言語より効率がよい」ということである。例えば、筆者の所属する言語文化研究科には、モンゴル語を母語とする中国人 A さんがいる。A さんは国籍が中国であるものの、中国語は母語ではなく、第二言語として小学生から高校生の間に習得していたのである。したがって、中国語を母語とする筆者と、モンゴル語を母語とする A さんが日本語でコミュニケーションを取る場面は、第三者言語接触場面と言える。さらに、A さんは中国語より日本語のほうが堪能であるため、2 人でコミュニケーションを取る場合、中国語で話すより日本語で話すほうが通じやすく、効率がよいのである。

ファン (2011) は、外国人住民の増加によって、非母語話者の言語生活⁷の動的な面も無視することができなくなると指摘しており、さらに、非母語話者の積極的な言語生活は、「近年「生活者としての外国人」のための地域日本語の議論で取り上げられた「自己実現能力」や「多文化共生コミュニケーション能力」にもつながる (岡崎 2007、日本語教育学会 2008)」(p.44) と述べている。

さらに、文化庁が 2007 年から推進する「生活者としての外国人」のための日本語教育事業⁸では、地域における日本語教育の担い手を、日本語母語話者だけとするのではなく、日本語非母語話者の参加も積極的に促すべきであるとしている。つまり、ポスト近代社会の非母語話者は接触場面に対して新たな意義をもたらしているのであり (ファン 2010)、この点からも、非母語話者同士の第三者言語接触場面の重要性について論じる必要があると言える。

一方、筆者を含めた日本語学習者は、ファン (1999)、赤羽 (2014)、などが述べたような「日本人と話すときは緊張する」「留学生同士で

⁷ ファン (2011) は、「言語生活」という用語を「日常生活での言語使用」ではなく、「言語で作る上げるライフスタイル」として捉え直している。具体的には、非母語話者は、日本語以外にも、自分の持っている言語リソースを活用し、日本で出会った様々な人との接触場面に参加することによって、豊かな言語生活、ひいては生活全体の計画を実現しようとしていると述べている (p.45)。

⁸ http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/index.html (2018 年 10 月 2 日 検索)

話すときはリラックスして話せる」という気持ちを持っている。また、相手が日本人である場合、日本人が話すような日本語を話さなければならない、日本人が理解できるように話さなければならないと強く意識した結果、日本語の規範や形式に縛られ、日本語では自分の言いたいことを自分らしく表現できないと悩む上級学習者の姿が明らかにされている（鄭 2010）。このような報告に注目すると、話し相手が目標言語の母語話者か否かという要因が、学習者内部に生じる日本語のバリエーションに影響を与える可能性は看過できないのではないだろうか。

以上のことから、グローバル化の急速な進展は、接触場面の多様化を拡大させているだけでなく、そこに参加する当事者の言語使用にも質的な変化を生じさせていることが分かる（村岡 2010）。したがって、日本語を使用言語とした第三者言語接触場面の言語特徴を考察する際に、加藤（2010）が述べるように、現実の接触場面で行われるインターアクションを分析し、そこでどのような営みが行われているかを見極めていくことが重要であると考えられる。

しかし、現在、非母語話者同士の第三者言語接触場面は、母語話者と非母語話者との相手言語接触場面に比べて研究が進んでおらず、参加者の言語使用の実態に関してまだ明らかにされていないところが多い（ファン 2011）。また、現在の日本社会には、日本語母語話者と非母語話者の間に「我々」と「彼ら」のような線引きが依然として存在しており（Ohri 2006）、日本において「外国人」が会話に参加する場合、その「外国人」であるという属性が過度に「日本人」側に意識され、「外国人」側は不愉快な思いをしてしまうという報告もある（大場 2012）。多文化共生社会の実現にむけて、日本社会に生活の基盤を置いた非母語話者を理解するために、母語話者の意識を変える必要があり、現在の日本語教育の「標準」も再考する必要がある（八木 2007、ファン 2011、など）のではないだろうか。

そこで、本研究では、相手言語接触場面及び、第三者言語接触場面に焦点を当て、日本において豊かな言語生活を築いていこうとしてい

る非母語話者の姿を究明することにする。

1.4 本研究における「言語調節」の位置づけ

本研究は中国語を母語とする日本語学習者が相手言語接触場面と第三者言語接触場面において行う言語調節について明らかにし、その仕組みの解明を目指すものである。

われわれはコミュニケーションを行う際、あらゆる場面において、場面と相手に応じて何らかの言語調節を行う。その調節はコミュニケーションの目的によっても異なる。柳田（2015）によれば、対人関係を円滑に進めるための調節もあれば、非常時に正確な情報伝達を最優先にする調節もあるという。

以下、本研究における「言語調節」の再定義及び「言語調節」の方向性について述べる。

1.4.1 本研究における「言語調節」の再定義

コミュニケーション研究において、「調整」「言語調整行動」という言葉も用いられているが（金 2005、辛 2008、など）、言語管理理論⁹の考え方では、「調整」は、コミュニケーション内で問題が生じたときに言語問題を解決するために行われるストラテジーとして捉えられることが多い（ネウストプニー1995、など）。一方、その「調整」の範囲を広く捉え、問題が起こっている箇所だけではなく、コミュニケーションの過程における何らかの働きの全てを指すために、「調節」という用語を使用する研究がある（赤羽 2014、柳田 2015）。本研究では、赤羽（2014）と柳田（2015）に従い、問題が起こっている箇所だけでなく、コミュニケーションの過程において、会話参加者が円滑な会話を進めるために行う言語行動のすべてを指して「調節」という用語を用いることにする。

⁹ 言語管理理論はネウストプニー（1995）によって提唱された理論である。「言語管理（Language Management）」は何らかの問題を解決するものであり、「言語問題（language problems）」は規範（norms）からの逸脱によって生じ、留意、評価、調整というプロセスをたどるとされる。

1.4.2 「言語調節」の方向性

われわれがコミュニケーションを取る際、コミュニケーションの成立と友好的人間関係の構築を指向するのが一般的であろう。熊谷（2000）は、言語行動遂行における指向性について、「当該の言語行動の目的（依頼、謝罪、説明、など）を効果的に達成すること」と「相手との対人関係を良好に保つこと」の2種類を挙げている（p.109）。前者は、言語行動を起こす上で当然のことと考えられる。後者も、言語行動が対人行動であることを考えれば、もっともなことであるし、行動目的の達成のために相手の感情を損ねずにおくことは重要であるとしている。熊谷（2000）は、言語行動を行う話し手は、以上の2つの指向性を常に併せもっていると述べている。

また、岡崎（2003）は、母語話者と非母語話者が参加する接触場面においては、コミュニケーション自体を成立させるために双方の使用者から相互に歩み寄る様々な言語的共生行動の過程が形成されることを指摘している。その過程を「協働の形成の過程（collaboration）」（p.34）と捉え、その「協働」を形成していく方向性の中で、「相互調整行動」、「配慮行動」、「円滑化行動」という3つの代表的な調整行動が行われるとしている。「相互調整行動」とはコミュニケーションのやりとりに関わる行動であり、それには「A.意味に関わる相互調整行動（共有されていない単語の確認、言い換えなど）」、「B.理解に関わる相互調整行動（理解の確認、不理解の表明や先行話者の発話の理解が合っているかの確認）」、「C.話題に関わる相互調整行動（身近なトピックの選択、話題のコントロールの放棄、話題の突出、意図しない話題の推移の受け入れなど）」の3つがある。「配慮行動」とは、インターアクションの経験が蓄積される中で、会話をよりよく遂行していくために行われる様々な言語行動のことである。「円滑化行動」とは、より文化的な基礎に根差した発話行為における相互の歩み寄りによる行動である（pp.35-37）。

加藤（2010）は、上記の熊谷（2000）の2つの指向性も、岡崎（2003）の3つの調整行動も、基本的にコミュニケーションの十分な達成と、

良好な対人関係を形成・維持していこうとする方向性では一致していると述べ、接触場面に参加する母語話者と非母語話者双方が「コミュニケーションを成立させなければならない」、「良好な人間関係を構築していこう」という方向性で会話を遂行させるとしている。

以上を踏まえれば、日本語学習者は、インターアクションの過程において、「コミュニケーションの達成」と「良好な人間関係の構築」という方向性に沿って、何らかの言語調節を行うと考えられる。そのため、本研究では、加藤（2010）に従い、「コミュニケーションの達成」と「良好な人間関係の構築」という方向性から接触場面における日本語学習者の言語調節を把握することにする。

2. 研究目的及び分析視点

本節では、本研究の目的と分析視点について述べる。

本研究は中国語を母語とする日本語学習者が、日本語母語話者との相手言語接触場面と、非母語話者との第三者言語接触場面において、「コミュニケーションの達成」と「良好な人間関係の構築」という方向性に沿って行う言語調節について明らかにし、その仕組みの解明を目的としている。中国語に学習者の母語を統一したのは、筆者の母語が中国語であり、また、中国語を母語とする日本語学習者が日本国内のみならず、海外における日本語学習者の中で最も人数が多いからである¹⁰。

分析視点としては、本研究は、日本語学習者の接触場面における言語調節の仕組みを研究全体の縦糸として据え、その諸相を具体的に捉えるための横糸を、「スピーチレベル管理」、及び話者交替の際に起こ

¹⁰ 独立行政法人日本学生支援機構の外国人留学生在籍状況調査結果によると、2018年5月1日現在の日本国内の中国出身の留学生は114,950人と最多であり、留学生全体（298,980人）の38.4%を占め、大学などの高等教育機関において重要な存在である。
https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student/data2018.html（2019年5月12日検索）

また、国際交流基金が2015年度に実施した、「海外日本語教育機関調査」の結果報告書によると、世界で最も日本語学習者が多いのは、中国で953,283人となっている。
<https://www.jpfa.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey15.html>（2019年5月12日検索）

る「発話の重なり」の2つの側面に求めることとする。

日本語には、丁寧体（デスマス体）と普通体（非デスマス体/ダ体）といった文体、すなわち文末スピーチレベルがある。相手や場面に応じて適切にそれぞれを使い分けることは、メッセージ伝達よりも対人関係構築に関わる問題であり、社会文化能力、社会言語能力の一種とされている（三牧 2007、など）。当該の談話において、場面や相手に応じて基調として丁寧体か普通体かという「基本的スピーチレベル」を設定し、また、相手との心的距離の変化や談話の展開などに応じて、丁寧体から普通体へ、普通体から丁寧体へというスピーチレベル・シフトが生起する。このような談話におけるスピーチレベルに関する様々な調節を、本研究では、三牧（2013）に従い、包括的に「スピーチレベル管理」と称することにする。日本語社会ではこのような「スピーチレベル管理」を通して人間関係の形成や維持が行われていることを重視し、本研究では、接触場面における非母語話者の言語調節を探究するための分析視点として「スピーチレベル管理」に注目する。

もう1つの分析視点は、「コミュニケーションの達成」と「良好な人間関係の構築」に密接な関係があると思われる「話者交替」（turn-taking）¹¹である。会話では、私たちは全く無秩序に、話す順番（turn）を交替しているわけではなく、ターン移行の適切な場において円滑な話者交替を行っているが、実際の会話の中では、ある一時点で複数話者の発話が同時に現れる現象がしばしば起こる。このような発話の「重なり」は、一見話者交替規則に違反するもののように見えるが、会話参加者がその重なりを通じて何らかの行動を達成しようとし、談話展開をさらに進めようとした結果起きるとも考えられる。したがって、本研究では、「良好な人間関係の構築」のために行われる「スピーチレベル管理」に加え、会話参加者の「コミュニケーションの達成」のために行われる、話者交替の際の「発話の重なり」を分析視点として設定し、「言語調節」の仕組みを解明することにする。

¹¹ 「話者交替」（turn-taking）とは、会話の構成に見られる最も基本的なシステムの1つで、会話に関与するものが、話し手と聞き手に分かれて義務と権利を行使し、会話に参加することを指す（林 2008：p.104）。

3. 研究の概要

最後に、本研究の概要を述べる。

本研究は7章から成っている。第1章「研究の理論的背景及び研究目的」では、本研究の理論的背景を説明し、研究目的及び分析視点を述べ、本研究の概要を示す。第2章「先行研究及び研究課題」では、本研究に関する先行研究を「第三者言語接触場面」、「スピーチレベル管理」、「発話の重なり」の3点から概観して、得られた示唆と問題の所在を明らかにし、本研究の課題を設定する。第3章「研究方法」では、本研究で扱うデータの特徴、収集方法及び分析方法について述べる。第4章と第5章が、本研究の中核を成す部分であり、本研究の方法論によって得たデータをもとに実証的に論じたものである。まず、第4章「相手場面と第三者場面における「スピーチレベル管理」について」では、学習者の言語調節を考察する際の、本研究の1つ目の分析視点である「スピーチレベル管理」について分析する。次に、第5章「相手場面と第三者場面における「発話の重なり」について」では、学習者の言語調節を考察する際の、本研究の2つ目の分析視点である「発話の重なり」に注目して、分析し、論じる。続いて、第6章「総合考察」では、第4章と第5章の分析結果に基づき、日本語非母語話者の言語調節について総合的な考察を行う。最後に、第7章「今後の課題」では、残された課題について述べる。

第 2 章 先行研究及び研究課題

本章では、本研究に関する先行研究をたどり、問題の所在を明らかにし、本研究の課題を設定する。1 節では「第三者言語接触場面」、2 節では「スピーチレベル管理」、3 節では「発話の重なり」の先行研究について概観する。最後に、4 節では先行研究から得られた示唆と問題点について述べた上で、本研究の研究課題を設定する。

1. 第三者言語接触場面に関する先行研究

非母語話者同士の接触場面を表す基礎概念として「第三者言語接触場面」(Fan1994) が取り上げられて以降、それに関する研究がなされるようになった。その中には、第三者言語接触場面における言語使用の実態を明らかにするために、言語面の調節に注目した研究や、心理面の調節に関心が寄せられた研究がある。以下、1.1 では「言語面の調節に関する先行研究」、1.2 では「心理面の調節に関する先行研究」を概観し、1.3 でまとめる。

1.1 言語面の調節に関する先行研究

第三者言語接触場面の言語面の調節に関する研究には、ファン(1999、2003、2006、2011、2016)、van Lier& Matsuo (2000)、春口(2004)、大場他(2004)、岩田(2006)、玉石他(2016)、赤羽(2017)、などがある。

ファン(1999、2006)は、接触場面研究において重要な「言語ホストー言語ゲスト」という概念を提出している。母語話者と非母語話者が参加する相手言語接触場面の場合、母語話者は「言語ホスト」となり、非母語話者は「言語ゲスト」となって、参加者の間に「言語ホストと言語ゲスト」という関係が存在するようになるという。また、言語ホストである母語話者は、自分の言語を使用する側でもあり、「接触言語のオーソリティとなり、その規範はインターアクションの基底規範として使われることが多い」(ファン 2006 : p.136) としている。

母語話者は会話を維持し相互理解を確認する責任を果たし、話題の発展をコントロールしたり相手の参加を求めたり支援したりするという言語ホストとしての調整行動を行うことが多い。一方、非母語話者は会話参加を最小限にしたり回避したり、また、言語・非言語問題で相手の言語ホストに助けや支援を求めたりして、言語ゲストとしての参加調整を行う傾向があるとしている。

では、母語話者が参加しない第三者言語接触場面では、参加者はどのような役割を担ってどのように会話を調節するのだろうか。ファン（1999、2016）¹²は、初対面の日本語非母語者同士のペア 6 組の自由会話に基づいて、会話参加、言語バラエティーの選択、意味交渉の 3 点から、参加者の言語問題を取り上げて考察を行っている。その結果、非母語話者同士のみでの第三者言語接触場面では、以下の 3 点が明らかにされた。(1) 弱い基底規範しか成立しない。母語話者が不在のため、非母語話者の参加者が標準日本語にこだわらず、各自の中間言語規範に基づいて会話を行うことになる。それと同時に、日本語以外の言語リソース（国際語としての英語や互いの母語）を活用する。(2) はっきりとした言語ホスト－言語ゲストの関係が確立できない。相手に任せたり求めたりするような参加よりも、自分なりに参加できるような言語ホストの参加調整も活用される。また、自分の参加が困難な場合には、相手の非母語話者と共同で問題の解決にあたる傾向がある。(3) 言語問題を認識してもそれらをすべて解決しようとせずに、会話維持の方を優先する。さらに、第三者言語接触場面では、言語バラエティーについては、自己紹介の場合の「どうぞよろしく」「よろしく願います」の省略、他称詞「さん」の省略など、新しい日本語の規範を試みるという現象が見られたと述べている。

van Lier & Matsuo（2000）は、英語非母語話者同士の会話を対象としたものである。日本人英語学習者 1 名を対象とし、それぞれ上レベル、同レベル、下レベルの 3 名の友人関係の英語非母語話者との自由会話（合計 3 組）をデータとして、発話量や、質問、割り込み、話題

¹² ファン（2016）は、ファン（1999）を一部修正したものである。

導入などの頻度を数量化して、会話参加の特徴について分析した。その結果、異なるレベルの非母語話者同士では、レベルが上の参加者が多く質問したり、話題を導入したり、会話の方向づけをコントロールしたりして、会話維持の仕事をより多く負担しており、会話参加が非対称であったという。それに対して、同レベルの非母語話者同士では、参加者が互いに質問したり、話題を導入したりして、協働してコミュニケーションを維持しており、会話参加が全体として対称的であったことを報告している。

ファン（2003）は、ファン（1999）の調査の延長線として、言語バラエティーに焦点を当て、日本語非母語話者同士の第三者言語接触場面で行われた日本語の言語規範意識の管理について分析を行っている。デンマーク、中国、ニュージーランド出身の3名の中上級学習者を対象として、それぞれが日本語母語話者1名と会話し、直後に、超上級韓国人学習者、中上級フィリピン人学習者、中級韓国人学習者計3名と会話したデータを分析している。その結果、第三者言語接触場面では、参加者が日本語の規範を緩めたり、母語の規範を適用したり、また相手の母語の規範を試みたり、さらに新しい日本語の規範を作ったりする現象が見られたという。以上のことから、第三者言語接触場面においては、非母語話者同士の参加者が必ずしも接触言語の規範に基づいてコミュニケーションを行うとは限らないことが示された。

春口（2004）は、ファンの「言語ゲストー言語ホスト」という役割の概念を応用して、中級学習者と上級学習者による会話、中級学習者と日本語母語話者による会話をそれぞれ10組ずつ、計20組を対象に比較分析した。その結果、上級学習者と中級学習者との第三者言語接触場面においては、上級学習者が言語ホストに準じた行動を取る一方で、中級学習者も、役割意識が薄いながらも、上級学習者に比べると頻度が低いホスト・ストラテジーを使用することが明らかになった。以上のことから、「第三者言語接触場面での言語的な役割は、言語能力の上下によってのみ支配されるわけではない」（p.75）と結論付けている。

以上のことから、ファン（2006）が述べたように、第三者言語接触場面においては、相手言語接触場面と違って、はっきりとした言語ホストと言語ゲストの関係が確立できず、参加者たちは、「その場面の言語ホストとして自分を認知することは普通ないし、相手方によってそう見られることもない」（p.137）ことが分かる。つまり、非母語話者同士の第三者言語接触場面において、会話参加者はどちらかが会話のリーダーの位置を取るということが義務付けられないため、対等の立場で協働してコミュニケーションを維持しようとする調節がより多くなされ、全体として双方の会話参加が促進されることが予測される。

一方、近年、第三者言語接触場面の言語使用の実態を探った上で、会話教育への応用を考察する研究が行われるようになった。

大場他（2004）は、上級日本語学習者2名（中国人学習者と韓国人学習者）による15分程度の初対面の自由会話を収集し、第三者言語接触場面におけるあいづちなどの談話技能と会話のスタイルについて分析を行っている。その結果、第三者言語接触場面においては、会話参加者が、あいづち、質問表現、共同発話、繰り返し、評価表現など、様々な談話技能を使用して会話への積極的な参加を示していることを指摘した。さらに、その結果を踏まえて、非母語話者が自らの力で会話を維持し、会話に積極的に参加していくための談話能力をつけるための会話教育が今後期待されるべきだと述べている。

岩田（2006）は、言語レベルが同程度の、既知関係にある非母語話者10名による5組の2者間自由会話を研究対象とし、発話の連鎖に注目した分析を通して、その参加の対称性と非対称性の特徴を探った。その結果、第三者言語接触場面においては、学習者同士は全体的な傾向として会話参加が対称的になることが明らかにされた。特に、両参加者が互いに相手の発話内容を踏まえて自発的な意見や評価を重ねて、積極的に談話の内容を協同で作り上げる、という対称的な参加が多く観察されている。このような対称的な参加は「協同発話権に基づ

く会話参加」(村岡 2003 : p.250)¹³として捉えられ、「単独発話権」(話し手が話し、聞き手はあいづちで参加する)に基づく会話参加と対比されるとしている。さらに、以上の結果を踏まえ、相手と協力して会話を展開する対称的会話参加の経験が可能である非母語話者同士の会話の意義を視野に入れて、教育現場をデザインすることが必要であると提言している。さらに、岩田(2006)は、現場への示唆として、その会話教育の活動をデザインする際に、母語話者の日本語に非母語話者の日本語を近づけることだけを目指すのではなく、「日本語使用を他者との関係を構築するプロセスと捉え直し、非母語話者同士の会話を積極的に組み込むこと」(p.185)を提案している。

ファン(2011)では、第三者言語接触場面と日本語教育の可能性について詳細に論じられている。ファン(2011)は、ポストモダニズムの中で生まれた接触場面の観点から、多言語多文化社会の到来が予期される現代日本社会における日本語学習者の言語使用の一面を示している。特に彼らの日本での言語生活を支えるのに重要な役割をもつ外国人同士による日本語使用の場面に注目し、そこから日本語教育との関連性について考察している。その結果、(1)日本語規範の適用、(2)ジャパン・リテラシーの必要性、(3)促進される場面参加、(4)問題解決より問題の管理、という4つの第三者言語接触場面の特徴から日本語教育との関連性を論じている。さらに、ファンは「日本社会に生活の基盤をおいた外国人の利益を理解するためには、彼らの客観的な言語能力よりも、それぞれがどのように主観的に接触場面の使用言語を捉えるかという観点から、彼らの多言語使用とそこでの日本語の位置や意味づけを考えていくことが肝要である」(p.51)と述べている。以上のファンの論考は多様な接触場面の非母語話者の日本語使用を考える上で新たな視点と可能性を示唆していると言えよう。

玉石他(2016)は、好印象を与える/受ける要因に着目して、初級日本語学習者同士の初対面会話活動における意識について考察を行

¹³ 村岡(2003)では、「協同発話権に基づく会話参加」とは、「話題が複数の参加者に共有され、協同話者となって話題が生成されていく」(p.250)場合を指している。

っている。会話活動は事前活動、会話活動、事後活動からなっている。事前活動ではモデル会話を提示せず、会話の始め、終わり、話題選択、相手への好印象付与をどう行うかを学習者に考えさせる。会話活動では制限時間を設けて、一対一の会話を、相手を変えて2回行う。事後活動時では学習者に日本語または英語で内省シート(自分が相手に好印象を与えたか/相手から良い印象を受けたか)に記入させた上で、内省シートの記述に基づいて半構造化インタビュー調査を行った。その結果、同レベルの学習者との会話がリラックスして、より自己表現しやすいということが分かった。その結果を通して、非母語話者同士の第三者言語接触場面を会話教育の中で積極的に活かしていくべきだと論じている。また、学習者が「日本語能力」に関連して意識していたのは、習った文法項目等の言語形式の問題ではなく、コミュニケーションを円滑に進めるために互いに歩み寄る過程であったという。そして、このような接触場面参加者による歩み寄りの過程は、教室外でも、学習者、日本語母語話者を問わず会話する際に必要となるものであり、これを経験できたことは学習者にとって有益だったと述べている。

赤羽(2017)は、日頃から第二言語としての日本語で会話をする友人同士のペア、13組の約13時間にわたる日常会話資料を研究対象とし、第三者言語接触場面の日本語会話における対称的なやりとりに焦点を当て、参加者が自分や相手をどのように捉え、どのようにやりとりを継続しているかを論じている。ここでの対称的なやりとりとは、意見や情報を参加者双方が偏りなく自発的に提示し合う連鎖を指している。分析方法としては、会話データから対称的なやりとりを抽出し、参加者がどのようなカテゴリーに属して発話し、どのように相互行為が続いていくのかを、成員カテゴリー¹⁴化分析(サックス1989)

¹⁴ 赤羽(2017: p.87)によれば、「成員カテゴリー」とは、ある集団の中の相互行為に現れる成員のアイデンティティ・カテゴリーのことである。1人の人に適用できるカテゴリーは、例えば、「女性」「教師」「母親」など、つねに複数存在する。それぞれの成員カテゴリーは、個別の事象として存在するだけでなく、他の成員カテゴリーや成員が行う活動とともに組織化される。例えば、「父親」「母親」「子供」という成員カテゴリーは、「家族」という「カテゴリー化装置(membership categorization device)」に属

によって分析を行っている。その結果、以下の点を明らかにした。

- (1) 対称的なやりとりの中で形成されていたカテゴリーは、参加者同士に共通するカテゴリーと、対立するカテゴリー対であった。対称的なやりとりは、カテゴリーを維持しながら、発話連鎖の中で基盤化された知識を利用し、それに関連した情報や意見をさらに表明し合うことで継続していた。
- (2) 第三者言語接触場面の対称的なやりとりの中にも、「〇〇人」カテゴリーが現れた。このカテゴリーは、「〇〇(国名)は...?」「〇〇(国名)では...」のように、国名が含まれる質問や情報提示によって生じ、基盤化を進めながら対称的なやりとりが継続していた。
- (3) 国籍カテゴリーが現れると、「〇〇人/××人」カテゴリー対または『外国人』カテゴリー集合が形成される。「〇〇人/××人」カテゴリー対は、対比的にそれぞれの評価や情報を表明し合う連鎖に現れていた。『外国人』カテゴリー集合は、参加者が「〇〇人」「××人」というそれぞれの国の出身者として、「対日本」について意見を述べ合うことによって作られていた。

(p.101 より)

以上の結果から、第三者言語接触場面における対称的なやりとりは、参加者間でその時々により共有される知識を共通基盤として、それに関わるカテゴリー化が行われ、カテゴリーが維持されたり、カテゴリー間の関係が変化したりしながら、情報や評価、意見が共有され、さらに基盤化が進むことによって継続していることが分かった。さらに、これらの結果は、日本語教育現場において問題になる母語話者と非母語話者の非対称性を変革する可能性を示している。

している。ある成員カテゴリーが他の成員カテゴリーとともにグループを形成するとき、これは「成員カテゴリー集合」と呼ばれる。また「妻-夫」「親-子」というように、対となるカテゴリーは「カテゴリー対」と呼ばれる。

以上、第三者言語接触場面における言語面の調節に関する先行研究を概観した。

1.2 心理面の調節に関する先行研究

第三者言語接触場面の心理面の調節に注目した研究には赤羽(2014)がある。ここでいう「心理面の調節」とは、話者同士が対話者に応じて行う意識的配慮、すなわち会話に必要な注意・気遣いを指している。赤羽(2014)は、74名のアジア系留学生を対象として、対話者が日本人及び留学生の2場面で会話に必要な注意・気遣いをどの程度行っているかについて質問紙調査を行っている。その結果、対話者が日本人である相手言語接触場面では、相手の様子に注意を払い、対立や問題を避けようと意識するのに対して、留学生同士の第三者言語接触場面では、自己表現を積極的に行い、話の内容を深めようと意識していることが明らかになった。さらに、非母語話者の心理面の調節を変動させる要因は、「対話者との間で、使用言語を母語または目標言語として共有しているかいないかである」(p.143)とまとめられている。具体的に言えば、相手言語接触場面では、対話者にとっては母語、自分にとっては目標言語というように、使用言語についての背景が共有されていないため、目標言語の規範や相手の評価を意識し、不安や緊張が対立や問題回避に作用する。それに対して、第三者言語接触場面では、使用言語が目標言語であっても、母語場面における母語のように、対話者間で目標言語として共有されているために、不安や緊張が緩和され、積極的な自己表現が可能になるとしている。したがって、話し相手が母語話者か非母語話者か、すなわち、「話し相手の母語」という言語外的要因が非母語話者の心理面の調節を変動させる要因となることが分かる。

1.3 まとめ

以上、第三者言語接触場面に関する先行研究を、「言語面の調節」と「心理面の調節」の観点から概観した。これらの研究成果を総合す

ると、第三者言語接触場面において、会話参加者は、目標言語の言語規範という負担から解放され、不安や緊張が緩和され、積極的に自己表現しようとする意識が働くために、相手言語接触場面とは異なり、会話参加がより対称的で活性化されていると言えるだろう。したがって、非母語話者同士の第三者言語接触場面においては、目標言語の言語規範より、情報伝達の目的達成や会話への積極的な参加を重視して様々な言語調節が行われる可能性があると考えられる。

2. 「スピーチレベル管理」に関する先行研究

日本語は丁寧体（デスマス体）と普通体（非デスマス体/ダ体）というスピーチレベルが文末形式に組み込まれている言語であり、その適切な使い分けが円滑な人間関係の構築において重要な役割を担っているとされている（三牧 2007、など）。そのため、本研究では、学習者の言語調節を考察する切り口の 1 つとしてスピーチレベルを取り上げる。

日本語のスピーチレベルに関して、特にスピーチレベル・シフトに注目し、1980 年代以降、日本語母語話者間（母語場面）の会話を扱った研究が盛んに行われてきた（生田・井出 1983、宇佐美 1995、など）。その後、1990 年代後半から、母語話者との相手言語接触場面における日本語非母語話者のスピーチレベル管理の実態と習得にも多くの関心が寄せられている（上仲 2005・2007、三牧 2007、など）。さらに、近年、外国人の増加により、非母語話者同士の第三者言語接触場面におけるスピーチレベル管理に対しても目が向けられ始めている（陳・川口 2012、高橋他 2017、など）。本節では、2.1 と 2.2 でそれぞれ「母語場面におけるスピーチレベル管理に関する研究」と「接触場面におけるスピーチレベル管理に関する研究」を概観する。最後に、2.3 でまとめる。

2.1 母語場面におけるスピーチレベル管理に関する研究

日本語母語話者のスピーチレベルに関する研究には、生田・井出

(1983)、メイナード(1991、2001、2004)、三牧(1993、1997、2000)、宇佐美(1995)、鈴木(1997)、陳(2003)、伊集院(2004、2016)、劉(2013)、高宮(2017)など、相当数の研究蓄積がある。

丁寧体と普通体という文末のスピーチレベルの選択については、鈴木(1997)が「話し手と聞き手の関係によって、どちらのスタイルを選ぶかは上下・年齢差・親疎・ウチソト・場面といった社会的要因によって決定され、どちらのスタイルを選ぶかについては、日本語母語話者の間には共通した認識が存在する」(p.69)と述べている。鈴木(1997)は、話し手と聞き手の関係が変われば、話し言葉のスタイルも変わること指摘し、また、日本語の話し言葉には、社会的要因が存在するので、日本語のスピーチレベル・シフトは非相互的であると報告している。言い換えれば、「相手を自分と同じウチの人間として扱い普通体世界の中に位置づけることで親しさを表現できるのは上位者に限られ、下位の話し手は、常に上位の相手を丁寧体の世界に位置づけて、その制約の中で親しさを表わさなければいけない」(p.70)のであり、文体が丁寧体から普通体にシフトするのは、「〈話し手の領域〉〈中立の領域〉について述べている部分に限られており、謝辞・質問・依頼など聞き手を目当てとした発話は、すべて丁寧体を維持している」(pp.71-72)という。

社会的要因とスピーチレベルとの関連を重視する鈴木(1997)の研究と異なり、メイナード(1991、2001、2004)の一連の研究はスタイル¹⁵のゆれと主体感情・心理要素との関係に着目したものである。まず、メイナード(1991)は、日本語の日常会話や小説の会話に観察されるデス・マス体に混用される「ダ体」の意味を中心に考察している。具体的には、ダ体は話者が(1)急に思い出したり、感情を直接そのまま表現する時、(2)話し手が物語の世界に入り、眼前描写する時、(3)自分の内面をひとりごとのようにつぶやく時、(4)はっきり相手に向けて発話するのではなく、特に会話では発話を共作する時、(5)

¹⁵ スピーチレベルと主体感情・心理要素との関係に着目したメイナード(1991、2001、2004)は、スピーチレベルという用語を使わず、スタイルという用語を使用している。

従属的情報を提供する時、(6) 親しさや心理的距離感を縮めようとする時に使われることを指摘している。メイナード(2001)は、テレビドラマの会話を資料とし、同一人物の文体のシフトに焦点を当て、発話のスタイルを「相手意識型」、「相手アピール型」、「相手無視型」と分類し、それらのスタイル・シフトには、話者の、相手への意識の度合いの変化及び心的態度の変化に関わりがあると報告している。メイナード(2004)はそれまでの研究成果に基づき、丁寧体と普通体の選択と混用を談話のレトリックという面から捉え、感情のゆれとスタイルのゆれがどのように関わっているかについて考察している。スタイルの選択とそのシフトが、社会的な要因のみならず、むしろ、話し手が、「(1) 正式に相手に向けるか、(2) 相手との距離を保持・拡大するかというどちらか」というと心理的・心情的な要素によって決まる」(p.109)として、スタイルの選択は「基本的には相手を意識して正式に働きかけるか・かけないかという条件と、相手と近付きたいか・遠くにいたいかという条件による」(p.101)と論じている。

他方、談話分析・会話分析が盛んに行われるに伴い、スピーチレベル・シフトという観点から丁寧体と普通体の混用の機能が注目されるようになった。先駆的な論考として、生田・井出(1983)がある。生田・井出(1983)は「待遇レベルのシフト」と呼び、その機能として、①社会的コンテクスト、②話者の心的距離の調節、③談話の展開の3点を列挙している。その延長として、三牧(1993)、宇佐美(1995)は、生田・井出(1983)の②と③の機能をさらに詳しく分析している。三牧(1993)はテレビの対談番組を資料として談話分析した結果、談話の展開標識としての普通体のシフトには、(1)新しい話題への移行、(2)重要部分(結論・結末・意思・事実・論点など)の明示、強調、(3)注釈・補足・独話等の挿入があると結論付けている。この3点は宇佐美(1995)にも結びつく。また、普通体にシフトする条件として、宇佐美(1995)では、(1)相手の「ーレベル」¹⁶に合わせる時、

¹⁶ 宇佐美(1995)では、「-(マイナス)レベル」は常体を含む発話や、質問に対する簡略すぎる答え(「いつ頃いらしたんですか。」に対する「87年。」)など、改まり度の低

(2) 何かを確認したり、確認のための質疑をする時、(3) それに答える時、の3つが明らかにされている。

また、三牧(1997)は、スピーチレベル・シフトのFTA補償ストラテジー機能¹⁷について考察している。具体的に言えば、主にその心的距離の調節機能によって、シフトが親密性や丁寧さを強調し、FTA補償ストラテジーとして有効に機能していることを明らかにしている。逆に、対人機能では、へだたりを強調する場合、また、談話機能では重要部分を明示・強調する場合にFTA強調ストラテジーとしても機能するとしている。さらに、三牧(2000)は、丁寧体基調の談話にみる「独話的発話」、「過去の発話及び心情の直接引用」、「現在の心情の直接表出」という3種類の普通体の発話に注目し、これらの発話が、わきまえを示しながら、丁寧体の堅苦しさを緩和し、話者間の距離感を縮小させ、和やかにコミュニケーションを遂行させるという機能を果たしていると述べている。

陳(2003)は、同年代の初対面日本語母語話者同士の会話を資料にし、「ダ体発話」へのシフトが以下の8つの状況で現れやすいと論じている。それは①相手の発話の一部を繰り返す時、②先取りをする時、③自己発話に対する補足・例示をする時、④情報内容の自己訂正を行う時、⑤何かを思い出しながら話す時、⑥適切な表現を模索する時、⑦相手の発話内容に感嘆を示す時、⑧自分の心情を吐露する時、の8つである。さらに、その8つの状況を(1)情報の受信を示す時、(2)情報の整理を表す時、(3)感情の表出を行う時の3つに分類している。

一方、普通体を基調とした自然談話に現れる丁寧体に注目した研究として、劉(2013)、高宮(2017)、などが挙げられる。劉(2013)は、友人3者間の自然会話をケーススタディとして、上下関係にある親しい友人同士の会話において、スピーチレベル管理がどのように行わ

い発話を指す。

¹⁷ 「FTA」(Face Threatening Act)とは、ポライトネス理論(Brown&Levinson1987)におけるポジティブフェイス/ネガティブフェイスを保持したいという欲求を脅かす行為を指す。フェイスに対する脅威を軽減し、さらに補償するために採用されるストラテジーを「FTA補償ストラテジー」と呼ぶ(ブラウン・レヴィンソン2011)。

れているか考察を行っている。その結果、上下関係のある親しい友人3者間の会話において、親疎関係より上下関係の作用が優位に働いていること、ダ体（普通体）からデスマス体（丁寧体）へのスピーチレベル・シフトは、常套句／会話終了時の合図、相手への非難、対立する立場や意見の提示の3つの場合に観察され、話し手が相手と心的距離をわざと置くことによって自分の意見を堅持するストラテジーとして用いられることが分かった。さらに、デスマス体からダ体へのスピーチレベル・シフトは、自分の意見や心情を一方向的に表出する場合と発話を繰り返す場合に観察された。その機能として、相手の立場や意見との関わりが薄く、聞き手のことを特に意識していないことを示していることが分かった。

高宮（2017）では、同年代の友人同士や家族間といった親しい間柄で話される日常談話を分析対象とし、不平、非難、批判、反論、不同意といった不満を表明する際に丁寧体が使われ、次の3つの機能があることが示されている。（1）丁寧体で不満表明を繰り返すことによって意味が強調され、相手を説得したり、理解させたりする効果がある。（2）普通体基調の会話に現れる丁寧体には、相手に譲歩させたり、相手をなだめたりする効果がある。（3）第三者について否定的なコメントをする際に、丁寧体を選択することによって、聞き手からの賛同を得る。さらに、このような機能は日本語での円滑なコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしているとしている。このように、日本語母語話者によるスピーチレベル・シフトについては、初対面場面であれ、対友人場面であれ、その機能がより精緻化される方向で解明されつつあると言えよう。

さらに、母語話者によるスピーチレベル管理についての研究は、場面差に関心が集まるようになった。伊集院（2004、2016）¹⁸は母語場面と接触場面（日本語上級レベルの台湾人学習者との会話）に着目し、Brown & Levinson（1987）のポライトネス理論を用いて、母語話者の両場面におけるスピーチレベルの使い分け及びシフトの特徴につい

¹⁸ 伊集院（2016）は伊集院（2004）に、加筆修正を加えたものである。

て分析している。その結果、母語話者は接触場面では、母語話者同士の場面と異なったメカニズムでスピーチレベルを選択していることを明らかにしている。伊集院（2004）の「母語話者は場面に応じて質的に異なった言語行動をとっている」（p.12）という指摘は大変興味深い。このような観点は、異なる母語をもつ者同士による第三者言語接触場面において、学習者が相手言語接触場面とは異なる言語規範意識によってスピーチレベルを管理している可能性があることに、大きな示唆を与えるものと言えるだろう。

2.2 接触場面におけるスピーチレベル管理に関する研究

接触場面におけるスピーチ管理に関する研究には、「相手言語接触場面」を扱ったものと「第三者言語接触場面」を扱ったものがある。前者を 2.2.1 で、後者を 2.2.2 で概観する。

2.2.1 相手言語接触場面におけるスピーチレベル管理に関する研究

相手言語接触場面における日本語学習者のスピーチレベルを扱った研究は、母語場面と比較したものがほとんどである（陳 2004、上仲 2005・2007、三牧 2007、田 2009、寺尾 2010、など）。これらの研究は、大きく日本在住の学習者を対象とするものと国外における学習者を対象とするものに分かれている。これらの研究結果から、学習環境及び日本語レベルによって、学習者の文末スタイルの管理に大きな差が存在することが示唆される。

日本在住の学習者の場合、三牧（2007）によれば、上級学習者に関する研究は、その中に学習者特有の要因によるシフトがあるもの、おおむね母語話者同様に巧みにスピーチレベル・シフトをしていることを示しているという。

一方、母語話者には見られない学習者特有の要因によってスピーチレベル・シフトをする現象があることも指摘されている。上級学習者 3 名の自然談話を分析した上仲（2005）は、スピーチレベルがシフトする主な原因は、学習者のスピーチレベルに対する注意度が持続しな

いことにあると述べている。また、学習者特有の決まり文句が固定化したことによるシフト現象も見られたと報告している。また、三牧（2007）によると、中級および初級学習者に、確認のための繰り返しによるシフトダウン（－レベルにシフトすること）が頻繁に見られたという。しかし、それ以外のシフトは、心的距離の調節などのストラテジ的な用法とは言えず、スピーチレベルに関して無自覚に使用した結果だと思われる無秩序な文体の混交が多かったと報告している。

国外における学習者を調査した研究には、陳（2004）、田（2009）がある。陳（2004）は台湾人上級学習者の接触場面を分析し、上級学習者でも、対人関係調整のためのスピーチレベル・シフトは十分に活用できないと結論付けている。その中で、母語話者と同じ状況における「ダ発話」へのシフトでも、学習者のシフトは必ずしも心的距離の短縮になるとは限らないと報告している。田（2009）は、中国における上級学習者と母語話者との初対面会話を分析した。学習者がスピーチレベルを使い分けられない実態を明らかにし、使い分けのパターンは母語話者と比べ、個人による差が大きいと指摘している。その原因として、(1) 学習者のスピーチレベルに対する知識の欠如、(2) 注意の持続困難、(3) 会話相手の話し方に影響されやすいことの3点を挙げている。

これ以降、学習者のスピーチレベルの選択基準には、中間言語¹⁹的な要素が存在するのか、母語の影響があるのかに関心が集まるようになった。上仲（2007）では、中国語を母語とする、ある特定の上級学習者（以下 C）が、日常生活で遭遇する日本語母語話者（以下 NS）との接触場面においてスピーチレベルをどのように使い分けているのかについて調査を行った。その結果、Cのスピーチレベルの基準には NS と類似の基準以外に、「コミュニケーション達成に関わるストラテジー」という中間言語的要素が存在することが明らかにされた。

¹⁹ 「中間言語」とは、目標言語に向かう発達過程にある、学習者の母語の体系とも、また習得している第二言語の体系とも異なる学習者独自の体系である（高見澤他 2004：p.194）。

例えば、相手が先生である緊張した場面では、はっきりと文末まで発音せず小声になるなどして、中途終了の発話のように文末のスピーチレベルを曖昧にするというストラテジーが使用された。また、普通体のほうが、短く、早く、分かりやすくて便利なので普通体を使用するというような、言語の待遇面より機能面を重視する傾向も見られた。

寺尾（2010）は、中国語を母語とする初～中級日本語学習者と日本語母語話者を対象として、2つの会話場面（対教師／対友人）で使用された文末のスピーチレベルの実態について縦断的に調査を行った。その結果、学習者の文末のスピーチレベルの選択は、場面や対話者という社会的な条件よりも言語内的な条件が優先され、その結果、スピーチレベルの切り換え、すなわちシフトが見えにくくなっている可能性を指摘している。引用節や従属節など、節を示すマーカーとしての非デスマス形の使用については、非デスマス形が「節」という文構造を示すマーカーとして使用されている例を挙げ、「学習者が独自の言語内的ルールを創り出している」（p.139）ことを述べている。以上のことから、非母語話者が日本語の文末のスピーチレベルを習得する過程で、文末のスピーチレベルについて独自の言語規範を作り出す可能性があることが示唆される。

2.2.2 第三者言語接触場面におけるスピーチレベル管理に関する研究

第三者言語接触場面におけるスピーチレベル管理に注目した研究には陳・川口（2012）、高橋他（2017）がある。

陳・川口（2012）は、相手言語接触場面と第三者言語接触場面における「対友人」会話と「初対面」会話において、中国人上級学習者（CNS）の文末のスピーチレベルがどのような選択基準によってシフトするかについて分析を行っている。その結果、両場面ともに、CNSは「日本語のルール」に従って「親疎」という相手との人間関係を考慮し、「対友人」会話には普通体を、「初対面」会話には丁寧体を基調として選択していること、「対友人」会話、「初対面」会話ともに、相手場面では丁寧体へシフトしやすいことが示された。

高橋他（2017）は約1年間日本に滞在している知り合いまたは友人関係の学習者16名を対象に、第三者言語接触場面におけるスピーチレベル・シフトの機能について考察した。その結果、非デスマス体からデスマス体へのアップシフトの機能として、①ふざけや皮肉といった特殊な表現効果で親密性を強調する、②心的距離の拡大で場の改まりを強調する、③相手のスピーチレベルに合わせることによる共感を表示する、④聞き手目当ての発話での配慮を表示する、⑤重要情報を強調する、⑥新話題への移行を示す、⑦注釈・独話・補足を挿入する、を挙げている。さらに、相手のスピーチレベルに合わせたシフトは相手言語接触場面で、親密性の強調を表すシフトは第三者言語接触場面で顕著にみられる学習者もいたという。

2.3 まとめ

以上、2.1と2.2でそれぞれ「母語場面におけるスピーチレベル管理に関する研究」と「接触場面におけるスピーチレベル管理に関する研究」を概観した。

以上の先行研究を概観してみると、これまでのスピーチレベル管理に関する研究は、母語場面及び日本語母語話者と非母語話者による接触場面を扱ったものがほとんどで、非母語話同士の第三者言語接触場面を扱った研究は、管見の限り、陳・川口（2012）、高橋他（2017）のみであり、まだ少ないと言えるだろう。しかし、陳・川口（2012）では、調査協力者である非母語話者の性別や日本語能力という属性が統一されていない。高橋他（2017）では、2者間の会話が中心であるが、3者間、4者間の会話も分析対象として採用されており、会話間の参加者人数が統制されていない。以上を踏まえて、第三者言語接触場面におけるスピーチレベル管理に関する考察には、調査協力者の社会関係、性別といった当該要素を統制した会話状況を設定する必要があると考えられる。

3. 「発話の重なり」に関する先行研究

本節では、学習者の言語調節を考察するもう 1 つの分析視点である「発話の重なり」の先行研究を概観する。日常会話における発話の重なりに関してはすでに一定の研究蓄積がある。これらの研究は大きく「母語場面」と「接触場面」を扱ったものに分けられる。本節では、まず、3.1 で「母語場面における発話の重なりに関する研究」、3.2 で「接触場面における発話の重なりに関する研究」を概観する。3.3 でまとめる。

3.1 母語場面における「発話の重なり」に関する研究

日本語母語話者の日常会話における発話の重なりに関しては、すでに一定の研究蓄積があり、発話の重なり機能や生じる要因、重なり後の談話展開などの様々な角度から研究が行われてきた。

藤井・大塚（1994）は、複数の友人同士の自然会話 6 組を会話データとし、会話形成における話し手と聞き手の協力という側面から発話の重なり機能について考察を行っている。その結果、日本語における友人同士の会話に見られる発話の重なりは、妨害というよりも、むしろ会話参加者の同意、共感、関心、理解などを積極的に表現し、会話参加者同士の連帯感を強め、会話を盛り上げ促進させる協力的な側面を多く持っているとして述べている。

生駒（1996）は、親しい女性同士の会話を資料として、発話の重なり機能を経験の進行と人間関係の確立という 2 つの観点から探究している。その結果、会話の進行においては、発話の重なりには、マイナスに作用するものとプラスに作用するものがあることが明らかになっている。マイナスに作用し、トラブルとなる発話の重なりは、スムーズな話者交替を妨げ、情報伝達に支障をきたすことにより、会話を停滞させる。一方、プラスに作用する発話の重なりは、会話を効率的に運び、活気のあるテンポの早い会話を生み出し、会話の促進につながっていくとしている。そして、会話の進行においては、発話の重なりを発話の接触として発話時のスキンシップのように捉えれば、

会話の進行においてマイナス作用であったものでさえ、親近感、遠慮のなさ、リラックスした雰囲気の流れとなり、好意的人間関係の確立に貢献すると述べている。このような発話の重なる多用を親しい者同士の会話での一種のスタイルとして捉えている。

本田（1997）は、職場における日本語母語話者の自然談話に見られる発話の重なりには、相手の発話をさえぎるのではなく、相手の発話に共鳴し、ともに会話を成立させる「共話」²⁰（水谷 1993）に寄与する重なりがあることを示している。つまり、日本語の談話進行上、発話の重なりは、避けるべき事態ではなく、談話を円滑に進行するための積極的な役割を担うものであることを指摘している。本田（2016）では、夫婦のような親しい関係の日常談話では、発話の重なりが生じながら、どちらも発話を中断しないという現象が観察されている。つまり、お互いに相手の言うことを聞いているような姿勢を示しながら、それぞれ自分の言いたいことを話し続けているのである。本田（2016）は、このような重なりは、談話を維持する働きをしていることを指摘し、「特に、発話者間の関係が「親」となっているデータに特徴的にあらわれている」（p.302）としている。

知人関係の4者間の会話データに注目した劉（2011）は、日本語母語話者が相手の発話と重なる際、その発話は主に先行発話への補足やコメントであり、重ねられた話者と共同で意見を構築する傾向があると報告している。

一方、初対面の会話における発話の重なる効果に注目した研究として、町田（2002）、牛田他（2010）、などが挙げられる。町田（2002）は、初対面の会話における発話の重なる効果に注目した結果、初対面同士の会話において、会話参加者が割り込みや発話の重なりを利用してお互いの心理的距離を近づけ、会話の継続という共同作業を成し遂げている様子を明らかにしている。つまり、初対面同士の会話では、発話の重なりや割り込みが、相手が提案した話題に関心や共感を示し、

²⁰ 水谷（1993）は、「共話」を「日本人の話し方の特徴」として捉え、「ひとつの発話を必ずしもひとりの話し手が完結させるのではなく、話し手と聞き手の二人で作っていく」（p.6）としている。

その話題に関する知識を共有していることを伝える装置として使われているという。

牛田他（2010）は、初対面同士の会話と友人同士の会話を比較し、発話の重なりと会話事態の認知の関係性について分析を行っている。牛田他（2010）は、発話の重なりを、「発話の頭と頭が重なる場合」（同時発話）、「先行発話の終了付近で重なる場合」（末尾）、「先行発話の途中で部分的に重なる場合」（途中）の3種類に分けている。その結果、友人ペアよりも初対面ペアのほうが末尾で発話が重なる回数が多いことが分かった。その理由としては、初対面ペアではぎこちなさを解消したいため、間を作らないように、末尾での重なりが友人ペアよりも多くなったと考察している。また、友人ペアでも初対面ペアでも、発話の重なりが多いほど、重ねられた話者の会話に対する印象や盛り上がり認知得点が高かったという。これは、発話の重なりが会話を促進する作用が大きいという藤井・大塚（1994）や生駒（1999）の研究結果とも一致すると述べている。さらに、友人ペアの盛り上がり認知得点が、「末尾」の重なりより「途中」の重なりが多かったことから、友人同士の会話における「途中」の重なり、すなわち「割り込み型」の重なりを、会話が盛り上がった表れとして捉えている。

以上のことから、日本語母語話者の会話においては、初対面会話であれ、友人会話であれ、発話の重なりは必ずしも話者交替規則に違反するものではなく、会話参加者の同意や共感、関心、理解を表し、相手と調和して会話を作り上げる効果もあることが分かる。

他方、発話の重なりが現れた後、会話参加者がいかにして各自の言語行動を調節するかについて分析を行った研究成果も見られる。本田（1997）は、発話の重なりが現れた後の、重ねられた話者の反応を考察している。その重ねられた話者の反応には、「①重なられても（本文ママ：以下同様）、そのまま発話を続けるもの」と②「重なられて発話を中断してしまうもの」という2つのタイプがある。①の場合、さらに①-a「重なった発話を無視して発話を続けるもの」と①-b「重なられても発話を続けながら、重なった発話に対して応答をおこなう

もの」)に分けられる。②の場合にも2つのタイプがある。それぞれ②-a「重なられて完全に自分のいおうとした話を断念してしまうもの」と②-b「重なった相手の発話が終わるのを待って、自分の言いたかったことを続けるもの」である。その中で、①-aは相手の問いかけなどを無視するという点で「自己主張型」として、①-bは重ねられても自分の話を続けているが、相手の発話も聞いて応答を返しているという点で「協調型」として扱われている(pp.210-211)。

町田(2002)は、初対面会話における割り込みが生じたときの処理を分析し、割り込みによって中断された発話や重なった発話をどのように続けるかについて、本田(1997)と同様の結果を示している。

都(2009)は、重なり後の現象に注目し、どのような要素が重なり後の発話中断を誘発しているか、そして、重なりによって中断された発話がどのように修復されているかという2つの観点から定性的に考察しながら、重なりをめぐる諸現象の多面性について考察を行っている。その結果、発話の中断を引き起こす要因として、先取りと話順移行が挙げられている。また、修復の過程で、中断された自己発話をしばらく保留し、相手の発話に合わせた後で自ら修復したり、中断発話を強制的に自己発話に合わせて修復したりする例が見られた。一方、中断発話が修復されずに流れてしまった場合や自己発話を優先した修復のストラテジーなどもあったと報告している。

4者間の会話データを扱った前述の劉(2011)は、重なり後の会話の展開の特徴については、2人での調整場面において、発話の途中で重なりが現れると、話者が発話を一時的に中断してその後継続するパターンと、発話が重なった2人の話者が競争的にターンを取って各自の発話を継続するパターンがあることを指摘している。また、最初に発話が重なった第1話者と第2話者が発話を調整する間に、第3話者が割り込むことによって会話に参加する場合において、複数の話者が競い合ってターンを取って自分の発話を遂行すると同時に、その第3話者の発話により、会話全体が新たな展開になることもあると述べている。

以上のことから、会話において発話の重なりが現れた後、会話参加者は様々な言語調節を行って会話を修復することが推測される。

以上、母語場面における重なりに関する先行研究を概観したが、日本語母語話者の会話において、発話の重なりは必ずしも話者交替規則に違反するものではなく、会話参加者の同意や共感、関心、理解を表し、相手と調和して会話を作り上げる効果もあることが分かった。

3.2 接触場面における「発話の重なり」に関する研究

ここでは接触場面を扱った発話の重なりに関する先行研究を概観する。接触場面における発話の重なりを扱った研究には木暮(2002)、長谷川(2005)、劉(2012)などがある。これらの研究の多くは母語場面と比較して、日本語学習者と母語話者との違いに注目している。

木暮(2002)は、母語場面と接触場面の会話における発話の重なりに注目し、それぞれの出現傾向を明らかにするとともに、学習者に見られた重なりの特徴を日本語能力との関連において考察を行っている。調査対象は母語話者3名と初級から上級レベルにあたる学習者9名の計12名であり、その12名の調査対象者それぞれと親しい友人関係にある日本語母語話者との15分程度の会話を収録した。発話権取得時に見られた発話の重なりを、ターンが重なる位置と発話内容から「同時開始型」、「終了見なし型」、「割り込み型」の3つに分類し、さらに、「終了見なし型」を「一致」と「不一致」²¹の2つに、「割り込み型」を「調和系」、「調整系」、「独立系」の3つに、合計6種類に分けている。分析の結果、まず、「終了見なし型」の「不一致」、「割り込み型」の「調整系」と「独立系」の3つの重なりで母語話者と学習者に量的な違いが観察されている。具体的には、不一致の重なりは日本語母語話者より学習者の方に、特に初級学習者に多く見られた。

²¹ 木暮(2002)は、「終了見なし型」を、「前話者が実際にターンを終了した箇所と次の話者が予測したターン終了箇所とが一致するかどうか」によって、さらに「一致」と「不一致」の2つに分けている。その「一致」と「不一致」とは、それぞれターン末尾の音や終助詞などが重なったものと、先行するターンが倒置文になっていたりして、話者がオプショナルな言葉を付加することなどによって起きる重なりを指している。

母語話者には「独立系」の重なりがほとんど見られず、「調整系」の重なりが多く見られたのに対して、学習者では「独立系」の重なりが多く、「調整系」の重なりが母語話者と比べ全体的に少なかった。さらに、重なりが生じた要因は、学習者の日本語能力レベルによって異なり、「不一致」による重なりは、初級学習者では母語話者が発話の調整を行うために生じ、中・上級学習者では倒置文や言葉の付加を行うために生じていること、「調整系」の重なりは、初級学習者では確認や訂正を行うために生じ、中・上級学習者では、情報の追加や関連する質問を行うために生じていることが明らかになった。また、「独立系」の重なりは、自己の発話を優先させることなどによって生じており、妨害的な割り込みとして捉えられている。このような否定的に捉えられる「独立系」の重なりは、上級学習者にも多く見られたことから、学習者は「先行発話に対して協力的な働きを行う発話権取得方法を身につける必要がある」(p.130)と論じている。

長谷川(2005)は、ある話者の発話の最中に他の会話参加者が発話を開始することにより起こった重なりを、「割り込み発話」と呼び、日本語学習者の行う「割り込み発話」の分類と生じた要因について分析している。さらに、藤井(1995)の枠組みに従い、割り込みと先行話者の発話権との関係及び「割り込み発話」のトピックと先行発話のトピックが一致するかどうかによって、「割り込み発話」を「調和系」「調整系」「独立系」の3つに分類している。その結果、母語話者の「割り込み発話」は「調和系」が最も多く、次いで「調整系」、「独立系」となっていた。反対に、学習者の「割り込み発話」は、先行話者のターンを支持するための「調和系」がほとんどなく、先行話者のターンを妨害する「独立系」が多いことを指摘している。また、学習者の「割り込み発話」が起こる要因には、①母語話者のターン開始のシグナルが分からない「シグナルの不認知」、②母語話者の発話が継続するかどうか予測できなかつたりする「話者交替の誤認」、③意図的に割り込む「自己の発話の優先」の3つがあると述べ(p.93)、さらに、これは、日本語学習者の会話予測能力不足が原因であると結論付けて

いる。

劉（2012）は、1人の話者が話している途中でもう1人の話者が発話を挿入するために起こった発話の重なりを「割り込み発話」と定義している。具体的には、日本語母語話者2名と上級中国人日本語学習者2名による4者間会話、合計8組（32人）の自由会話を研究対象とし、「割り込み発話」の機能について分析している。その結果、劉（2012）は、割り込んだ話者の言語行動によって、「割り込み発話」の機能を「補足」、「評価・感想」、「質問・確認」、「先取り」、「新情報の提示」の5種類に分けている。さらに、割り込み発話と先行話者の「フロア」²²との関係を基準にして「割り込み発話」の機能を「フロア内での割り込み」と「新たなフロアを築く割り込み」に分類している。「フロア内での割り込み」とは、「割り込み話者が先行話者の発話の途中で、補足や短い感想などの割り込み発話によって、先行話者の発話を補助すること」（p.10）を指し、「補足」、「評価・感想」、「質問・確認」、「先取り」の4つがある。「新たなフロアを築く割り込み」とは、「割り込み話者が先行話者の発話の途中で、先行話者の発話を踏まえて新しい情報を持ち込むあるいは先行話者の発話とまったく関係ない情報を持ち込むことによって、先行話者から発話権（ターン）を奪い、その後、常に割り込み発話を中心にして新しいフロアを築き始めること」（pp.10-11）を指し、「新情報の提示」がある。母語話者と学習者を比較した結果、母語話者の場合は「補足」、「評価・感想」、「質問・確認」、「先取り」のような「フロア内での割り込み」の頻度が高く、学習者の場合は「新情報の提示」のような「新たなフロアを築く割り込み」の頻度が高いことを明らかにしている。また、劉（2012）は、日本語学習者の割り込み発話は、相手の発話の補助よりも、自分の発話を優先させるため、母語話者の割り込みに比べて不快に感じられやすいと述べている。

以上の「接触場面」における「発話の重なり」に関する先行研究を

²² 「フロア」とは、林（2008）によれば、話の主導権の認識に関する心的な概念である。ターンが交替しても、会話者がその場の話の主導権の属性を巡って共通の認識を持つ限りは、フロアの所有者は変わらない（p.108）。

概観した結果、日本語学習者の重なり、特に割り込み発話は、母語話者と比べ、先行話者の発話を妨害するなど、マイナスに捉えられるものが多く、学習者の言語能力の不足を理由に結論付けられることが多いことが分かった。

3.3 まとめ

以上、3.1と3.2で「母語場面」と「接触場面」における発話の重なりに関する先行研究を概観した。これらの研究によって、日常会話における「発話の重なり」に関しては、言語行動の面及び日本語教育の立場からその分類や機能、生じる要因、重なり後の談話展開の特徴などが明らかになりつつある。母語話者の会話においては、発話の重なりは必ずしも話者交替規則に違反するものではなく、会話参加者の同意や共感などを表し、相手と調和して会話を作り上げる効果もあるとされている。一方、日本語学習者による重なりは、先行話者の発話を妨害するなど、否定的に捉えられることが多く、学習者の言語能力不足を理由に結論付けられることが多いことが分かった。

しかし、これらの「発話の重なり」に関する研究は、母語場面及び非母語話者との相手言語接触場面を扱ったものに限られ、非母語話者同士の第三者言語接触場面は、まだ扱われていない。また、以上の相手言語接触場面に関する調査は、会話参加者の人間関係や場面状況が統一されていない。例えば、会話参加者間の上下・親疎関係（劉2012、など）、または調査対象者の性別や年齢（木暮2002、など）も統一されていない。劉（2012）も述べるように、「発話の重なり」の特徴を考察する場合、会話の話題、参加者間の上下・親疎関係、性別などの要因を無視するわけにはいかない。したがって、調査協力者の社会関係、性別といった当該要素を統制した会話状況を設定する研究が必要であると考えられる。また、非母語話者同士の第三者言語接触場面においては、学習者の「発話の重なり」にはどのような特徴があるのか、母語話者との相手言語接触場面とはどのような違いがあるのか、などについて考察を行う必要がある。

4. 第2章のまとめ及び研究課題

最後に、第2章でたどった先行研究の成果と問題の所在を明らかにし、本研究の研究課題を設定する。

1節では、第三者言語接触場面に関する先行研究を、「言語面の調節」と「心理面の調節」の2つの側面から概観した。その結果、第三者言語接触場面において、会話参加者は、目標言語の言語規範という負担から解放され、不安や緊張が緩和され、積極的に自己表現しようとする意識が働くために、相手言語接触場面とは異なり、会話参加がより対称的で活性化されていることが示された。したがって、非母語話者同士の第三者言語接触場面においては、目標言語の言語規範より、情報伝達の目的達成や会話への積極的な参加を重視する様々な言語調節が行われる可能性があると考えられる。

2節では、学習者の言語調節を考察する1つの分析視点である「スピーチレベル管理」の先行研究を概観した。これまでの「スピーチレベル管理」に関する研究は、母語場面及び日本語母語話者と非母語話者による相手言語接触場面を扱ったものがほとんどで、非母語話者同士の第三者言語接触場面を扱った研究は、管見の限りでは、陳・川口（2012）、高橋他（2017）のみである。陳・川口（2012）は、調査協力者である非母語話者の性別や日本語能力という属性が統一されておらず、高橋他（2017）は会話間の参加者数が統制されていないという問題点がある。

3節では、学習者の言語調節を考察する際の、本研究のもう1つの分析視点である「発話の重なり」に関する先行研究を概観した。その結果、「発話の重なり」に関する研究は母語場面及び相手言語接触場面を扱ったものに限られ、非母語話者同士の第三者言語接触場面はまだ扱われていないことが分かった。また、相手言語接触場面を扱った研究は、会話参加者間の人間関係や場面状況が統一されていないという問題点が指摘された。

以上のことから、これまでの学習者が参加する接触場面の会話に焦点を当てた研究では、「スピーチレベル管理」に関する研究であれ、

「発話の重なり」に関する研究であれ、日本語母語話者との相手言語接触場面を対象としたものが中心であったことが分かる。さらに、これらの研究の多くは、母語場面と比較することにより学習者の言語行動と母語話者のそれとの違いを分析し、その違いを接触場面における言語問題と捉えるものであった。また、この言語問題は、学習者の言語能力の不足を理由に結論付けられることが多かった。しかし、1節で見た第三者言語接触場面を扱った先行研究が示すように、言語習得を考える上で、話し相手が目標言語の母語話者か否かという要因が学習者内部に生じる日本語のバリエーションに影響を与える可能性は大きいと考えられる。

そこで、本研究は、「スピーチレベル管理」と話者交替の際に起こる「発話の重なり」という分析視点から、中国語を母語とする日本語学習者（以下、CNS）の日本語母語話者との相手言語接触場面（以下、相手場面）と、非母語話者との第三者言語接触場面（以下、第三者場面）における、「初対面」会話と「対友人」会話を扱うこととし、研究課題を以下の2点に設定する。

研究課題 1 相手場面と第三者場面において、CNS のスピーチレベル管理は、親しい友人と初対面の相手に対して、それぞれどのような選択基準によってなされるか。

研究課題 2 相手場面と第三者場面において、親しい友人と初対面の相手に対する CNS による発話の重なり及び重なり後の談話展開には、どのような特徴があるか。

研究課題 1 については第 4 章で、研究課題 2 については第 5 章で明らかにする。「初対面」会話と「対友人」会話を扱う理由については、第 3 章 1.2 で述べる。

第 3 章 研究方法

本章では、本研究の研究方法について述べる。1 節で本研究が収集するデータの特徴について、2 節で調査参加者について、3 節で調査方法と会話情報について、4 節で分析方法について説明する。

本研究で取り上げる自由会話とは、「操作されていない」会話を指す。本研究で収集する会話データは、会話参加者が録音されていることが分かり、友人関係または初対面関係の相手と会話をするという状況が統制されているが、実際に「何を話すか」や「どのように話すか」などは会話参加者に委ねられている。話題の制限がなく、談話の流れも操作されていないため、自由会話と見なすことができると考える。

1. 本研究が収集するデータについて

本研究で収集する会話データは、相手場面と第三者場面における友人関係及び初対面関係の 2 人による 20 分程度の自由会話である。1.1 でなぜ自由会話に注目したか、1.2 でなぜ会話場면을「初対面」会話と「対友人」会話に設定したか、1.3 でなぜ日本語非母語話者の日本語能力を上級レベルとしたか、それぞれの理由について述べる。

1.1 自由会話

本研究では、1 対 1 でなされる、話題制限のない 2 者間の自由会話を分析対象とした。その理由として、三牧（2013：p.4）が述べたように、自由会話は最も基本的なコミュニケーションのあり方であるため、他の多人数会話のような多様なコミュニケーションを考える上でも、多くの示唆を与え得ることが挙げられる。また、自由会話は、謝罪、依頼のような明確な目的である交渉的会話と異なり、良好な人間関係を深く築いていくために行われる会話と考えられる。前述したように、本研究は、学習者が「コミュニケーションの達成」と「良好な人間関係の構築」という方向性に沿って行う言語調節について明らかにし、その仕組みの解明を目指すものである。学習者の言語調節の全

体像をより明らかにするためには、話題制限のない自由会話に注目することが重要になると考えられる。

1.2 参加者間の人間関係

第1章2節で記述したように、本研究が学習者の言語調節を考察する分析視点は、「スピーチレベル管理」及び、話者交替の際に起こる「発話の重なり」である。

学習者の「スピーチレベル管理」に関しては、初対面2者間会話を分析対象とした研究が圧倒的に多く、友人同士の会話を考察対象とした研究は初対面に比べ、まだ少ない（高宮 2017）。しかし、1つの場面におけるスピーチレベルの運用だけを見ていたのでは、学習者の適切なスピーチレベル管理ができない原因を明らかにすることは難しく（寺尾 2010）、学習者が親しい友人同士の場面においてはどのようにスピーチレベルを管理しているか、そのプロセスを明らかにできないという問題点がある。そこで、学習者のスピーチレベルの使用実態及び、スピーチレベルの選択基準、言語使用規範などを全体的に究明するために、「初対面」会話に加え、「対友人」会話にも注目することにした。

一方、高崎・立川編（2008）は「重なりの生起理由は会話参加者の人間関係や場面によって異なってくる」（p.129）ことを指摘している。竹田（2016）は、親疎が異なる日本語母語話者同士の相互行為に見る発話の重なりに注目し、友人ペアでは参与間の親近感や共感性を、初対面ペアでは距離感や沈黙への気遣いを反映する発話の重なりが見られたことを指摘し、その結果から、発話の重なりを通じた協調性は、親疎の影響を受けると述べている。これらの先行研究から、発話の重なりの特徴を考察する場合、会話参加者間の親疎関係を無視するわけにはいかないと考える。

以上を踏まえ、本研究では、「スピーチレベル管理」と「発話の重なり」という分析視点から学習者の言語調節の全体像をより明らかにするために、会話場면을、「初対面」場面と「対友人」場面に設定す

ることとした。

1.3 日本語非母語話者の日本語能力

本研究では、上仲（2007）を参考にし、参加者の日本語能力が上級レベルであることを条件とした。上仲（2007）は中国語を母語とする上級学習者のスピーチレベルの選択基準について考察しているが、上級学習者を対象とした理由について、次のように述べている。

ACTFL²³による日本語OPIの判定基準によると、中級は「普通体か丁寧体のどちらか一つがよく使える」、上級は「主なスピーチレベルができ、敬語の部分的コントロールが可能」、超級は「スピーチレベルに問題がない」（牧野1991）とされている。つまりスピーチレベルの使用において、中級から超級²⁴の間に位置する上級の学習者こそが、NNSのスピーチレベルの中間言語的な様相を観察するのに最も相応しい調査対象者であると考えられる。

（上仲2007：p.143より）

そこで、本研究では、上仲（2007）に従い、日本語能力が上級レベルであると判断され、日本国内の某私立大学（調査当時）に在籍する中国語を母語とする日本語学習者（CNS）を調査対象者とする。そのCNSの第三者場面の会話相手である日本語学習者の日本語能力も同じく上級レベルに統一した。その日本語能力については、滞日歴、学習歴、日本語能力試験の資格によって判定した。上級と判断した滞日歴、学習歴は、堀口（1997）と陳（2004）を参考にし、（A）来日して1年以上であること、（B）日本語学習時間数が800時間以上であるこ

²³ ACTFL-OPIとは、the American Council for the Teaching of Foreign Languages-Oral Proficiency Interviewの略である。「スピーチレベル」は「社会言語能力」の一つとして、日本語OPIのレベル分けの判定基準に設定されている（上仲2007）。

²⁴ 脇田・三谷（2011）は、日本語能力試験の旧1級以上のレベルを「超級」としている。また、超級レベルの対象となるのは「上級の重要文型100、基礎語彙10000語、基礎漢字2000字程度」を既に学習した者で、その達成目標は「より高度な日本語の運用能力の習得」を目指し、「日本人学生と日本語で十分な議論ができるようになる」ことであると述べている（p.62）。

と、(C) 日常生活やゼミで自由に日本語を使っていること、の3点による。また、日本語能力試験の資格は旧試験の1級、あるいは現行のN1である。

2. 調査参加者

本研究の調査参加者は、辛（2010）を参考にし、「調査対象者」と「調査協力者」の両者に分けている。「調査対象者」とは、日本国内の某私立大学に所属する中国語を母語とする上級日本語学習者（以下、CNS）16名である。「調査協力者」とは、調査対象者 CNS の相手話者となる会話参加者のことを指す。前述のように、本研究の分析対象は、相手場面と第三者場面における友人関係及び初対面関係の2者による1組20分程度の自由会話である。それに基づき、本研究では、調査協力者は相手場面においては、CNS と友人関係及び初対面関係にある日本語母語話者（以下、JNS）13名であり、第三者場面においては、CNS と友人関係及び初対面関係にある韓国人上級学習者（以下、KNS）7名、ドイツ人上級学習者（以下、GNS）2名及びマレーシア人上級学習者（以下、MNS）1名、合計10名である。

「初対面」と「友人」という親疎の人間関係の判定について述べる。牛田他（2010）は、「初対面ペアは、親密性の判定において、互いを「全く知らなかった」もしくは「顔を見たことはあった」と評定したペアであった。友人ペアは親密性の評定において「頻繁に話をしている」「悩み事の相談をしたことがある」と評定したペアであった」（p.115）と述べている。本研究では、「初対面」と「友人」という親疎の人間関係について牛田他（2010）の判定基準に従うことにした。また、調査参加者の社会的属性を統制するために、全データの調査参加者を、すべて、日本国内の某私立大学に所属する学部生、大学院生、交換留学生の20代の女性とした。「調査対象者」（CNS）と「調査協力者」（JNS、KNS、GNS、MNS）のインフォーマント情報を、それぞれ表2と表3に示す。

表 2 調査対象者のインフォーマント情報

調査対象者	日本語能力	国籍	母語	性別	年齢	滞日歴	日本語学習歴
CNS1	上級	中国	中国語	女	25	2年7ヶ月	5年6ヶ月
CNS2	上級	中国	中国語	女	21	1年	3年2ヶ月
CNS3	上級	中国	中国語	女	21	1年	3年2ヶ月
CNS4	上級	中国	中国語	女	23	1年8ヶ月	5年2ヶ月
CNS5	上級	中国	中国語	女	22	6年	3年
CNS6	上級	中国	中国語	女	24	1年8ヶ月	5年2ヶ月
CNS7	上級	中国	中国語	女	21	1年	8年3ヶ月
CNS8	上級	中国	中国語	女	20	2年6ヶ月	3年5ヶ月
CNS9	上級	中国	中国語	女	25	2年2ヶ月	5年7ヶ月
CNS10	上級	中国	中国語	女	23	1年	4年
CNS11	上級	中国	中国語	女	27	3年	6年
CNS12	上級	中国	中国語	女	25	2年8ヶ月	6年1ヶ月
CNS13	上級	中国	中国語	女	25	3年	5年2ヶ月
CNS14	上級	中国	中国語	女	21	3年6ヶ月	3年8ヶ月
CNS15	上級	中国	中国語	女	24	1年7ヶ月	5年7ヶ月
CNS16	上級	中国	中国語	女	21	1年	2年4ヶ月

表 3 調査協力者のインフォーマント情報

調査協力者	日本語能力	国籍	母語	性別	年齢	滞日歴	日本語学習歴
JNS1	母語話者	日本（群馬県）	日本語	女	23		
JNS2	母語話者	日本（埼玉県）	日本語	女	22		
JNS3	母語話者	日本（群馬県）	日本語	女	20		
JNS4	母語話者	日本（千葉県）	日本語	女	22		
JNS5	母語話者	日本（埼玉県）	日本語	女	22		
JNS6	母語話者	日本（埼玉県）	日本語	女	22		
JNS7	母語話者	日本（新潟県）	日本語	女	21		
JNS8	母語話者	日本（千葉県）	日本語	女	20		
JNS9	母語話者	日本（群馬県）	日本語	女	20		
JNS10	母語話者	日本（群馬県）	日本語	女	21		
JNS11	母語話者	日本（茨城県）	日本語	女	22		
JNS12	母語話者	日本（岐阜県）	日本語	女	20		
JNS13	母語話者	日本（千葉県）	日本語	女	20		
KNS1	上級	韓国	韓国語	女	27	4年	6年6ヶ月
KNS2	上級	韓国	韓国語	女	21	1年1ヶ月	7年
KNS3	上級	韓国	韓国語	女	21	1年	4年
KNS4	上級	韓国	韓国語	女	21	1年	4年
KNS5	上級	韓国	韓国語	女	20	7年	3年
KNS6	上級	韓国	韓国語	女	21	1年	8年
KNS7	上級	韓国	韓国語	女	23	1年	4年9ヶ月
GNS1	上級	ドイツ	ドイツ語	女	29	1年9ヶ月	3年
GNS2	上級	ドイツ	ドイツ語	女	22	2年	3年8ヶ月
MNS1	上級	マレーシア	マレーシア語	女	22	3年9ヶ月	4年6ヶ月

3. 調査方法と会話情報

本調査の会話録音は以下のような方法で行った。

まず、事前にアンケートを行い、調査対象者 CNS がどのような場面でどのような人とよく日本語を使用しているかを調査した。その結果、CNS の日本語使用はほぼ大学内に限られていることが分かった。そこで、CNS の会話場面を大学内に設定した。

データ収録時の手順は、大場（2012）を参考にし、以下のように行った。まず、筆者が会話参加者 2 人を部屋に案内し、話題は自由で日常生活で行われる会話と同じような世間話でよいこと、20 分後にノックをして終了時間を知らせること、ノック時に話している話題について 2 人が気の済むまで話してから自主的に会話を終了すればいいことの 3 点を、説明した。以上の説明を行った後、IC レコーダーの録音を開始して退室した。「初対面」における会話データは、事前に出身地、年齢などの相手に関する情報を一切与えず、自由な話題で 20 分間会話をするという同一状況下で収録した。会話の収録が終了した後、会話参加時の意識などについてフォローアップインタビューを行い、参考資料とした。また、会話データの文字化作業完了後、必要に応じて、発話や話題の理解確認などについて、調査対象者本人に確認を行った。

以上の調査方法に従い、本研究では、「対友人」会話を 14 組、「初対面」会話を 14 組、合計 28 組 560 分の会話を収集した。つまり、中国人上級学習者（CNS）16 名と友人関係及び初対面関係にある日本語母語話者（JNS）13 名、韓国人上級学習者（KNS）7 名、ドイツ人上級学習者（GNS）2 名、マレーシア人上級学習者（MNS）1 名、合計 10 名の日本語非母語話者との 2 場面各 14 組による自由会話、合計 28 組 560 分の会話を収録した。調査時期は 2010 年 10 月、2016 年 5 月～2017 年 12 月²⁵までであった。収集した会話情報を表 4 に示す。

²⁵ 表 4 に示した「CNS1-JNS1」と「CNS1-KNS1」の 2 組の会話は筆者の修士課程の時期（2010 年 10 月）に、ほかの 26 組の会話は博士後期課程の時期（2016 年 5 月～2017 年 12 月）に収録したデータである。

表 4 会話情報

	相手場面	第三者場面
「対友人」会話 (親-親)	「CNS1-JNS1」	「CNS1-KNS1」
	「CNS2-JNS2」	「CNS2-KNS2」
	「CNS3-JNS3」	「CNS3-KNS3」
	「CNS4-JNS4」	「CNS4-KNS2」
	「CNS5-JNS5」	「CNS6-KNS4」
	「CNS7-JNS6」	「CNS7-GNS1」
	「CNS8-JNS7」	「CNS8-MNS1」
「初対面」会話 (疎-疎)	「CNS2-JNS8」	「CNS2-KNS5」
	「CNS3-JNS9」	「CNS3-KNS6」
	「CNS4-JNS10」	「CNS13-GNS1」
	「CNS9-JNS11」	「CNS9-KNS7」
	「CNS10-JNS3」	「CNS14-GNS2」
	「CNS11-JNS12」	「CNS15-GNS2」
	「CNS12-JNS13」	「CNS16-MNS1」

なお、以上の調査対象者及び調査協力者の 39 名に対しては、研究の概要に関する項目、個人情報保護に関する項目、インフォームド・コンセントに関する事項について説明し、調査協力に関する同意書に署名を得た。その手続き上の正当性は、文教大学研究倫理審査委員会の承認を得たものである。

4. 分析方法

ここでは、上記の方法で得られた会話データの文字化の方法を 4.1 で、分析項目を 4.2 で述べる。

4.1 文字化の方法

本研究では、宇佐美（2006）の「改訂版：基本的な文字化の原則

(Basic Transcription System for Japanese : 以下 BTSJ)」に従い、収録した会話データを文字化した。以下に詳細を述べる。

(1) 発話文の認定の仕方

BTSJ では、「実際の会話の中で発話された文」という意味で「発話文」という用語を用い、基本的な分析の単位としている。これは、日本語では、スピーチレベルの分析など、「文」単位でコーディングをする必要があるためである。以下の発話文の認定方法に関する説明は宇佐美（2006：p.21）からの抜粋である。

「発話文」の定義は、会話という相互作用の中における「文」とする。そして、以下のように認定する。基本的に、ひとりの話者による「文」を成していると捉えられるものを「1 発話文」とする。しかし、自然会話では、いわゆる「1 語文」や、述部が省略されているもの、あるいは、最後まで言い切られない「中途終了型発話」など、構造的に「文」が完結していない発話もある。そのような場合は、話者交替や間などを考慮した上で「1 発話文」であるか否かを判断する。つまり、「発話文」の認定には、「話者交替」、「間」という 2 つの要素が重要になる。

(宇佐美 2006: p.21 より)

本研究では、発話文を宇佐美が述べるように認定することにする。

(2) 改行の仕方

基本的には、話者が交替するたびに改行する。しかし、話者が交替しなくても、同一話者が複数の「発話文」を続けて発するときには、「発話文」ごとに改行する。1 発話文の途中で相手の発話が入った場合には、その途中の句末に英語式コンマ 2 つ「,,」をつけ、その発話文が終わっていないことをマークし、改行して相手の発話を記入する。この場合、話者が交替しても同一話者によって発せられた、「発話番号-1」と「発話番号-2」とで 1 つの発話文とみなす。また、相手の発話に重なる短い小声笑いやあいづち、つまり、「うん」、「ああ」、「ふ

一ん」のような「話し手の話を聞いているということを伝える機能だけ」（水野 1988：p.20）を持っていると判断されるあいづちは、（ ）に入れて、相手の発話の最も近いと思われる場所に挿入する。

（3）記号凡例

BTSJ で用いられる記号を以下にまとめる。尚、以下の記号は、但し書きのあるもの以外は、「半角」で統一することを原則としている。

- 。 [全角] 1 発話文の終わりにつける。
- ，， 発話文の途中で相手の発話が入った場合、前の発話文が終わっていないことをマークするためにつけ、改行して相手の発話を入力する。
- 、 [全角] 1 発話文および 1 ライン中で、日本語の表記の慣例の通りに読点をつける。なお、慣例として表記する箇所短い間がある場合には、「，」をつける。（次の説明を参照）
- ， [全角] 発話と発話のあいだに短い間がある場合につける。
- ‘ ’ ① [全角] 複数読み方があるものを漢字で表す場合、最も一般的な読み方ではなく、特別な読み方で発せられたことを示すために、その読み方を平仮名で ‘ ’ に入れて示す。
② [全角] 通常とは異なる発音がなされた場合など、音の表記だけでは意味が分かりにくい発話は、‘ ’ の中に正式な表記をする。
- 『 』 [全角] 視覚上、区別した方が分かりやすいと思われるもの、例えば、本や映画の題名のような固有名詞や、発話者がその発話の中で漢字の読み方を説明したような部分等は、『 』でくくる。
- “ ” [全角] 発話中に、話者及び話者以外の者の発話・思考・判断・知覚などの内容が引用された場合、その部分を“ ”でくくる。

- ? 疑問文につける。疑問の終助詞がついた質問形式になっていなくても、語尾を上げるなどして、疑問の機能を持つ発話には、その部分が文末（発話文末）なら「?。」をつける。倒置疑問の機能をもつものには、発話中に「?,」をつける。
- ?? 確認などのために語尾を上げる、いわゆる「半疑問文」につける。
- [↑][→][↓] イントネーションは、特記する必要があるものを、上昇、平板、下降の略号として、[↑][→][↓]を用いて表す。
- 《少し間》 話のテンポの流れの中で、少し「間」が感じられた際につける。
- 《沈黙秒数》 1 秒以上の「間」は、沈黙として、その秒数を左記のように記す。沈黙自体が何かの返答になっているような場合は 1 発話文として扱い 1 ライン取るが、基本的には、沈黙後に誰が発話したのかを同定できるように、沈黙を破る発話のラインの冒頭に記す。
- = = 改行される発話と発話の間（ま）が、当該の会話の平均的な間（ま）の長さより相対的に短いか、まったくないことを示すためにつける。これは、2 つの発話（文）について、改行していても音声的につながっていることを示すためである。その場合、最初のラインの発話の終わりに「=」をつけてから、句点「。」または英語式コンマ 2 つ「,,」をつける。そして、続くラインの冒頭に「=」をつける。
- ... 文中、文末に関係なく、音声的に言いよどんだように聞こえるものにつける。
- < >{<} 同時発話されたものは、重なった部分双方を< >でくくり、重ねられた発話には、< >の後ろに、{<}をつけ、そのラインの最後に句点「。」または英語式コンマ 2 つ「,,」をつける。また重ねた方の発話には、< >の後に、{>}

をつける。

- 【【】】 [全角] 第1話者の発話文が完結する前に、途中に挿入される形で、第2話者の発話が始まり、結果的に第1話者の発話が終了した場合は、「【【】】」をつける。結果的に終了した第1話者の発話文の終わりには、句点「。」の前に【【をつけ、第2話者の発話文の冒頭には】】をつける。
- [] 文脈情報。その発話がなされた状況ができるだけわかりやすくなるように、音声上の特徴（アクセント、声の高さ、大小、速さ等）のうち、特記の必要があるものなどを[]を入れて記しておく。
- () 短く、特別な意味を持たない「あいづち」は、相手の発話中の最も近い部分に、()にくくって入れる。
- < > 笑いながら発話したものや笑い等は、< >の中に、<笑いながら>、<2人で笑い>などのように説明を記す。笑い自体が何かの返答になっているような場合は1発話文となるが、基本的には、笑いを含む発話中か、その発話文の最後に記し、その後句点「。」または英語式コンマ 2 つ「,,」をつける。
- (< >) 相手の発話の途中に、相手の発話と重なって笑いが入っている場合は、短いあいづちと同様に扱って、(<笑い>)とする。
- # 聞き取り不能であった部分につける。その部分の推測される拍数に応じて、#マークをつける。
- 「 」 [全角] トランスクリプトを公開する際、固有名詞等、被験者のプライバシーの保護のために明記できない単語を表すときに用いる。

また、本研究では、以上の BTSJ で用いられる記号に加えて、以下の記号も用いる。

[発話の重なるの開始位置
→ 分析で注目する行

以上のような方法によって文字化した談話資料の一部を本論文末にサンプルとして添付する。

4.2 分析項目

本研究では、文字化した会話データを数量化し、定量的な分析が可能になるように、発話文の分析の単位として、すべての発話文を分析項目別にコーディングする。分析の項目は、大きく文末の「スピーチレベル」と「発話の重なり」の2つである。「スピーチレベル」については、宇佐美（2015）の一部を参考に、デスマス形（P）、非デスマス形（N）、中途終了型発話（NM）の3つの種類に分ける。これについては、第4章2節で詳説する。「発話の重なり」の分類については、「発話冒頭における同時発話」、「発話終了付近における同時発話」、「発話途中における同時発話」の3種類に分類する。これについては、第5章の1.2で詳細に記述する。なお、それぞれの項目については、SPSS統計解析ソフトを用い、統計的な検定処理（ χ^2 検定）を行った。

第 4 章

相手場面と第三者場面における「スピーチレベル管理」について

第 4 章では、学習者の言語調節を考察する際の、本研究の 1 つの分析視点である「スピーチレベル管理」に注目し、研究課題 1「相手場面と第三者場面において、CNS のスピーチレベル管理は、親しい友人と初対面の相手に対して、それぞれどのような選択基準によってなされるか」を明らかにする。

まず、1 節で「スピーチレベル」に関連する用語を整理し、本研究の捉え方を明らかにする。次に、2 節で本研究における「スピーチレベル」の分析方法について説明する。3 節で「相手場面と第三者場面における友人同士の会話では、CNS のスピーチレベル管理はどのような選択基準によってなされるか」、4 節で「相手場面と第三者場面の初対面同士の会話では、CNS のスピーチレベル管理はどのような選択基準によってなされるか」について分析し、考察する。最後に、5 節でまとめる。

1. 「スピーチレベル」に関連する用語について

まず、1.1 で先行研究における「スピーチレベル」に関連する用語の使い方について整理する。その上で、1.2 で、本研究では「スピーチレベル」に関する用語をどのように捉えるか、述べる。

1.1 先行研究における「スピーチレベル」の関連用語の整理

これまでの日本語のスピーチレベルに関する研究は、使用する基本用語及び扱う研究対象が研究ごとに異なっている。本研究では、主に談話分析、日本語教育の分野におけるスピーチレベルの選択及びシフトに注目した研究に限定して、用語を整理する。表 5 に先行研究における日本語のスピーチレベルに関連する用語を示す。表 5 は宇佐美（2015）をもとに筆者が作成したものである。下線は、同一論文内で複数の用語が使用されているものである。

表 5 スピーチレベルに関連する用語のまとめ

用語	研究（発表年順）
スピーチレベル （スピーチレベル・シフト）	足立（1995）、宇佐美（1995、1998、2001、2015）、 <u>大浜・鈴木・多田（1998）</u> 、 <u>佐藤・福島（1998）</u> 、 <u>前田（1999）</u> 、 <u>岡野（2000）</u> 、 <u>岡部（2003）</u> 、陳（2001、2003、2004）、谷口（2004）、林（2005）、宮武（2007、2009）、上仲（1997、2005、2007）、日高・伊藤（2007）、李（2008）、田（2009）、福富（2009）、篠崎（2012）、酒井（2015）、賈（2015）、三牧（2013）、劉（2013）、嶋原（2014）、 <u>高橋他（2017）</u>
スピーチスタイル （スピーチスタイル・シフト）	<u>岡野（2000）</u> 、 <u>岡部（2003）</u> 、伊集院（2004、2016）、大津（2004、2007）、申（2007a、2007b、2009）、ウォーカー（2008）、陳・川口（2012）、谷部（2015）、 <u>高橋他（2017）</u> 、高宮（2017）
待遇レベル （待遇レベル・シフト）	三牧（1993、1996、1997、2002）、 <u>佐藤・福島（1998）</u> 、江口（1999）
敬語レベル	生田・井出（1983）
スタイル（スタイル切り替え）	<u>前田（1999）</u> 、渋谷（2008）、寺尾（2010）、高野（2012）
表現スタイル（スタイル・シフト）	<u>大浜・鈴木・多田（1998）</u> 、永井（2007）
言語形式（文の）のスタイル	山口（2002）
文体シフト	岡本（1997）

表 5 から、「スピーチレベル」、「スピーチスタイル」、「待遇レベル」、「敬語レベル」「スタイル」、「表現スタイル」、「言語形式（文）のスタイル」、「文体シフト」という 8 種類の用語が使用されていることが

分かる。その中で、「スピーチレベル」、「スピーチスタイル」、「待遇レベル」が多く使用されている。そこで、本節では、順に、1.1.1で「スピーチレベル」、1.1.2で「スピーチスタイル」、1.1.3で「待遇レベル」を取り上げて、その定義、扱う範囲、特徴を検討する。

1.1.1 スピーチレベル

表5から、「スピーチレベル」という用語が、本研究で取り上げた参考文献の中で最も多く用いられていることが分かる。その定義については、研究ごとに異なっている。宇佐美（1995、1998、2001）は文末文体である丁寧体・普通体、敬語使用・不使用等を指して「スピーチレベル」としているが、宇佐美（2015）は「スピーチレベル」を簡潔に「言語形式の丁寧度」を表すものとして捉えている。谷口（2004）は、「スピーチレベル」を「ある談話において選択される文末文体（「ですます体」・「非ですます体」）や、敬語（いわゆる尊敬語・謙譲語）の使用、不使用、終助詞（「ね」、「よ」、「わ」、など）の使用、不使用による「丁寧さ」のレベル」（p.117）と定義している。また、劉（2013）、酒井（2015）は丁寧体（デスマス体）、普通体（非デスマス体/ダ体）という文末の丁寧さに関する文体のレベルを「スピーチレベル」としている。

このように、スピーチレベルが、丁寧体（デスマス体）と普通体（非デスマス体/ダ体）という文末形式の丁寧度を扱うという点では、どの研究においても一致している。研究によって差があるのは文末形式以外についての扱いで、1) 語彙レベル（狭義の敬語と軽卑語）を考察範囲に入れるか、2) 「ね」、「よ」のような終助詞を付加するか、の2点である。例えば、文末スピーチレベルのみを扱った研究（陳 2003、谷口 2004、田 2009、酒井 2015、高橋他 2017、など）がある一方、文末スピーチレベルのほかに、謙譲語・尊敬語の使用、「お野菜」などの美化語や軽卑語など、語彙の丁寧度を扱った研究（宇佐美 1998・2001、岡部 2003、上仲 2005・2007、三牧 2013、など）もあり、さらに、文末の終助詞の有無も分析対象とする研究（佐藤・福島 1998、

三牧 2013、劉 2013、など) もある。

1.1.2 スピーチスタイル

「スピーチスタイル」を使用した研究には岡野(2000)、岡部(2003)伊集院(2004、2016)、大津(2004、2007)、申(2007a、2007b、2009)、陳・川口(2012)²⁶、谷部(2015)、高橋他(2017)、高宮(2017)等がある。その定義については、伊集院(2004、2016)には、「「スピーチスタイル」は、文体の選択のみならず、語彙(敬語・俗語・幼児など)の選択や方言の使用・不使用、縮約の有無などによっても異なるものである」(伊集院 2016:p.83)という記述があるが、伊集院(2004、2016)は主に丁寧体(デスマス体)と普通体(非デスマス/ダ体)といった発話末の文体の選択とシフトに注目して考察を行っている。申(2007a、2007b、2009)、陳・川口(2012)、高宮(2017)なども、伊集院(2004、2016)と同じく、文末の丁寧体(デスマス体)と普通体(非デスマス/体ダ体)といったスピーチスタイルのみに焦点を当てている。また、岡野(2000)、高橋他(2017)では、「スピーチレベル」を「スピーチスタイル」と特に区別せずに使用している。つまり、これらの研究では、「スピーチスタイル」は、「スピーチレベル」とほぼ同義で、丁寧体(デスマス体)と普通体(非デスマス/ダ体)という文末形式の丁寧度を指す場合が多いと言えるだろう。

一方、「スピーチレベル」と区別して「スピーチスタイル」を使用している研究がある(岡部 2003、大津 2004・2007)。岡部(2003)は、「スピーチレベル」と「スピーチスタイル」という用語を両方使用しているが、丁寧体(デスマス体)と普通体(非デスマス/ダ体)という言語形式の丁寧度をコーディングする場合、「スピーチレベル」を使用している。「スピーチスタイル」については、「どの程度の丁寧さで話すか、あるいは女性/男性らしく話すか、高校生/子供らしく話すかなどのスピーチスタイルの選択は、対人関係を調節する重要な機能

²⁶ 申(2007b、2009)、陳・川口(2012)は用語「文末スタイル」を使用しているが、伊集院(2004)の枠組みを使用したものであるため、「スピーチスタイル」の範囲に入れた。

を果たす」(p.23)と述べ、「スピーチレベル」とは区別していることが分かる。また、大津(2007)は、スピーチスタイルのシフトによる冗談に注目して友人会話を分析しているが、スピーチスタイルをより広く捉え、文末形式だけでなく、ある話し手が通常することのない話し方をした時にも、それを一つのスタイルと見なしている。さらに、そのシフトについては、普通体から丁寧体へのシフトだけでなく、突然老人のような言葉づかいをしたかと思うと幼児のような口調に替えたりするような話し方の変化も、スピーチスタイル・シフトとして扱われている。

このように、「スピーチスタイル」は丁寧体(デスマス体)と普通体(非デスマス体/ダ体)といった言語形式の丁寧度だけを表すわけではなく、「～らしく話す」や、老人や幼児のような話し方など、より広い範囲を扱うものとして使われることが分かった。

1.1.3 待遇レベル

三牧の一連の研究(1993、1996、1997、2002)、佐藤・福島(1998)、江口(1999)²⁷では、「待遇レベル」という用語が使用されている。三牧の一連の研究は、談話開始時に話者間の社会的距離等を考慮して設定される基本的な文末文体や、談話の進行と共に変化する心的距離を反映した文末文体及び語の選択のシフトを示す概念として「待遇レベル」という用語を使用している。つまり、「待遇レベル」を、相手や場面に対する待遇の程度、待遇表現の丁寧度を示すものとして捉えていると言える。その定義については、三牧(1993)では、「談話の中で選択・使用される待遇表現のレベルを「待遇レベル」と呼ぶ。待遇レベルは敬語、方言、音便、終助詞などの使用・不使用、文末文体などに表現される」(p.39)とされているが、三牧(1996)では「選択された待遇表現の待遇度」(p.437)と定義されている。その三牧(1996)の「待遇度」は、相手や話題の人物をどのように位置づけるか、待遇するかという相手を動的に待遇する話者の待遇意識が強調さ

²⁷ 江口(1999)は三牧(1993)の枠組みに従ったものである。

れていると考えられる。

また、日本語学習者と母語話者における発話末表現の「待遇レベル」認識の違いに注目した佐藤・福島（1998）は「スピーチレベル」と「待遇レベル」という用語を両方使用しているが、「スピーチレベル」を、丁寧体を用いるか普通体を用いるか、また、敬語や終助詞を使用するかしないか等によって決定される会話の「待遇レベル」としている。佐藤・福島（1998）では、文末文体である丁寧体・普通体の使用、敬語や終助詞の使用など、言語形式の丁寧度を指す用語として「スピーチレベル」が使用される一方で、「自然な度合い」や「適切さ」といった印象調査の際の認識に関わるものとして「待遇レベル」が使用されている。

さらに、2007年以前の三牧の一連の研究（1993、1996、1997、2002）においては、「待遇レベル」という用語が使用されてきたが、三牧（2013）は、「待遇レベル」という用語の問題点について、「「待遇」という用語を使用する限り、儀礼的ではなく、話し手の会話相手に対する待遇意識のみを反映しているとの印象を与えかねない」（p.85）として「スピーチレベル」を使用している。

このように、「待遇レベル」という用語は、文末文体や語といった言語形式に付随する丁寧度を指すというより、話し手の相手に対する待遇意識の方が強調されて用いられていると言えよう。

1.2 本研究における「スピーチレベル」の捉え方

以上、主に日常会話における文末文体といった言語形式の丁寧度を論じるにあたり、「スピーチレベル」、「スピーチスタイル」、「待遇レベル」という用語を取り上げて検討した。その結果、「スピーチスタイル」は、他の用語より扱う範囲が広いこと、「待遇レベル」は「儀礼的用法を含むとしても真の待遇意識のみを反映しているとの印象を与える危険が伴う」（三牧 2013： p.85）ということが分かった。宇佐美（2015）は、「言語形式の丁寧度は、あくまで、言語形式自体の丁寧度レベルを表すもの」であり、それ自体が直接、実質的な対話相

手の待遇」や「相手へのポライトネス」を表すものではないと捉えているため、そのことをより明確に示すために、最もニュートラルな「スピーチレベル」という用語を用いている」(p.17)と述べている。また、三牧(2013)も、言語形式の丁寧度レベルをより明確でニュートラルに示す用語として、「スピーチレベル」が最もニュートラルであるとしている。

本研究では、発話の言語形式、特に文末文体においてどのような丁寧度レベルが示されているかという現象面に注目し、考察を行うため、三牧(2013)や宇佐美(2015)に従い、よりニュートラルな「スピーチレベル」を使用することとする。

さらに、本研究では、酒井(2015)を参考にし、丁寧体(デス・マス体)、普通体(ダ体)といった文末の丁寧さに関する文体のレベルを「スピーチレベル」とし、場面や相手に応じて基調として選択された文末のスピーチレベルを「基本的スピーチレベル」、同一人物の談話における基本的スピーチレベルからの一時的なスピーチレベルの移行を「スピーチレベル・シフト」と呼ぶ。また、三牧(2013)を参考にし、以上述べてきた基本的スピーチレベルの設定やスピーチレベル・シフトのような、談話におけるスピーチレベルに関する様々な調整(management)を、包括的に「スピーチレベル管理」と称することとする。

また、「スピーチレベル」の分析対象について、1.1.1で指摘したように、文末のスピーチレベルのみを扱った研究がある一方で、文末スピーチレベルのほかに、謙譲語・尊敬語の使用、美化語や軽卑語など、語彙の丁寧度を扱った研究もあった。本研究では、文末のスピーチレベルのみに注目することとし、語彙の丁寧度は扱わない。

2. 本研究における「スピーチレベル」の分析方法

まず、「スピーチレベル」を表す用語について説明する。従来、文末形式のスピーチレベルを表す用語は研究者によって異なり、「丁寧体・普通体」(鈴木 1997、三牧 2000・2013、上仲 2007、田 2009、嶋

原 2014、賈 2015、高宮 2017、など)、「敬体・常体」(申 2007a・2007b・2009、林 2005、宇佐美 2006、李 2008、など)、「デスマス体・ダ体」(三牧 1997、伊集院 2004、陳 2003、陳・川口 2012、劉 2013、など)、「デスマス体・非デスマス体」(宇佐美 1998・2001、など)などがある。以上の用語のニュアンスについては、宇佐美(2015)に以下のような記述がある。

「敬体」、「丁寧体」というような「敬う」、「丁寧な」というニュアンスも含む用語より、さらにニュートラルで、かつ、よく用いられている「デスマス体」、「非デスマス体」をあえてここまで用いることにした。しかし、より厳密には、「○○体」という言い方には、文体、すなわち、「全体的なスタイル」を表すニュアンスがあることから、〈中略〉あくまで「言語形式の丁寧度を示す形態」を表す「デスマス形」、「非デスマス形」という用語が、最も適切ではないかと考えている。以降、「デスマス形」、「非デスマス形」を用いる。

(宇佐美 2015: p.17 より)

本研究では、宇佐美(2015)に従って、「デスマス形」と「非デスマス形」を用いることにし、文末のスピーチレベルを伊集院(2004)の一部を参考に²⁸、「デスマス形 (Polite-form : P)」、「非デスマス形 (Non-Polite form : N)」、「中途終了型発話 (No-Marker : NM)」の3つの種類に分けることにした。文末のスピーチレベルの判断においては、終助詞などを考慮にいれずに、「デスマス形 (P)」と「非デスマス形 (N)」の発話文末のスピーチレベルのみを見る。また、李(2008: p.68)を参考に、「行きます、はい。」「そうか、へー。」のように、発話文末において「デスマス形 (P)」や「非デスマス形 (N)」の後に「はい」、「へー」などの間投詞的なものがきた場合は、その前の部分

²⁸ 伊集院(2004)では、文末のスピーチレベルを大きくデス・マス体、ダ体、中途終了型の3つに分類し、さらにデス・マス体、ダ体を、言い切りの文末スタイルと終助詞あるいは接続助詞を伴う文末のスピーチレベルに分類しているが、本稿では下位分類は行わない。

のデスマス形 (P) や非デスマス形 (N) などを見て発話文末のスピーチレベルを判断することにする。倒置文は、文法的にもとの位置に戻してから述語に注目してスピーチレベルを判定することにした。

表 6 に本研究における「文末のスピーチレベルの分類」を示す。「デスマス形 (P)」は、言い切りのデスマス形や終助詞あるいは接続助詞が付いているデスマス形を含む。「非デスマス形 (N)」は、言い切りの非デスマス形や終助詞あるいは接続助詞が付いている非デスマス形であり、名詞、副詞の一語文および名詞や形容動詞の語幹で終了している文を含む。「けど」、「が」、「から」、「し」のような接続助詞については、形式上主節を伴わずにこれらの接続助詞のみで終わる場合、南 (1993) では「接続助詞が文末で終助詞的に使われる」(p.220)、高橋 (1993) では「接続助辞が終助辞化したものと位置づけ」(p.23) ると論じられている。本研究では、以上の議論に基づき、「けど」、「が」、「から」、「し」の従属節だけで言いたいことを言い終わっている場合、「けど」、「が」、「から」、「し」のような接続助詞を終助詞と同等に扱うことにする。「中途終了型発話 (NM)」とは、述部まで言い切られていないにもかかわらず、意図した情報の伝達が終了している発話を表す。

ただし、「中途終了型発話 (NM)」に関しては、宇佐美 (2015) の「文末形式の丁寧度を示すマーカのない発話」(p.18) や篠崎 (2012) の「普通体とも丁寧体とも異なる作用を持つ」(p.19) という指摘に基づき、本研究の考察対象から外す。本章ではスピーチレベルを分析する際には、「デスマス形 (P)」、「非デスマス形 (N)」のみに注目する。

表 6 文末のスピーチレベルの分類

スピーチレベル	発話末の言語形式
デスマス形 (P)	デスマス形の言い切り 例：～ます；～ました；～ませんか；～です；～でした； ～ですか；～ください、など デスマス形＋終助詞/接続助詞 例：～ます（よ）ね；～ませんね；～です（よ）ね； ～ですよ；～ですが；～ですけど；～ですから、など
非デスマス形 (N)	非デスマス形の言い切り 例：勉強した；大変だった；見ない；記念のところ； 偉い；本当、など 非デスマス形＋終助詞/接続助詞 例：すごいね；いいよ；きれいだよね；いいかなあ； ～だっけ；変化も多いし；～と思うんだけど、など
中途終了型発話 (NM)	中途終了型 例：そこまでは...；ドラマとか...；鈴木さんがいると...； ～と思って；～って；～みたいに；～とか；～ば、な ど

また、林（2008）の「会話のストラテジーの中で、話者交替に最も強く結び付いているのが「あいづち」（p.17）であるという指摘に基づいて、「あいづち」もスピーチレベルの分類が可能であると考えられることから、本研究では、1発話を成す「あいづち」を分析対象にすることにした。あいづち表現の待遇的意味については、日本語記述文法研究会編（2009）が、表7のように分類している。

表 7 あいづち表現の待遇的意味

上向き待遇	肯定	はい、ええ、はあ
	否定	いいえ、いえ
中立・下向き待遇	肯定	うん、おう、ああ、まあ
	否定	ううん、いや

(日本語記述文法研究会編 2009 : p.156 より)

本研究では、これに従い、「はい、ええ、はあ、いいえ、いえ」をデスマス形 (P)、「うん、おう、ああ、まあ、ううん、いや」を非デスマス形 (N) として扱うことにする。さらに、本研究では、「へー」のような感嘆を表す発話や「ははは...」のような笑い声を表す発話は、文末のスピーチレベルの丁寧度が判断できないので、分析対象から除外した。また、第三者に向けられた言葉をそのまま引用した発話文も、引用部分は直接に会話相手に向けられた言葉ではないため、分析対象から除いた。また、日高 (2005) は、相手に確認の問いかけをする推量形の「~でしょう」については、その丁寧体と普通体の丁寧さのレベルが、平叙文のそれ(「~だろう」)とは同一ではないことを指摘し、さらに、「普通体の「~だろう」は、通常の普通体のレベルより丁寧さの度合いが低く、特に女性語では丁寧体の「~でしょう」を用いるのが普通である」(p.71) と述べている。本研究では、分析対象が女性同士の会話であるため、以上の日高 (2005) の指摘に従い、「非デスマス形」を基調として設定した会話では、「~でしょう」で終わった発話文末のスピーチレベルを「普通体」すなわち「非デスマス形 (N)」として捉えることにした。

以上の「スピーチレベル」の分類に従い、以下、3 節と 4 節で、「対友人」会話と「初対面」会話における CNS の「スピーチレベル管理」に焦点を当てて考察を進める。

3. 「対友人」会話における「スピーチレベル管理」

3 節では、「相手場面」と「第三者場面」における「対友人」会話に注目し、親しい友人に対する CNS のスピーチレベル管理はどのような選択基準によってなされるか、明らかにする。そのために、以下の2つの点に焦点を当て、分析と考察を進める。

- ①「相手場面」と「第三者場面」における「対友人」会話は、それぞれ、どのような基本的スピーチレベルが選択されるか。
- ②「相手場面」と「第三者場面」における「対友人」会話は、それぞれ、どのような状況でスピーチレベル・シフトが行われるか。

以下、3.1 で①について、3.2 で②について明らかにし、3.3 で CNS のスピーチレベル管理のメカニズムについてまとめる。

3.1 基本的スピーチレベルの選択及びその選択基準

まず、「相手場面」と「第三者場面」における「対友人」会話を文字化し、発話ごとに文末のスピーチレベルをコーディングして集計した。両場面における CNS のスピーチレベルを表 8-1 と図 1 に示す。

表 8-1 両場面における「対友人」会話の CNS のスピーチレベル

発話数 (%)

	デスマス形 (P)	非デスマス形 (N)	中途終了型 (NM)	合計
相手場面	83 (6.8)	936(77.1)	195(16.1)	1214(100.0)
第三者場面	28(2.2)	1048(82.9)	188(14.9)	1264(100.0)
合計	111(4.5)	1984(80.1)	383(15.5)	2478(100.0)

($\chi^2(2) = 32.707, p < .001$)

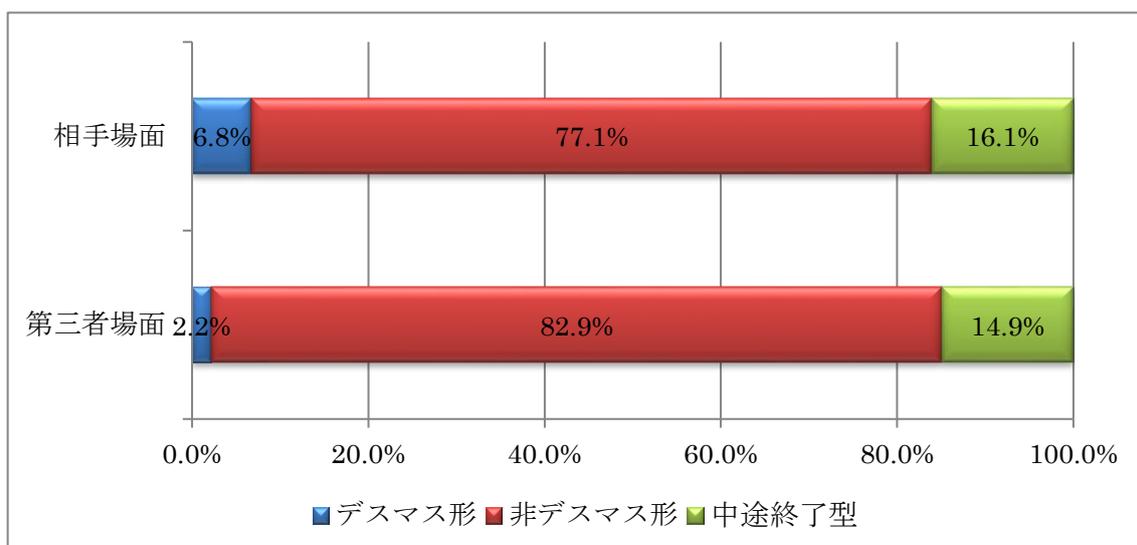


図 1 両場面における「対友人」会話の CNS のスピーチレベル

この結果について χ^2 検定を行ったところ、0.1%水準で有意差があった ($\chi^2(2) = 32.707$, $p < .001$) ことから、「対友人」の場合、CNS のスピーチレベルの選択には相手が日本語母語話者であるか否かが影響することが把握された。

表 8-1 と図 1 をみると、「対友人」の場合、相手場面であれ、第三者場面であれ、CNS の最も出現率の高いスピーチレベルは非デスマス形で、相手場面では 77.1% (936 話)、第三者場面では 82.9% (1048 話) を占めている。つまり、「対友人」の場合、相手場面と第三者場面のどちらにおいても、CNS は基本的スピーチレベルを非デスマス形を基調として設定していることが分かる。

日本語の言語規範や先行研究の成果を顧みると、「対友人」会話の場合は、「親－親」の社会的関係があるので、非デスマス形が基本的スピーチレベルとして設定されるのが一般的である。したがって、上記の結果から、「対友人」会話においては、基本的スピーチレベルの設定に当たって、CNS は、相手が日本語母語話者か非母語話者にかかわらず、日本語の言語規範に従い、「親」という社会的関係を考慮し、非デスマス形を選択していることが分かる。この基本的スピーチレベルの選択基準について、CNS はフォローアップインタビュー

でも、「相手が日本人かどうかにかかわらず、友人関係だから、非デスマス形を使うべきだと思う」と語っている。

しかしながら、「対友人」の場合、CNSの基本的スピーチレベルの設定には相手が日本語母語話者か非母語話者かによる違いが見られないものの、非デスマス形からデスマス形へのスピーチレベル・シフトには差が見られた。表 8-1 と図 2 を見ると、「対友人」の場合、CNSのデスマス形へのシフトは、相手場面では 6.8%（83 話）であるのに対して、第三者場面では 2.2%（28 話）と、相手場面の半分以下でしか起きていない。表 8-2 に示した残差分析の結果、デスマス形は相手場面で有意に多いのに対して、非デスマス形は第三者場面で有意に多いことが分かった。つまり、「対友人」の場合、CNS は、相手場面の方が第三者場面よりデスマス形へシフトする傾向が強いと言えよう。

表 8-2 残差の一覧表

	デスマス形	非デスマス形	中途終了型
相手場面	5.6***	-3.6***	0.8n.s.
第三者場面	-5.6***	3.6***	-0.8n.s.

(n.s. : not significant, ***p<.001)

3.2 デスマス形へのシフト要因の分析

では、これらのスピーチレベル・シフトは、どのような状況で、どのような要因によって生起するのだろうか。ここでは、「対友人」会話における CNS のデスマス形へのシフトが生起する状況及びその要因について分析する。まず、3.2.1 でシフトが起きた発話を発話機能によって分類した結果を報告する。次に、3.2.2 でそれぞれの発話機能によるシフト要因について分析し、考察する。

3.2.1 発話機能によるデスマス形へのシフトの分類

表 8-1 から、「対友人」の場合、CNS の非デスマス形からデスマス形へのシフトは、相手場面では 83 話であるのに対して、第三者場面

では 28 話であることが分かった。これらの発話を、発話機能によって分類した結果、①「あいづち」、②「重要部分の明示・強調」、③「新話題への移行」、④「補足・説明の挿入」、⑤「情報要求」の 5 つに分類された。表 9-1 と図 2 はその結果を示したものである。

表 9-1 両場面における「対友人」会話のデスマス形へのシフト

発話数 (%)

	① あいづち	② 重要部分	③ 新話題への移行	④ 補足・説明	⑤ 情報要求	合計
相手場面	40(48.2)	17(20.5)	8(9.6)	11(13.3)	7(8.4)	83(100.0)
第三者場面	5(17.9)	12(42.9)	4(14.3)	3(10.7)	4(14.3)	28(100.0)
合計	45(40.5)	29(26.1)	12(10.8)	14(12.6)	11(9.9)	111(100.0)

($\chi^2(4) = 10.013, p < .05$)

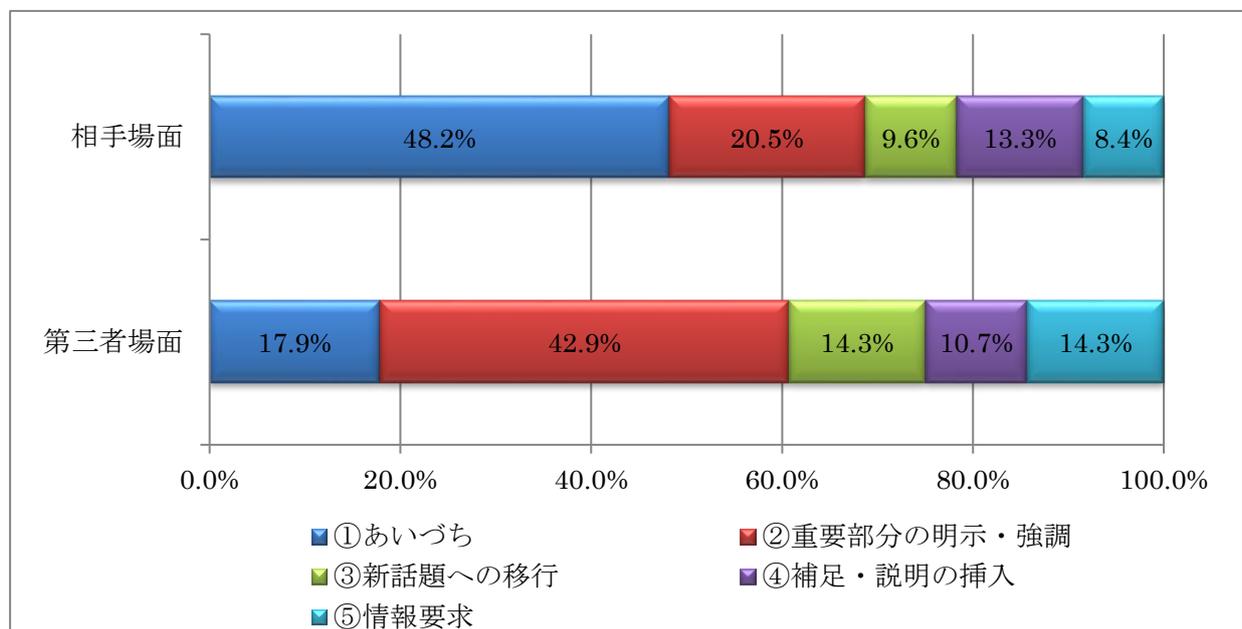


図 2 両場面における「対友人」会話のデスマス形へのシフト

この結果について χ^2 検定を行ったところ、5%水準で有意差があった ($\chi^2(4) = 10.013, p < .05$)。表 9-1 を見ると、相手場面においては、

最も多く生起したデスマス形へのシフトが①「あいづち」によるシフトで、全体の半分近く（48.2%、40話）を占めていることが分かった。次に多く生起したのが②「重要部分の明示・強調」によるシフトで、20.5%（17話）を占めていた。3番目に多く生起したのが④「補足・説明の挿入」によるシフトで、13.3%（11話）であった。

それに対して、第三者場面においては、②「重要部分の明示・強調」によるシフトが最も多く、全体の半分近く（42.9%、12話）を占めていた。2番目に多く生起したのが①「あいづち」によるシフトで17.9%（5話）であった。次に③「新話題への移行」、⑤「情報要求」のシフトが同じく、14.3%（4話）を占めていた。

さらに、表 9-1 について、残差分析を行った結果を表 9-2 に示す。

表 9-2 残差の一覧表

	①あいづち	②重要部分の 明示・強調	③新話題へ の移行	④補足・ 説明	⑤情報要求
相手場面	2.8**	-2.3*	-0.7n.s.	0.3n.s.	-0.9n.s.
第三者場面	-2.8**	2.3*	0.7n.s.	-0.3n.s.	0.9n.s.

(n.s. : not significant, *p<.05, **p<.01)

表 9-2 を見ると、①「あいづち」と②「重要部分の明示・強調」によるシフトには場面の有意差があることが分かった。つまり、①「あいづち」によるシフトは相手場面で有意に多いのに対して、②「重要部分の明示・強調」によるシフトは第三者場面で有意に多いと言える。一方、③「新話題への移行」、④「補足・説明の挿入」及び⑤「情報要求」は両場面には有意差が見られなかった。

では、以上のような、両場面におけるシフト要因の頻度の違いは何を意味しているのだろうか。その要因を明らかにするために、以下、順に①「あいづち」、②「重要部分の明示・強調」、③「新話題への移行」、④「補足・説明の挿入」、⑤「情報要求」の談話の分析を質的に

試みることにする。

3.2.2 発話機能によるデスマス形へのシフト要因

まず、相手場面で有意に多い①「あいづち」によるデスマス形へのシフトについて分析する。

① あいづち

「対友人」の場合、CNSの「あいづち」によるデスマス形へのシフトは、相手場面では48.2%（40話）、第三者場面では17.9%（5話）で、相手場面の方が有意に多く起こっていた。以下、相手場面における「あいづち」によるデスマス形へのシフトの談話例を示す。

例 1

- 13-1JNS1：で、そうしたら、その後は,, (/)
→14 CNS1：はい。 (P)
13-2JNS2：あのう、バイトをやめる時だね,, (/)
→15 CNS1：はい。 (P)
13-3JNS1：例えば,, (/)
→16 CNS1：はい。 (P)
13-4JNS2：どのぐらい前、“一ヶ月前に言って”って言われる?。(N)

例 1 では、CNS1 は 14、15、16 で「はい」というあいづちを 3 回用いている。本章の 2 節で述べたように、「はい」は「上向き待遇」のあいづち表現であるため、本研究では、あいづち表現「はい」をデスマス形発話と同等に扱い、「はい」によるシフトをデスマス形へのシフトとして捉えた。

例 1 のような「はい」の他、あいづち表現「そうですね」によるデスマス形へのシフトも観察された。談話例を例 2 に示す。

例 2

- 226 JNS4: じゃ, 先生と子供よりも子供にこうちゃんと近づいて
言っ**て**あげることができる。 (N)
- 227 CNS4: そうですね。 (P)
- 228 JNS4: すごいね、なかなかできない。 (N)
- 229 CNS4: えっ[↑], なんで?。 (NM)

例 2 では、CNS4 は 227 で「そうですね」というあいづち表現を用いてデスマス形へシフトしている。

相手場面における「あいづち」によるデスマス形へのシフト 40 話は、すべて例 1 と例 2 のような「はい」及び「そうですね」によるものであった。その中で、「はい」は 27 話、「そうですね」は 13 話であった。さらに、この「はい」によるシフト 27 話のうち、23 話が CNS1 の発話に集中しており、残りの 4 話は CNS4 の発話に観察された。また、「そうですね」による 13 話のうち、11 話が CNS4 の発話に集中しており、残りの 2 話は CNS1 の発話に観察された。

親しい友人に、あいづちを打つ時にデスマス形へシフトすることには違和感があり、この言語行動から、CNS1 と CNS4 は、相手に応じて「そうだね」と「そうですね」及び「うん」と「はい」を使い分けるという「日本語のルール」が習得できていない可能性が考えられる。しかし、第三者場面の「対友人」会話を見ると、CNS1 があいづちを打つ時には、以下の例 3 と例 4 に示すように、すべて「そうだね」「うん」が用いられているのである。

例 3

- 29 KNS1: こっちが長いけど、そっちも長いよね。 (N)
- 30 CNS1: ねー、〈笑いながら〉長いよね。 (N)
- 31 KNS1: うん、そっか、そっか。 (N)
- 32 CNS1: そうだね。 (N)
- 33 KNS1: あんまり長いよね。 (N)

例 4

- 1-1KNS1: クリスマスね,, (/)
→2 CNS1: うん。 (N)
1-2KNS1: 私さ、最初は,, (/)
→3 CNS1: うん。 (N)
1-3KNS1: こう、休みを取って、こう、どこかへ行こうかなと
思ったの。 (N)

つまり、CNS1 は、「そうですね」と「そうだね」、「はい」と「うん」を相手に応じて使い分けられないのではなく、同じ「親しい友人」であっても、相手が日本語母語話者である場合には待遇的意味を重視して丁寧度が高いデスマス形を用いていることが推測される。

一方、CNS4 の場合、あいづちを打つ時の、「はい」によるデスマス形へのシフト（4 話）は、全て相手場面に集中しており、第三者場面では観察されなかった。また、「そうですね」によるデスマス形へのシフトは、相手場面と第三者場面ではそれぞれ 11 話と 5 話であった。しかし、例 5 と例 6 に示すように、非デスマス形のあいづち表現「そうだね」も両場面において用いられた。

例 5

- 134 CNS4: 女性にとっては、これはいいなあと思って。 (NM)
135 JNS4: うん、働きやすいよね。 (P)
→136 CNS4: そうだね。 (N)
137 JNS4: 産休みみたいなもの取りやすい。 (N)

例 6

- 209 CNS4: ああ、キウイー、キウイーだ、知ってる知ってる(うん
うん)、食べる。 (N)
210-1KNS2: これ、なんか、普通、その緑の色だけどね,, (/)
→211 CNS4: うん、そうだね。 (N)

210-2KNS2：なんか、黄色いゴールドキウィーというものがあるけど(うん)、それがめっちゃ美味しい、甘い。(N)

CNS4 による両場面における「そうですね」と「そうだね」の発話数を観察してみると、相手場面では、「そうですね」の発話数は 11 話で、「そうだね」は 9 話であった。一方、第三者場面では、「そうですね」の発話数は 5 話で、「そうだね」は 14 話であった。つまり、同じ「親しい友人」であっても、CNS4 はあいづちを打つ時に、相手場面では「そうですね」(11 話)と「そうだね」(9 話)が拮抗しているのに対して、第三者場面では「そうだね」(14 話)を「そうですね」(5 話)の約 3 倍使用していることが分かった。

このように、情報内容を持たず、ほとんど無意識に発せられるあいづちの場合のデスマス形へのシフトが、相手場面では全体の半分近く(48.2%)を占めており、有意に多く起こっていたことから、「日本語母語話者には丁寧に話さなければならない」という意識は CNS の潜在意識にあるものと考えられ、CNS 自身も気づいていない可能性が示唆される。

これは CNS1 と CNS4 に対するフォローアップインタビューの結果からも裏付けられた。CNS1 と CNS4 はフォローアップインタビューで「日本語を勉強し始めた時に、デスマス形が一番無難な使い方だと教えられたから、日本人と話す時に、失礼にならないように、デスマス形を使おうとする意識や、日本語の待遇的意味を考慮しなきゃいけないという意識が強い。会話相手が友達であっても、この意識がまだあると思う。そのため、思わず「そうですね」と「そうだね」及び、「はい」と「うん」を混ぜて使う」と語っている。

②重要部分の明示・強調

次に、第三者場面で最も多く生起した②「重要部分の明示・強調」の談話例を示す。

例 7

- 471 KNS2:何っていうか、それがあれなんか、秋とか、冬よりは、
(うん)、春とか夏の方がなんか、人間も元気も出るし、
なんか、あっちこっち行こうっていう、その感覚が春
と夏。 (N)
- 472 CNS4:うん。 (N)
- 473 KNS2:面白い、私、秋と夏、秋と冬が弱い、(ああ)、秋と冬
は本当に早く家に帰って、ごろごろしたいしか思っ
ない、本当に。 (N)
- 474 CNS4:へー、私は逆なんだよ。 (N)
- 475 KNS2:へー、そうか。 (N)
- 476 CNS4:私、秋の方一番元気です。 (P)
- 477 CNS4:冬も、みんな…、なんか、私あんまり、あのう、冬は
寒くないと<思ってる>{<}から。 (N)
- 478 KNS2:<うんうん>{>}。 (N)

例 7 では、473KNS2 の「秋と冬は元気がない」という発話に対し
て、CNS4 は 474 で「へー、私は逆なんだよ」と自分は反対であるこ
とを述べている。続いて、476 で「私、秋の方一番元気です」という
重要部分を明示して強調する際に、デスマス形へシフトしている。こ
のように、スピーチレベルをデスマス形にシフトすることで、「私は
秋が一番元気である」という情報をはっきりと示し、重要部分を際立
たせる効果もあると考えられる。嶋原(2014)が述べるように、談話
的条件上のアップシフト(デスマス形へのシフト)が談話の展開を明
確にする機能を果たしている。このような、CNS 全体の「重要部分
の明示・強調」によるデスマス形へのシフトは、相手場面と第三者場
面ではそれぞれ 20.5% (17 話) と 42.9% (12 話) で、第三者場面の
ほうが相手場面より有意に多く起こっていた。このことから、「対友人
」の場合、CNS は、第三者場面の方が「重要部分」を明示・強調
する状況で談話の展開を明確にするためにデスマス形へシフトする

傾向が強いことが分かった。

③ 新話題への移行

続いて、③「新話題への移行」によるデスマス形へのシフトの談話例を示す。

例 8

254 KNS2: <曇り>{>}、曇り。 (N)

255 CNS4: うん、それ、この、圧、や、え[↑]、<気圧>{<}。 (N)

256 KNS2: <蒸し暑い>{>}?。 (N)

257 CNS4: うん、ちょっと低いから、(うんうん)、なんか、<明日>{<}。 (N)

258 KNS2: <で、空を>{>}見ても、晴れという感じっていうより、曇り、曇ってる、(うんうん)、なんか、青あんまり見えない<というか>{<}。 (N)

259 CNS4: <そうか>{>}、蒸し暑い、これが一番嫌だ。 (N)

→260 CNS4: 私、アレルギーの肌ですので、けっこう敏感の肌ですので、(うん)梅雨の時、いつも、え、これ、出てきます。 (P)

261 KNS2: クーラー?。 (N)

262 CNS4: なんか、<アレルギー>{<}。 (N)

例 8 では、CNS4 が 259 までは非デスマス形を用いて KNS2 と「天気」の話題をめぐって話していたが、260 でデスマス形へシフトすることによって、「アレルギー肌」という新しい話題へ移行している。ここでのアップシフトは、文末に変化を持たせ、次のトピックに移すという談話の展開を明確にするという機能を果していると考えられる。このような、CNS 全体の「新話題への移行」によるデスマス形へのシフトは、相手場面では 9.6% (8 話)、第三者場面では 14.3% (4 話) で、有意差がなかった。

④補足・説明の挿入

④「補足・説明の挿入」によるデスマス形へのシフトの談話例を示す。

例 9

- 134 CNS4：女性にとっては、これはいいなあと思って。 (NM)
- 135 JNS4：うん、働きやすいよね。 (N)
- 136 CNS4：そうだね。 (N)
- 137 JNS4：産休みみたいなもの取りやすい。 (N)
- 138 CNS4：ただ、一つがなんか、私からそう思ってるよ。 (N)
- 139 JNS4：うん。 (N)
- 140 CNS4：一つは、一つはとてもおもしろいと思って、おもしろいんじゃないかと、おもしろいんじゃないかと(うん)、あのう、いい点から(うん)、まず、週末があります。 (P)
- 141 JNS4：そうだね、土日<休みね>{<}>。 (N)
- 142 CNS4：<土日>{>}と、あの夏休み(うん)と春休み。 (N)

例 9 では、CNS4 と JNS4 が教員の職業のメリットについて話をしている。CNS4 は 138 で「ただ、一つがなんか、私からそう思ってるよ」と非デスマス形を用いて自分の考え方を提起した。続いて、140 で「週末がある」というメリットについて具体的に説明を始めた時に、デスマス形へシフトしている。文末のスピーチレベルをシフトすることで、その説明や補足の話に注意を向けさせると同時に、談話を進める働きがあると考えられる。このような、CNS 全体の「補足・説明の挿入」によるデスマス形へのシフトは、相手場面では 13.3% (11 話)、第三者場面では 10.7% (3 話) で、有意差がなかった。

⑤情報要求

最後に、⑤「情報要求」によるデスマス形へのシフトの談話例を見てみよう。

例 10

- 13-4JNS1: どのぐらい前、“一ヶ月前に言って”って言われる?。(N)
17 CNS1: なんか、そこまでは…。(NM)
→18 CNS1: 普通は一ヶ月ですか?。(P)
19 JNS1: うんうん。(N)

例 10 では、CNS1 は、13-4JNS1 の「どのぐらい前、“一ヶ月前に言って”って言われる?」という発話に対し、17 で「なんか、そこまでは…」と言いきし、ここでは「言われていない」が省略されている。続いて、18 で「普通は一ヶ月ですか?」と JNS1 に対する質問する時に、デスマス形へシフトしている。

質問文による「情報要求」は、聞き手目当ての行為、つまり、相手に向ける行為である。メイナード(2004)は、正式に相手に向ける発話においてスピーチレベル・シフトが起こることを論じているが、CNS は、質問する時、つまり、相手から情報を引き出そうとする時に相手を意識して、デスマス形へシフトしたのではないか。

「情報要求」の場合のデスマス形へのシフトは、相手場面では 8.4% (7 話)、第三者場面では 14.3% (4 話) で、有意差がなかった。

3.3 「対友人」会話における CNS のスピーチレベル管理のメカニズム

以上のように、「対友人」会話では、CNS のデスマス形へのシフトは、①「あいづち」、②「重要部分の明示・強調」、③「新話題への移行」、④「補足・説明の挿入」、⑤「情報要求」の 5 つの状況で起きていたが、相手場面と第三者場面に有意差があったのは①「あいづち」と②「重要部分の明示・強調」であった。つまり、相手場面では「あいづち」によるシフトが有意に多いのに対して、第三者場面では「重要部分の明示・強調」によるシフトが有意に多いことが分かった。CNS は、相手場面では、あいづちを打つ際にデスマス形へシフトする傾向があるのに対して、第三者場面では、「重要部分の明示・強調」の状況で談話の展開を明確にするためにスピーチレベル・シフトを行

う傾向があることが明らかになった。

以上の結果から、「対友人」の場合、CNSは相手場面と第三者場面では、異なったメカニズムで文末のスピーチレベルを管理していることが推測される。

まず、CNSは、基本的スピーチレベルの設定にあたり、「対友人」会話においては、相手が日本語母語話者か非母語話者かにかかわらず、相手場面と第三者場面のどちらにおいても、日本語の規範に従い、「親」の社会的関係を考慮し、非デスマス形を基調として選択している。

一方、両場面の差に注目すると、相手場面ではデスマス形が有意に多いのに対して、第三者場面では非デスマス形が有意に多いことが分かった。つまり、相手場面の方が第三者場面よりデスマス形へシフトする傾向が強いと言える。さらに、デスマス形へのシフトの状況を発話機能によって分類した結果、相手場面では、情報内容を持たず、ほとんど無意識に発せられる「あいづち」の場合にデスマス形へシフトする傾向があるのに対して、第三者場面では、「重要部分の明示・強調」という状況で談話の展開を明確にするためにスピーチレベル・シフトを行う傾向があることが分かった。相手場面では、「あいづち」の場合にデスマス形へシフトする傾向があることから、同じ「親しい友人」であっても「日本語母語話者には丁寧に話す」という意識がCNSの潜在意識にあるものと考えられ、CNS自身も気づいてない可能性が示唆される。また、嶋原（2014）は、日本語母語場面における談話的条件下のアップシフト（デスマス形へのシフト）は「意見・結論を明示する時」「ユニット²⁹を移行する時」に談話の展開を明確にするために使われていることを論じている。本調査結果でも、CNSは、第三者場面において、母語話者同様に「重要部分を明示・強調する」状況でデスマス形へのシフトを多く行っていた。このことから、「第三者言語接触場面の参加者が内的場面³⁰に似た参加の仕方」（フ

²⁹ 「ユニット」は、嶋原（2014）では話題を指しており、「ユニットを移行する時」は話題を転換する時という意味である。

³⁰ 内的場面とは母語場面のことである。

アン 2011 : p.49) をしていることが示唆される。

4. 「初対面」会話における「スピーチレベル管理」

4節では、「相手場面」と「第三者場面」における「初対面」会話に注目し、初対面の相手に対する CNS のスピーチレベル管理はどのような選択基準によってなされるか、明らかにする。そのために、以下の2つの点に焦点を当て、分析と考察を進める。

- ① 「相手場面」と「第三者場面」における「初対面」会話は、それぞれ、どのような基本的スピーチレベルが選択されるか。
- ② 「相手場面」と「第三者場面」における「初対面」会話は、それぞれ、どのような状況でスピーチレベル・シフトが行われるか。

以下、4.1で①について、4.2で②について明らかにし、4.3で CNS のスピーチレベル管理のメカニズムについてまとめる。

4.1 基本的スピーチレベルの選択及びその選択基準

まず、「相手場面」と「第三者場面」における「初対面」会話を文字化し、発話ごとに文末のスピーチレベルをコーディングして集計した。両場面における CNS のスピーチレベルを表 10-1 と図 3 に示す。

表 10-1 両場面における「初対面」会話の CNS のスピーチレベル

	発話数 (%)			
	デスマス形 (P)	非デスマス形 (N)	中途終了型 (NM)	合計
相手場面	741(62.3)	271(22.8)	178(15.0)	1190(100.0)
第三者場面	764(56.9)	369(27.5)	210(15.6)	1343(100.0)
合計	1505(59.4)	640(25.3)	388(15.3)	2533(100.0)

($\chi^2(2) = 8.787, p < .05$)

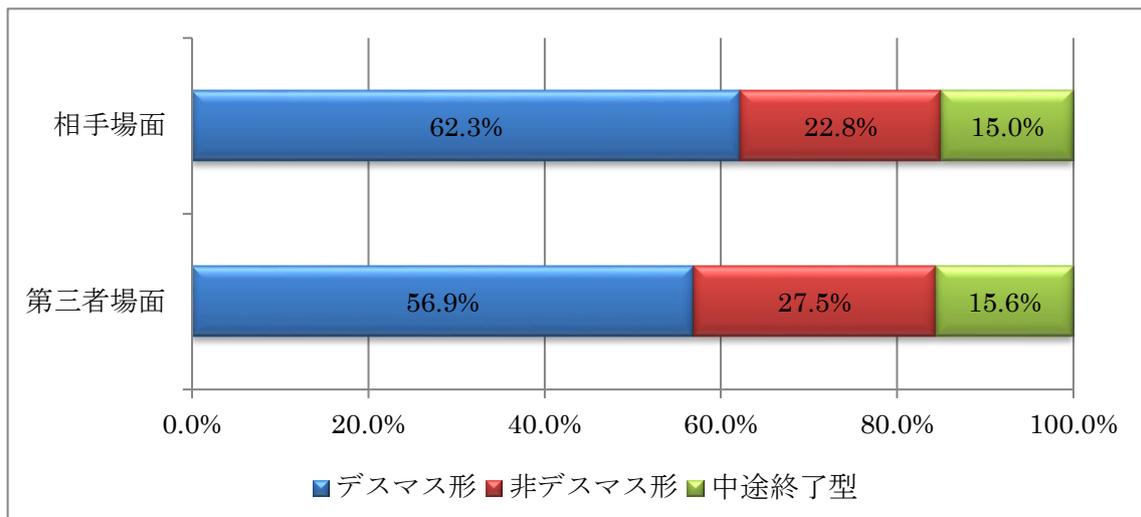


図 3 両場面における「初対面」会話の CNS のスピーチレベル

この結果について χ^2 検定を行ったところ、5%水準で有意差があった ($\chi^2(2) = 8.787$, $p < .05$) ことから、「初対面」の場合、CNS のスピーチレベルの選択には相手が日本語母語話者であるか否かが影響することが把握された。

表 10-1 と図 3 を見ると、「初対面」の場合、相手場面であれ、第三者場面であれ、CNS の最も出現率の高いスピーチレベルはデスマス形で、相手場面では 62.3% (741 話)、第三者場面では 56.9% (764 話) を占めている。つまり、「初対面」会話の場合、相手場面と第三者場面のどちらにおいても、CNS は基本的スピーチレベルをデスマス形を基調として設定していることが分かる。

日本語の言語規範や先行研究の成果を顧みると、「初対面」会話の場合は、「疎-疎」の社会的関係があるので、デスマス形が基本的スピーチレベルとして設定されるのが一般的である。したがって、上記の結果から、「初対面」会話においては、基本的スピーチレベルの設定に当たって、CNS は、相手が日本語母語話者か非母語話者かにかかわらず、日本語の言語規範に従い、「疎」という社会的関係を考慮し、デスマス形を選択していることが分かる。この基本的スピーチレベルの選択基準について、CNS はフォローアップインタビューでも、「相手が日本人かどうかにかかわらず、初対面だから、デスマス形を

使うべきだと思う」と語っている。

しかしながら、「初対面」の場合、CNSの基本的スピーチレベルの設定には相手が日本語母語話者か非母語話者かによる違いが見られないものの、デスマス形から非デスマス形へのスピーチレベル・シフトには差が見られた。表 10-1 と図 3 を見ると、「初対面」の場合、CNSの非デスマス形は、相手場面では 22.8% (271 話) であるのに対して、第三者場面では 27.5% (369 話) と、第三者場面の方で占める割合が大きいことが分かった。さらに、表 10-2 に示した残差分析の結果、デスマス形は相手場面で有意に高いのに対して、非デスマス形は第三者場面で有意に多いことが分かった。つまり、「初対面」の場合、CNSは、第三者場面の方が相手場面より非デスマス形へシフトする傾向が有意に大きいと言えよう。

表 10-2 残差の一覧表

	デスマス形	非デスマス形	中途終了型
相手場面	2.8**	-2.7**	-0.5n.s.
第三者場面	-2.8**	2.7**	0.5n.s.

(n.s. : not significant, **p<.01)

4.2 非デスマス形へのシフト要因の分析

では、これらのスピーチレベル・シフトは、どのような状況で、どのような要因によって生起するのだろうか。ここでは、「初対面」会話における CNS の非デスマス形へのシフトが生起する状況及びその要因について分析する。まず、4.2.1 でシフトが起きた発話を発話機能によって分類した結果を報告する。次に、4.2.2 でそれぞれの発話機能によるシフト要因について分析し、考察する。

4.2.1 発話機能による非デスマス形へのシフトの分類

表 10-1 から、「初対面」の場合、CNS のデスマス形から非デスマス形へのシフトは、相手場面では 271 話であるのに対して、第三者場面

では 369 話であることが分かった。本研究では、三牧（1993、2000）、宇佐美（1995）、陳（2003）が挙げた非デスマス形へシフトしやすい状況を参考にし、「初対面」会話における CNS の「非デスマス形」へのシフトを、a「情報の受信を示す時」、b「情報の整理を表す時」、c「感情の表出を行う時」、d「あいづちを打つ時」の 4 つに分類することにした。そのようにして分類した結果を表 11-1 と図 4 に示す。

表 11-1 両場面における「初対面」会話の非デスマス形へのシフト

	発話数 (%)				合計
	a 情報の受信	b 情報の整理	c 感情の表出	d あいづち	
相手場面	100(36.9)	116(42.8)	33(12.2)	22(8.1)	271(100.0)
第三者場面	171(46.3)	119(32.2)	50(13.6)	29(7.9)	369(100.0)
合計	271(42.3)	235(36.7)	83(13.0)	51(8.0)	640(100.0)

($\chi^2(3)=8.270$, $p<.05$)

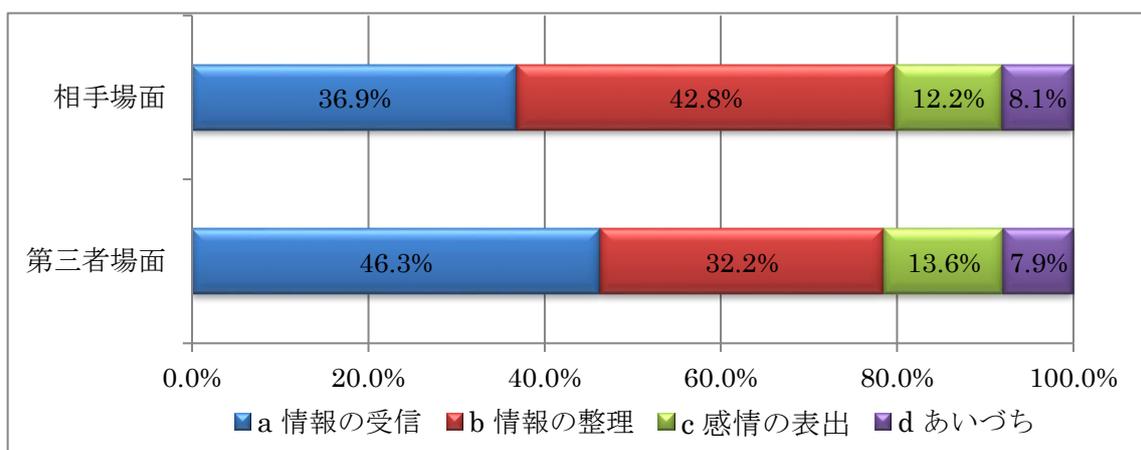


図 4 両場面における「初対面」会話の非デスマス形へのシフト

相手場面と第三者場面における非デスマス形へのシフトを比較してみると、表 11-1 と図 4 に示したように、特に a「情報の受信を示す時」と b「情報の整理を表す時」の数値が逆転していることに気づく。この結果について χ^2 検定を行ったところ、5%水準で有意差があった

($\chi^2(3)=8.270$, $p<.05$)。

さらに、表 11-1 について、残差分析を行った結果を表 11-2 に示す。

表 11-2 残差の一覧表

	a 情報の受信	b 情報の整理	c 感情の表示	d あいづち
相手場面	-2.4*	2.7**	-0.5n.s.	0.1n.s.
第三者場面	2.4*	-2.7**	0.5n.s.	-0.1n.s.

(n.s. : not significant, * $p<.05$, ** $p<.01$)

表 11-2 を見ると、a「情報の受信を示す時」、b「情報の整理を表す時」に場面の有意差があることが分かった。つまり、a「情報の受信を示す時」によるシフトは第三者場面で有意に多いのに対して、b「情報の整理を表す時」によるシフトは相手場面で有意に多いと言える。一方、c「感情の表出を行う時」、d「あいづちを打つ時」は、両場面には有意差が見られなかった。

4.2.2 発話機能による非デスマス形へのシフト要因

では、以上のような、両場面におけるシフト要因の頻度の違いは何を意味しているのだろうか。その要因を明らかにするために、以下、4.2.2.1～4.2.2.4でa「情報の受信を示す時」、b「情報の整理を表す時」、c「感情の表出を行う時」、d「あいづちを打つ時」の談話の分析を質的に試みることにする。

4.2.2.1 情報の受信を示す時

まず、第三者場面で有意に多い a「情報の受信を示す時」の談話を観察する。

a「情報の受信を示す時」とは、話し手が聞き手からの情報を受信したことを示す状況である。第2章2.1で前述した三牧(1993、2000)、宇佐美(1995)、陳(2003)が挙げた非デスマス形へシフトしやすい

状況の a「情報の受信を示す時」には、①「相手の発話の一部を繰り返す時」、②「確認や確認のための質問をする時」、③「先取りをする時」、④「相手の発話に対する補足をする時」、⑤「相手の質問に応答する時」がある。これらの先行研究に従って、ここでは a「情報の受信を示す時」の発話を 5 つに分類することにした。その結果が表 12 と図 5 である。

表 12 「情報の受信を示す時」の非デスマス形へのシフト

発話数 (%)						
	①相手発話の繰り返し	②確認・質問	③先取り	④相手発話の補足	⑤質問の応答	合計
相手場面	38(38.0)	27(27.0)	12(12.0)	8(8.0)	15(15.0)	100(100.0)
第三者場面	53(31.0)	32(18.7)	26(15.2)	17(9.9)	43(25.1)	171(100.0)
合計	91(33.6)	59(21.8)	38(14.0)	25(9.2)	58(21.4)	271(100.0)

($\chi^2(4) = 6.668n.s.$)

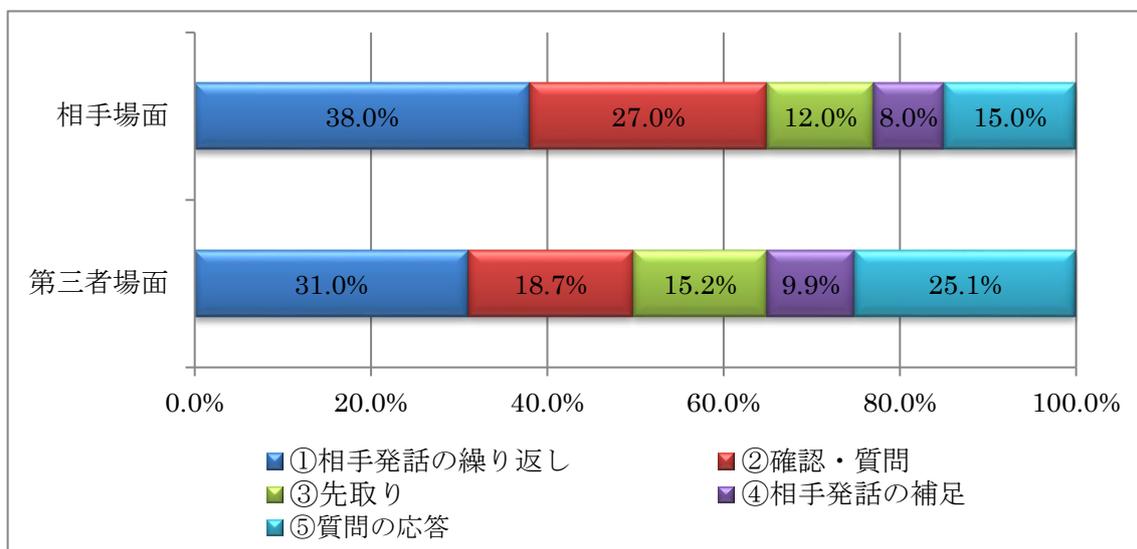


図 5 「情報の受信を示す時」の非デスマス形へのシフト

この結果について χ^2 検定を行ったところ、各分類は両場面に有意差

がなかった。以下に各分類の談話例を示す。

①相手の発話の一部を繰り返す時

まず、両場面ともに最も多く生起していた①「相手の発話の一部を繰り返す時」の談話例を示す。

例 11

247 KNS5:子供の時だったから、時だったから、ちょっと、私は記憶がないんですけど。 (P)

248 CNS2:うん。 (N)

249-1KNS5:お母さん、母が言って、〈聞くと〉{<},, (/)

250 CNS2:〈あ、そうなん〉{>}ですか。 (P)

249-2KNS5:“そういうことがあって、ちょっとつらい、つらい思い、〈思い出があった〉{<}” ,, (/)

→251 CNS2:〈つらい思い出、うん〉{>}。 (N)

249-3KNS5:って言うけど、私、私、〈笑いながら〉よく、なんか…。 (NM)

CNS2は251「つらい思い出、うん」で非デスマス形へシフトしている。これはCNS2が249-2のKNS5の発話「そういうことがあって、ちょっとつらい、つらい思い、思い出があった」の一部を繰り返した発話である。こうした相手の発話の一部の繰り返しによるシフトについて、陳(2003)は、話者間の距離感を縮小させ、話しやすい雰囲気醸成できると指摘している。このような「相手の発話の一部を繰り返す時」に非デスマス形へシフトすることによって、CNS2は話者間の距離感を縮小させ、話しやすい雰囲気を醸成していると言えよう。①「相手の発話の一部を繰り返す時」が相手場面では38.0%(38話)、第三者場面では31.0%(53話)であった。

②確認や確認のための質問をする時

次に、②「確認や確認のための質問をする時」の談話例を示す。

例 12

361 KNS5:韓国では、普通(うん)1年生が終わったら、1年生は終わって、軍隊に行く人が多いです。(P)

→362 CNS2:男たち??。(N)

363 KNS5:男たちは、はい。(P)

例 12 では、KNS5 は、361 で韓国の大学生 (男性) は 1 年生が終わったら軍隊に行く人が多いことについて話しているが、軍隊に行く学生が男性であることについてはっきり述べていないため、CNS は 362 で「男性たち??」という、確認のための質問をして非デスマス形へシフトしている。宇佐美 (1995) は、主要な話題の流れの途中で、その内容をよりよく理解するために確認したり確認のために質問したりする時に普通体を使用することによって、発話を簡潔化して、会話のスムーズな流れを滞らせるのを最小限にとどめることができると指摘している。つまり、主要な話題の流れの途中で何かを確認する時に、効率を求めて非デスマス形が用いられると考えられる。このような確認による非デスマスへのシフトは、相手場面では 27.0% (27 話)、第三者場面では 18.7% (32 話) であった。

③先取りをする時

続いて、③「先取りをする時」に非デスマス形へシフトする談話例を示す。例 13 では、KNS5 は韓国で恋愛のカップルが徴兵制のせいで最後に別れる人が多いことについて話している。

例 13

387 KNS5:大体別れて、別れたり、女の人になんか、浮気をするとかくCNS2の笑い>、そういうこと【】。(N)

388 CNS2: **】** そうなん<ですか>{<}>。 (P)

389 KNS5: <そん<な>{>}、あれを聞きました。 (P)

390 CNS2: <それは珍しいですか、はい>{<}>。 (P)

391 KNS5: <そういうこともあるし、男>{>}、男の子で(はい)、もうなんか、女の人が2年間待ってくれたけど、男の人がまた **【**。 (NM)

→392 CNS2: **】** ああ、心なんか、気持ちもう変わった<みたい>{<}>。 (N)

393 KNS5: <うん、変わった>{>}みたいな、そういう感じで、別れる人もいと聞きました。 (P)

KNS5 が 391 で「そういうこともあるし、男、男の子で、もうなんか、女の人が2年間待ってくれたけど、男の人がまた」と話し出すと、CNS2 は KNS5 の言おうとしたことを予測し、KNS5 の発話のターンの終了を待たずに、392 で「ああ、心なんか、気持ちもう変わったみたい」と非デスマス形の発話によって先取りして、KNS5 の発話を完成させている。「先取り」の言語行動については、林(2008)が、会話における熱心さを伝え、会話相手との協力や連帯感を強めるという肯定的な側面があると論じている。これに従えば、先取りをする時に、非デスマス形へシフトすることによって、話者間の心理的距離が短縮できると思われる。このような、「先取り」による非デスマス形へのシフトは、相手場面では 12.0% (12 話)、第三者場面では 15.2% (26 話)であった。

④相手の発話に対する補足をする時

次に、④「相手の発話に対する補足をする時」の談話例を示す。例 14 は、日本人の行列に並ぶ文化に関する談話である。

例 14

160-2GNS2: もう前から前の人が先に外出て(うん)それで順番に(あ

- 一)、みんなちゃんと待ってた、それはすごいなーと思
 った。 (N)
- 162 GNS2:<誰も>{<} **【**。 (NM)
- 163 CNS14:**】** <秩序>{>}がいい。 (N)
- 164 GNS2:そう、誰も嫌な顔しなくて、みんなすごくあのう、冷
 静に待ってた(あー、そっかそっか)ドイツでは考えら
 れないこと。 (N)
- 165 CNS14:たしかにね、中国も同じ、なんかみんなが忙しそうで、
 なんか大変混雑になります、でも日本は大丈夫ですね。
 (P)
- 166 GNS2:うん、バス停とかでもちゃんと列になって(うん)並ぶと
 か、それもドイツではないね、バス停では列に並ばない
 (笑い声)。 (N)
- 167 CNS14:で、あと電車もそう。 (N)

GNS2 は、160-2 で自分が乗った飛行機が日本に到着した時、日本人が並んで順番待ちをして飛行機を降りることを話している。その発話に対して、CNS14 は 163 で「秩序がいい」と評価を補足する時に非デスマス形へシフトしている。続いて、166GNS2 の「日本人がバス停でもちゃんと列に並ぶ」という発話に対して、CNS14 は 167 で「で、あと電車もそう」と補足する時に、再び非デスマス形へシフトしている。④「相手の発話に対する補足をする時」の発話は、会話相手、すなわち、聞き手領域に関わるものであり、この状況で非デスマス形へシフトすることによって、CNS14 は、相手に共感を示そうとして積極的に相手の発話に関与し、相手との心的距離の短縮を図っていると考えられる。このような状況による非デスマスへのシフトは、相手場面では 8.0% (8 話)、第三者場面では 9.9% (17 話)であった。

⑤相手の質問に応答する時

最後に、⑤「相手の質問に応答する時」に非デスマスへシフトする

談話例を示す。

例 15

298 GNS1:でもたまには“あーもう中国帰りたーい”とか思う?。(N)

299CNS13:思、思います。(P)

300 GNS1:うーん、それは何が理由、理由は?。(NM)

→301CNS13:理由はそうですね、例えば落ち込んだりとか(あー)、あ
のーなんだ、さみしい時とか、あの一助けてほしい時は
助けてくれる人もいないしとか(うーん)、そういう時は
なんだろう、すっごく(うーん)国に帰りたいなあと思っ
てる。(N)

302 GNS1:そっかー。(N)

CNS13は、GNS1による298、300の「たまに中国へ帰りたと思う理由は何か?」という質問に応答する時に、301で非デスマス形へシフトしている。その中の「そうですね」、「あの一」、「なんだ」、「なんだろう」というフィラー³¹の使用から、CNS13が考えながら応答する様子が窺える。これは、CNS13が情報伝達に意識が集中していることを示している。このような状況による非デスマスへのシフトは、相手場面では15.0% (15話)、第三者場面では25.1% (43話)であった。

以上のことから、①②③④は、いずれも、会話の相手である聞き手に関わる発話、すなわち「聞き手領域」に関わる発話と考えられる。⑤は聞き手の情報要求に応じる発話である。「初対面」の場合、①②③④⑤のようなa「情報の受信を示す時」は、第三者場面で有意に多かったことから、CNSは、第三者場面においては「聞き手領域」に関

³¹ 「フィラー」とは、「発話の一部を埋める音声現象や語句のことを指し、それ自身は命題内容、及び、他の発話との(狭義の)応答関係・接続関係・修飾関係を持たない」(林 2008: p.131)。

わる発話や「聞き手の情報要求に応じる」発話が非デスマス形へシフトしやすいことが分かる。

4.2.2.2 情報の整理を表す時

次に、相手場面で有意に多い b「情報の整理を表す時」の発話について観察する。

b「情報の整理を表す時」とは、話者が伝える情報を整理していることを示す状況である。三牧(1993、2000)、宇佐美(1995)、陳(2003)が挙げた非デスマス形へシフトしやすい状況の b「情報の整理を表す時」には、⑥「自己発話に対する補足をする時」、⑦「重要部分の明示、強調をする時」、⑧「独話的発話をする時」、⑨「新しい話題へ移行する時」の4つがある。これらの先行研究に従って、ここでは b「情報の整理を表す時」の発話を4つに分類することにした。その結果が表13及び図6である。

表13 「情報の整理を表す時」の非デスマス形へのシフト

	発話数 (%)				
	⑥自己発話 の補足	⑦重要部分の 明示・強調	⑧独話	⑨新話題へ の移行	合計
相手場面	49(42.2)	51(44.0)	8(6.9)	8(6.9)	116(100.0)
第三者場面	40(33.6)	55(46.2)	10(8.4)	14(11.8)	119(100.0)
合計	89(37.9)	106(45.1)	18(7.7)	22(9.4)	235(100.0)

($\chi^2(3) = 2.882$ n.s.)

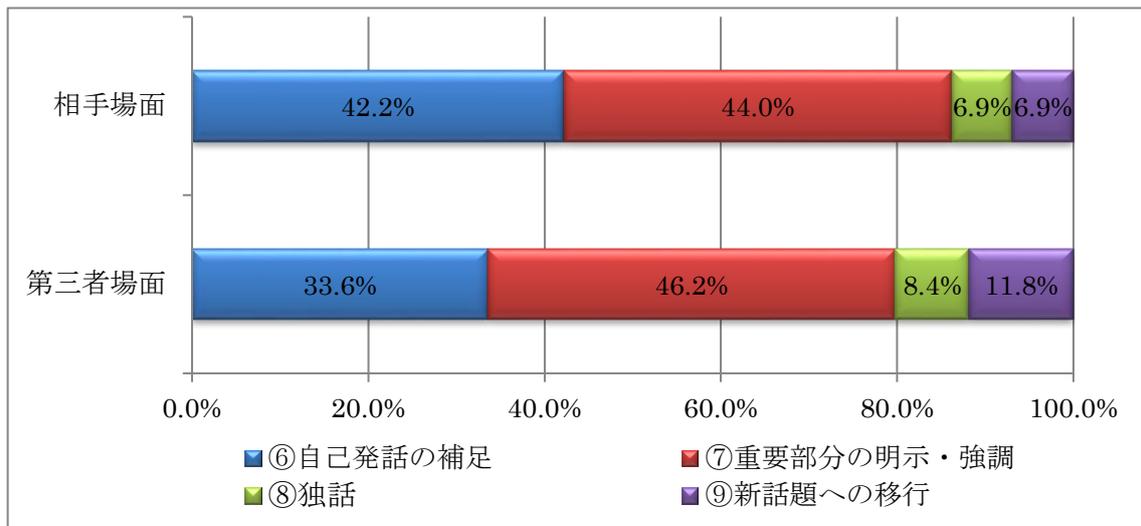


図 6 「情報の整理を表す時」の非デスマス形へのシフト

この結果について χ^2 検定を行ったところ、各分類は両場面に有意差がなかった。以下に各状況の談話例を示す。

⑥ 自己発話に対する補足をする時

まず、⑥「自己発話に対する補足をする時」の談話例を示す。

例 16

- 151-1CNS4: で、だからもうすごく自分は心がね、なんか年取ってる,,
(/)
- 152 JNS10: <えー!? あーあーあー>{<} (笑い声)。 (/)
- 151-2CNS4: <年寄りの心持ってる、そういう>{>}、そういうふう
思っちゃうなん<ですよ>{<}。 (P)
- 153 JNS10: <はいはい>{>} はいはい<はいはい>{<}。 (P)
- 154 CNS4: <大体>{>} の 20 代の若者みんななんか週末とか遊ぶと
か部活とか (はいはい)、でも私、昨日ね、クリスマスイ
ブなんだけど、1 人で寝てる (あー)、1 人で一日中家で
食べて寝てる (はいはい)、で起きて (あーあー) 寝てる、
そういう感じ。 (N)

CNS4 は 151-1 と 151-2 で自分は若いのに年寄りの心を持っていることを話している。この発話に続いて、CNS4 は 154 で「20 代の若者は週末は部活をしたり遊んだりして元気に過ごしているが、自分はクリスマスイブの時でも一日中家で 1 人で食べたり寝たりしている」と具体的な内容を補足する時に、非デスマス形へシフトしている。三牧（1993）によると、このような非デスマス形へのシフトは、「自己発話に対する補足」を示す談話展開標識の機能を果たしているという。つまり、⑥「自己発話に対する補足」は、「話し手領域」の発話であることを示すために非デスマス形が使われていると言える。このような状況による非デスマスへのシフトは、相手場面では 42.2% (49 話)、第三者場面では 33.6% (40 話) であった。

⑦ 重要部分の明示、強調をする時

次に、⑦「重要部分の明示、強調する時」の談話例を示す。

例 17

192 CNS10: うーん、私の故郷は中国の湖南省知っていますか?あの
湖南省、南<の方です>{<}。 (P)

(中略)

196 CNS10: <広州は>{>}知っていますよね, 広州のちょっと上です。
(P)

197 JNS3: うん。 (N)

198 CNS10: あのう、私の故郷は辛いのが一番好きなところです(笑
い)。 (P)

→199 CNS10: 中国で一番辛いとも言われている。 (N)

200 JNS3: へー。 (/)

201 CNS10: はい(笑い)。 (P)

例 17 では、CNS10 は故郷の湖南省の話題を取り上げて、198 で「あのう、私の故郷は辛いのが一番好きなところです」と話している。続

いて、199で「中国で一番辛いとも言われている」という重要部分を強調する時に、非デスマス形へシフトしている。三牧（1993）は、このような重要部分の明示・強調によるシフトを、やはり談話展開標識の機能として指摘しており、CNS10は、「中国で一番辛いところ」という重要部分を非デスマス形へシフトさせることによって、明示していると考えられる。このような、⑦「重要部分の明示・強調」による非デスマス形へのシフトは、相手場面では44.0%（51話）、第三者場面では46.2%（55話）であった。

⑧ 独話的発話をする時

続いて、⑧「独話的発話をする時」に非デスマス形へシフトする談話例を示す。

例 18

- 278 JNS9: ああ、その島は一回だけあるのかな、ぐらいですね。(P)
 279-1 JNS9: やっぱ日本人でもそんなに,, (/)
 280 CNS3: あ、<そんなにいかない>{<}. (N)
 279-2 JNS9: JNS9:<あんまいかない>{>}. (N)
 281 CNS3: はい。(P)
 →282 CNS3: [小さな声で]行かないなあ。(N)
 283 JNS9: うん。(N)
 284 CNS3: 私に日本で一番好きなのは北海道です。(P)

CNS3は282で小さな声で「行かないなあ」と独話的発話³²をする時に、281のデスマス形から非デスマス形へシフトしている。三牧（1993）は、独話的発話をする時に非デスマス形へシフトすることによって、当該の発話が話し手自身に向けられていることを明示する談話展開標識の機能を果たしていると指摘している。つまり、CNSは、

³² 三牧（2013：p.148）は、独話であるか否かの判定は「～かな」のような言語形式からだけでは困難であるため、独話的発話を、その前後の発話と比較して、「声の大きさの変化（小声化）」のような特徴を伴うもの限定すると述べている。

自分自身に向けた独話の場合に非デスマス形へシフトしていると言える。⑧「独話的発話をする時」による非デスマス形へのシフトは、相手場面では 6.9% (8 話)、第三者場面では 8.4% (10 話) であった。

⑨ 新しい話題へ移行する時

最後に、⑨「新しい話題へ移行する時」に非デスマス形へシフトする談話例を示す。以下に第三者場面の談話例を示す。例 19 は、KNS5 が、子供の頃日本で暮らしていた時に自分がいじめに遭った経験をお母さんから聞いたことを話した後の談話である。

例 19

- 255-2KNS5: そんなことがあったかなって(あー)、今全然、今も小学校の友達と連絡したりするから。 (N)
- 257 CNS2: あー、はい。 (P)
- 258 KNS5: 今…。 (NM)
- 259 CNS2: 日本語がけっこううまいですから、全然問題ないと思います。 (P)
- 260 KNS5: <笑いながら>ありがとうございます。 (P)
- 261 CNS2: 私日本語を勉強して、ただ 2 年半ぐらい。 (N)
- 262 KNS5: 2 年半??。 (N)
- 263 CNS2: はい、大学に入ってから。 (NM)
- 264 KNS5: 超上手<ですよ>{<}。 (P)
- 265 CNS2: <いいえ>{>}。 (P)

258KNS5 の「今…」という発話の後、CNS2 は 259 で「日本語がけっこううまいですから、全然問題ないと思います」とデスマス形で KNS5 に対する肯定的な評価を述べている。その CNS2 の評価に対して KNS5 が 260 で「ありがとうございます」と応答してその話題を終わらせた後、CNS2 は 261 で「私日本語を勉強して、ただ 2 年半ぐらい」と非デスマス形で「自分の日本語学習歴」という新しい話題を導

入している。このように、話題が「KNS5 の高い日本語力」から「CNS2 自身の日本語学習歴」へ、すなわち「話し手領域」へ転換されている。この状況で非デスマス形へシフトすることによって、新しい話題の開始が明確に示されている。三牧（1993）は、新しい話題への移行によるシフトは談話展開標識の機能を果たしていると述べている。⑨「新しい話題へ移行する時」による非デスマス形へのシフトは、相手場面では 6.9%（8 話）、第三者場面では 11.8%（14 話）であった。

以上のことから、⑥⑦⑧⑨は、いずれも三牧（1993）が指摘する談話展開標識を示すシフトと言え、特に⑥⑦⑨は、話し手自身に関わる内容、すなわち「話し手領域」に関する発話であり、⑧は、独話的発話、すなわち「話し手自身へ向けられた」発話である。⑥⑦⑧⑨のような b「情報の整理を表す時」は、相手場面で有意に多かったことから、「初対面」の場合、相手が日本語母語話者である相手場面では、CNS は、「話し手領域」の内容や「話し手自身へ向けられた」発話によって「情報の整理を表す時」に非デスマス形へシフトする傾向があると言える。

4.2.2.3 感情の表出を行う時

続いて、両場面には有意差がなかった c「感情の表出を行う時」の談話を観察する。

c「感情の表出を行う時」とは、話し手が自分の感情を表出するという状況である。三牧（2000）、陳（2003）を参考にし、⑩「相手の発話への共感を示す時」と⑪「心情を直接表出する時」の 2 種類に分類した。両場面の結果を表 14 及び図 7 に示す。

表 14 「感情の表出を行う時」の非デスマス形へのシフト

発話数 (%)

	⑩相手の発話への共感	⑪心情の直接表出	合計
相手場面	14(42.4)	19(57.6)	33(100.0)
第三者場面	23(46.0)	27(54.0)	50(100.0)
合計	37(44.6)	46(55.4)	83(100.0)

($\chi^2(1) = 0.103n.s.$)

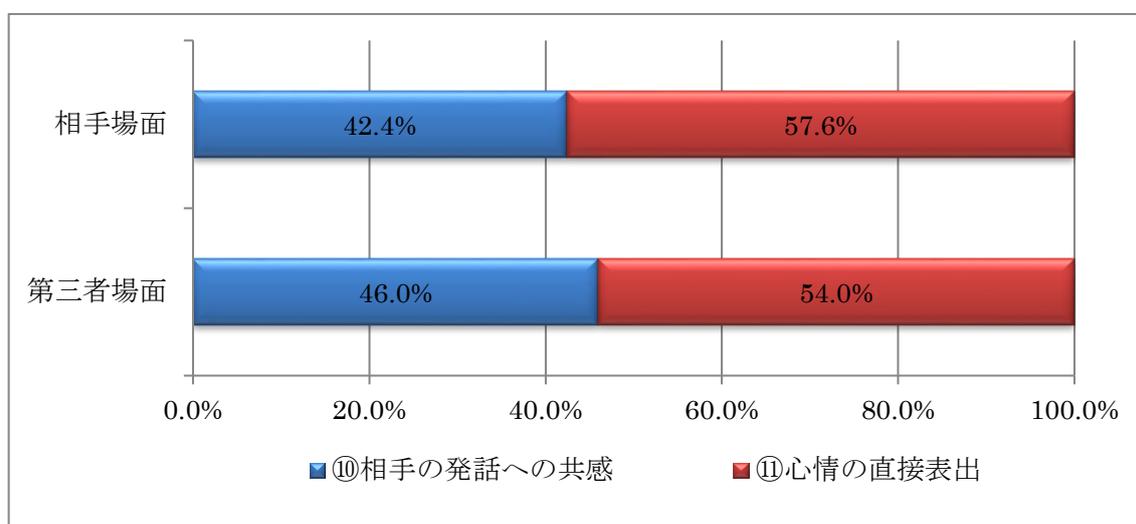


図 7 「感情の表出を行う時」の非デスマス形へのシフト

この結果について χ^2 検定を行ったところ、⑩⑪は両場面には有意差がなかった。以下に談話例を示す。

⑩相手の発話への共感を示す時

第三者場面における⑩「相手の発話への共感を示す時」の談話例を示す。

例 20

182-1 GNS2:味が良ければ、それは我慢<できるけど>{<>, (//)

183-1 CNS14:<我慢>{>}できます<けど>{<>。 (P)

182-2 GNS2:<味>{>}は想像より,, (//)

- 183-2 CNS14:味はちょっと。 (NM)
- 182-3 GNS2:悪かった。 (N)
- 184 CNS14:うん、そうですね、私も納豆できない。 (N)
- 185 GNS2:なんかすごく伸びるの、いやだ(笑い声)。 (N)
- 186 CNS14:そうね、それはありますね(笑い声)、いやだよね。(N)

GNS2 は 182-1 から 182-3 までで納豆を食べられない理由を述べている。CNS14 はこの GNS2 の述べた「納豆の味が想像より悪い」に対して、184 で「私も納豆できない」という非デスマス形の発話によって、自分も納豆が食べられないという事実を述べて共感を示している。さらに、185 GNS2 の「なんかすごく伸びるの、いやだ」という発話に対して、CNS14 は 186 で「いやだよ」と、再び非デスマス形を用いて共感を示している。陳(2003)が述べたように、相手の発話への共感を示す時に、非デスマス形へシフトすることによって、会話に対する熱心さを相手に伝え、話者間の距離感を縮小させ、スムーズな会話の展開を促進させていると考えられる。この状況によるシフトは、相手場面では 42.4% (14 話)、第三者場面では 46.0% (23 話) と、両場面には有意差がなかった。

⑪ 心情を直接表出する時

以下に⑪「心情を直接表出する時」の談話例を示す。

例 21

- 310 CNS2:そして、来、来月、8月に(はい)帰国する予定です。(P)
- 311 KNS5:ああ[↑]、8月??。(N)
- 312 CNS2:はい、ただ一ヶ月しか残っていないですよ、日本で<の生活>{<}。(N)
- 313 KNS5:<あー>{>}。(/))
- 314 CNS2:早いですよ。(P)
- 315 KNS5:はははは<笑い>。(/))

→316 CNS2:帰りたくないなあ。

(N)

CNS2 は 316 行目で「帰りたくないなあ」という心情を直接表出する時に、非デスマス形へシフトしている。三牧（2000）は、現在の心情を直接表出する時に、非デスマス形へシフトすることによって、わきまえを示しながら、丁寧体の堅苦しさを緩和し、話者間の距離感を縮小させ、和やかにコミュニケーションを遂行させる機能を果たすと主張している。この状況で生起するシフトは、相手場面では 57.6%（19 話）、第三者場面では 54.0%（27 話）で、有意差がなかった。

4.2.2.4 あいづちを打つ時

最後に、両場面には有意差がない d「あいづちを打つ時」について説明する。

本データの「初対面」会話には、「うん」のようなあいづち表現が観察された。本章の 2 節で示した表 7 では、「うん」は中立・下向き待遇のあいづち表現である。したがって、ここでは、この基準に従い、「うん」というあいづち表現を非デスマス形発話と同等に扱い、非デスマス形へのシフトとして捉えた。以下、あいづち表現「うん」によるシフトの談話例を示す。

例 22

- 430 KNS7:あ、日本人なんだけど(あーあー)日本人ぼくない全然。
(N)
- 431 CNS9:うん、ちょっと欧米の感じもします。
(P)
- 432 KNS7:なんかもうあれかな[↑]ハーフかな[↑]。
(N)
- 433 CNS9:うん。
(N)
- 434 KNS7:あーめっちゃ綺麗。
(N)
- 435 CNS9:うん。
(N)

CNS9 は 431、433、435 で非デスマス形のあいづち表現「うん」を

使って、相手の KNS7 に自分が今、話を聞いていることを伝えている。

次に、相手場面の談話例を示す。

例 23

- 206 JNS8:子どもね<ー>{<}>。 (NM)
→207 CNS2:<うん>{>}。 (N)
208 JNS8:なんか、私がそのボランティア入って、なんか一個でも
子どもが変われたらなあと思うんです<けど>{<}>。 (P)
209 CNS2:<はい>{>}。 (P)

例 23 では、CNS2 は 207 であいづちを打つ時に「うん」を使って非デスマス形へシフトしている。このあいづち表現「うん」による非デスマス形へのシフトは、相手場面では 8.1% (22 話)、第三者場面では 7.9% (29 話) で、両場面には有意差がなかった。

「うん」のあいづち表現の使用意識について、CNS はフォローアップインタビューで「初対面」の場合、「うん」を使うと、会話の雰囲気のリラックスし、話しやすくなってくるかなあと思って、無意識に「うん」を使った」と語っている。

4.3 「初対面」会話における CNS のスピーチレベル管理のメカニズム

以上の結果から、「初対面」の場合、CNS は相手場面と第三者場面では、異なったメカニズムで文末のスピーチレベルを管理していることが推測される。

まず、CNS は、基本的スピーチレベルの設定にあたり、「初対面」会話においては、相手が日本語母語話者か非母語話者かにかかわらず、相手場面と第三者場面のどちらにおいても、日本語の規範に従い、「疎」の社会的関係を考慮し、デスマス形を基調として選択している。

一方、両場面の差に注目すると、CNS のスピーチレベルを分類した結果、デスマス形は相手場面では有意に多いのに対して、第三者場

面では非デスマス形が有意に多いことが分かった。つまり、初対面の場合、第三者場面の方が相手場面より非デスマス形へシフトする傾向が強いことが分かった。さらに、非デスマス形へのシフトの状況を発話機能によって分類した結果、a「情報の受信を示す時」は、第三者場面で有意に多いのに対して、b「情報の整理を表す時」は、相手場面で有意に多いことが分かった。a「情報の受信を示す時」の談話を質的に分析した結果、それは、会話の相手、すなわち、聞き手に関わる「聞き手領域」に関する発話や「聞き手の情報要求に応じる」発話であることが明らかになった。一方、b「情報の整理を表す時」は、話し手自身に関わる発話や独話的発話、すなわち、「話し手領域」の事柄について整理する発話であることが明らかになった。つまり、CNSは、第三者場面においては「聞き手領域」に関わる発話や「聞き手の情報要求に応じる」発話が非デスマス形へシフトしやすく、相手場面においては「話し手領域」に関わる発話や「話し手自身に向けられた」発話が非デスマス形へシフトする傾向があると考えられる。このことから、初対面の場合、CNSは第三者場面においては、「丁寧に話す」という待遇的意味に対する配慮が薄れ、非母語話者には「心的距離の短縮」と「情報伝達」を優先するのに対して、相手場面では、「疎」の社会関係と待遇的意味に配慮する方向に意識が傾き、自分自身のことや自分自身へ向けた発話を非デスマス形へシフトさせて談話展開標識を明示することによって、「へりくだる」姿勢を見せる傾向が窺える。

5. 第4章のまとめ及び考察

本章では、学習者の言語調節を考察する際の「スピーチレベル管理」に注目し、研究課題1「相手場面と第三者場面において、CNSのスピーチレベル管理は、親しい友人と初対面の相手に対して、それぞれどのような選択基準によってなされるか」について分析した。

まず、両場面ともに、CNSは「日本語のルール」に従って「親疎」という相手との人間関係を考慮し、「対友人」会話には非デスマス形

を、「初対面」会話にはデスマス形を基調として選択する。その一方で、「初対面」会話、「対友人」会話ともに、CNSのスピーチレベル・シフトには相手が日本語母語話者か非母語話者かによって差が見られた。「対友人」会話では、相手場面の方が第三者場面よりデスマス形へシフトする傾向が強く、同じ「親しい友人」であっても、相手が日本語母語話者である場合には丁寧であろうとするCNSの意識が推測された。さらに、デスマス形へのシフトの状況を発話機能によって分類し、分析した結果、相手場面では情報内容を持たず、ほとんど無意識に発せられる「あいづち」の場合にデスマス形へシフトする傾向があるのに対して、第三者場面では、「重要部分を明示・強調する」状況で談話の展開を明確にするためにスピーチレベル・シフトを行う傾向があることが分かった。

次に、「初対面」会話では、第三者場面の方が相手場面より非デスマス形へシフトする傾向が強く、同じ「初対面の相手」であっても、相手が非母語話者である場合には丁寧であろうとするCNSの意識が下がることが推測された。さらに、非デスマス形へのシフトの状況を発話機能によって分類して分析し、次の結果が得られた。CNSは、第三者場面においては「聞き手領域」に関わる発話や「聞き手の情報要求に応じる発話」が非デスマス形へシフトしやすいのに対して、相手場面においては「話し手領域」に関わる発話や「話し手自身に向けられた」発話が非デスマス形へシフトする傾向がある。これらのことから、CNSは、非母語話者には「心的距離の短縮」と「情報伝達」を優先するのに対して、母語話者には、待遇的意味に配慮して母語話者に「へりくだる姿勢」を見せる可能性が示唆される。

以上の結果から、CNSは「親疎」という相手との人間関係に応じたスピーチレベルの使い分けはできているものの、CNSのスピーチレベル・シフトには、言語外的要因として、相手が日本語母語話者である場合にはより丁寧であろうとする「学習者独自のルール」が存在することが指摘されるだろう。それは、相手が日本語母語話者である場合、「母語話者」を意識し、「丁寧に話す」という待遇的意味に強く

配慮する結果と言える。そのようなスピーチレベル管理から、CNSが日本語母語話者に気をつかいながら会話に臨んでいる姿勢が窺える。では、それは何に起因するのだろうか。

赤羽(2014)では、非母語話者の心理面の調節を変動させる要因は、「対話者との間で、使用言語を母語または目標言語として共有しているかいないかである」(p.143)と論じられている。具体的には、自分の母語を用いずに、目標言語を母語とする相手と話す相手場面では、対人関係不安や発話に関わる緊張が対立や問題回避に作用する。それに対して、使用言語を目標言語として共有する第三者場面では、不安や緊張感を持たずに発話自体に意識が向けられるとしている。今回の「スピーチレベル管理」の本調査結果を照らし合わせてみると、相手場面では、対話者にとっては母語、自分にとっては目標言語という、使用言語についての背景が共有されていないため、対人関係不安と緊張感を持ちやすく、相手に失礼にならないように、問題を起こさないように、より丁寧であろうとする意識が強く働くと考えられる。その結果、初対面の場合、母語話者に謙虚な姿勢を示して「話し手領域」に関わる発話や「話し手自身に向けられた」発話が非デスマス形へシフトしやすいのではないかと考えられる。さらに、対友人の場合、特にあいづちを打つ時に、相手場面の方がデスマス形へシフトする傾向が強かったことから、同じ「親しい友人」であっても、「日本語母語話者には丁寧な話し方をしなければならない」という意識はCNSの潜在意識にあるものと考えられ、CNS自身も気づいていない可能性が高い。それに対して、第三者場面では、使用言語が目標言語であっても、対話者間で目標言語として共有されているために、母語場面における母語同様に、不安や緊張感が緩和され、目標言語規範が適用されたとしても、その規範自体は過度に強調されることがない。その結果、「初対面」の場合、待遇的意味より相手との心理的距離の短縮と情報伝達の方に意識が向けられて、「聞き手領域」に関わる発話や聞き手の質問に応答する時に非デスマス形へシフトしやすいと考えられる。

第 5 章

相手場面と第三者場面における「発話の重なり」について

第 5 章では、学習者の言語調節を考察する際の、本研究のもう 1 つの分析視点である「発話の重なり」に注目し、研究課題 2「相手場面と第三者場面において、親しい友人と初対面の相手に対する CNS による発話の重なり及び重なり後の談話展開には、どのような特徴があるか」を明らかにする。

本研究では、「発話の重なり」とは、複数の話者が参加する談話において、ある一時点で複数の話者の発話が同時に現れる現象を指す。

まず、1 節で「発話の重なり」の分類基準を整理した上で、本研究における「発話の重なり」の分類を明らかにする。次に、2 節で相手場面と第三者場面の「対友人」会話における、CNS による「発話の重なり」及び「重なり後の談話展開」について、3 節で相手場面と第三者場面の「初対面」会話における、CNS による「発話の重なり」及び「重なり後の談話展開」について分析し、考察する。最後に、4 節でまとめる。

1. 「発話の重なり」の分類基準の整理

まず、1.1 で先行研究における「発話の重なり」の分類をたどり、その問題点を明らかにする。その上で、1.2 で、本研究で「発話の重なり」をどのように捉えるか、述べる。

1.1 先行研究における「発話の重なり」の分類

会話では通常、一度に 1 人ずつ話すのがルールである。そのため、会話参加者は、次の話し手へのターンの移行が適切となる箇所、すなわち、「ターン移行適切箇所」(transition relevance place、以下 TRP)まで待ってから、次のターンを取得するのが原則である。しかし、実際の会話の中では、ある一時点で複数話者の発話が同時に現れる現象がしばしば起こる。このような現象は「発話の重なり」と呼ばれてい

る。これまでの「発話の重なり」に関する研究を見ると、重なりの分類基準は各研究者によって異なり、次の3つの基準によって分けられている。①重なりが生じる要因による分類基準（藤井・大塚 1994）、②重なりの位置による分類基準（藤井 1995、生駒 1996、木暮 2002、本田 1997・2016、牛田他 2010、劉 2011、など）、③話者交替規則³³による分類基準（町田 2002）が挙げられる。以下、順に説明する。

まず、「①重なりが生じる要因による分類」について説明する。藤井・大塚（1994）は、重なりが生じる要因によって、発話の重なりを、「自己選択によるもの」、「割り込みによるもの」、「見なしによるもの」、「継続によるもの」の4つに分類している。「自己選択によるもの」は、1人の発話が終了したときに、次の発話順序を取ろうとする複数の話者が同時に話し始めたために生じた重なりである。「割り込みによるもの」は、先行発話の途中で、発話が重なることを承知で、他の話者が発話を挿入するために生じた重なりである。「見なしによるもの」は、先行発話が終わったと見なしたことによって生じた重なりである。「継続によるもの」は、先行話者の発話が一旦とぎれた箇所で、他の話者の発話が始まるが、これが終了しないうちに、先行話者が自分の発話権が続いていると考え、発話を継続するために生じた重なりである。

次に、「②重なりの位置による分類基準」について説明する。藤井（1995）は、重なりが生じるタイミング、すなわち、重なりの位置によって発話の重なりを分類し、発話冒頭で同時に話し始める「同時開始型」、先行話者の発話が終わったとみなし、終了間際で重なる「終了見なし型」、先行話者の発話途中、すなわち、先行話者の発話が明らかに終わっていない状況で発話を開始する「割り込み型」の3種類に分類している。生駒（1996）は、発話の重なりの位置には「発話の頭と頭が重なる場合」、「先行発話の末尾と重なる場合」、「先行発話の途中で重なる場合」の3つがあるとしている。本田（1997、2016）は、発話の重なりを、先行発話終了の予測の誤りにより話し始める「早す

³³ 「話者交替規則」については、本章の1.2で詳細に説明する。

ぎ」、発話冒頭で同時に話し始める「同時発話」、先行発話の途中で相手の言おうとすることを予測して相手に同調して発話を重ねる「先取り」、先行発話の途中で、その終了を待たずに発話を話し始める「割り込み」の4つに分類している。その中で、「先取り」と「割り込み」は先行発話の途中で発話を開始したために起こる重なりであるが、その違いは、「先取り」は相手の発話に同調する「共話の重なり」（本田1997：p.204）として捉えられるのに対して、「割り込み」は相手の発話を妨害する重なりと捉えられるという点である。木暮（2002）は藤井（1995）の枠組みに従い、重なりの位置を基準にし、発話の重なりを「同時開始型」、「終了見なし型」、「割り込み型」に分けている。また、牛田他（2010）は藤井（1995）と生駒（1996）の枠組みに従い、「発話の頭と頭が重なる」場合を「同時発言」、「先行発話の途中で重なる」場合のうち、発話の重なりが先行発話の途中から始まり、先行発話が終わっても重なった発話が続いている場合は「終了付近での重なり」とし、「末尾」と表記した。発話の重なりが先行発話の途中から始まり、先行発話が終わる前に発話の重なり状態が終了した場合を「途中で部分的に重なる」とし、「途中」と表記した。

以上の藤井（1995）、生駒（1996）、本田（1997、2016）、木暮（2002）、牛田他（2010）では、発話の冒頭、発話の終了付近、発話の途中という重なりの物理的な位置については論じられているものの、単にその位置のみによって発話の重なりを分類する基準には恣意的な面があると考えられる。劉（2011）が述べたように、どこまでが発話の終了（末尾）か、どこまでが発話の途中かが不明確であるという問題点がある。この問題を踏まえて、劉（2011）は、重なりが現れた時点において、先行発話の意味がどのくらい産出されているかによって、重なりを「先行発話の意味が明瞭になっていない部分での重なり」と「先行発話の意味が明瞭になっている部分での重なり」と2つに分けている。しかし、劉（2011）は、「先行発話の意味が明瞭になっているかどうか」を判断する基準については具体的に言及していない。また、これらの研究においては、様々な発話の重なりのどれを特に「割り込

み」とみなすか必ずしも統一されているわけではない。このことから、「割り込み」の厳密な定義が確立していないことが分かる。

最後に、「③話者交替規則による分類基準」について説明する。町田（2002）は、話者交替規則に従い、発話の重なりを「割り込み」、「オーバーラップ」、「掛金的発話交代」の3つのタイプに分けている。町田（2002）では、「割り込み」とは、「現在の話し手の TRP 以前に発話が始まったことによる発話の重なり」（p.192）であり、「オーバーラップ」とは、「会話の参加者がそれぞれ発話順番取り規則を遵守しているにもかかわらず、TRP の予測がはずれるなどの理由で結果的に発話が重なり合うケース」（p.193）であり、「掛金話者交代」とは、「現在の話し手の発話の TRP 直前の部分と次の発話が引っかかりあうように重なっていくタイプの重なり」（p.194）である。町田（2002）の研究では、「割り込み」の厳密な定義が確立できるのは評価されるべき点である。しかし、「オーバーラップ」に関しては、その定義及び扱う範囲が研究者によって異なっている。町田（2002）では、「オーバーラップ」は TRP の予測のはずれによる「発話の重なり」の一つとして扱われている。一方、串田（2005、2006）、林（2008）、本田（2016）などでは、「オーバーラップ」は、複数の話者が同時に発話している現象を指し、「発話の重なり」として扱われており、扱う範囲が町田（2002）より広い。このことから、「オーバーラップ」に関しては、その定義及び扱う範囲がまだ統一されていないことが分かる。

1.2 本研究における「発話の重なり」の分類

以上の問題点を踏まえて、「発話の重なり」は「話者交替」の際に起こる言語行動であると考え、本研究では、単に発話の重なりが生じる位置で重なりを分類するのではなく、サックス他（2010）の「予測可能性 projectability」に基づき、「発話の重なり」を分類することにする。

会話は複数の人々によって、話者の交替を繰り返しながら進められ

ていく。この「話者交替」は全く無秩序に行われるのではなく、以下の「規則」により行われる。

- (1) あらゆる順番において、最初の順番構成単位が、順番の移行に適切な最初の場所にいたったとき、
 - (a) もしそこまでのあいだに現在の順番が、「現在の話し手が次の話し手を選択する」ための技法の使用を含むような形で、組み立てられているならば、その選択された者が、次の発言順番を取る権利を得、義務を負う。そこで順番は移動する。
 - (b) もしそこまでのあいだに現在の順番が、「現在の話し手が次の話し手を選択する」ための技法の使用を含まない形で、組み立てられているならば、次の発言者になろうとする者により、自己選択というやり方が採用されてよい（採用されなければならないわけではない）。最初に話し始めた者が、次の順番への権利を得、そこで順番は移動する。
 - (c) もしそこまでのあいだに現在の順番が、「現在の話し手が次の話し手を選択する」ための技法の使用を含まない形で、組み立てられているならば、現在の話し手は、他の者が自己選択しないかぎり、自分が話し続けてもよい（そうしなければならないわけではない）。
- (2) もし最初の順番構成単位が順番の移行に適切な最初の場所にいたったとき、(1a) も (1b) も実行されず、かつ、(1c) の取り決めに従って現在の話し手が話し続けたならば、そのときには、順番移行に適切な次の場所で、(1a) ~ (1c) の規則群が再適用される。最終的に順番の移動が起きるまで、順番の移行に適切な、そのつど次の場所において、同様のことが繰り返される。

(サックス他 2010 : pp.28-29 より)

という発話に対して、Cは10で「ふーん」と「えー」とあいづちを打ち、間を少し置いて、ターンを終了した。Cの発話がここで終了したと思ったEは、11で次の発話順番を取って「よんひゃくにじゅうえんというのはそう」と発話を開始した。それと同時に、Cが12で「おいしいですか↑」と発話を続けたために、EとCのターンが11と12で同時に開始され、発話冒頭で発話が重なっている。このような重なりは、前話者Cが自分の発話を続けようとし、次話者Eが自己選択によってターンを取ろうとしたために起きたものであり、話者間の予測のずれによって生じたものと言える。このような場合の重なりを「発話冒頭における同時発話」とする。

(2) 発話終了付近における同時発話

これは、先行発話が終了すると予測できる箇所（TRP）³⁴で、もう1人の話者がターンを開始したために生じた重なりである。これは、藤井・大塚（1994）を参考にすると、さらに、a「発話の末尾が重なったもの」とb「発話終了と見なせる箇所ののちに発話が続くことによるもの」の2つに分けられる。以下、aとbについて説明する。

a. 発話の末尾が重なったもの

これは、先行発話が終了すると予測できる箇所（TRP）で、次の話者が先行発話の末尾の最後の要素まで待たずに発話を開始したために、先行発話の末尾で生じた重なりである。

例 25

→1a: でも、今度引っ越さなければならぬよ[ねえ。

→2b: [うん。

（木暮 2002 : p. 118 より）

例 25 では、a が 1 で「でも、今度引っ越さなければならぬよ」まで言い終わったところで、相手のターンの終了を予測した b はその

³⁴ 先行発話が終了すると予測できる箇所は、原則としてそこは、ターン移行適切箇所となる（サックス他 2010）。

発話内容を理解し、2 で迅速に「うん」と相手に同意を示している。こうして、2b の「うん」は 1a の発話末尾「ねえ」と重なっている。このような先行発話の末尾で起こった重なりは、次の話者がターンの完結を予測して次ターンを開始した結果生じたものと言える。末尾の要素について、藤井・大塚（1994）は最後の数個の音や、引き伸ばされた音などを指している。しかし、「最後の数個の音」がどんな要素を指すのか、何音節前までを指すのか、などについて明確な定義がされていない。本研究では、高梨（2016）に従い、発話の基本単位の末尾の予測を可能にする「述語末要素」を、以下のものとする。

- a) 最終動詞接辞「ます」など
- b) コピュラ「だ」「です」など
- c) 終助詞「ね」「よ」など
- d) 要求・命令表現「ください」「なさい」など
- e) その他（名詞化要素「わけ」「もん」など）

（高梨 2016：p.10 より）

本研究では、以上の「述語末要素」に重なるものを「発話の末尾が重なったもの」と考える。

b. 発話終了と見なせる箇所のにちに発話が続くことによるもの

これは、先行発話が終了すると予測できる箇所（TRP）で次の話者が発話を開始したが、前の話者がさらに話し続けたために生じた重なりである。このような重なりは日本語では倒置文の頭や、発話の繰り返し部分などでよく見られる。

例 26（木曜日に子供を預かってもらうことになった経緯の話）

→a: 向こうから言ってくれたんだよ、[木曜日はどうするのよ、a さん
って。

→b: [あらっ、いい友達ができたねー。

（藤井・大塚 1994：p.5 より）

例 26 では、話者 a の「向こうから言ってくれたんだよ」という発話は、文の形式上は終了している。そのため、a の発話のターンがここで終了すると予測した b が、次のターンで「あらっ、いい友達ができたねー」と話し始めたが、このとき、a が「木曜日はどうするのよ、a さんって」とさらに言葉を付け加えたために、重なりが生じている。このような重なりは、話者 b が話者 a の発話に重ねる意図をもっていたために起きたものではなく、先行発話のターンの終了の予測、すなわち、TRP の予測がはずれたことによって結果的に生じたものと言える。

本研究では、a と b の場合の重なりを「発話終了付近における同時発話」と見なす。

(3) 発話途中における同時発話

これは、現話者のターン移行の適切な箇所 (TRP) ではないところで、もう 1 人の話者が発話を挿入したことによって生じた重なりである。

例 27

→a: もう 1 種類はね、何か [ね、オレンジゼリーみたいなかんじ。

→b: [アイスクリーム?

(藤井・大塚 1994 : p.4 より)

例 27 では、a が「もう 1 種類はね、何か」と話していたところで、b が次の文で「アイスクリーム?」と発話を開始したために重なりが生じている。この談話例に示したように、b による「発話の重なり」の開始は、a の文の産出途中であり、進行中の発話がいつ頃終わりそうかという予測が可能になる前の時点である。つまり、これは、b が、現在の話し手が発話途中であることを知りながら発話を開始したために生じたものである。このような場合の重なりを「発話途中における同時発話」として、本研究では、これを「割り込み発話」とする。

2. 「対友人」会話における「発話の重なり」

2節では、「相手場面」と「第三者場面」における「対友人」会話に注目し、親しい友人に対する CNS による「発話の重なり」及びその「重なり後の談話展開」には、どのような特徴があるか明らかにする。

以下、2.1 で「発話の重なり」について、2.2 で「重なり後の談話展開」について分析し、2.3 でまとめる。

2.1 「発話の重なり」の相手場面と第三者場面の比較

まず、2.1.1 で相手場面と第三者場面における「対友人」会話の「発話の重なり」がどの位置で生じているか、その出現率を示す。次に、2.1.2 で「発話冒頭における同時発話」、2.1.3 で「発話終了付近における同時発話」、2.1.4 で「発話途中における同時発話」について具体的に談話を分析する。最後に 2.1.5 でまとめる。

2.1.1 「発話の重なり」の位置による出現率

発話の重なりを、「発話冒頭における同時発話」(以下「発話冒頭」)、「発話終了付近における同時発話」(以下「発話終了付近」)、「発話途中における同時発話」(以下「発話途中」)の3種類に分類した。「対友人」会話の CNS による発話の重なりの位置による出現率を表 15-1 と図 8 に示す。

表 15-1 両場面における「対友人」会話の発話の重なり

	発話数 (%)			
	発話冒頭	発話終了付近	発話途中	合計
相手場面	48(22.9)	58(27.6)	104(49.5)	210(100.0)
第三者場面	32(11.7)	56(20.4)	186(67.9)	274(100.0)
合計	80(16.5)	114(23.6)	290(59.9)	484(100.0)

($\chi^2(2) = 18.278, p < .001$)

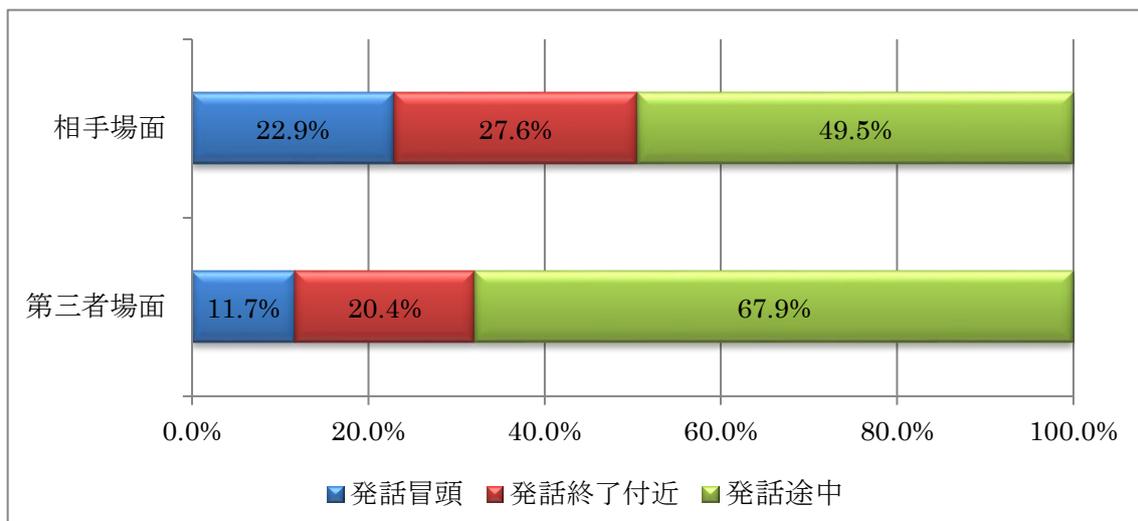


図 8 両場面における「対友人」会話の発話の重なり

「対友人」会話において、CNS による発話の重なりの合計は、相手場面で 210 発話、第三者場面で 274 発話であった。相手場面においては、「発話冒頭」が 22.9% (48 話)、「発話終了付近」が 27.6% (58 話)、「発話途中」が 49.5% (104 話) であるのに対して、第三者場面においては、「発話冒頭」が 11.7% (32 話)、「発話終了付近」が 20.4% (56 話)、「発話途中」が 67.9% (186 話) であった。つまり、両場面ともに「発話途中」の重なりが最も多く、次いで「発話終了付近」「発話冒頭」の順に生じていた。

この結果について χ^2 検定を行ったところ、0.1%水準で有意であった ($\chi^2(2) = 18.278, p < .001$) ことから、「対友人」の場合、「発話の重なり」には相手が日本語母語話者であるか否かが影響することが把握された。さらに、その残差分析を行った結果を表 15-2 に示す。

表 15-2 残差の一覧表

	発話冒頭	発話終了付近	発話途中
相手場面	3.3***	1.8n.s.	-4.1***
第三者場面	-3.3***	-1.8n.s.	4.1***

(n.s. : not significant, *** $p < .001$)

表 15-2 から、「発話冒頭」の重なりは相手場面で有意に多く、「発話途中」の重なりは第三者場面で有意に多いことが分かった。「発話終了付近」の重なりは両場面には有意差が見られなかった。

では、「対友人」の場合、以上のような、両場面における重なりの位置の違いは何を意味し、各分類の重なりはどのような状況で生起するのだろうか。その要因を明らかにするために、以下、順に「発話冒頭」、「発話終了付近」、「発話途中」の「発話の重なり」について談話の質的分析を試みることにする。

2.1.2 「発話冒頭における同時発話」

まず、相手場面で有意に多い「発話冒頭における同時発話」について分析する。談話例 28 を見てみよう。

例 28 (CNS2 の送別会について)

75 JNS2: お別れ会とかなかったし。

76 CNS2: ある、私たち。

77 JNS2: ああ、そうなんだ。

(中略)

81 JNS2: わっち?。

82 CNS2: わっち《少し間》。

→83 JNS2: [<いいね> { }]。

→84 CNS2: [<わっち> { }] と一緒に。

例 28 では、81JNS2 の「わっち?」(大学のサークル名) という質問に対し、CNS2 は 82 で「わっち」と答えて、間を少し置いて、ターンを終了したが、次の 84 で再びターンを取って「わっちと一緒に」と言い始めている。それと同時に、JNS2 は、CNS2 から 82「わっち」という応答を得たために発話権を取得したと考え、83 で「いいね」と評価を表している。そのため、JNS2 と CNS2 のターンが 83 と 84 で同時に開始され、発話冒頭で発話が重なっている。このように、発

話冒頭で起こる重なりは、2人の会話参加者が TRP で同時にターンを開始したために起こるものであり、会話参加者が、話者交替規則を指向するために起こるものである。その重なりから、CNS が話者交替規則を指向しながら、次の話し手になろうという、積極的に会話に参加する姿勢が窺える。

「発話冒頭」で起こる重なりは、相手場面では 22.9% (48 話)、第三者場面では 11.7% (32 話) で、相手場面の方が第三者場面より有意に多く起こっていた。このことから、CNS は、相手場面では相手が母語話者であることを意識し、話者交替規則をより強く指向しながら次の話し手になろうとしていることが推測される。

2.1.3 「発話終了付近における同時発話」

次に、「発話終了付近における同時発話」について分析する。以下に談話例 29 を挙げる。

例 29 (CNS2 の帰国に関する話題について)

→36 JNS2: 中国に帰るんだよね, [<○○ちゃんは>{<} (CNS2)。

→37 CNS2: [<そうよ>{>}、一ヶ月しかないよ。

38 JNS2: あと?。

39 CNS2: 二ヶ月、本当に二ヶ月。

例 29 では、JNS2 の 36 「中国に帰るんだよね」という発話は、文の形式上は終了している。そのため、JNS2 の発話のターンがここで終了すると予測した CNS2 が 37 で「そうよ」と次の発話を始めたが、この時、JNS2 が「○○ちゃんは」と主語を付け加えたために重なりが生じている。このような重なりは、先行発話のターンが終了したと見なせる箇所 (TRP) で、前の話者がさらに何らかの言葉を補足したりして、話し続けるために生じた「発話の重なり」である。これは、前の話者が、相手が理解しやすいように配慮して自分の発話を調節すると同時に、次の話者も、相手の発話に注意を払いながらターンの終

了箇所を予測した結果生じた「重なり」である。つまり、「互いに協力して会話を促進させていこうとしたことの現れ」(木暮 2002: p.121) と言えよう。このような重なりは、TRP が予測可能であることに基づくもので、話者交替規則を指向して次の話者になろうとする CNS の積極的な姿勢の表れとして捉えられる。

「発話終了付近」で起こる重なりは、相手場面では 27.6% (58 話)、第三者場面では 20.4% (56 話) で、両場面には有意差がなかった。

2.1.4 「発話途中における同時発話」

最後に、第三者場面で有意に多い「発話途中における同時発話」、すなわち、「割り込み発話」について分析する。以下に談話例 30 を挙げる。

例 30 (帰国のことについて)

→280 KNS2:なんか別れる気がするよね、それ、そうい[<う>{<} 【】。

→281 CNS2:[【】 <そ>{>}う、めっちゃ早いじゃん、今学期。

282 KNS2:早い。

283 CNS2:何もしていないのに、もう…。

例 30 では、KNS2 が 280 で「なんか別れる気がするよね、それ、そういう」と話したところで、CNS2 は 281 で「そう、めっちゃ早いじゃん、今学期」と発話を開始し、KNS2 の発話を中断させている。CNS2 の発話は、KNS2 の発話の途中で挿入された「割り込み発話」で、話者交替規則に違反するものであると言える。

「対友人」の場合、「割り込み発話」は、相手場面と第三者場面においては、それぞれ 49.5% (104 話) と 67.9% (186 話) で、第三者場面の方が相手場面より有意に多く起こっていた。

「割り込み発話」は、現在話している話者の発話と重なるのを承知の上で行われることが多いため、重ねられた話者の発話が途中で打ち切られるのが特徴である。

このような「割り込み発話」について、劉（2012）は「フロア内での割り込み」と「新たなフロアを築く割り込み」に分類している。前者は、相手の発話への共感などを示し、会話の展開を促進する「協調的な割り込み」であり、後者は先行話者の発話権を奪い、相手の発話を妨害する「支配的な割り込み」であるという。ここでは、さらに、「割り込み発話」が起きる状況を明らかにするために、劉（2012）を参考にし、「割り込み発話」を「協調的な割り込み」と「支配的な割り込み」の2つに分類して分析した。その結果を表 16-1 と図 9 に示す。

表 16-1 と図 9 に示したように、「対友人」の場合、相手場面であれ、第三者場面であれ、出現率が最も高い「割り込み発話」は「協調的な割り込み」で、相手場面では 88.5%（92 話）、第三者場面では 77.4%（144 話）を占めている。つまり、両場面ともに、「協調的な割り込み」の方が「支配的な割り込み」より圧倒的に多いことが分かる。

表 16-1 両場面における「対友人」会話の割り込み発話

発話数 (%)			
	協調的な割り込み	支配的な割り込み	合計
相手場面	92(88.5)	12(11.5)	104(100.0)
第三者場面	144(77.4)	42(22.6)	186(100.0)
合計	236(81.4)	54(18.6)	290(100.0)

($\chi^2(1) = 5.367, p < .05$)

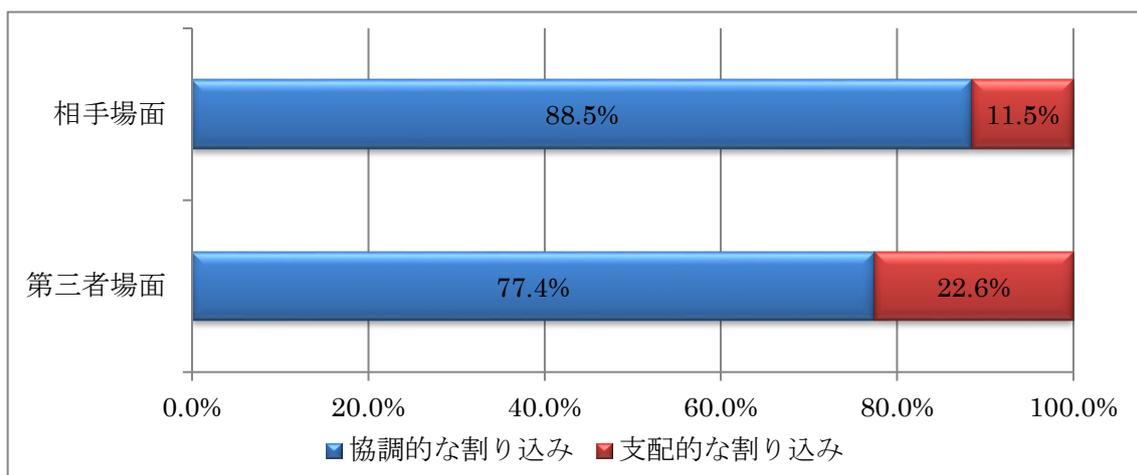


図 9 両場面における「対友人」会話の割り込み発話

この結果について χ^2 検定を行ったところ、5%水準で有意差があった ($\chi^2(1)=5.367$, $p<.05$) ことから残差分析を行った。表 16-2 に示した残差分析の結果、「協調的な割り込み」は相手場面で有意に多いのに対し、「支配的な割り込み」は第三者場面で有意に多いことが分かった。

表 16-2 残差の一覧表

	協調的な割り込み	支配的な割り込み
相手場面	2.3*	-2.3*
第三者場面	-2.3*	2.3*

(* $p<.05$)

では、以上のような、両場面における「対友人」会話の「割り込み発話」が生起する状況の違いは、何に起因するのだろうか。その要因を明らかにするために、以下、2.1.4.1で「協調的な割り込み」について、2.1.4.2で「支配的な割り込み」について談話を分析する。

2.1.4.1 「協調的な割り込み」

まず、相手場面で有意に多い「協調的な割り込み」について分析する。「対友人」会話における「協調的な割り込み」は、「①評価・感想」

「②情報付加・補足」「③共話作り」「④質問・確認」の4つに下位分類された。相手場面と第三者場面における「協調的な割り込み」の談話を、その下位分類に従って分類した結果を、表17と図10に示す。

表17 両場面における「対友人」会話の「協調的な割り込み」

	①評価・感想	②情報付加・補足	③共話作り	④質問・確認	合計
相手場面	34(37.0)	32(34.8)	13(14.1)	13(14.1)	92(100.0)
第三者場面	58(40.3)	46(31.9)	27(18.8)	13(9.0)	144(100.0)
合計	92(39.0)	78(33.1)	40(16.9)	26(11.0)	236(100.0)

発話数 (%)

($\chi^2(3) = 2.329$ n.s.)

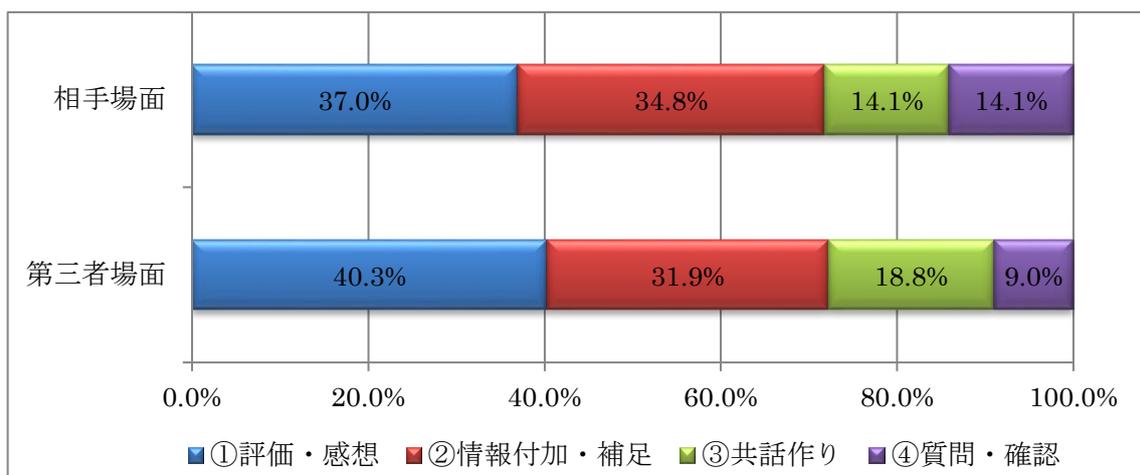


図10 両場面における「対友人」会話の「協調的な割り込み」

「対友人」会話において、相手場面、第三者場面ともに、「①評価・感想」が最も多く、次いで「②情報付加・補足」、「③共話作り」、「④質問・確認」の順であった。この結果について χ^2 検定を行ったところ、①②③④は両場面に有意差がなかった。以下、それぞれ談話例を挙げて分析する。

① 評価・感想

これは、相手の発話内容に対して同意、共感、関心などを表すコメントや感想を示すために、聞き手が相手のターンの終了を待たずに発話を開始するものである。

例 31 (KNS2 の沖縄旅行について)

→138 KNS2 : で、もともと、私はなんか、8月に、なんか、高校の友達と沖縄行く予定だったけど、なんか、それは便がないことになっちゃって、結局、なんか 【【[。

→139 CNS2 : 【】 行きたい、行きたい。

140 KNS2 : で、むしろ来年2月ぐらいに沖縄に行こうって、そのぐらいになっちゃった。

141 CNS2 : へー。

例 31 では、138KNS2 の「高校の友達と8月に沖縄へ行く予定だったのが、便がなくなった」という発話に対し、CNS2 は沖縄に大きな興味が湧き、KNS2 の発話がまだ終わらないうちに、139 で割り込んで「行きたい、行きたい」と同じ言葉を繰り返して自分の感情を示している。その後、KNS2 は、CNS2 が言い終わるのを待って、140 で再びターンを取って、「で、むしろ来年2月ぐらいに沖縄に行こうって、そのぐらいになっちゃった」と先の発話を継続し、当初計画していた発話の目的が達成された。このような「割り込み発話」は相手のターンを取る意図はなく、相手の発話に共鳴し、高い関心度と理解を表しているので、肯定的に捉えていいのではないか。

「①評価・感想」の割り込みは相手場面では 37.0% (34 話)、第三者場面では 40.3% (58 話) であった。

② 情報付加・補足

これは、話し手が文末まで言い終わる前に、聞き手が先行発話に関

連する情報を付け加えて、相手の発話を補足するものである。

例 32 (KNS2 の大学の学科の名前変更について)

475 KNS2: 日文と中文を(うん)合わせて、アジア言語学科に変わるんだって。

476 CNS2: <笑いながら>ばかばかしい。

477 KNS2: そうね、ばかばかしい。

478 CNS2: それ、本当に。

→479 KNS2: それと、フランス語とドイツ語の学科 [【】。

→480 CNS2: [【】 ヨーロッパ。

481 KNS2: そう、ヨーロッパ系言語。

482 KNS2: “何やってるの [↑]” って、意味わからない、本当に。

例 32 は、KNS2 が所属している大学の学科の名前変更に関する談話である。KNS2 は 479 で「それと、フランス語とドイツ語の学科」について話そうとしたところで、CNS2 はその内容を予測し、KNS2 の発話を最後まで待たずに、480 で「ヨーロッパ」と割り込みの形で関連する情報を付け加えている。その後、KNS2 は、その補足を踏まえて、481 で「そう、ヨーロッパ系言語」と同意を表しながら、482 で「“何やってるの [↑]” って、意味わからない、本当に」と引き続き自分の発話を構築し続けている。つまり、KNS2 のターンは維持されている。このように、CNS2 は、相手のターンを取るというより、相手の発話に関連する情報を補足して、積極的に会話に関与しようとするために、相手の発話に割り込みを行っていることが分かる。

また、「情報付加・補足」の中には以下の談話例も見られた。

例 33 (台湾の映画について)

158 JNS2: 中国のあれ見た。

159 JNS2: ああ、なんだっけ?、あ、なんだっけ?、台湾のなんだけど。

- 160 CNS2 : うん、何?。
- 161 JNS2 : 台湾の映画で、ああ、タイトルは思い出せない。
- 162 CNS2 : はははは<CNS2 の笑い>。
- 163 CNS2 : アクションじゃない?。
- 164-1JNS2 : ううん、もうー,,
- 165 CNS2 : <ラブストーリー>{<}。
- 164-2JNS2 : <ラブストーリー>{>}。
- 166 CNS2 : <笑い><やっぱり>{<}。
- 167 JNS2 : <学校>{>}、学校のやつでー【【[。
- 168 CNS2 : 【】ああ、“那些年”（中国語）《沈黙 2 秒》、じゃないかなあ。
- 169 CNS2 : “那些年一起追过的女孩”（中国語）。

例 33 では、JNS2 が見た台湾映画のタイトルが思い出せず、聞き手 CNS2 がその関連情報を補足したりして積極的に相手を助けようとする姿が見られた。CNS2 はまず 163 で「アクションじゃない?」と相手を助けているが、JNS2 が 164-1 で「ううん、もうー」と答えてターンを維持している途中で、CNS2 は、JNS2 の否定的な応答に対して、続いて 165 で「ラブストーリー」と割り込み、JNS2 の 164-2「ラブストーリー」と重なっている。このように、2 人が同じ言葉「ラブストーリー」を同時発話することによって、偶然「ユニゾン」(串田 2006)³⁵が発生している。このような重なりは、滝浦 (2008) では「共感のオーバーラップ」と呼ばれ、「協調的で共感の強い、2 人で一緒に会話を作りあげるような親密な会話に現れる」(p.101) とされている。また、その後も、JNS2 の 167「学校、学校のやつでー」というヒントを受けて、CNS2 は、168 で「ああ、“那些年”（中国語）」ともう一度割り込み、この映画の名前を言い出して関連情報を補足している。

この一連の言語行動から、CNS2 が積極的に関連情報を補足したり

³⁵ 串田 (2006) は、「言葉を重ね合わせる工夫によって首尾よく実現されたものとしての言葉の一致」(p.117) を「ユニゾン」と呼ぶ。

して、相手と協調的に会話を進めようとする意欲が窺えた。このような「割り込み発話」は、荻原（2002）では、「話者を助けるための割り込み」として捉えられている。

「②情報付加・補足」の割り込みは相手場面では 34.8%（32 話）、第三者場面では 31.9%（46 話）であった。

③ 共話作り

これは、話し手が話している途中で、聞き手がその発話の残りの部分を予測して、それを相手が言う前に先取りして、2人の会話参加者が共同で一つの発話を作りあげていくものである。

例 34（KNS1 が出勤先で困ることについて）

- 195 KNS1: で、第二は(<笑いながら>) おばさんがいること。
196 CNS1: ははははは（笑い）。
→197 KNS1: おばさんがいると 【【】。
→198 CNS1: 【】 絶対何か話しかける。
199 KNS1: 30 分ぐらいかかるね。
200 CNS1: うんうんうん。

例 34 は、KNS1 が出勤先で困ることについて話している談話である。KNS1 が 197 で「おばさんがいると」と言って出勤先で 2 番目に困ることについて話し出すと、CNS1 はその先取りをして、次の 198 で「絶対何か話しかける」と発話を完結した。つまり、KNS1 の 197 発話は CNS1 の割り込みによって中断されたものの、伝えようとした情報は CNS1 の先取り発話によって完成されている。CNS1 と KNS1 は共同で「おばさんがいると絶対何か話しかける」という一つの発話を作り上げている。串田（2006）は、1人が開始したターンをもう1人が協調的に完結させることを、「先取り完了」と呼んでいるが、例 34 のような先取り発話に当たる「割り込み発話」は、相手のターンを奪うのではなく、会話参加者双方が協力して会話を進めようとして

いると考えられる。また、ポライトネス理論（Brown&Levinson1987）から見れば、共話作りによって、「同一の出来事に関心を共有しているというポジティブ・ポライトネス³⁶に相当する仲間意識が構築されている」（三牧 2015：p.35）と言える。

「③共話作り」による割り込みは相手場面では 14.1%（13 話）、第三者場面では 18.8%（27 話）であった。

④ 質問・確認

これは、話し手が話している途中で、聞き手はその発話に対して質問や確認を挿入するものである。

例 35（中国の中学校の恋愛禁止について）

500 JNS2:で、それはずっと言ってた、確かに学校も恋愛禁止みたいな。

501 CNS2:あー。

→502 JNS2:中学校も 【【】。

→503 CNS2: 【】 それはあるんだ、日本には?。

504 JNS2:日本じゃない、中国、中国。

505 CNS2:ああ、中国、そうなんだ。

506 JNS2:中国の中学校は、その学校はまあ、男女の付き合いとか禁止で。

例 35 では、JNS2 は 500 で「学校も恋愛禁止」だと話しているが、どの国の学校なのかについて分からずに、CNS2 は JNS2 の 502「中学校も」のところで割り込んで、「それはあるんだ、日本には?」と JNS2 に確認している。JNS2 はそれに対して、「日本じゃない、中国、中国」と相手の誤解を訂正し、CNS2 の 505「ああ、中国、そうなんだ」の返事を聞いた後、506 で CNS2 の割り込みにより中断された「中学校

³⁶「ポジティブ・ポライトネス」とは、「相手に対する共感や親しさを強調して相手のポジティブ・フェイス（positive face）を保持することにより実現されるポライトネス」（応用言語学事典 2003：p.212）である。

の恋愛禁止」の話題を続け始めた。このように、JNS2の発話はCNS2の「割り込み発話」によって、一時的に中断されたが、その後同一内容の発話が再開され、当初計画していた発話目的は達成されたことが分かる。この流れから、CNS2は相手の発話に割り込んで、簡潔に確認をすることによって、相手の全体の話のスムーズな流れを滞らせたり、相手のターンを取ってしまうことはなかったと言えよう。この「割り込み発話」は、「不明瞭さを残したまま会話を持続させないという聞き手側の意識の現れ」(荻原 2002: p.71)、すなわち、単に相手の発話内容を明確にさせるための手段と考えられる。このように、「質問・確認」の「割り込み発話」から、聞き手の話題への高い参加意識が窺える。

「④質問・確認」の割り込みは相手場面では14.1% (13話)、第三者場面では9.0% (13話)であった。

以上の「①評価・感想」「②情報付加・補足」「③共話作り」「④質問・確認」の発話内容を見ると、①②③④のような「協調的な割り込み」は、相手のターンを取るわけではなく、相手の発話への興味深さや関心を示したり、相手の発話を補助したりして、相手とともに会話を構築していこうという話者の意図が窺える。「対友人」の場合、両場面ともに、このような「協調的な割り込み」の方が「支配的な割り込み」より圧倒的に多かった。CNSは、両場面ともに相手の発話への共感、関心などを示しながら協働的に会話を進めようとしていると言えるだろう。

2.1.4.2 「支配的な割り込み」

次に、第三者場面で有意に多い「支配的な割り込み」について分析する。「支配的な割り込み」は「⑤新情報提示」と「⑥反論」の2つに下位分類された。相手場面と第三者場面における「支配的な割り込み」の下位分類の結果を表18と図11に示す。

表 18 両場面における「対友人」会話の「支配的な割り込み」

発話数 (%)

	⑤ 新情報の提示	⑥ 反論	合計
相手場面	9(75.0)	3(25.0)	12(100.0)
第三者場面	33(78.6)	9(21.4)	42(100.0)
合計	42(77.8)	12(22.2)	54(100.0)

($\chi^2(1) = 0.069$ n.s.)

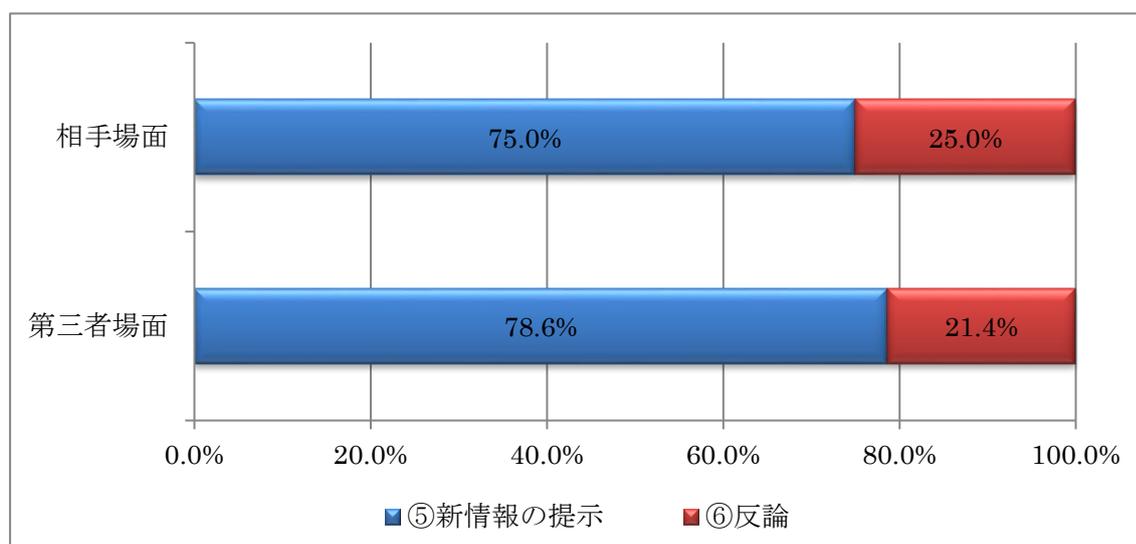


図 11 両場面における「対友人」会話の「支配的な割り込み」

χ^2 検定の結果、⑤⑥は両場面に有意差がなかった。表 18 と図 11 に示したように、両場面ともに「⑤新情報の提示」の占める割合が「⑥反論」の約 3 倍の数値を示しており、圧倒的に「⑤新情報の提示」のための割り込みが多いことが分かる。以下、それぞれの談話例を見ていく。

⑤ 新情報の提示

これは、先行話者の内容と関連性が弱い情報、または新たな話題を挿入するものである。

例 36 (中国の有名な小説『活着』の主人公の死に方について)

351-1 JNS2: なんかさ、『活着』の,,

352 CNS2: ああ、<その人>{<}。

→351-2 JNS2: <主人公>{>}は饅頭、あ、お医者さん[<がさ>{<} 【【。

→353 CNS2: 【】<ああ>{>}、それは水、水のせいで。

354 JNS2: 水のせい? あ、もう 【【。

355 CNS2: 【】そう、饅頭食べて、そして水を飲んで(うん)、こうやって。

356 JNS2: ポンポンになっくて>{<}。

357 CNS2: <ポン>{>}ポンになって、そう、死んじゃった、そう。

358 JNS2: バカな死に方だなあ。

例 36 は中国の有名な小説『活着』の主人公の運命に関する談話である。JNS2 は 351-1、351-2 でその主人公の死に方について説明しようとしている。CNS2 もこの小説を読んだことがあるので、その主人公の死亡の原因について思い出し、JNS2 の説明を最後まで聞かず 353 で「ああ」とあいづちを打った後に「それは水、水のせいで」という新しい情報を持ち出して、JNS2 の発話を中断させている。その後、会話は、CNS2 の割り込んだ「死んだのは水のせいだ」という話題をめぐって展開されている。このように、CNS2 は、相手の発話内容を踏まえて新たな情報を言うためにあえて相手の発話に割り込んでいると考えられ、その後、その新情報に関する話題が CNS2、JNS2 双方によって継続されていることが分かる。

次に、第三者場面の談話例 37 を示す。

例 37 (日本での留学生活について)

442 KNS2: 10 ヶ月だけど、なんか留学生同士で、なんか、わいわい
<して>{<}。

443 CNS2: <そうそう>{>}、わいわいしてて。

→444 KNS2 : わいわい 【】。

→445 CNS2 : 【】 特に秋学期のほうが楽しかった。

446 KNS2 : ああ、そう?。

447 CNS2 : 本当に。

448 KNS2 : ああ、まあね、本当に「〇〇」ちゃん (CNS2)、「〇〇」
(他の友人)、いろいろ遊んだりくしたよね><{>。

449 CNS2 : <そうそう>{>}。

450 CNS2 : そして、みんなとも、先輩とも、いろいろ話してたし、
(そうか)、いろいろやってたし。

例 37 では、KNS2 と CNS2 は日本での留学生生活について話している。KNS2 が 444 で「わいわい」まで話していたところで、CNS2 は 445 でターンを取って「特に秋学期のほうが楽しかった」という新しい情報を持ち出して、KNS2 の発話を中断させている。KNS2 は中断された自身の発話を継続せずに、446 で「ああ、そう?」と CNS2 に確認している。CNS2 はそれに対して、447 で「本当に」と答えている。続いて、KNS2 は 448 で「ああ」と理解を表した後に、「まあね、本当に「〇〇」ちゃん (CNS2)、「〇〇」(他の友人)、いろいろ遊んだりしたよね」と発話している。このように、会話は、CNS2 の割り込んだ「秋学期のこと」という話題をめぐって展開されている。この割り込みから、例 36 同様に、CNS2、KNS2 双方によって新情報に関する話題が継続されている。

「⑤新情報の提示」の割り込みは相手場面では 75.0% (9 話)、第三者場面では 78.6% (33 話) であった。両場面ともに、「⑤新情報の提示」が「支配的な割り込み」全体の 3/4 を占めており、圧倒的に多いことが分かる。つまり、CNS は、どちらの場面においても、相手の発話に関する新しい情報を加えようとして「割り込む」のであり、その後は、その新情報をめぐって会話が活発化していくことが分かった。

⑥ 反論

これは、相手の話や意見に対して反論を表すために、相手の発話に割り込むものである。

例 38 (ニュージーランドの友達「〇〇」について)

323 KNS2: 「〇〇」(ニュージーランドの友達)、ちょっと、でも…。

324 CNS2: 〈笑いながら〉「〇〇」ちょっと無理よね。

325 KNS2: 遠すぎる>{<}。

326 CNS2: <遠>{>}すぎるから、遠すぎるから。

(中略)

330 CNS2: <チケットも>{>}高いじゃん。

331 KNS2: うん、ニュージーランド代、高いじゃん。

→332KNS2: ええと、でも、まあね、Facebook とかで、写真とか見ると、なんか、“えっ”】】 [。

→333 CNS2: [【【違うよ。

334 CNS2: 本人にあいたいよ、写真だけじゃなくて。

335 KNS2: [口調を変えて] “もう、やめて”。

例 38 では、CNS2 と KNS2 は、共通のニュージーランドの友達「〇〇」をめぐって話題を展開している。ニュージーランドは韓国や中国から遠く、チケットも高く、会いに行くのは難しい。そのため、KNS2 は、332 で Facebook で連絡を取ったり写真を見たりすることができるとアドバイスを出しているが、CNS2 はその話を最後まで聞かずに、333 で「違うよ」と相手の考えを否定し、334 で「本人にあいたいよ、写真だけじゃなくて」と反対意見を述べている。そのため、CNS2 の割り込みによって、KNS2 の 332 発話が途中で中断されている。このように、「反論」を表す割り込みは、現在話している話者の発話と重なるのを承知の上で行われることが多いため、重ねられた話者の発話が不自然な形で打ち切られているのが特徴である。このような「割り込み発話」は、相手の発話に介入する度合いが強く、多用しすぎると、

相手の発話を遮る失礼な行為とみなされがちであり、相手に不快感を与える「遮り行為」(林 2008) と言える。そのような言語行動であることから、「⑥反論」は、CNS が話者交替規則よりも積極的な自己意見の表出の方に意識が傾いていると言える。

「対友人」会話における「⑥反論」の割り込みは相手場面では 25.0% (3 話)、第三者場面では 21.4% (9 話) で、どちらの場面も少なかった。

2.1.5 まとめ

以上、相手場面と第三者場面における「対友人」会話の CNS による「発話の重なり」について分析した。その結果、以下のことが分かった。まず、CNS による「対友人」会話における「発話の重なり」は、両場面ともに「発話途中」の重なりが最も多く、次いで「発話終了付近」「発話冒頭」の順に生じていた。さらに、「発話途中」すなわち「割り込み発話」が生じた談話を分析すると、両場面ともに「協調的な割り込み」の方が「支配的な割り込み」より圧倒的に多かった。CNS は、両場面ともに相手への共感を示しながら協働的に会話を進めようとしていることが窺える。このことから、対友人の場合、相手が日本語母語話者であれ、非母語話者であれ、CNS による「発話の重なり」は、相手への共感を示しながら相手とともに協働的に会話をスムーズに促進するための手段として使われていると考えられる。

第 2 章 3.1 の先行研究が指摘するように、日本語母語話者の会話において発話の重なりは、会話参加者の共感、関心などを表し、会話を促進する作用が大きいとされている (藤井・大塚 1994、生駒 1996、など)。本研究では、CNS による「対友人」会話における発話の重なりは、母語話者と同様な結果を示していると言える。

さらに、CNS による「発話の重なり」の場面差に注目すると、「発話冒頭」の重なりは相手場面で有意に多く、「発話途中」の重なりは第三者場面で有意に多いことが分かった。「発話途中」すなわち「割り込み発話」の談話を分析した結果、「協調的な割り込み」が相手場

面で有意に多いのに対して、「支配的な割り込み」が第三者場面で有意に多いことが分かった。つまり、「対友人」会話においては、相手場面での重なりは「発話冒頭」に多く生起し、「協調的な割り込み」が有意に多かったのに対して、第三者場面での重なりは「発話途中」に多く生起し、「支配的な割り込み」が有意に多かった。この結果から、対友人の場合、相手場面において CNS は、相手が母語話者であることを意識して、話者交替規則を強く指向することによって「発話冒頭」の重なりが多くなる一方で、友人同士であっても、協調関係の維持が優先されることによって「発話途中」の「協調的な割り込み」が多くなり、「支配的な割り込み」が控えられる傾向が強まると考えられる。それに対して、第三者場面では、発話自体に意識が向くことによって、新情報を加えて明瞭に自分の意見と感情を表現することが優先され、積極的な会話参加が志向されていることが推測される。

2.2 発話の重なり後の相手場面と第三者場面の談話展開

次に、CNS による「発話の重なり後の談話展開」を観察する。まず、2.2.1 で相手場面と第三者場面における CNS による「対友人」会話の「発話の重なり」を取り上げ、その「重なり後の談話展開」について分析を行う。次に、2.2.2～2.2.5 で具体的な談話例に基づき、両場面の特徴と差異を明らかにする。最後に 2.2.6 でまとめる。

2.2.1 重なり後の談話展開

2.1 で見たように、「対友人」会話において、CNS による「発話の重なり」は相手場面が 210 発話であるのに対して第三者場面が 274 発話であった。その CNS による「発話の重なり後の談話展開」を分析した結果、「1.支障なく両者の発話が続行する」、「2.重ねられた話者が中断発話を再開する」、「3.重ねた話者がターンを取って話題を転換する」、「4.競合的に各自のフロアを継続する」の 4 パターンが把握された。相手場面と第三者場面における各談話展開パターンの出現率を表 19-1 と図 12 に示す。

表 19-1 「対友人」会話の重なり後の談話展開

談話数 (%)

	1.支障のない 発話の続行	2.重ねられた 話者による中 断発話の再開	3.重ねた話者 による話題 転換	4.競合的な フロアの継続	合計
相手場面	152(72.4)	44(21.0)	14(6.7)	0(0.0)	210(100.0)
第三者場面	159(58.0)	68(24.8)	34(12.4)	13(4.7)	274(100.0)
合計	311(64.3)	112(23.1)	48(9.9)	13(2.7)	484(100.0)

($\chi^2(3) = 18.494, p < .001$)

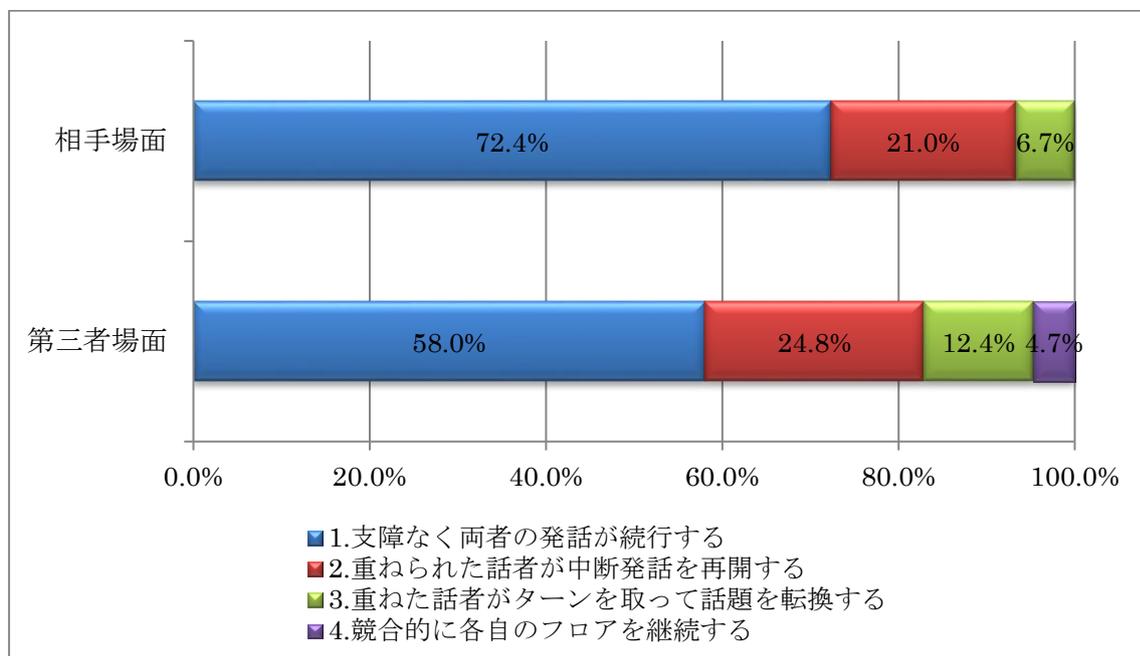


図 12 「対友人」会話の重なり後の談話展開

表 19-1 と図 12 に示したように、「対友人」会話において、相手場面も第三者場面も、最も多いのは「1.支障なく両者の発話が続行する」場合であるが、それぞれが占める割合が異なっている。相手場面では 72.4% (152 談話)、第三者場面では 58.0% (159 談話) で、相手場面の方が占める割合が大きい。「2.重ねられた話者が中断発話を再開する」場合は相手場面が 21.0% (44 談話)、第三者場面が 24.8% (68 談話) であった。「3.重ねた話者がターンを取って話題を転換する」場合は、相手場面が 6.7% (14 談話)、第三者場面が 12.4% (34 談話)

で、第三者場面の方が相手場面の2倍近く多いことが分かる。「4.競合的に各自のフロアを継続する」は、相手場面では見られなかったのに対して、第三者場面では4.7%（13談話）であった。この結果について χ^2 検定を行ったところ、0.1%水準で有意であった（ $\chi^2(3)=18.494$, $p<.001$ ）ことから、「対友人」の場合、「重なり後の談話展開」には相手が日本語母語話者であるか否かが影響することが把握された。

その残差分析を行った結果を表19-2に示す。

表 19-2 残差の一覧表

	1.支障のない 発話の続行	2.重ねられた話者 による中断発話 の再開	3.重ねた話者 による話題 転換	4.競合的な フロアの継続
相手場面	3.3***	-1.0n.s.	-2.1*	-3.2**
第三者場面	-3.3***	1.0n.s.	2.1*	3.2**

(n.s. : not significant, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$)

表19-2から、「対友人」会話において、相手場面では「1.支障なく両者の発話が続行する」場合が有意に多いのに対して、第三者場面では「3.重ねた話者がターンを取って話題を転換する」と「4.競合的に各自のフロアを継続する」場合が有意に多いことが分かる。「2.重ねられた話者が中断発話を再開する」場合は両場面には有意差が見られなかった。つまり、「対友人」会話において、CNSによる発話の重なりが生じた後、相手場面では、会話の進行に支障なく両者（CNSとJNS）が発話を続行する傾向が強いのに対して、第三者場面では、重ねた話者（CNS）がターンを取って話題を転換する、さらに両者（CNSとKNS/GNS/MNS）が競合的に各自のフロアを継続するという傾向が強いことが分かった。

では、この場面の差は何を意味しているのだろうか。その要因を明らかにするために、以下、順にそれぞれの談話展開について分析を試みることにする。

2.2.2 支障なく両者の発話が続行する

まず、両場面ともに最も多く、相手場面で有意に多い「1.支障なく両者の発話が続行する」パターンについて分析する。これは、CNSによる発話の重なりが生じてても、両者が各自の発話を中断せず、それぞれ言いたいことを続行しながら会話を円滑に進める場合である。

例 39 (中国映画の日本語字幕について)

304 CNS2 : そして、翻訳もそんなに、なんか適當すぎる(へー)、日本語の翻訳、字幕。

305 JNS2 : なんか、翻訳、日本語は特に長くなっちゃうから、どうしても。

→306 JNS2 : 何文字、何文字以内でおさめなさいって決まっているん
[<だって>{<}]。

→307 CNS2 : [<ああ>{}], そうなんだ。

308 JNS2 : だから、たとえば、四字熟語とかさ、(うん)、絶対四文字じゃん。

→309 CNS2 : <ああ、四文字>{<}]。

→310 JNS2 : <日本語で>{}言えなくいじゃん>{<}]。

→311 CNS2 : <そうそう>{}]そうそう。

312 JNS2 : すごい長くなるじゃん。

313 JNS2 : やばいの <JNS2 の笑い>]。

→314 JNS2 : ギュッて<しては>{<}いけないから <JNS2 の笑い>]。

→315 CNS2 : <ギュッて>{}]。

→316 JNS2 : だから、すごく難かしいと思う>{<}]。

→317 CNS2 : <そう、だから意>{}]味もちょっと変わった(うん)みたいで。

例 39 は中国映画の日本語字幕に関する談話である。まず、306JNS2の発話終了付近で、CNS2 が理解を示す「ああ、そうなんだ」とあいづちを打ったために、1 回目の重なりが生じている。次に、308「だ

から、たとえば、「四字熟語とかさ、絶対四文字じゃん」で JNS2 の発話が終了したと思った CNS2 は、309 で「ああ、四文字」と言っただけの後に相手の発話の一部を繰り返して発話を開始している。それと同時に、JNS2 は 310 で再びターンを取って、「日本語で言えないじゃん」と発話を開始したために、309 と 310 が発話冒頭で重なっており、2 回目の重なりが生じている。続いて、310 JNS2 の発話終了付近で、CNS2 は共感を表す「そうそうそうそう」とあいづちを打ったために、3 回目の重なりが生じている。また、JNS2 の 314 「ギョッてしてはいけないから」の途中で、CNS2 は 315 で「ギョッて」と相手の発話の一部を繰り返して発話したために、4 回目の重なりが生じている。さらに、その後、JNS2 が 316 で「だから、すごく難しいと思う」と話している途中で、CNS2 は 317 で「そう、だから意味もちょっと変わったみたいで」とあいづちを打った後に自分の言いたいことを続けているために、5 回目の重なりが生じている。このように、CNS2 による発話の重なりが 5 回生じているが、CNS2 も JNS2 も各自の発話を中断せず続行していることから、CNS2 のあいづちと繰り返しによって 2 人の発話が同時に成立し、会話が円滑に進んでいることが分かる。これは、相手の発話の続きが予測可能な箇所、CNS2 が JNS2 の発話に重ねていくことによって、相手の話を注意深く聞いていることを示すために起きた重なりと言えよう。

この談話展開パターンの第三者場面の談話例を例 40 に示す。

例 40 (韓国人学習者は日本語が得意であることについて)

- 105 CNS2: 2 人とも日本語めっちゃうまいし。
→106 KNS2: いやいや、ぜん[<ぜんうまい>]ほうじゃないから。
→107 CNS2: [<問題ないよ>]。
108 KNS2: このようには、日本語が得意な人がたくさんいるよ。
109 CNS2: それは確かに。
110 KNS2: うん。

例 40 では、CNS2 は 105 で「2 人とも日本語めっちゃうまいし」と言って、相手の KNS2 ともう 1 人の韓国人学習者の日本語がうまいとほめている。KNS2 がそれに対して、106 で「いやいや」と謙遜して、「ぜん」まで発話したところで、CNS2 はその発話内容を予測し、それを否定して、107 で「問題ないよ」と述べたことで重なりが生じている。KNS2 はその後、108 で「このようには、日本語が得意な人がたくさんいるよ」と情報を加えて、109 で CNS2 が「それは確かに」と同意していることから、発話の重なりが生じても、2 人の発話が順調に進んで円滑に会話が発展していることが分かる。これは、CNS2 の発話の重なりが、相手の発話の予測可能な箇所、相手の謙遜を否定して相手をほめるために起きた重なりであるためと考えられる。

例 39 と例 40 では、CNS による発話の重なりが生じても、その重なり後は、あいづちを打ったり、相手の発話を繰り返したり、相手をほめたりして、相手の発話への強い関心や共感を示す発話が続くことが分かる。つまり、両者は、「発話の重なり」によって各自の発話を中断することなく、互いに相手の話に強い関心と肯定的な態度を示しつつ、それぞれが自分の発話を続行しながら会話を円滑に進めていると考えられる。

このような談話展開パターンは相手場面と第三者場面においては、それぞれ 72.4% (152 談話) と 58.0% (159 談話) で、両場面ともに最も多かった (表 19-1、図 12)。これは、コミュニケーションにおいては、相手の母語を問わず、あらゆる場面において、会話参加者は「円滑な会話成立」を目指して会話を進めるのが一般的であるためと考えられる。また、この結果は、2.1 で明らかになった「対友人の場合、相手が日本語母語話者であれ、非母語話者であれ、CNS による発話の重なりは、相手への共感を示しながら相手とともに協働的に会話をスムーズに促進するための手段として使われている」という結果を裏付けるものと言える。一方、場面差に注目すると、このパターンは、相手場面の方が第三者場面より有意に多く起こっていた。このことから、相手場面では、第三者場面よりも会話参加者双方が円滑な会話成

立を目指して会話を進める傾向が強いことが分かる。

2.2.3 重ねられた話者が中断発話を再開する

次に、「2.重ねられた話者が中断発話を再開する」パターンについて検討する。このパターンの談話展開を観察したところ、次の3つのパターンが観察された。重ねられた話者が中断された自己発話をしばらく保留し、相手の発話に応じた後に継続する場合、重ねた話者(CNS)と共に中断発話を継続する場合、相手の発話に応じずに中断された自身の発話をそのまま直ちに継続する場合の3パターンである。以下に各パターンの談話例を示す。

まず、重ねられた話者が中断された発話をしばらく保留し、相手の発話に応じた後に継続する談話例を見てみよう。

例 41 (友人及びクラスメートと話す時の声の高さについて)

→193 JNS3 : 大学で同じクラスで、2人、「○○」、「○○」ちゃん(共通の日本人の友人)いるんだけど、その子と話す時はめっちゃ声が高いけど、[<違うクラス>{<} 【】。

→194 CNS3 : 【】 <自分が意識>{>}していないよね。

→195 JNS3 : してない。

→196 JNS3 : 違うクラスの子とか話す時は声が低い。

197 CNS3 : でも、それがテン、テンションと関係があるから。

198 JNS3 : テンションと関係があると思う。

例 41 では、JNS3 は 193 で、「友人と話す時は声が高いが、違うクラスの子と話す時は声が低い」ことを説明しようとしている。しかし、JNS3 が「違うクラス」について話を展開しようとしているところで、CNS3 が 194 で「自分が意識していないよね」と自分の意見を述べ、JNS3 に確認を求めたために、JNS3 の「違うクラス」の発話が CNS3 の発話と重なって中断されている。JNS3 は重ねた CNS3 に 195 で「し

ていない」と応答した後、196で、中断された193「違うクラス」の後を「違うクラスの子とか話す時は声が低い」と続けている。このように、JNS3は、CNS3の発話と重なって一時的に発話を中断したが、CNS3の発話に応答した上で中断した発話を再開している。本田(1997)は、重ねられた発話に応じた後に中断された発話を継続する談話を「相手との協調関係に気を配る、「協調型」の談話進行」(p.211)と述べている。

次に、重ねられた話者が重ねた話者(CNS)と共に中断した発話を継続する談話例を示す。例34はKNS1が出勤先で困ることについて話している談話である。

例34:(KNS1が出勤先で困ることについて)

- 195 KNS1:で、第二は〈笑いながら〉おばさんがいること。
196 CNS1:ははははは(笑い)。
→197 KNS1:おばさんがいると【【[。
→198 CNS1: 【】絶対何か話しかける。
→199 KNS1:30分ぐらいかかるね。
→200 CNS1:うんうんうん。
→201 KNS1:30分ぐらいかかるよ。
→202 CNS1:そうそう。

KNS1が2番目に困ることについて197で「おばさんがいると」と話し出すと、CNS1は198でKNS1の先取りをして、「絶対何か話しかける」と発話を完結している。つまり、197KNS1の発話は198CNS1の割り込みによって中断されたものの、伝えようとした情報はCNS1の先取り発話によって完成されている。その後、KNS1は198CNS1の発話を踏まえて、199で「(おばさんがいると)30分ぐらいかかるね」と続け、200でCNS1が「うんうんうん」と強い同意を示すあいづちを打っている。さらに、KNS2は201で「30分ぐらいかかるよ」と199の自分の発話を繰り返して、「おばさんがいると、30分ぐらい

かかる」ことを強調し、CNS1が202で「そうそう」と再びあいづちを打って強い同意と共感を示している。このように、この談話展開パターンでは、CNS1がKNS1に同意と共感を表すあいづちを打ちながら、KNS1と共に2人で中断された197の発話を継続していることが分かる。

最後に、重ねられた話者がCNSの重ねた発話に配慮せずに、中断された自身の発話を直ちに再開する談話例を挙げる。例42では、KNS2は、ライブがあるので10月にまた日本に来ること、そのライブ会場が埼玉アリーナなので、共通の韓国人の友人の部屋に泊まる予定であることを話している。

例42（共通の韓国の友人の部屋に泊まることについて）

- 116 CNS2：じゃ、文教に戻るの？戻らないよね。
- 117 KNS2：そう、たぶん、や、「〇〇」（共通の韓国人の友人）の部屋に泊まる。
- 118 CNS2：ああ、そうなんだ。
- 119 CNS2：そう、「〇〇」たちもまだいるよね。
- 120 KNS2：うんうん、ちょうど、なんか、そのライブをやるところは埼玉アリーナ。
- 121 CNS2：えー[↑]。
- 122 KNS2：<で>{<}。
- 123 CNS2：<じゃ>{>}、近いじゃん。
- 124 KNS2：うん、大宮から一駅らしい。
- 125 CNS2：そっか。
- 126 KNS2：で、[<ちょうど>{<} 【】。
- 127 CNS2： 【】 <30分>{>}、40分ぐらいかなあ。
- 128 KNS2：で、ちょうどだから、「〇〇」の部屋に泊まって。
- 129 KNS2：[口調を変えて] “みんな久しぶり”。
- 130 CNS2：いいね。

KNS2 が 126 で「で、ちょうど」と話している途中で、CNS2 が 127 で「30 分」と発話を開始したために重なりが生じている。126KNS2 の発話はその重なりによって中断されたが、その後、KNS2 は、127CNS2 の重ねた発話に応じずに、CNS2 が「30 分、40 分ぐらいかなあ」と言い終わるのを待って、128 で「で、ちょうどだから」と言っ て 126 で重ねられた発話の冒頭（「で、ちょうど」）を再生³⁷した後、「〇〇」の部屋に泊まって」と直ちに中断された発話を継続している。このような、重ねられた自分の発話の冒頭を再生して自発話を完成させることを、串田（2006）は「ターン冒頭再生」（recycled turn beginning）³⁸として扱っている。この談話展開パターンでは、中断された話者、すなわち重ねられた話者が、相手の発話には応じずに直ちに自分の発話を繰り返したあと、後半部分を継続していることから、相手の発話に対する配慮よりも自己発話の継続を優先していることが窺える。

以上のように、重ねられた話者は、3つのパターンを通じて中断された発話を再開して自分の発話を遂行していることが分かった。「対友人」会話における「2.重ねられた話者が中断発話を再開する」パターンは相手場面が 21.0%（44 談話）、第三者場面が 24.8%（68 談話）で、有意差がなかった。

2.2.4 重ねた話者がターンを取って話題を転換する

続いて、第三者場面で有意に多い「3.重ねた話者がターンを取って話題を転換する」パターンについて分析する。これは、重ねられた話者が中断された発話を継続せずに、重ねた話者（CNS）がターンを取って話題を変える場合である。以下に談話例 43 を示す。

³⁷ 串田（2006）によれば、「再生」とは、「オーバーラップした発話部分（の一部）を、そのまま（あるいは若干の語句の変更を加えて）反復再生して自発話を完成させる」（p.83）ことである。

³⁸ 「ターン冒頭再生」は、Schegloff（1987）の「recycled turn beginning」によるものである。

例 43 (日本人の友達を作ることができないことについて)

372 CNS2 : 私たち、なんか、寂しかったよね、秋学期。

373 KNS2 : そう、<そうそう>{<}。

374 CNS2 : <あんまり>{>}日本人の友達作れないし。

→375 KNS2 : それと、まあね、何か問題があったかなあ、なんかいろいろ作れなくてね、[<急に>{<} 【】。

→376 CNS2 : 【】<でも>{>}、なんか、今回も男性たちはけっこうもてるじゃない[↑]。

→377 KNS2 : わっち(大学のサークル名)の?。

→378 CNS2 : いや、来た韓国人の(ああ)男性たち。

379 KNS2 : うんうん、けっこう人に親しい?。

380 CNS2 : いや、親しいっていうか、まあ、日本人の女性が自分から自らこうやって近づいてくるし>{<}。

381 KNS2 : <うんうん>{>}。

例 43 では、CNS2 と KNS2 は 372~375 で、秋学期は日本人の友達を作ることができなかつたことについて話している。KNS2 は 375 で「それと、まあね、何か問題があったかなあ、なんかいろいろ作れなくてね」まで話したところで、CNS2 は、KNS2 の話を最後まで聞かずに、376 でターンを取って「でも、なんか、今回も男性たちはけっこうもてるじゃない[↑]」と逆接の接続詞「でも」の後に、「なんか」というフィラーを入れて新情報を持ち出して KNS2 に確認要求し、KNS2 の発話を中断させている。KNS2 は、中断された自身の発話を継続せずに、CNS2 に応じて 377 で「わっちの?」と CNS2 に質問している。CNS2 はそれに対して、378 で「いや、来た韓国人の男性たち」と答えて、「わっちの男性ではない」ことを伝えている。その後、CNS2 と KNS2 は 381 まで、CNS2 が割り込んだ「韓国人の男性の方がもてる」という新しい話題をめぐって互いに相手の発話を踏まえて談話を展開している。このように、この談話展開パターンでは、重ねられた話者 KNS2 が中断された発話を継続せずに、重ねた話者 CNS2 がター

ンを取って新情報を導入することによって、会話全体が新たな方向へ展開されていくことが分かる。

この談話展開パターンは相手場面で 6.7% (14 談話)、第三者場面で 12.4% (34 談話) で、第三者場面の方が相手場面より有意に多く起こっていた。つまり、CNS による発話の重なりが現れた後、第三者場面のほうが、重ねられた話者が中断発話を継続せず、重ねた話者 CNS がターンを取ることによって話題が変わっていく傾向が強いと言える。

2.2.5 競合的に各自のフロアを継続する

最後に、重ねた話者 (CNS) と重ねられた話者が競合的にターンを取って各自のフロアを構築する談話を観察する。以下に談話例 44 を示す。

例 44 (男性友人の部屋で映画を見たことについて)

451 KNS2:で、先輩たちと「○○ちゃん」(CNS2) とか、「○○」(他の友人)とかよく映画一緒に見たりしてたじゃん、その「○○君」(男性の友人 JNS) の部屋で。

452 CNS2:1 回も行かなかったよ、私。

453 KNS2:えっ?行かなかった?。

454 CNS2:行かなかった。

→455-1KNS2:ええ, そうか, 「○○」(他の友人)[,,

→456-1CNS2: [それは[<なんか>, ,

→455-2KNS2: [<○○>, 「○○」(他の友人), ,

→456-2CNS2:男の子の部屋に行くのはちょっとあれ[<だけど>{<}。

→455-3KNS2: [<2回>{>}、3回とか行ったことがあるけど, [「○○」(他の友人)は>{<}。

→457 CNS2: [<私>{>}ない、そう。

458 KNS2: まあ、それ、私 1 回も行ったことがないけど、それ、今、
今学期やってるかなあって思ってる、なんか(うんうん)、
なんかね、[<で、意外に>{<} 【】。

→459 CNS2: 【】 <先輩>{>} 卒業できなさそう。

460 KNS2: 先輩?。

461 CNS2: 「〇〇」(共通のドイツ人男性の友人)。

462 KNS2: ははははは(KNS2 の笑い)。

例 44 では、KNS2 は 451 で、CNS2 と共通の友人が男性の友人 JNS の部屋でよく映画を見ていたことについて話している。CNS2 は、452 で「(自分は) 1 回も行かなかった」と述べ、2 人の会話に食い違いが起きる。KNS2 は 453 「えっ?行かなかった?」と CNS2 の発話を繰り返すことによって事実を確認しようとしたのに対して、CNS2 は 454 で「行かなかった」と言って再度、自分は男性の友人 JNS の部屋には行ったことがないことを伝えている。KNS2 は、455-1 で「ええ、そうか」と言って理解したことを示した後、455-3 まで、実際に男性の友人 JNS の部屋に行ったのは他の友人「〇〇」であったことを話し続け、自身の発話を修正しようとしている。一方、CNS2 は、456-1 と 456-2 で、女性が男性の部屋へ行くのは躊躇されることを話し続けている。CNS2 が 456-1 で「それはなんか」と言って KNS2 に重ねた後、457 まで両者が互いの発話に割り込んでそれぞれの言いたいことを話し続け、競合的に各自のフロアを継続していることが分かる。特に、455-2 で KNS2 が「〇〇、〇〇」と、他の友人の名前を繰り返して再生することが観察された。この「再生」は、「相手発話が開始している行為を制止することによって自発話の発話連鎖状の接続関係を保持するために用いる」(串田 2006: p.98)ものと言える。その KNS2 の「再生」による制止行為にもかかわらず、CNS2 はターンを譲らず、456-2 「男の子の部屋に行くのは、ちょっとあれだけど」と続けて自分の言いたいことを言い続け、KNS2 も 455-3 「2 回、3 回とか行ったことがあるけど、「〇〇」は」と、自分の言いたいことを継続してい

る。一方、CNS2はKNS2の「2回、3回とか行ったことがあるけど」の後に、457「私ない、そう」と重ねて、JNSの部屋に行ったことがないことを繰り返し述べている。さらに、KNS2が458で自分も行ったことがないと話し続けている途中で、突然、CNS2は459で「先輩が卒業できなさそう」と全く別の新しい話題へと移行した。こうして、CNS2は話題を大きく転換することによって、食い違いが起こった会話を円滑に収束しようとしていることが分かる。

このような互いにフロアを継続していくような談話展開パターンは第三者場面では13談話（4.7%）が観察されたが、相手場面では全く見られなかった。

2.2.6 まとめ

以上、相手場面と第三者場面における「対友人」会話のCNSの発話の「重なり後の談話展開」について分析した。その結果、次のことが分かった。まず、CNSによる発話の重なりが現れた後の談話展開には、「1.支障なく両者の発話が続行する」、「2.重ねられた話者が中断発話を再開する」、「3.重ねた話者がターンを取って話題を転換する」、「4.競合的に各自のフロアを継続する」の4パターンが観察された。両場面における各談話展開パターンの出現率を比較すると、両場面ともに「1.支障なく両者の発話が続行する」が最も多かった。このパターンでは、CNSによる発話の重なりが生じても、その重なりは、相手の発話への肯定的な関わりを示すものであるため、会話の進行も妨害されずに会話が円滑に進んでいた。

一方、各談話展開パターンの場面差に注目すると、「1.支障なく両者の発話が続行する」場合は相手場面では有意に多いのに対して、「3.重ねた話者がターンを取って話題を転換する」、「4.競合的に各自のフロアを継続する」場合は第三者場面では有意に多いことが分かった。特に「4.競合的に各自のフロアを継続する」については、相手場面では全く見られず、第三者場面でのみ観察された。この結果から、「対友人」会話においては、CNSによる発話の重なりが現れた後、相手場

面では、両者（CNS と JNS）が発話を中断せず、あいづちを打ったり相手の言葉を繰り返したりしながら協働的に続行して会話を円滑に進める傾向が強いのに対して、第三者場面では、重ねた話者（CNS）がターンを取って自己表現し、話題を新たな方向へ転換する、また、両者（CNS と KNS/GNS/MNS）が互いにターンを譲らず各自の意見を明瞭に述べ合って競合的に各自のフロアを継続するという傾向が強いことが分かった。さらに、両者が互いにターンを譲らず競合的に各自のフロアを継続する場合には、話題を大きく転換することによって会話を円滑に収束していく様子も観察された。

以上のことから、CNS による発話の重なりが現れた後、友人同士であっても、相手場面では相手を気づかう配慮が相互に強く、円滑な会話成立を互いに目指す意識が強いのに対して、第三者場面では両者が互いに各自の意見を明瞭に述べ合うことによって、談話の内容を協働的に作り上げようとする意識が強くなることが示唆される。

2.3 2 節のまとめ

2 節では、相手場面と第三者場面における「対友人」会話の、CNS による「発話の重なり」及び「重なり後の談話展開」には、どのような特徴があるかについて考察した。

2.1 で、親しい友人に対する CNS による「発話の重なり」について分析した結果、CNS による「発話の重なり」は、相手場面より第三者場面の方が有意に多く起こっていたことから、「発話の重なり」には、相手が日本語母語話者であるか否かが影響することが把握された。「発話の重なり」を分類すると、相手場面では、「発話冒頭」の重なりが有意に多かったことから、CNS は相手が母語話者であることを意識し、話者交替規則を指向しつつ次の話し手になろうとすることが窺えた。さらに、「発話途中」の重なりは、相手場面では、「協調的な割り込み」が有意に多かったことから、友人同士であっても、相手との協調関係の維持を優先する傾向が強いと言える。それに対して、第三者場面では、「発話途中」の重なりは「支配的な割り込み」が有意

に多かったことから、発話自体に意識が向けられ、新情報を加えて、積極的な会話参加を志向する傾向が強く、反論する場合でも明瞭に自分の意見と感情を表現することが明らかになった。

次に、2.2でCNSによる「発話の重なり後の談話展開」について分析した。その結果、「対友人」会話においては、CNSによる「発話の重なり」が現れた後、友人同士であっても、相手場面では相手を気づかう配慮が相互に強く、円滑な会話成立を互いに目指す意識が強くなるのに対して、第三者場面では両者が互いに各自の意見を明瞭に述べ合って、談話の内容を協働的に作り上げようとする意識が強くなることが推測された。

3. 「初対面」会話における「発話の重なり」

3節では、「相手場面」と「第三者場面」における「初対面」会話を観察し、初対面の相手に対するCNSによる「発話の重なり」及びその「重なり後の談話展開」には、どのような特徴があるか明らかにする。

以下、3.1で「発話の重なり」について、3.2で「重なり後の談話展開」について分析し、3.3でまとめる。

3.1 「発話の重なり」の相手場面と第三者場面の比較

まず、3.1.1で相手場面と第三者場面における「初対面」会話の「発話の重なり」がどの位置で生じているか、その出現率を示す。次に、3.1.2で「発話冒頭における同時発話」、3.1.3で「発話終了付近における同時発話」、3.1.4で「発話途中における同時発話」について具体的に談話を分析する。最後に3.1.5でまとめる。

3.1.1 「発話の重なり」の位置による出現率

発話の重なりを、「発話冒頭における同時発話」(以下「発話冒頭」)、「発話終了付近における同時発話」(以下「発話終了付近」)、「発話途

中における同時発話」(以下「発話途中」)の3種類に分類した。初対面の相手に対する CNS による発話の重なる位置による出現率を表 20-1 と図 13 に示す。

表 20-1 両場面における「初対面」会話の発話の重なり

	発話冒頭	発話終了付近	発話途中	合計
相手場面	36(16.6)	70(32.3)	111(51.2)	217(100.0)
第三者場面	39(15.0)	57(21.9)	164(63.1)	260(100.0)
合計	75(15.7)	127(26.6)	275(57.7)	477(100.0)

発話数(%)

($\chi^2(2) = 7.853, p < .05$)

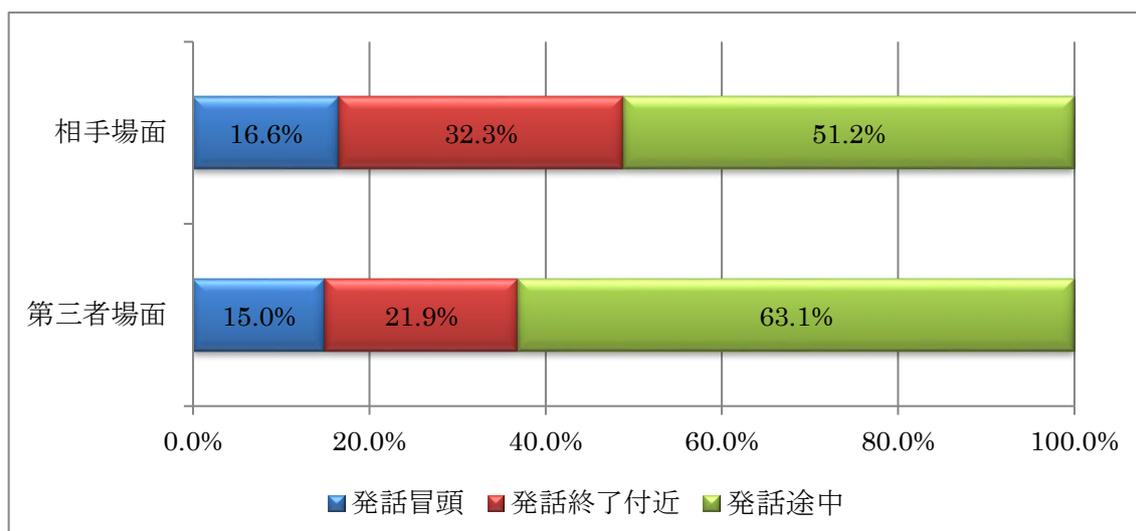


図 13 両場面における「初対面」会話の発話の重なり

表 20-1 に示したように、「初対面」会話において、CNS による発話の重なるの合計は、相手場面で 217 発話、第三者場面で 260 発話であった。相手場面においては、「発話冒頭」が 16.6% (36 話)、「発話終了付近」が 32.3% (70 話)、「発話途中」が 51.2% (111 話) であるのに対して、第三者場面においては、「発話冒頭」が 15.0% (39 話)、「発話終了付近」が 21.9% (57 話)、「発話途中」が 63.1% (164 話) であった。つまり、両場面ともに「発話途中」の重なりが最も多く、次い

で「発話終了付近」「発話冒頭」の順に生じていた。

この結果について χ^2 検定を行ったところ、5%水準で有意であった ($\chi^2(2) = 7.853, p < .05$) ことから、「初対面」の場合、「発話の重なり」には相手が日本語母語話者であるか否かが影響することが把握された。

さらに、その残差分析を行った結果を表 20-2 に示す。

表 20-2 残差の一覧表

	発話冒頭	発話終了付近	発話途中
相手場面	0.5n.s.	2.5*	-2.6**
第三者場面	-0.5n.s.	-2.5*	2.6**

(n.s. : not significant, * $p < .05$, ** $p < .01$)

表 20-2 から、「初対面」会話において、「発話終了付近」の重なりは相手場面で有意に多く、「発話途中」の重なりは第三者場面で有意に多いことが分かった。「発話冒頭」の重なりは両場面には有意差が見られなかった。

では、「初対面」の場合、以上のような、両場面における重なりの位置の違いは何を意味し、各分類の重なりはどのような状況で生起するのだろうか。その要因を明らかにするために、以下、順に「発話冒頭」、「発話終了付近」、「発話途中」の「発話の重なり」について談話の質的分析を試みることにする。

3.1.2 「発話冒頭における同時発話」

まず、「発話冒頭における同時発話」について分析する。談話例 45 を見てみよう。

例 45 (CNS3 の観光について)

263 JNS9 : 観光とかをしてない?。

264 CNS3 : 観光とかもしましたけど、まあ、研修みたいな感じが

な、まあ、夜だけちょっと発表とかあって、みんな一緒に鎌倉と箱根、箱根は関所、箱根関所(うーん)とあじさい電車《沈黙 2 秒》。

→265 JNS9 : [〈あれ〉{ } [↑]。

→266 CNS3 : [〈でー〉{ } }、鎌倉は八幡宮。

267 JNS9 : あ、鳩いっぱい見ましたか?、鳩。

268 CNS3 : 鳩か、気付かなかったんです。

269 JNS9 : ははは(笑い)。

例 45 では、263JNS9 の「観光とかをしてない?」という質問に対し、CNS3 は 264 で、箱根や鎌倉を観光したことを答え、ターンを終了した。2 秒間という沈黙の後、相手がターンを取らないと思った CNS3 は、次の 266 で再びターンを取って「でー、鎌倉は八幡宮」と発話を続けている。それと同時に、JNS9 は 265 で「あれ[↑]」と発話を開始したため、発話冒頭で重なりが生じている。2.1.2 で指摘したように、発話冒頭で起こる重なりは、2 人の会話参加者が TRP で同時にターンを開始したために起こるものであり、会話参加者が話者交替規則を指向するために起こるものである。

「発話冒頭」で起こる重なりは、相手場面と第三者場面においては、それぞれ 36 話 (16.6%) と 39 話 (15.0%) で、有意差はなかった。

3.1.3 「発話終了付近における同時発話」

次に、相手場面で有意に多い「発話終了付近における同時発話」について分析する。以下に談話例 46 を示す。

例 46 (中国出身の芸能人について)

164 CNS3 : じゃ、韓国のアイドルたちは好きですか?。

165 JNS9 : 大好きです、EXO が好きです。

166 CNS3 : あー。

167 JNS9 : 張芸興 [中国語発音] が大好きなんです。

- 168 CNS3 : あー。
- 169 JNS9 : 本当に。
- 170 CNS3 : 今中国に帰ったんくですよね>{<}。
- 171 JNS9 : <そうです>{>}、帰りました[<よね>{<}。
- 172 CNS3 : [<今>{>}中国でもけっこう人気ありますよ。
- 173 JNS9 : 本当ですか?。
- 174 CNS3 : はい。
- 175 JNS9 : 大好きなん[<です>{<}。
- 176 CNS3 : [<あー>{>}、中国のランニングマンみたいなものに出
ますよね。
- 177 JNS9 : あっ、そう、出てますね。

例 46 では、JNS9 は韓国アイドルグループ EXO、特に中国出身のメンバー張芸興のファンであることを話している。CNS3 もそのメンバーを知っているため、2 人の間に知識の共有性が確立された。それをきっかけに、CNS3 は 172 と 176 で、先行発話のターンの終了を予測して、JNS9 の 171 と 175 の発話末尾に重ねてそのメンバーに関する話を始めた。この 2 箇所为重なりは、どちらも CNS3 が先行発話のターンの完結を予測していち早くターンを開始した結果起きたものであり、安井（2017）が指摘するように、参加者が次の話し手になるという話者交替規則を指向するために起こるものである。

一方、牛田他（2010）は、母語話者の初対面同士の会話と友人同士の会話を比較し、初対面会話ではぎこちなさを解消したいために、間を作らないように、発話終了付近での重なりが友人会話よりも多くなることを指摘している。表 20-2 の残差分析に示したように、発話終了付近の重なりは、相手場面の方が第三者場面より有意に多く起こっていたことから、初対面の場合、CNS は相手場面では相手が母語話者であることを意識し、話者交替規則を指向しつつ、ぎこちなさを解消したいという気持ちが強く働いて、発話終了付近での重なりが多くなることが示唆される。

3.1.4 「発話途中における同時発話」

最後に、第三者場面で有意に多い「発話途中における同時発話」、すわなち、「割り込み発話」について検討する。以下に談話例 47 を示す。

例 47 (KNS7 の学年について)

- 34 CNS9 : <え、今>{>}は何年生ですか?。
→35 KNS7 : 今はですねー、えっと韓国で 3 年までやってここ来て、
また来年は **[[**。
→36 CNS9 : **[[**] よ、4 年<生>{<}。
37 KNS7 : <4>{>}年生ぐらいです。
38 CNS9 : あー。

例 47 では、34CNS9 の「え、今は何年生ですか?」という質問に対して、KNS7 が 35 で「今はですねー、えっと韓国で 3 年までやってここ来て、また来年は」と答えたところで、CNS9 は 36 で「よ、4 年生」と発話を挿入し、KNS7 の発話を中断させている。CNS9 の発話は、KNS7 の文の産出過程で挿入された割り込みで、話者交替規則に違反するものであると言える。

「初対面」の場合、「割り込み発話」は、第三者場面の方が相手場面より有意に多く起こっていた (表 20-2)。このことから、CNS は、「対友人」会話と同じように「初対面」会話でも、第三者場面の方が話者交替規則への配慮より、積極的な会話参加に意識が傾いていることが示唆される。

例 47 に示したように、「割り込み発話」は継続中の発話を途中で中止に追い込む場合が多く、スムーズな話者交替の妨げになるため、初対面の場合は特に情報の伝達と会話の進行に支障を来す危険性が高くなる。それにもかかわらず、CNS9 はなぜそのタイミングで割り込みを行ったのだろうか。

CNS による「割り込み発話」が起きる状況を明らかにするために、

2.1.4 の「対友人」会話同様に、劉（2012）を参考にして、「割り込み発話」を「協調的な割り込み」と「支配的な割り込み」の2つに分類して分析した。その結果を表 21-1 と図 14 に示す。

表 21-1 両場面における「初対面」会話の割り込み発話

	協調的な割り込み	支配的な割り込み	合計
相手場面	103(92.8)	8(7.2)	111(100.0)
第三者場面	139(84.8)	25(15.2)	164(100.0)
合計	242(88.0)	33(12.0)	275(100.0)

発数話 (%)

($\chi^2(1)=4.049, p<.05$)

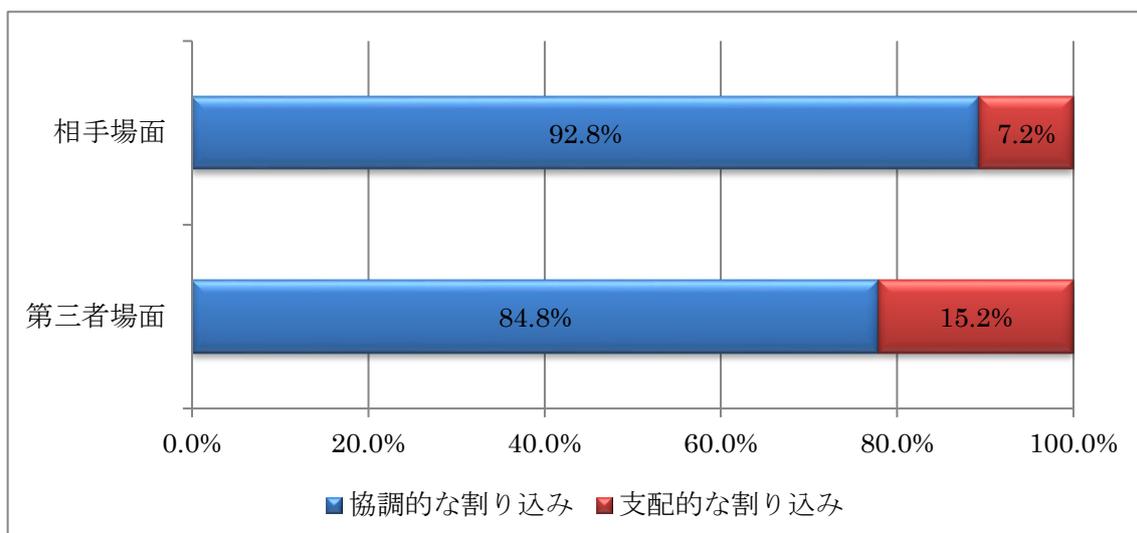


図 14 両場面における「初対面」会話の割り込み発話

表 21-1 と図 14 に示したように、「初対面」の場合、相手場面であれ、第三者場面であれ、出現率が最も高い「割り込み発話」は「協調的な割り込み」で、相手場面では 92.8%（103 話）、第三者場面では 84.8%（139 話）を占めている。つまり、両場面ともに、「協調的な割り込み」の方が「支配的な割り込み」より圧倒的に多いことが分かる。

この結果について χ^2 検定を行ったところ、5%水準で有意差があった ($\chi^2(1)=4.049, p<.05$) ことから残差分析を行った。表 21-2 に示し

た残差分析の結果、「対友人」会話と同じく、「協調的な割り込み」は相手場面で有意に多いのに対し、「支配的な割り込み」は第三者場面で有意に多いことが分かった。

表 21-2 残差の一覧表

	協調的な割り込み	支配的な割り込み
相手場面	2.0*	-2.0*
第三者場面	-2.0*	2.0*

(* $p < .05$)

では、以上のような、両場面における「初対面」会話の「割り込み発話」が起きる状況の違いは、何に起因するのだろうか。その要因を明らかにするために、以下、3.1.4.1 で「協調的な割り込み」について、3.1.4.2 で「支配的な割り込み」について談話を分析する。

3.1.4.1 「協調的な割り込み」

まず、相手場面で有意に高い「協調的な割り込み」について分析する。「初対面」会話における「協調的な割り込み」は、「対友人」会話同様に、「①評価・感想」「②情報付加・補足」「③共話作り」「④質問・確認」の4つに下位分類された。相手場面と第三者場面においてそれぞれ分類した結果を、表 22 と図 15 に示す。

表 22 両場面における「初対面」会話の「協調的な割り込み」

発話数 (%)

	①評価・感想	②情報付加・補足	③共話作り	④質問・確認	合計
相手場面	53(51.5)	18(17.5)	19(18.4)	13(12.6)	103(100.0)
第三者場面	51(36.7)	29(20.9)	41(29.5)	18(12.9)	139(100.0)
合計	104(43.0)	47(19.4)	60(24.8)	31(12.8)	242(100.0)

($\chi^2(3) = 6.269$ n.s.)

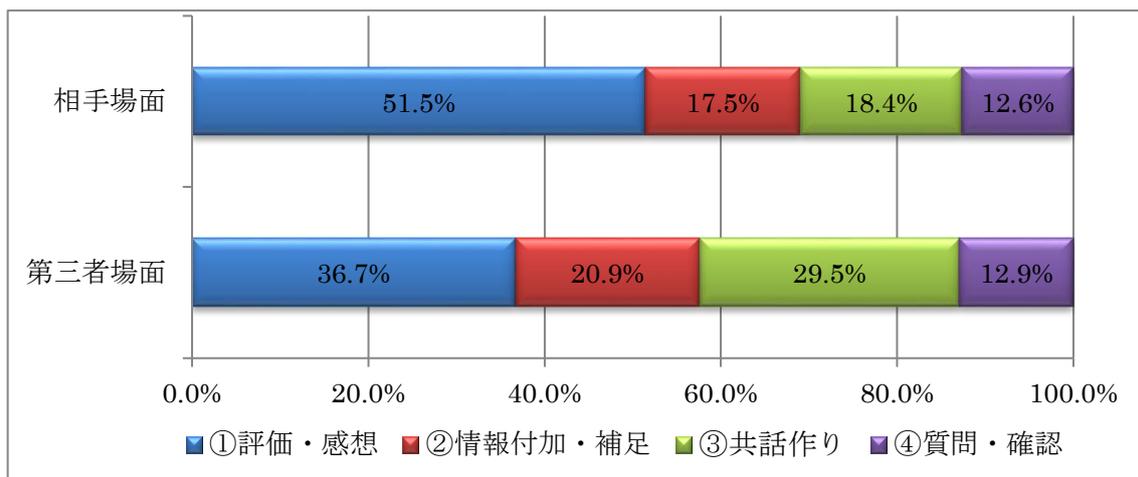


図 15 両場面における「初対面」会話の「協調的な割り込み」

「初対面」会話において、相手場面、第三者場面ともに、「①評価・感想」が最も多く、次いで「③共話作り」、「②情報付加・補足」、④「質問・確認」の順であった。この結果について χ^2 検定を行ったところ、①②③④は両場面に有意差がなかった。以下、それぞれ談話例を挙げて分析する。

① 評価・感想

まず、両場面ともに最も多い「①評価・感想」の談話例を示す。

例 48 (ドイツ語の「名詞の性」について)

152 GNS2 : あードイツ語はまあ英語には似てるけど(はい)、あの一余計なものがいっぱいある。

153 CNS15 : 余計な(笑い)、余計なものですか。

154-1GNS2 : そう、例えば(はい)女の子はもう(はい)女子だよね(はい)、でもなんか、あのう、なんか、,

155 CNS15 : <年齢>{<}??。

154-2GNS2 : <あのう>{>}、その前にあのう、つける言葉があるんだけど(あーはい)、で、それ、その前についてる言葉で(はい)後の言葉が男子か女子なのか分かるんだけど(はい)女の子は女子でも男子でも何でもないの。

- 156 CNS15 : えー[↑]。
→157-1GNS2 : なんか、[<あのう>{<},,
→158 CNS15 : [<面白い>{>}。
157-2GNS2 : うん、性別ないって(笑い)。
159 CNS15 : ふふふ(笑い)あー、そうなんですか。

例 48 はドイツ語の「名詞の性」に関する談話である。GNS2 は 154-1 と 154-2 で、名詞冒頭につける冠詞によってその名詞が男性名詞か女性名詞か見分けることができるが、「女の子」という名詞は中性名詞であることを説明している。GNS2 のその発話に対して、CNS15 は、まず 156 で「えー」と言っていて驚いた気持ちと関心を表している。続いて、GNS2 が 157-1 「なんか」というフィルターによってターンを維持してさらに詳しく説明しようとしたところで、CNS15 は 158 で「面白い」と言っていて、GNS2 の発話内容に対して評価と感想を表し、GNS2 の 157-1 「あのう」と重なっている。しかし、その割り込みによって GNS2 は話を中断することなく、157-2 で「うん」と応じて、「性別ないって」と笑いながら発話を続けている。CNS15 も 159 で笑いながら、「あー、そうなんですか」と理解したことを示している。このように、158 の「面白い」のような、先行発話に対する評価・感想を述べるような割り込みは、会話参加者には障害とは見なされていないことが分かる。

また、その 158CNS15 の割り込みでは、それまでデスマス形を用いていた CNS15 のスピーチレベルが、非デスマス形へシフトしている。158CNS15 「面白い」のようなスピーチレベル・シフトは、第 4 章 4.2.2.3 で見た「感情の表出」によるシフトであり、相手の発話への関心を示し、話者間の距離感を縮小させる機能を果たす。「初対面」会話では、例 47 のように、「評価・感想」を述べる割り込みが行われる場合、非デスマス形へシフトすることが多く観察された。このような割り込みは、相手の発話に対する関心を積極的に表明するために用いられ、それによって「初対面」会話の参加者間の共感が深まり、心理的距離を

接近させることにつながると考えられる。

「①評価・感想」の割り込みは、相手場面では 51.5% (53 話)、第三者場面では 36.7% (51 話) で、両場面ともに最も多く用いられていた。

②情報付加・補足

次に、「②情報付加・補足」による割り込みの談話例を示す。

例 49 (別科生と一緒に受ける授業について)

109 CNS15: 授業が 1 回だけ??、2 回??、そうですね、でもみんな
で一緒に旅行に行ったんですよね。

110 GNS2: そう、春学期ではね、それで(はい)そこで仲良くなった。

111 CNS15: あーそうなんですか。

→112-1 GNS2: なんかいろんなどこに行ったり(はい)して、あと水曜
日の 1 限でも、た、[<た>{<}],,

→113 CNS15: [<多>{>} 言語??。

112-2 GNS2: 多文化理解演習[↑]。

114 CNS15: あ、〇〇先生の(そうそう)授業ですか?。

115 GNS2: あれ、でも一緒になってるから。

116 CNS15: はい、えー。

117 GNS2: あの、多言語でも。

118 CNS15: <多言語>{<} [↑]。

119 GNS2: <多言語>{>} 交流室、けっこういいところだね(笑い声)。

例 49 では、CNS15 と GNS2 が、交換留学生と別科生と一緒に授業を受けたり旅行に行ったりして仲が良いことについて話している。GNS2 は 112-1 で、ある授業を別科生と一緒に受けていることを話そうしたが、その授業名が思い出せずに、「た、た」と繰り返して自分のターンを維持している。そのとき、CNS15 は 113 で「多言語??」と、関連情報を補足して積極的に相手を助けようとした。しかし、続

く GNS2 の 112-2「多文化理解演習」という発話から、CNS15 の補足した情報がはずれていたことが分かる。このように、「初対面」の場合、相手に関する情報を持っていないので、予測がはずれる可能性が高いが、それにもかかわらず情報補足のために割り込みが行われている。このことから、「初対面」の場合、CNS が相手の発話に関心を示し、共有情報を模索しながら積極的に会話を進めようとしている様子が窺える。また、続く 117 行目以降の発話に注目すると、CNS15 の補足した「多言語」という情報をきっかけに、会話の話題が「多言語交流室」に向かったことが分かる。これは、情報を補足する割り込みは、会話の進行を妨げず、逆に会話の進行に役に立つことがあるを示している。

また、「②情報付加・補足」による割り込みの中に、以下の談話例も観察された。例 50 は韓国ドラマの男性主人公に関する談話である。

例 50 (韓国ドラマの男主人公について)

90 CNS3:じゃ、韓国のドラマが一番好きなのはありますか。

91 JNS9:一番好きなのはみんな好きなんですけど(CNS の笑い)、『星から来たあなた』っていう(あー)、知ってますか、
<あっ、知ってますか>{<}?。

92 CNS3:<知ってます>{>}、知ってます。

→93 JNS9:キム・セ・ヒャン 【【】。

→94 CNS3: 【】 あ、あれ中国でも(うーん)けっこうはやってたんです。

95 JNS9:キム・セ・ヒャンけっこう日本でも韓国でも中国でも有名らしくて。

96 CNS3:はい。

97 JNS9:一番好きなんです。

90CNS3 の「じゃ、韓国のドラマが一番好きなのはありますか」という質問に対して、JNS9 は 91 で『星から来たあなた』と答えたい

で、CNS3に「(このドラマを)知っていますか?」と情報要求している。CNS3は92で「知ってます、知ってます」と答え、情報の共有性をすばやく相手に伝えようとして、91JNS9の発話終了付近で重なりが生じている。それに続き、JNS9が93で「キム・セ・ヒャン」と、その男性主人公の名前を出すやいなや、CNS3は94で相手の発話に割り込んで「あ、あれ中国でもけっこうはやってたんです」と関連情報を補足している。94のCNS3による割り込み発話は、相手の提出した主人公の名前「キム・セ・ヒャン」に直接結びつく情報であると言える。その後、JNS9は94CNS3の発話を踏まえて、95でキム・セ・ヒャンが日本でも韓国でも中国でも有名であると発話を続けている。

例49と例50のような割り込み発話は、いずれも相手の話題に直結する情報を補足するものである。このような割り込みは、竹田(2016:p.96)によれば、初対面という、事前にコンテクストを共有していない参加者同士の間で、当座の対話内で共有情報を模索し、それをきっかけに話を進めるためのものと言える。

「②情報付加・補足」の割り込みは、相手場面では17.5%(18話)、第三者場面では20.9%(29話)であった。

③共話作り

次に、会話参加者が共同で一つの文を完成させる「③共話作り」の談話例を見てみよう。

例51(日本のアニメーションについて)

289 CNS2: <うん>{>}、私『名探偵コナン』が大好き。

290 KNS5: あー。

291 CNS2: これは全部見ました。

292 KNS5: そのあと、『ワンピース』。

293 CNS2: 『ワンピース』、そう。

→294 KNS5: 『ワンピース』も【【[。

→295 CNS2: 【】けっこう有名ですよ。

296 KNS5 : はい。

297 CNS2 : たぶんどんな国でも。

例 51 では、CNS2 と KNS5 が日本のアニメーションが世界中で人気があることについて話している。KNS5 が 294 で『ワンピース』もと話し出すと、CNS2 は先取りをして、295 で「けっこう有名ですよ」と発話を完結した。このような、他者の発話をその話し手に代わって完了するのは、「相手が言わんとしていることを理解していることを示すきわめて強い方法」（串田他 2017 : p.166）と言え、CNS2 が 295 で先取りを完了したあと、KNS5 が 296 で「はい」と「受け入れ」を表示し、CNS2 の先取りによって示された理解が正しいことを認定している。

また、相手場面では、例 52 のような「③共話作り」の談話例も観察された。

例 52 (JNS3 の外国人との接触経験について)

→67 JNS3 : でも、本当大学入る前までは、[<あん>{<} 【】。

→68 CNS10 : 【】 <接>{>} 触経験がな
いくですね>{<}。

69 JNS3 : <うん>{>}、ない、中国人とまずない。

70 CNS10 : 文教大学中国人が多いですよ(笑い)。

→71 JNS3 : 中国人が多くてー(うん)、だから一番はじめに話した中国人が去年の、えー、[<おとし>{<} 【】。

→72 CNS10 : 【】 <交換留学生>{>}。

73 JNS3 : そう、交換留学生の「○○」とか 【】。

74 CNS10 : 【】「○○」？。

75 JNS3 : たぶん分からない<と思うけど>{<}。

76 CNS10 : <分からないですね>{>}。

例 52 では、JNS3 が外国人との接触経験について話している。CNS10

は、68と72でJNS3の発話を先取りして共話の形を作ろうとしている。まず、JNS3が67で「でも、本当大学入る前までは」と1文の従属節を話したところで、CNS10は先取りをして、68で「接触場面がないですね」と主文をつづけて発話を完結した。69JNS3の「うん、ない、中国人とまずない」という肯定の応答から、68ではCNS10の先取りの予測がうまくいったと言える。また、JNS3が71で「中国人が多くてー、だから一番はじめに話した中国人が去年の、えー」とフィルターによってターンを維持しているときに、CNS10は先取りをして、72で「交換留学生」と述語を述べて発話を完結した。72CNS10の先取りに対して、JNS3は73でまず「そう」と、肯定の応答が返されているが、続く「交換留学生の「〇〇」とか」という発話から、JNS3が71で言おうとしたのは「一番はじめに話した中国人がおととしの交換留学生の「〇〇」であったことが分かる。

熊谷・木谷(2010)によれば、互いの情報を持たない初対面の場合、予測がはずれる危険性は高くなるが、それにもかかわらず相手の発話を先取りして「共話」の形を作ろうとする行為が行われる理由の一つは、単なる相づちに比べて、先取りが相手に対して積極的な関心を表明する有効な手段にもなるからであるという。このように、「共話作り」は、2人で一つの文を完成させることで、「初対面」会話の参加者間に連帯感を生み、心理的距離を縮めることにつながると言える。

「③共話作り」による割り込みは、相手場面では18.4%（19話）、第三者場面では29.5%（41話）で、どちらも2番目に多かった。

④質問・確認

次に、「④質問・確認」による割り込みについて分析する。

例 53（中国の小学校の視察について）

271 JNS11：<12>{>}月25日から12月28日まで(うん)、なんか、英語教育の盛んな小学校があるみたいなんで、(あー)そこにみんなで視察に行くんですけど。

272 CNS9 : <中国>{<}>。

273 JNS11 : <そういう>{>}サークルに入ってる。

274 CNS9 : 中国のどこですか?。

→275-1 JNS11 : あー、どこだっけな、詳しい日程も送られてきていないんですけど、[<なんか、昨年度の>{<}],

→276 CNS9 : [<何省ですか?>{>}]。

275-2 JNS11 : 日程を送ってもらったのがあって、それは実験学校とか、実験学校(んー)っていう学校があるんですかね?、(んー)実験学校って書いてあった。

277 JNS11 : 上海。

278 CNS9 : あっ、上海<ですか>{<}>。

例 53 で、JNS11 は中国の英語教育の盛んな小学校へ視察に行くことを話している。274 の CNS9 の「中国のどこですか?」という質問に対して、JNS11 がその地名をすぐに思い出せず、275-1 で「あー、どこだっけな、詳しい日程も送られてきていないんですけど」と答えを考えている途中で、CNS9 はさらに、276 でやや速いスピードで「何省ですか?」と割り込んだために、JNS11 の 275-1 発話の一部「なんか、昨年度の」と重なっている。しかし、CNS9 の割り込みによって、JNS11 は発話を中断させることなく、275-2 で「日程を送ってもらったのがあって」とそのまま話を展開しつつ、「実験学校って書いてあった」と記憶をたどって発話している。その後、JNS11 はその地名を思い出して 277 で「上海」と言って、CNS9 の質問に答えている。

このような「④質問・確認」の割り込みは、相手場面では 12.6% (13 話)、第三者場面では 12.9% (18 話) で、ほぼ同様の割合であった。

以上の「①評価・感想」「②情報付加・補足」「③共話作り」「④質問・確認」の発話内容を見ると、①②③④のような「協調的な割り込み」は、相手のターンを取るわけではなく、相手の発話に対する関心を示し、内容の共有性を確認するための方略として用いられているこ

とが分かる。それにより相手との連帯感と共感が深まり、協調的な人間関係の構築につながると考えられる。「初対面」の場合、このような「協調的な割り込み」は、相手場面の方が第三者場面より有意に多かった。

3.1.4.2 「支配的な割り込み」

次に、第三者場面で有意に多い「支配的な割り込み」について分析する。「初対面」会話における「支配的な割り込み」は「⑤新情報の提示」のみ観察された。以下にその談話例を示す。

⑤新情報の提示

例 54 (CNS9 が日本で起業することについて)

180 CNS9: いや、せん、あー、中国に帰ったらあの一、先生は一応考えますけど、でも日本だったらちょっと自分で何か商売をしたい(笑い)。

(中略)

183 KNS7: すっごい、商売、えー、あーえー、なんか服屋さんとか、なんか<やりそう>{<}。

184 CNS9: <あーそれ>{>}。

185 KNS7: 服屋さんちょっと。

186 CNS9: いやーでも、それは日本ではちょっと難しいかも。

187 KNS7: かもねー。

188 CNS9: うん。

→189 KNS7: かもですねー、うん、まあ、たしかに[声が小さくなる]これもほんと[<むずか>{<} 【】。

→190 CNS9: 【】 <えっ>{>}、[自分のズボンを指して]これは韓国(えー!)、Made in Korea (笑い)。

191 KNS7: えー! どこで買ったんですか? あ、日本で買ったんですか?。

192 CNS9: いや、中国で。

193 CNS9:でもあの一、中国は今いろいろなあの一人は韓国に行つて、あの一、洋服を買うために韓国に行つて、あの一、(あ、あ、そうなんだ)韓国で買ってきたら(え一)にゆ、中国で販売するという形。

194 KNS7:あ一あ一なるほど。

例 54 は CNS9 が日本で起業することに関する談話である。KNS7 の服屋さんの商売という提案に対して、CNS9 は 186 で「いやーでも、それは日本ではちょっと難しいかも」と自分の意見を述べている。その意見に対して、KNS7 が 187 で「かもね一」と CNS9 の発話の一部を繰り返して同意を示しており、CNS9 が 188 で「うん」と応じている。その後、KNS7 が 189 で「かもですね一、うん、まあ、たしかにこれもほんとむずか」まで述べたところで、CNS9 は、190 で「えっ」と割り込んで、自分のズボンを指しながら「これは韓国、Made in Korea」という新情報を持ち出して、KNS7 の発話を中断させている。KNS7 は中断された自身の発話を継続せず、続いて 191 で「えー!」と驚く気持ちを表して「どこで買ったんですか、日本で買ったんですか?」と CNS9 に質問している。CNS9 はそれに対して、192 で「いや、中国で」と答え、193 で中国では韓国製の洋服を販売する人が多いと詳しく説明している。この談話では、CNS9 の割り込んだ「自分のズボンが韓国製である」ことをめぐって会話が活発化していくことが示されている。

「初対面」会話における「⑤新情報の提示」の割り込みは、相手場面と第三者場面においては、第三者場面の方が相手場面より有意に多く起こっていた。このことから、CNS は第三者場面の方が新しい情報を提示することによって話題を継続させ、積極的に会話を進めようとする傾向が強いことが分かった。

3.1.5 まとめ

以上、相手場面と第三者場面における「初対面」会話の CNS によ

る「発話の重なり」について分析した。その結果、次のことが分かった。まず、CNSによる「初対面」会話における「発話の重なり」は、両場面ともに「発話途中」の重なりが最も多く、次いで「発話終了付近」「発話冒頭」の順に生じていた。さらに、「発話途中」すなわち「割り込み発話」が生じた談話を分析すると、両場面ともに「協調的な割り込み」の方が「支配的な割り込み」より圧倒的に多かった。CNSは両場面ともに「評価・感想の表出」、「情報補足」、「共話作り」などの重なりを通じて、相手の話に対して関心を示したり、内容の共有性を伝えたりして相手とともに協働的に会話を進めようとするのが窺える。つまり、「対友人」会話と同じように、「初対面」会話においても、CNSの「発話の重なり」は、相手に関心を示し、会話を円滑にかつ協働的に進行させる手段の一つと考えられる。

さらに、CNSによる「発話の重なり」の場面差に注目すると、相手場面では「発話終了付近」の重なりが有意に多く、第三者場面では「発話途中」の重なりが有意に多いことが分かった。また、「発話途中」すなわち「割り込み発話」の談話を分析した結果、相手場面では「協調的な割り込み」が有意に多いのに対して、第三者場面では「支配的な割り込み」が有意に多いことが分かった。つまり、相手場面での重なりは「発話終了付近」に多く生起し、「協調的な割り込み」が有意に多いのに対して、第三者場面での重なりは「発話途中」に多く生起し、「支配的な割り込み」が有意に多い。この結果から、「初対面」の場合、相手場面においてCNSは、相手が母語話者であることを意識し、初対面のぎこちなさを解消したい気持ちが強く働くために、話者交替規則を指向して「発話終了付近」の重なりが多用され、また、対人的な連帯感の表出や協調的な人間関係構築を優先するために、「協調的な割り込み」が多用されることが推測される。それに対して、第三者場面では、話者交替規則に配慮することよりも、積極的な会話参加に意識が傾くために、新情報を加えるなどして会話の進行をさらに進めようとすることによって、「支配的な割り込み」が多用されることが推測される。

3.2 発話の重なり後の相手場面と第三者場面の談話展開

次に、CNS による「発話の重なり後の談話展開」を観察する。まず、3.2.1 で相手場面と第三者場面における CNS による「初対面」会話の発話の重なりを取り上げ、その重なり後の談話展開について分析を行う。次に、3.2.2～3.2.4 で具体的な会話例に基づき、両場面の特徴と差異を明らかにする。最後に 3.2.5 でまとめる。

3.2.1 重なり後の談話展開

3.1 で見たように、「初対面」会話において、CNS による「発話の重なり」は相手場面が 217 発話であるのに対して第三者場面が 260 発話であった。その CNS による「重なり後の談話展開」を分析した結果、「1.支障なく両者の発話が続行する」、「2.重ねられた話者が中断発話を再開する」、「3.重ねた話者がターンを取って話題を転換する」の 3 パターンが把握された。相手場面と第三者場面における各談話展開パターンの出現率を表 23-1 と図 16 に示す。

表 23-1 「初対面」会話の重なり後の談話展開

	談話数 (%)			
	1.支障のない 発話の続行	2.重ねられた話者 による中断発話 の再開	3.重ねた話者 による話題 転換	合計
相手場面	163(75.1)	35(16.1)	19(8.8)	217(100.0)
第三者場面	145(55.8)	77(29.6)	38(14.6)	260(100.0)
合計	308(64.6)	112(23.5)	57(11.9)	477(100.0)

($\chi^2(2) = 19.417, p < .001$)

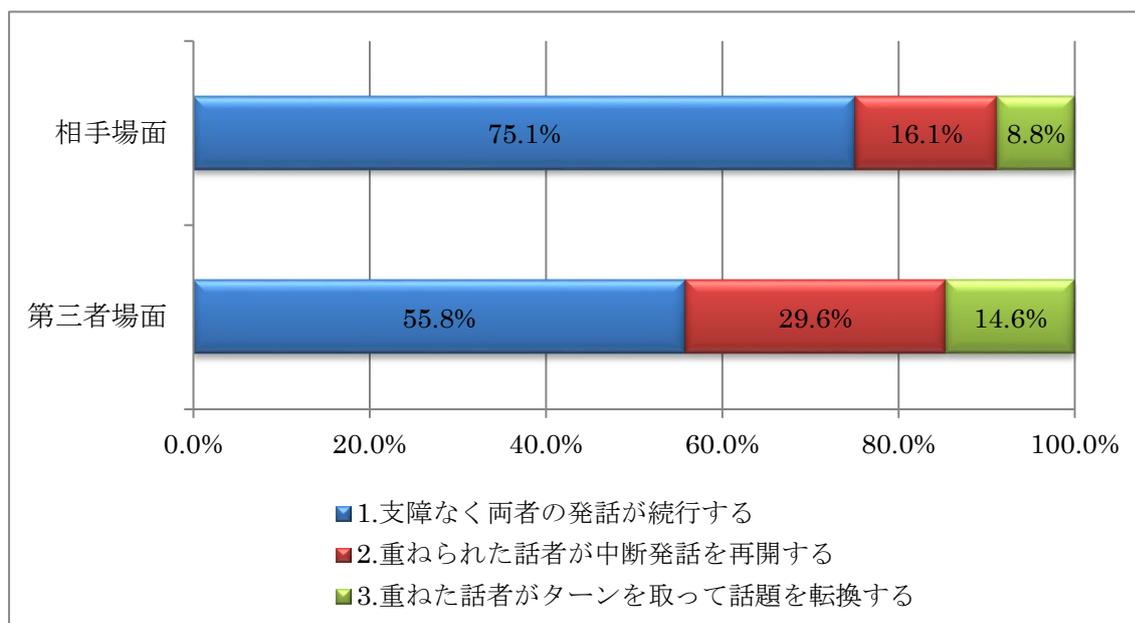


図 16 「初対面」会話の重なり後の談話展開

表 23-1 と図 16 に示したように、「初対面」会話において、相手場面も第三者場面も、最も多いのは「1.支障なく両者の発話が続行する」場合であるが、それぞれが占める割合が異なっている。相手場面では 75.1%（163 談話）、第三者場面では 55.8%（145 談話）と、相手場面の方が占める割合が大きい。「2.重ねられた話者が中断発話を再開する」場合は相手場面が 16.1%（35 談話）、第三者場面が 29.6%（77 談話）で、第三者場面の方が占める割合が大きい。「3.重ねた話者がターンを取って話題を転換する」場合は、相手場面が 8.8%（19 談話）、第三者場面が 14.6%（38 談話）で、第三者場面の方が占める割合が大きい。この結果について χ^2 検定を行ったところ、0.1%水準で有意であった ($\chi^2(2) = 19.417, p < .001$) ことから、「初対面」会話の場合、「重なり後の談話展開」には相手が日本語母語話者であるか否かが影響することが把握された。

さらに、その残差分析を行った結果を表 23-2 に示す。

表 23-2 残差の一覧表

	1.支障のない 発話の続行	2.重ねられた話者による 中断発話の再開	3.重ねた話者による 話題転換
相手場面	4.4***	-3.5***	-2.0*
第三者場面	-4.4***	3.5***	2.0*

(* $p < .05$, *** $p < .001$)

表 23-2 から、「初対面」会話において、相手場面では「1.支障なく両者の発話が続行する」場合が有意に多いのに対して、第三者場面では「2.重ねられた話者が中断発話を再開する」と「3.重ねた話者がターンを取って話題を転換する」場合が有意に多いことが分かる。つまり、「初対面」の場合、CNS による発話の重なりが生じた後、相手場面では、会話の進行に支障なく両者（CNS と JNS）が発話を続行する傾向が強いのに対して、第三者場面では、重ねられた話者（KNS/GNS/MNS）が中断発話を再開して自己の発話を遂行する、また、重ねた話者（CNS）がターンを取って話題を転換するという傾向が強いことが分かった。

では、「初対面」会話における両場面の差は何を意味しているのだろうか。その要因を明らかにするために、以下、順にそれぞれの談話展開について分析を試みることにする。

3.2.2 支障なく両者の発話が続行する

まず、両場面ともに最も多く、相手場面で有意に多い「1.支障なく両者の発話が続行する」パターンについて分析する。

例 55（JNS8 の小学校でのボランティア経験について）

208 JNS8：なんか、私とそのボランティア入って、なんか一個でも子どもが変われたらなあと思うんです<けど>{<}>。

209 CNS2：<はい>{>}。

210-1JNS8：うん、この子は何を考えてるのか、,

- 211 CNS2 : [<わからないですよね>{<}]。
- 210-2JNS8 : [<わからないところ>{>}] もありますし (笑い)。
- 212 CNS2 : わからないですよ、いま若者たちの考え方は。
- 213 JNS8 : うん。
- 214 CNS2 : そうです。
- 215 JNS8 : 子どもに限らずだと思うんですけどね (笑い)、人の考えてること (笑い)、考えるの難しいんで。
- 216 CNS2 : 難しい、できない、私には無理です。

例 55 では、JNS8 が小学校でボランティアをしていた時に、少し変わった子供がいたことについて話している。JNS8 が 210-1 で「うん、この子は何を考えてるのか」まで話していたところで、CNS2 はその発話内容を予測し、211 で「わからないですよね」と先取りし、JNS8 の 210-2 「わからないところもありますし」の一部と重なっている。JNS8 がターンを維持していることに気付かなかった CNS2 は、212 で「わからないですよ、いま若者たちの考え方は」と自身の発話を完結させている。それに対して JNS8 は、213 で「うん」と応じ、CNS2 が 214 「そうです」と言い終った後に、215 で「子どもに限らずだと思うんですけどね、人の考えてること、考えるの難しいんで」と言いかけたことを笑いを交えて完成させている。211CNS2 と 210-2JNS8 のような、聞き手が話し手とともに発話の後半部分を同時に産出する行為は、串田他 (2017) では「共同産出」として扱われ、「発話が話し手と聞き手の協働作業の産物として産出されることを如実に示すプラクティス」(p.167) として捉えられている。このように、この談話展開パターンでは、211CNS2 による重なりが生じても、「共同産出」によって、相手のターンを損なうことはなく、重なった自己の発話を完成させて、会話参加者がそれぞれ言いたいことを続行しながら、円滑に会話を進めていると言える。

この談話展開パターンの第三者場面の談話例を例 56 に示す。

例 56 (納豆の味について)

- 177 CNS14: そうだよね、もうこういうもので、納豆も同じ、でもさ、納豆はね、味もつよ【】。
- 178 GNS2: 【】味強いよねー。
- 179 CNS14: そうだよね、味もちょっと、あんまり…。
- 180-1 GNS2: なんかにおいと食感も嫌なんだけど,,
- 181 CNS14: <そうですね>{<}>。
- 180-2 GNS2: <それは>{>}まだ我慢できる。
- 182-1 GNS2: 味が良ければ、それは我慢で[<できるけど>{<}>,,
- 183-1CNS14: [<我慢>{>}できる [<けど>{<}>,,
- 182-2 GNS2: [<味>{>}は想像より [, ,
- 183-2CNS14: [味はちょっと。
- 182-3 GNS2: 悪かった。
- 184 CNS14: うん、そうですね、私も納豆できない。

例 56 は、CNS14 と GNS2 が「納豆は味が強くて食べられない」ことを述べている談話である。GNS2 が 182-1 で「味が良ければ、それは我慢できるけど」と話しているところで、CNS14 は、183-1 で「我慢できるけど」と相手の発話の一部を繰り返して、182-1GNS2 発話の一部に重ねている。その後、GNS2 が 183-1CNS14 の「我慢できるけど」の「けど」を重ねて、182-2 で「味は想像より」とターンを取り戻して発話を続けているところで、CNS14 は 183-2 で再び重ねて同様に納豆の味に否定的な「味はちょっと。」と発話を続けている。その直後に、GNS2 は 182-3 で「悪かった。」と述べて、182-2 の「味は想像より」を完結している。182 と 183 は発話の重なりによりまったく切れ目なく続いている。それぞれの発話を一続きにしてみると、GNS2 は 182-1、182-2、183-3 で「味が良ければ、それは我慢できるけど、味は想像より悪かった。」であり、CNS14 は 183-1 と 183-2 で「我慢できるけど、味はちょっと。」となる。つまり、一つの発話順番の構成単位を互いに分断しあいながら、どちらも各自の発話を中断せずにそ

れぞれ言いたいことを続行しているのである。それでも、会話がスムーズに進んでいるように感じられるのは、CNS14 と GNS2 の双方が「納豆の味」について各々ひとかたまりの話を語るのではなく、同じ意味の発話を互いに重ねて述べ合うことによって、相手の話を聞いていることが示されているからではないだろうか。

赤羽（2017）は、第三者場面では、会話参加者が「対日本」について意見を述べ合うことによって『外国人』カテゴリ集合が生成されるという。それに伴い、「対日本」について言及することで、共通基盤構築を指向する対称的なやりとりが継続すると報告している。例 56 では、「ドイツ人」カテゴリに属する GNS2 と「中国人」カテゴリに属する CNS14 の間で、『外国人』であるお互いにとって「納豆の味は強くて我慢できない」という共通基盤が形成され、それをきっかけに、2 人の関係が「ドイツ人/中国人」カテゴリ対から、『外国人』カテゴリ集合へ統合されたと考えられる。つまり、182 と 183 においては、CNS14 と GNS2 が同じ『外国人』同士としてまとめ、「納豆の味」について同じ情報や意見を互いに重ねて述べ合いながら協働的に一つのまとまった談話を作り上げていると言えよう。

例 55 と例 56 に示したように、CNS による重なりが生じてても、共同産出や協働的に一つのまとまった談話を作り上げていくことによって、会話の進行が妨げられず円滑に進んでいることが分かる。「初対面」の場合、この談話展開パターンは相手場面と第三者場面においては、それぞれ 75.1%（163 談話）と 55.8%（145 談話）で、両場面ともに最も多く、相手場面の方が第三者場面より有意に多く起こっていた。これは、「初対面」の場合、相手場面の方が、うまく会話を成り立たせようとする協働姿勢を取りつつ会話を円滑に進める傾向が強いことを示唆している。

3.2.3 重ねられた話者が中断発話を再開する

次に、第三者場面で有意に多い「2.重ねられた話者が中断発話を再開する」パターンについて分析する。このパターンのその後の談話展

開を観察したところ、「対友人」会話同様に、重ねられた話者が、中断された自己発話をしばらく保留し、相手の発話に応じた後に継続する場合、重ねた話者（CNS）と共に中断発話を継続する場合、相手の発話に応じずに中断された自身の発話をそのまま直ちに継続する場合の3パターンが観察された。以下にそれぞれの談話例を示す。

まず、重ねられた話者が中断された自己発話をしばらく保留し、相手の発話に応じた後に継続する談話例を見てみよう。

例 57（日本在住の辛い経験について）

227 CNS2：なんか、みんなと違ってて(うん)、ちょっと“あー、外国人だね”って、みんな思っちゃいますよね。

228 CNS2：だから、ちょっと“あー(〈KNS5の笑い〉)、なんで一緒ににならないんですか”って、(うーん)、それもちょっとなんか、外国で暮らしてるのが一番つらいことかもしれない<す>{<}。

229 KNS5：<うん>{>}。

→230 KNS5：[<私も>{<} 【】。

→231 CNS2：[【】<いつも>{>}、そう、自分の国じゃないですから<す>{<}。

→232 KNS5：<うん>{>}、そういうの[↓]。

→233-1KNS5：私も小学校、あっ、幼稚園と(はい)小学校4年生まで通ったんですけど(うん、はい)、なんか韓国人たちのそういう学校じゃなくて、ただの日本人がみんないて、，

→234 CNS2：ああ、[<普通の日本人と一緒に>{<}。

→233-2KNS5：[<普通の学校で>{>}、そう、普通の学校に通ったんですけど、私1人、韓国人が私1人です。

235 CNS2：えー[↑]。

236 KNS5：それで、みんな、“韓国人が初めてだから、(はい)、すこしなんか、いじめしようかなあ”って、そういう

感じで、その時、まあ先生がちょっと、よく言ってあげたんですけど、そういう感じが分かりますよ。

例 57 では、CNS2 は 227 と 228 で「外国人」であるという属性が過度に「日本人」側に意識されて特別扱いされた経験と不愉快な思いについて話している。KNS5 は CNS2 の発話に対して 229 で「うん」とあいづちを打ち、さらに、次の 230 で「私も」と類似した経験を続けようとしている。それと同時に、229「うん」で KNS5 の発話が終了したと思った CNS2 が、231 で「いつも、そう、自分の国じゃないですから」と発話を開始したために、230 と 231 が発話冒頭で重なっている。その重なりによって、230KNS5 の発話が中断されている。KNS5 は重ねた 231CNS2 の発話に対して、232 で「うん、そういうの [↓]」と応じた後、233-1 で再びターンを取って、「私も小学校、あっ、幼稚園と小学校 4 年生まで通ったんですけど、なんか韓国人たちのそういう学校じゃなくて、ただの日本人がみんないて,,」と、中断された 230 の発話を再開している。その発話を継続している途中で、CNS2 が 234 で再び「ああ、普通の日本人と一緒に」と言い換えて共感を示す発話を挿入したために、233-2KNS5 の「普通の学校で」と重なっている。KNS5 は、234 で重なった CNS2 に対して 233-2 で「そう」と応じた上で、「普通の学校に通ったんですけど、私 1 人、韓国人が私 1 人です」と発話を継続し同一話題を再開している。その後、KNS5 は 236 で日本在住中にいじめられた経験について語り続けている。

この談話では、KNS5 が CNS2 の経験語りを聞いた時に、自分の類似経験と感覚を探索して語ろうとしている。この行為は、相手と自分が「共-成員性」³⁹（串田 2006）を有することを示す一つの方法と言える。このような重なり後の談話展開から、KNS5 が自分と相手の共通性と共感を表面化させて、自分の発話を遂行することによって話の

³⁹ 串田（2006）は、会話者たちが「互いに同じカテゴリーの担い手としてふるまう」ことを「共-成員性」を有するとしている（p.38）。

内容を深めようとする意識が窺える。

次に、重ねられた話者が重ねた話者（CNS）と共に中断した発話を継続する談話例を示す。例 58 はインスタグラムというアプリに関する談話である。

例 58（インスタグラムというアプリについて）

- 445 CNS9：えっ、今の韓国の女の子はほとんどこれやっていますか？。
→446 KNS7：あ、ほとんど、もうやってない【】。
→447 CNS9：【】人はあんまりい[<ない>{<}。
→448 KNS7：[<あん>{>}まり[<いない>{<}。
→449 CNS9：[<いない>{>}ですよね。
→450 KNS7：なんか(うーん)、9、9割は(うーん)やってる感じ。
451 CNS9：うーん。

445CNS9 の「えっ、今の韓国の女の子はほとんどこれやっていますか？」という質問に対して、KNS7 は 447 で「あ、ほとんど、もうやってない」と応答している途中で、CNS9 が 447 で KNS7 の先取りをして、「人はあんまりいない」と発話を完結させている。つまり、KNS7 の言おうとしていることを CNS9 が先取りによって完結させている。その後、KNS7 は CNS7 の 447 発話をなぞるように、CNS9 の発話が完了する前に、448 で「あんまりいない」と同じ言葉を繰り返して同意を示し、CNS9 の先取りによって示された理解が正しいことを認めている。それに続き、CNS9 が 449 で「いないですよね」と、448KNS7 のターン末尾の「いない」と同じ発話を同時に発することによって、「ユニゾン」が発生している。その後、KNS7 は CNS9 の発話を踏まえて 450 で「なんか、9、9割はやってる感じ」と続けている。このパターンでは、初対面であっても、重ねた話者と重ねられた話者が共同で一つの発話を構築することで連帯感が作り出されている様子が窺える。

最後に、重ねられた話者が CNS の重ねた発話に配慮せずに、中断

された自身の発話を直ちに再開する談話例 59 を挙げる。

例 59 (日本のアニメーション『ワンピース』について)

→298 KNS5 : 男の子の中で『ワンピース』とすると(えー[↑])、どの
国でも、一緒に[<話せる>{<} 【】。

→299 CNS2 : 【】<盛り上が>{>}ってました。

→300 KNS5 : 話せるアニメって(うーん)<聞きました>{<}。

301 CNS2 : <いいですなあ>{>}。

302 CNS2 : すごいですよね、確か、日本のアニメ産業。

例 59 では、KNS5 が 298 で「男の子の中で『ワンピース』とすると、どの国でも、一緒に話せる」と発話している途中で、CNS2 が 299 で「盛り上がってました」と発話を挿入したために重なりが生じて、298KNS5 の発話は中断されている。しかし、KNS5 は発話の継続を諦めず、CNS2 が言い終わるのを待って、300 で再びターンを取って「話せるアニメって聞きました」と、そのまま直ちに中断された 298 を継続し統語的に発話を完成させている。このような、重ねられた話者 KNS5 が、CNS2 の重ねた 299「盛り上がってました」という発話には反応を示さず、そのまま直ちに自発話の続きを完成させることは、串田他(2017)では、重なりによって問題が生じなかったようにふるまい、明示的な自己回復をしないという意味で、「無標な形での自己回復」(p.140)と見なされている。このようにここでは、重ねられた話者が何もなかったかのように単に中断された自発話の続きを回復させて自分のフロアを維持しようという意識が窺える。

以上のような、「2.重ねられた話者が中断発話を再開する」場合は相手場面が 16.1% (35 談話)、第三者場面が 29.6% (77 談話) で、第三者場面の方が相手場面より有意に多く起こっていた。

3.2.4 重ねた話者がターンを取って話題を転換する

続いて、第三者場面で有意に多い「3.重ねた話者がターンを取って

話題を転換する」パターンについて分析する。

例 60 (コミュニケーションアプリについて)

456 KNS7 : あっ、LINE もできないんですよね?。

457 CNS9 : あっ、LINE もできないです。

458 KNS7 : へー、あ、なんでできないんですか?それって。

459 CNS9 : ちょっと分かんないですね(笑い)。

460 KNS7 : はははは(笑い)。

461 CNS9 : でもめっちゃ不便ですよ。

→462 KNS7 : そうですね、なんか、[<えー>{<} **【**。

→463 CNS9 : **【**] <えっ>{>} , 中国の WeChat は持っていますか?。

→464 KNS7 : あ、WeChat 持っていない(うーん)です。

→465 CNS9 : やっぱり(笑い)。

→466 KNS7 : あー、やっぱり(笑い)なんか中国人しか使っていない。

467 CNS9 : そうですね。

例 60 はコミュニケーションアプリに関する談話である。462 までは CNS9 と KNS7 が LINE というチャットアプリが中国で使えないことについて話している。461CNS9 の「でも、めっちゃ不便ですよ」という発話に対して、KNS7 が 462 で「そうですね、なんか」まで話していたところで、CNS9 は、463 でターンを取って「えっ、中国の WeChat は持っていますか?」と KNS7 に質問し、462KNS7 の発話を中断させている。KNS7 は中断された自身の発話を継続せずに、463CNS9 の質問に対して、464 で「あ、WeChat 持っていないです」と応答している。その後、465CNS9 の「やっぱり」という評価に応じて、KNS7 は 466 で「やっぱり」を繰り返して「あー、やっぱりなんか中国人しか使っていない」と発話している。このように、463CNS9 の割り込んだ質問をきっかけに、CNS9 と KNS7 は「WeChat (中国版の LINE)」という新しい話題をめぐって談話を展開している。それにより、会話全体が LINE から WeChat という新たな方向へ導き出されている。こ

のように、この談話展開パターンでは、重ねられた話者が中断された自身の発話を継続せず、重ねた話者 CNS がターンを取って会話全体が新たな展開になることが多い。

このようなパターンは相手場面で 8.8% (19 談話)、第三者場面で 14.6% (38 談話) で、第三者場面の方が相手場面より有意に多く起こっていた。つまり、「初対面」の場合、CNS による発話の重なりが現れた後、第三者場面のほうが、重ねた話者 CNS がターンを取って話題が転換される傾向が見られた。

3.2.5 まとめ

以上、相手場面と第三者場面における「初対面」会話の CNS の「発話の重なり後の談話展開」について分析した。その結果、CNS による発話の重なりが現れた後、「1.支障なく両者の発話が続行する」、「2.重ねられた話者が中断発話を再開する」、「3.重ねた話者がターンを取って話題を転換する」の 3 パターンが観察された。両場面における各談話展開パターンの出現率を比較すると、両場面ともに「1.支障なく両者の発話が続行する」場合が最も多かった。これは、三牧 (2013 : p.231) で述べられているように、初対面会話という特質上、会話を円滑に進行させること自体に参加者が意識的に取り組んでいるためと考えられる。

一方、各談話展開パターンの場面差に注目すると、相手場面では「1.支障なく両者の発話が続行する」場合が有意に多いのに対して、第三者場面では「2.重ねられた話者が中断発話を再開する」、「3.重ねた話者がターンを取って話題を転換する」場合が有意に多いことが分かった。この結果から、CNS による発話の重なりが現れた後、相手場面の方が両者ともに各自の発話を中断せずに協調しながら続行する傾向があるのに対して、第三者場面では、重ねられた話者 (KNS/GNS/MNS) が中断発話を再開する、重ねた話者 (CNS) がターンを取って話題を転換する傾向があることが分かった。これは、「初対面」の場合、CNS による発話の重なりが現れた後、相手場面では、

会話参加者双方がうまく会話を成り立たせようとする協働姿勢を取りつつ会話を円滑に進行させることを優先するのに対して、第三者場面では、会話参加者双方が積極的に自己発話を遂行して会話の内容を深めようとする意識が強く働いているためと考えられる。

3.3 3節のまとめ

3節では、相手場面と第三者場面における「初対面」会話の、CNSによる「発話の重なり」及び「重なり後の談話展開」には、どのような特徴があるかについて分析した。

3.1で、初対面の相手に対するCNSによる「発話の重なり」について分析した結果、CNSによる「発話の重なり」は、相手場面より第三者場面の方が有意に多く起こっていたことから、重なりには、相手が日本語母語話者である否かが影響することが把握された。発話の重なりを分類すると、相手場面においては、「発話終了付近」の重なりを多用していたことから、CNSは、相手が母語話者であることを意識し、初対面のぎこちなさを解消したい気持ちが強く働くために、話者交替規則を指向していることが推測された。さらに、有意に「協調的な割り込み」が多用されていたことから、相手場面においては対人的な連帯感の表出や協調的な人間関係の構築が優先される傾向が強いと言える。それに対して、第三者場面では、「発話途中」の重なりのうち「支配的な割り込み」が有意に多かったことから、話者交替規則への配慮よりも、積極的な会話参加の方に意識が傾き、新情報を加えて会話の進行を新たな方向へ進めようとする傾向が強いことが分かった。

次に、3.2でCNSによる「発話の重なり後の談話展開」について分析した。その結果、「初対面」会話においては、CNSによる発話の重なりが現れた後、相手場面では、会話の進行を妨げることなく両者の発話が続行する傾向が強いのに対して、第三者場面では、重ねられた話者(KNS/GNS/MNS)が中断発話を再開する、または重ねた話者(CNS)がターンを取って話題を転換する傾向が強いことが分かった。これは、

CNS による発話の重なりが現れた後、相手場面では、両者がうまく会話を成り立たせようとする協働姿勢を取りつつ会話を円滑に進める傾向が強いのに対して、第三者場面では、両者が積極的に自己発話を遂行して会話の内容を深めようとする傾向が強いためと考えられる。

4. 第 5 章のまとめ及び考察

本章では、学習者の言語調節を考察する際の、本研究のもう 1 つの分析視点である「発話の重なり」に注目し、研究課題 2「相手場面と第三者場面において、親しい友人と初対面の相手に対する CNS による発話の重なり及び重なり後の談話展開には、どのような特徴があるか」について分析を行った。

まず、CNS による「発話の重なり」については、「対友人」会話であれ、「初対面」会話であれ、両場面ともに「発話途中」の重なり、すなわち「割り込み発話」が最も多かった。さらに、「割り込み発話」が生じた談話を分析すると、両場面ともに「協調的割り込み」の方が「支配的な割り込み」より圧倒的に多かった。CNS は「評価・感想の表出」、「情報補足」、「共話作り」などを通じて、相手の発話に対して共感や関心などを示しながら、相手とともに協働的に会話を進めようとすることが明らかになった。このことから、話者間の親疎関係を問わず、両場面ともに、CNS による「発話の重なり」は、相手に関心を示し、会話を円滑にかつ協働的に進行させる手段の一つと考えられる。この結果は、日本語母語話者における発話の重なりが会話を促進する作用が大きいという生駒（1996）や牛田他（2010）などの研究結果と一致している。つまり、「親しい友人」及び「初対面の相手」に対する CNS による「発話の重なり」は、相手が日本語母語話者か非母語話者かにかかわらず、プラスに働くものであり、会話を促進することが多く、好意的な人間関係の確立に貢献していると言える。

一方、場面差に注目すると、相手場面では、「対友人」会話において「発話冒頭」の重なりが、「初対面」会話において「発話終了付近」

の重なりが有意に多く生起していた。このことから、相手が母語話者である相手場面では、CNS は話者交替規則を指向しながら次の話し手になろうとするが、その一方で牛田他（2010）が指摘したように、「初対面」会話ではぎこちなさを解消したいという気持ちが強く働くために、「発話終了付近」での重なりが「対友人」会話より有意に多く生起すると考えられる。それに対して、第三者場面では、「対友人」であれ、「初対面」であれ、「発話途中」での重なりが有意に多く生起していた。これは、相手が非母語話者である第三者場面では、CNS は相手との親疎関係にかかわらず、話者交替規則への配慮よりも積極的な会話参加に意識が傾いていることを示唆している。さらに、「発話途中」の談話を分析した結果、「対友人」会話、「初対面」会話ともに、相手場面では「協調的割り込み」が有意に多かったのに対して、第三者場面では「支配的な割り込み」が有意に多かった。以上のことから、CNS は相手との親疎関係にかかわりなく、相手場面では、相手が母語話者であることを意識して、言いたいことよりも話者交替規則や協調的な対人関係を優先するのに対して、第三者場面では、話者交替規則や対人関係よりも自分の言いたいことを率直に表出する方を優先することが推測される。

さらに、第三者場面の「支配的な割り込み」の場合、CNS がいきなり自分の言いたいことを相手の発話に挿入するわけではなく、「ああ」、「えっ」のようなあいづちを打ったり「でも」のような接続詞などを用いたりした後に自分の言いたいことを続けることが多く観察された。このような、発話順番の冒頭におけるあいづちや接続詞などは、串田他（2017）では「発話順番冒頭の要素」と呼ばれ、「これらの要素は、発話順番冒頭の位置において、先行発話に対するさまざまなスタンスや接続のあり方を示す重要な資源」（p.147）となり、円滑な会話の進行にとって重要な役割を担うものである。CNS は、相手の発話に割り込む際に、「発話順番冒頭の要素」を上手に用いることによって、会話の進行を円滑に進めていると言えよう。

次に、「重なり後の談話展開」については、「対友人」会話でも、「初

対面」会話でも、両場面ともに、「支障なく両者の発話が続行する」談話展開が最も多かった。これは、コミュニケーションにおいては、話者間の親疎関係と相手の母語を問わず、あらゆる場面において、会話参加者は「円滑な会話成立」を目指して会話を進めるのが一般的であるためと考えられる。一方、場面差に注目すると、相手場面の方が「対友人」会話、「初対面」会話ともに、CNSによる発話の重なりが現れた後、支障なく両者の発話が続行する傾向が強いことが分かった。このことから、相手場面では、話者間の親疎関係にかかわりなく、会話参加者（CNSとJNS）が協調的な人間関係の構築や維持を配慮しつつ円滑な会話成立を図る傾向が強いことが窺える。それに対して、第三者場面では、「対友人」会話の場合、重ねた話者（CNS）がターンを取って積極的に自己表現する、さらに、両者（CNSとKNS/GNS/MNS）が互いにターンを譲らず各自の意見を明瞭に述べて競合的に各自のフロアを継続するという傾向が強いことが分かった。一方、「初対面」会話の場合、重ねた話者（CNS）がターンを取って会話の方向を転換する、また、重ねられた話者（KNS/GNS/MNS）が中断発話を再開して自己発話を遂行する傾向が強いことが分かった。このように、第三者場面では、「対友人」会話、「初対面」会話ともに、CNSによる発話の重なりが現れた後、参加者が積極的に自己表現する姿が観察された。

以上のことから、CNSの発話の重なり及び、その後の談話展開においてCNSは、話者間の親疎関係を問わず、第三者場面の方が相手場面より自己表現意欲が強く、積極的に会話に参加しようとしていることが示唆される。

ファン（2006）は、母語話者と非母語話者が参加する相手場面の場合、参加者の間に「言語ホストー言語ゲスト」という関係が存在するとし、使用される言語の母語話者が言語ホストとなり、話題の発展など会話の方向付けをコントロールすることが多いが、非母語話者は会話参加を最小限にしたり回避したりして言語ゲストとしての参加調整を行う傾向があるとしている。一方、ファン（1999）や春口（2004）

などは、非母語話者同士による第三者場面では、はっきりとした「言語ホスト一言語ゲスト」の関係が確立できないため、相手に頼ったりするような参加よりも、積極的な自己参加の調整を選択することが多く、時には言語ホストの調整を活用しようとする行動が見られると述べている。本研究においても、重ねた話者 CNS がターンを取って新たな情報要求を行うことによって会話の方向付けと展開をリードするという「ホスト」的に振る舞う傾向が窺えた。

また、劉（2011）は知人関係の四者間の日本語母語話者による会話データを分析対象としているが、重なり後の談話展開の特徴について、2者間の調整場面において、発話の途中で重なりが現れると、発話が重なった2人の話者が競合的にターンを取って各自の発話を継続するパターンが観察されたことを報告している。本研究では、「対友人」会話においては、CNSによる発話の重なりが現れた後、劉（2011）が指摘したような、参加者双方が競合的に各自のフロアを継続するというパターンが第三者場面でのみ観察された。つまり、「重なり後の談話展開」において、第三者場面では母語場面と類似した調整が行われていると言えるだろう。このことから、「第三者言語接触場面の参加者が内的場面に似た参加の仕方」（ファン 2011:p.49）をしていることが示唆される。

赤羽（2017）は「意見や情報を双方が偏りなく自発的に提示しあう連鎖」（p.86）を「対称的なやりとり」すなわち「対称的な会話参加」と定義している。また、岩田（2006）は、留学生同士による第三者場面では、会話参加者双方が互いに意見や情報を自発的に述べ合い、積極的に談話の内容を協同で作りに上げるという「対称的参加」が多く観察されたことを報告している。本研究でも、第三者場面では、参加者間の関係が固定されず、動的であるために、CNSによる重なりが現れた後、両者（CNSとKNS/GNS/MNS）が積極的に自己表現して各自の発話を遂行する会話の様相が窺えた。つまり、第三者場面の方が相手場面より会話参加が対称的になり、活性化されていると言えるだろう。

第 6 章 総合考察

本研究は、2つの研究課題を設定し、第4章で研究課題1「相手場面と第三者場面において、CNSのスピーチレベル管理は、親しい友人と初対面の相手に対して、それぞれどのような選択基準によってなされるか」について、第5章で研究課題2「相手場面と第三者場面において、親しい友人と初対面の相手に対するCNSによる発話の重なり及び重なり後の談話展開には、どのような特徴があるか」について解明することを目指した。

本章では、まず、1節で第4章と第5章の調査結果と分析に基づき、日本語非母語話者の言語調節について論じる。次に、2節で、第三者場面における非母語話者の言語特徴をもとに、「非母語話者の日本語使用」の新たな位置づけを試みる。最後に、3節で日本教育への示唆を提言する。

1. 日本語非母語話者の言語調節

第4章の「スピーチレベル」に関する調査では、CNSは「親疎」という相手との人間関係に応じたスピーチレベルの使い分けができている一方で、相手が日本語母語話者である場合には、母語話者を意識し、「丁寧に話す」という待遇的意味に強く配慮する傾向があることを明らかにした。

第5章の「発話の重なり」に関する調査では、CNSは相手場面では、相手との協調的関係の構築と維持を図り、話者交替規則を指向しつつ「支配的な割り込み」を控えるのに対して、第三者場面では、話者交替規則よりも発話自体に意識が向けられ、新情報を加えて積極的に会話に参加する傾向が見られた。また、CNSによる発話の重なりが現れた後、相手場面では、会話参加者は相手を気づかう配慮が相互に強く働き、円滑な会話成立を優先するが、第三者場面では、対人関係への配慮よりも積極的な自己表現を志向し、さらに、その重なりを

きっかけに、互いに相手の発話を踏まえて談話を展開し、対称的な会話が成立している様相が把握された。

上記の結果から、非母語話者が非母語話者同士で会話をするとき、日本語母語話者とは異なる言語調節を行っていることが明らかになった。非母語話者は、母語話者との相手場面においては、相手が母語話者であることを強く意識して、目標言語の言語規範と対人関係に配慮しつつ円滑な会話成立を優先する言語調節を行うと考えられる。それに対して、非母語話者同士の第三者場面においては、目標言語の言語規範や対人関係よりも、明瞭な自己表現や会話への積極的な参加を指向した言語調節を行っていると言える。それでは、非母語話者が相手に応じて異なる言語調節を行うことには、どのような要因が働いているのであろうか。

ファン（2011）は、「相手言語接触場面と違って、第三者言語接触場面では日本語規範が適用されたとしても、言語規範自体は過度に強調されることはない。そのために、逸脱かどうか（留意）、問題がないかどうか（評価）、調整すべきかどうか（計画、実施）など一連の言語管理が比較的緩くなり、結果として第三者言語接触場面の外国人は自分の言語を使っていないにもかかわらず、ある程度緊張から解放され」（p.49）と述べている。また、赤羽（2014）は、接触場面における日本語非母語話者の心理面の調節を分析し、母語話者との相手場面で特に意識されるのは相手に気をつかって問題化しないようにする配慮であるが、第三者場面で特に重視される配慮の一つは、明瞭な自己表現に関することであることを指摘している。本研究の調査結果を、ファン（2011）及び赤羽（2014）に照らし合わせて考えると、相手が母語話者である相手場面では、非母語話者は、問題を避けようとする意識が強く働くために、相手に失礼にならないように、デスマス形を多用したり、話者交替に問題が起こらないように、意見の対立を避け、「支配的な割り込み」を控えたりするなどの、対人関係と円滑な会話成立を優先する言語行動を取りやすいと考えられる。それに対して、非母語者同士の第三者場面において、会話参加者は、目標言

語の言語規範と対人関係という負担から解放され、不安や緊張が緩和され、積極的に自己表現しようとする意識が働くために、反論の意見であっても自己の意見と感情を明瞭に表現し、会話に対する積極性を示してお互いに深い理解を志向する言語行動を取りやすいのではないだろうか。

さらに、第三者場面においては、ファン（2006）が述べたように、相手場面と違って、はっきりとした言語ホストと言語ゲストの関係が確立できず、参加者たちは、「その場面の言語ホストとして自分を認識することは普通ないし、相手方によってそう見られることもない」（p.137）のである。つまり、非母語話者同士の第三者場面において、会話参加者はどちらかが会話のリーダーの位置を取るということが義務付けられないため、対等の立場で協働してコミュニケーションを維持しようとする調節がより多くなされ、双方の会話参加が促進されると考えられる。

他方、会話の様相は固定的なものではなく、相互依存する発話と発話の連なりによって、刻々と変化する動的なものである。岩田（2005）は日本語学習者と日本語母語話者の会話参加の様相の変化を分析し、その結果、「母語話者の質問」と「学習者の応答」という一方行的で著しく非対称的だったやりとりが、次第に自発的に意見や情報を述べ合うという双方向的で対称的なものへ変化したことを報告している。その変化のきっかけは、選択されるアイデンティティ・カテゴリーが、「留学生対日本人」のように両者が対立するものから、「スポーツ愛好家」のように、両者を結び付ける共有するものによって変わっていったことであるとしている。このように、会話参加の変化のきっかけは、会話における相手と自分の捉え方、すなわち参加者のアイデンティティ・カテゴリーの選択と交渉に関わっていることが分かる。

また、赤羽（2017）は第三者場面の、参加者双方から意見や情報が提示される対称的なやりとりに注目し、その対称的なやりとりに現れるカテゴリーについて分析を行った。その結果、第三者場面では、会話参加者が共有する知識を基盤化し、共通するカテゴリーを形成する

だけでなく、自分と相手を対立するものとして位置づけて対立するカテゴリーを形成したり、さらにお互いを「日本人」カテゴリーに属さない者同士として結びつけて『外国人』集合カテゴリーを形成したりと、カテゴリー間の関係を変化させながら、対称的なやりとりを継続していることを明らかにした。その結果を踏まえ、赤羽（2017）は、第三者場面では、参加者たちのお互いの位置づけが多様であるため、より自由かつ積極的なふるまいが可能となり、対称的なやりとりが継続できると述べている。

本研究で収集した第三者場面の会話においても、非母語話者同士が「〇〇人/××人」といった一面的な関係性のみに固定されることなく、多様な関係性で対称的なやりとりを行う談話が多く観察された。例えば、第5章の談話例57（pp.170-171）に示したように、両者が「異国に居住する外国人」という共通カテゴリーに属する者として、日本在住時の辛い経験について積極的に情報を述べ合う談話が観察された。また、第5章の談話例38（p.128）のように、「友達に会いたい時は写真を見ればいい」と「写真だけではだめ」といった二項対立的な立場から各自の意見を明瞭に述べ合う談話や、第5章の談話例56（p.168）に示したように、参加者間で『外国人』カテゴリー集合が現れ、両者が外国人同士としてまとめ、「納豆の味」について同じ情報や意見を互いに述べ合う談話が観察された。このように、本データの第三者場面における対称的かつ積極的な会話参加は、参加者の多様な関係性への指向に関係していると言えるだろう。

グローバル化の急速な進展は接触場面の多様化を拡大させているだけでなく、そこに参加する当事者の言語管理にも質的に変化を生じさせている（村岡 2010）。だとすれば、接触場面の会話特徴を考察する際に、日本語母語話者と非母語話者それぞれの談話の特徴を比較するに留まらず、接触場面の動的側面、特に非母語話者同士の第三者場面の中に立ち現れる個々のミクロな使用実態を見極めていくことが重要と言えよう（加藤 2010、川口 2015、など）。

2. 「非母語話者の日本語」の新たな位置づけ

次に、第三者場面における非母語話者の言語特徴を踏まえ、「非母語話者の日本語」を新たに位置づけることを試みる。

第2章で述べたように、これまでの学習者が参加する接触場面の会話に焦点を当てた研究では、「スピーチレベル管理」に関する研究であれ、「発話の重なり」に関する研究であれ、日本語母語話者との相手場面を対象としたものが中心であった。これらの研究の多くは、母語場面と比較することにより学習者の言語行動と母語話者のそれとの違いを分析し、その違いを接触場面における言語問題と捉え、さらに、この言語問題は、学習者の言語能力の不足を理由に結論付けられることが多かった（田 2009、劉 2012、など）。しかし、第4章の「スピーチレベル」に関する調査では、相手場面、第三者場面ともに、CNSは「日本語のルール」に従って「親疎」という相手との人間関係を考慮し、「対友人」会話には非デスマス形を、「初対面」会話にはデスマス形を基調として選択していた。また、CNSのスピーチレベル・シフトには、心的距離の調節をあらわす対人機能や談話の展開を示す談話機能が反映されていた。つまり、CNSがおおむね日本語母語話者同様に、「親疎」という相手との人間関係に応じて「基本的スピーチレベル」を選択し、巧みにスピーチレベル・シフトをしていることが明らかになった。また、第5章の「発話の重なり」に関する調査では、相手場面、第三者場面ともに、話者間の親疎関係を問わず、CNSによる「発話の重なり」は、日本語母語話者同様に、相手に関心を示し、会話を円滑にかつ協働的に進行させるための手段として使われることが多く、好意的な人間関係の確立に貢献していることが明らかになった。このように、「スピーチレベルの管理」及び「発話の重なり」においては、非母語話者は、相手が日本語母語話者か非母語話者かにかかわらず、「コミュニケーションの達成」と「良好な人間関係の構築」に沿って言語調節を行っていると言えよう。

さらに、第三者場面においては、会話参加者は、目標言語の言語規範という負担から解放され、不安や緊張が緩和され、積極的に自己表現しようとする意識が働くために、会話参加がより活性化されていることが多く観察された。例えば、第三者場面で有意に多く生じた CNS による「新情報の提示」のような「支配的な割り込み」は、これまでは、先行話者の発話を妨害するなど、言語問題として否定的に捉えられることが多かった。しかし、その状況の談話内容を質的に分析した結果、それは、CNS が相手の発話に関する新しい情報を加えようとして「割り込む」のであり、積極的に会話に参加しようとする姿勢の現れと捉えられることが分かった。また、第三者場面のみで観察された、非母語話者同士がターンを譲らず積極的に各自の発話を遂行するような言語行動は、双方が各自の意見を積極的に話そうとし、互いに会話内容を深めながら納得がいくまで話し合うことを示している。これらは、非母語話者同士が互いに自発的な意見や情報を述べ合い、双方向的にコミュニケーションのゴールを達成させるための協働構築過程であると言えよう。このような、第三者場面に見られた非母語話者の日本語は、インターアクションを促進させるリソースとして肯定的に捉えられるのではないだろうか。

第 1 章で述べたように、近年、日本における外国人の増加により、非母語話者との対等な関係を重視する意識が高まりつつあり、非母語話者の参加を、「否定的な評価」から「肯定的な評価」へ見直すことが提唱され(大平 2001、岡崎 2002、川口・角田 2005・2010、村岡 2006、八木 2007、芝原 2012、川口 2015、など)、接触場面に参加する非母語話者を、インターアクションの障害としてではなく、その「外来性をインターアクションを促進させるリソースとして」(村岡 2006 : p.113) 肯定的に捉える可能性が指摘されている。本研究の調査結果は、これらの主張を実証的に、かつ具体的に示したものと言えよう。

岡崎 (2002) は、多文化共生の実現のための「共生言語としての日本語」(以下、共生日本語)を、「日本語母語話者と非母語話者あるいは非母語話者同士のコミュニケーションの手段となる日本語」(p.58)

であると定義し、その「共生日本語」は、母語話者と非母語話者が相互交渉の過程で、双方で創り上げるものであると述べている。また、岡崎（2007）は、「共生日本語教育」は、ある日本語の規範を習得することを期待するのではなく、多様な言語・文化背景を持つ者が共通の目標を達成するために、互いをコミュニケーションの対等な当事者として位置づけ、互いに歩み寄りながら協働で日本語によるコミュニケーションを進めることを目指すとしている。本研究で得られたような非母語話者同士による協働構築過程は、相手場面や「共生日本語教育」で目指される、会話参加者が協働でコミュニケーションを維持する過程と考えられる。

第1章で指摘したように、「母語話者のみの言語規範を言語教育の対象としていこうとするこれまでの言語教育の姿勢はもはや非現実的であるばかりか、将来的に相互理解のために活用されうる日本語自体の衰退も導きかねない」（加藤 2010：p.4）のである。多文化化・多言語化が進んでいる日本社会に着目すると、非母語話者の日本語をすべて「訂正すべき対象」ではなく、一つの「正当なバリエーション」として捉え直すべきではないだろうか。

本研究では、相手場面と第三者場面における非母語話者の日本語使用の実態を質的に分析し、記述することによって、非母語話者の言語調節の一端を明らかにし、さらに、相手場面や「共生日本語」で目指すべき積極的かつ対称的な会話参加を可視化し、提示することができたと考えられる。

3. 日本語教育への示唆

最後に、本研究の分析結果を、日本語教育へ活用する可能性について述べる。

本研究の相手場面で見られた日本語母語話者に対する強い意識は、接触場面での日本語母語話者との会話を成立させる上で、対人関係などのトラブルを未然に防ぐということに寄与するものと考えられる。しかし、その一方で、それが、相手との心的距離を拡大させ、日本語

母語話者とのより深い人間関係の構築を妨げる可能性は否定できないであろう。また、このような選択基準は、母語話者と非母語話者の間に上下関係を生じさせる要因にもなりうる。それにより、「母語話者」対「非母語話者」と線引きされてしまい、さらに、「非母語話者/外国人」が「母語話者/日本人」に従属した非対称的な関係性を導きかねないのではないか。一方、第三者場面で見られた明瞭な自己表現と積極的な会話参加の言語行動は、会話をより活性化させ、相手との人間関係をより親密な関係に発展させることに寄与すると考えられる。したがって、その積極的な会話参加は、母語話者に対して抑制されるのではなく、非母語話者に対するのと同様に活性化されることが望ましい。

近年、日本社会において第三者場面が顕在化するにつれて、非母語話者同士の言語使用を日本語会話教育へ応用する可能性が論じられるようになった（大場他 2004、岩田 2006、ファン 2011、赤羽 2017、など）。岩田（2006）は、会話教育の活動のデザインにおいて、共通基盤に立って情報を述べ合うという非母語話者同士の会話が自発的で積極的な会話参加の経験を提供することを指摘している。本研究の結果を照らし合わせてみると、共通基盤の構築だけでなく、参加者同士が共通基盤をもとに意見や性質などに関わる相対立する立場から各自の考えを明瞭に述べ合う談話展開や、同じ外国人同士としてまとまって、「対日本」について情報や意見を互いに述べ合う談話展開も、積極的かつ対称的な会話参加の素材として、会話教育の活動に活かすことができるのではないだろうか。

また、鎌田（2003）は、ネウストプニー（1995）の「接触場面を日本語教育の基礎として位置づけるべき」という主張に基づき、接触場面に教材作成の原点を求めべきであると主張している。第1章で述べたように、グローバル化が進展するにつれて、日本国内において日本語母語話者と非母語話者との接触はもちろん、日本語を共通語とした非母語話者同士の接触も当然増加していることが推測される。このような社会背景を鑑み、上記の鎌田（2003）の「接触場面の教材化」

の主張に従えば、日本語教材の会話場面は日本語母語話者との相手場面だけではなく、非母語話者同士の第三者場面も取り入れるべきではないだろうか。これまでの日本語学習者向けの教科書は、会話場面を日本語母語話者との相手場面に設定したものがほとんどである⁴⁰。したがって、本研究で見られた、第三者場面の非母語話者の積極的で自発的な会話参加の姿勢や枠組みを教科書の会話場面に活用するような検討も可能であろう。

一方で、近年は非母語話者同士の第三者場面を教育現場に応用する実践活動も行われている。例えば、池田（2004）は、学習者同士が協働的に問題解決するピア・レスポンス活動を日本語作文教育で実施している。労他（2013）は非母語話者同士の学び合いを促進することを目指し、インターネットを通じて韓国・中国・スウェーデンをつなぐ遠隔交流の実践活動を行っている。今後、このような、第三者場面を日本語教育現場に応用する実践活動が増えることが予想される。

以上のことから、本研究の結果は、第三者場面における非母語話者の日本語使用を、多様な日本語教育現場に還元する際の一助になると考えられる。

⁴⁰ 例えば、中国の大学専攻用教科書『総合日語』（北京大学出版社）は、曹（2008：p.2）によれば、新しい試みが凝らされた日本語教材であるが、その教科書の会話場面は日本語母語話者と非母語話者との接触場面によってのみ設定されている。また、世界各国で使われている『みんなの日本語』（スリーエーネットワーク）も、その会話場面は日本語母語話者と非母語話者との接触場面のみである。

第 7 章 今後の課題

最後に、今後の課題について述べる。

今後の課題として、以下の 4 点が挙げられる。

まず、今回の調査は上級レベルの中国人学習者 CNS を対象としたものであった。その CNS の第三者場面の会話相手も同じく上級学習者に統一した。しかし、ファン（2011）は、グローバル化の流れによる日本国内の留学生数の増加に伴い、日本語能力が高い学習者だけでなく、日本語能力の低い学習者が、限られた言語リソースを用いてどのように場面に参加し、会話を維持するのかを明らかにすることも重要な課題であると述べている。今後は、分析の対象を初・中級学習者に広げ、より多様なデータを収集・分析し、日本語非母語話者の言語調節のさらなる実態の解明を試みたい。

次に、今回の調査は、調査参加者の 1 回のみ接触を対象としたものであった。今後は、日本語学習者が会話相手との接触回数を増やすことによって、相手場面と第三者場面における「スピーチレベルの管理」及び「発話の重なり」にどのような変化がみられるかという縦断的視点から、日本語非母語話者の動態としての言語調節を明らかにする必要がある。

また、今回は「発話の重なり後の談話展開」という視点から、相手場面と第三者場面における会話参加の様相について考察を行った。今後は、話題導入の頻度や話題導入の形式に注目し、より多角的な視点から両場面における「会話参加の対称性」について考察を行いたい。さらに、本データの第三者場面における対称的かつ積極的な会話参加について、岩田（2005）と赤羽（2017）を参考にし、参加者の「アイデンティティ・カテゴリー」の選択と交渉という観点から簡単な考察を行ったが、両場面における会話参加の様相の差異を考察するにはより詳細なカテゴリー化の分析を行うことが必要であろう。

本研究の最後に、第三者場面の非母語話者の積極的で自発的な会話

参加の姿勢を会話教育現場及び教科書の会話場面に応用する可能性について論じたが、第三者場面における非母語話者の日本語使用を、具体的にどのように会話活動に応用するか、どのように教材化へ発展させるかは、重要な課題として残されている。今後は、本研究の知見を日本語教育現場に活用していくための実践を進めていきたい。

参考文献

- 赤羽優子（2014）「日本語非母語話者の日本語接触場面における心理面の調節」『計量国語学』29（5）計量国語学会，pp.131-153
- 赤羽優子（2017）「第二言語としての日本語使用者同士のカテゴリー化実践—第三者言語接触場面の対称的なやりとりに注目して—」『国際日本研究』9 筑波大学人文社会科学研究所国際日本研究専攻，pp.83-105
- 足立さゆり（1995）「日本語の会話におけるスピーチ・レベル・シフト」『拓殖大学日本語紀要』5 拓殖大学国際部，pp.73-87
- 生田少子・井出詳子（1983）「社会言語学における談話研究」『月刊言語』12（12）大修館書店，pp.77-84
- 池田玲子（2004）「日本語学習における学習者同士の相互助言」『日本語学』23（1）明治書院，pp.37-50
- 池田玲子・舘岡洋子（2007）『ピア・ラーニング入門』ひつじ書房
- 生駒幸子（1996）「日常会話における発話の重なる機能」『世界の日本語教育』6 国際交流基金日本語国際センター，pp.185-199
- 伊集院郁子（2004）「母語話者による場面に応じたスピーチ文末スタイルの使い分け—母語場面と接触場面の相違—」『社会言語科学』6（2）社会言語科学会，pp.12-26
- 伊集院郁子（2016）「母語話者による場面に応じたスピーチ文末スタイルの使い分け—母語場面と接触場面の相違—」村岡英裕・ファン，S.K.・高民定編『接触場面の言語学—母語話者・非母語話者から多言語話者へ—』ココ出版 pp.61-88
- 岩田夏穂（2005）「日本語学習者と母語話者の会話参加における変化—非対称的参加から対称的参加へ—」『世界の日本語教育』15 国際交流基金日本語国際センター，pp.135-151
- 岩田夏穂（2006）「日本語非母語話者同士の参加の様相—留学生の自由会話の場合—」『人間文化論叢』9 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科，pp.175-187
- 上仲淳（1997）「中上級日本語学習者の選択するスピーチレベルおよ

- びスピーチレベルシフト—日本語母語話者との比較考—」小出詞子先生退職記念編集委員会編『日本語教育論文集—小出詞子先生退職記念—』凡人社， pp.149-165
- 上仲淳（2005）「日本語非母語話者に特有のスピーチレベルのシフト要因—中国語を母語とする上級日本語学習者の接触場面から—」『社会言語科学会第 16 回大会発表論文集』社会言語科学会， pp.160-163
- 上仲淳（2007）「中国語を母語とする上級学習者のスピーチレベルの選択基準」『大阪大学言語文化学』16 大阪大学言語文化学会， pp.141-154
- ウォーカー，泉（2008）「初級学習者のスピーチスタイルに関する「気づき」—待遇コミュニケーション教育に関する考察—」『早稲田大学日本語教育学』2 早稲田大学大学院日本語教育研究科， pp.15-28
- 宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』662 昭和女子大学近代文学研究所， pp.27-42
- 宇佐美まゆみ（1998）「ディスコース・ポライトネス・ストラテジーとしてのスピーチレベル・シフト」『平成 10 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会， pp.110-115
- 宇佐美まゆみ（2001）「「ディスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能—敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること—」『語学研究所論集』6 東京外国語大学語学研究所， pp.1-29
- 宇佐美まゆみ（2006）「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese：BTSJ）2005 年 2 月 25 日改訂版」宇佐美まゆみ編『自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』言語情報学研究報告 13 東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」， pp.21-46

- 宇佐美まゆみ（2015）「日本語の「スタイル」にかかわる研究の概観と展望—日本語会話におけるスピーチレベルシフトに関する研究を中心に—」『社会言語科学』18（1）社会言語科学会，pp.7-22
- 牛田梨恵香・小川一美・斉藤和志（2010）「親密性の違いに着目した発話の重なり方と会話事態の認知」『愛知淑徳大学論集—コミュニケーション学部・心理学研究科篇—』10 愛知淑徳大学コミュニケーション学部，pp.113-124
- 江口英子（1999）「調査報告 ティーチャートークにおける談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『日本語教育』102 日本語教育学会，pp.60-67
- 榎本美香（2009）『日本語における聞き手の話者移行適格場の認知メカニズム』ひつじ書房
- 大津友美（2004）「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス—「遊び」としての対立行動に着目して—」『社会言語科学』6（2）社会言語科学会，pp.44-53
- 大津友美（2007）「会話における冗談のコミュニケーション特徴—スタイルシフトによる冗談の場合—」『社会言語科学』10（1）社会言語科学会，pp.45-55
- 大野道邦（2000）「日本の社会と文化—「前近代」、「近代」、「ポスト近代」の構造的布置—」『社会学雑誌』17 神戸大学社会学研究会，pp.3-22
- 大場美和子・中井陽子・土井真美（2004）「会話への積極的参加の指導に向けて—第三者言語接触場面における談話技能と会話のスタイル分析—」『日本語教育方法研究会誌』11（1）日本語教育方法研究会，pp.22-23
- 大場美和子（2012）『接触場面における三者会話』ひつじ書房
- 大浜るい子・鈴木雅恵・多田美有紀（1998）「自由談話に見られるスピーチレベルシフト現象」『教育学研究紀要』44 中国四国教育学会，pp.389-397
- 大平未央子（2001）「ネイティブスピーカー再考」野呂香代子・山下

- 仁編『「正しさ」への問い—批判的社会言語学の試み—』三元社，
pp.85-110
- 岡崎眸（2002）「内容重視の日本語教育」細川英雄編『ことばと文化
を結ぶ日本語教育』凡人社， pp.49-66
- 岡崎眸（2007）「共生日本語教育とはどんな日本語か」岡崎眸監修『共
生日本語教育学—多言語多文化共生社会のために—』雄松堂出
版， pp.273-308
- 岡崎敏雄（2003）「共生言語の形成—接触場面固有の言語形成—」宮
崎里司・マリオット， H.編『接触場面と日本語教育—ネウスト
プニーのインパクト—』明治書院， pp.23-44
- 岡野喜美子（2000）「留学生の待遇表現使用—発話調査の結果から—
—」『早稲田大学日本語教育センター紀要』13 早稲田大学，
pp.1-13
- 岡部悦子（2003）「高校生・交換留学生のスピーチレベルシフト—女
子学生の課題解決場面を例として—」『長崎外大論叢』6 長崎外
国語大学・長崎外国語短期大学， pp.23-34
- 岡本能里子（1997）「教室談話における文体シフトの指標的機能—丁
寧体と普通体の使い分け—」『日本語学』16(3) 日本語教育学会，
pp.39-51
- 荻原稚佳子（2002）「日本語インタビューにおける「言いさし-割り込
み」の連鎖—対人コミュニケーションの視点から—」『異文化コ
ミュニケーション研究』14 神田外語大学異文化コミュニケーション
研究所， pp.57-77
- 加藤好崇（2010）『異文化接触場面のインターアクション—日本語母
語話者と日本語非母語話者のインターアクション規範—』東海
大学出版会
- 鎌田修（2003）「接触場面の教材化」宮崎里司・マリオット， H.編『接
触場面と日本語教育—ネウストプニーのインパクト—』明治書
院， pp.353-381
- 賈璐（2015）「現代日本語のスピーチレベル—同学年の初対面女子会

- 話を通して一」『国文学研究ノート』54 神戸大学, pp.63-74
- 川口良・角田史幸 (2005) 『日本語はだれのものか』吉川弘文館
- 川口良・角田史幸 (2010) 『「国語」という呪縛—国語から日本語へ、そして〇〇語へ—』吉川弘文館
- 川口良 (2014) 『丁寧体否定形のバリエーションに関する研究』くろしお出版
- 川口良 (2015) 「日・中・韓接触場面における討論の分析—談話における「逸脱」に注目して—」『文学部紀要』29 (1) 文教大学文学部, pp.1-36
- 河野理恵 (1999) 『「異文化コミュニケーション」としての『日本事情』—エスノメソドロジーからの示唆—』『21世紀の「日本事情」創刊号』くろしお出版, pp.40-53
- 金銀美 (2005) 「接触場面におけるコミュニケーション調整行動—日本語母語話者と韓国人日本語学習者の会話より—」『自然会話分析と会話教育—統合的モジュール作成への模索—』言語情報学研究報告 6 東京外国語大学大学院地域文化研究科 21世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」, pp.243-259
- 金珍淑・野々口ちとせ (2007) 「共生日本語教室における参加者間の談話分析—非対称な力関係を示す発話行為を中心に—」岡崎眸監修『共生日本語教育学—多言語多文化共生社会のために—』雄松堂出版, pp.203-221
- 串田秀也 (2005) 「参加道具としての文—オーバーラップ—発話の再生と継続—」串田秀也・定延利之・伝康晴編『活動としての文と発話』, ひつじ書房, pp.27-62
- 串田秀也 (2006) 『相互行為秩序と会話分析—「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化—』世界思想社
- 串田秀也・平本毅・林誠 (2017) 『会話分析入門』勁草書房
- 熊谷智子 (2000) 「言語行動分析の観点—「行動の仕方」を形づくる諸要素について—」『日本語科学』7 国立国語研究所, pp.99-113

- 熊谷智子・木谷直之（2010）『三者面接調査におけるコミュニケーション—相互行為と参加の枠組み—』くろしお出版
- 木暮律子（2002）「話者交替における発話の重なり—母語場面と接触場面の会話において—」『日本語科学』11 国立国語研究所，pp.115-134
- 西條美紀（2005）「接触場面の非対称性を克服する会話管理的方略」『社会言語科学』8（1）社会言語科学会，pp.160-188
- 酒井智美（2015）「スピーチレベルシフトに関する研究—親しい先輩・後輩の会話をもとに—」『東京女子大学言語文化研究』24 東京女子大学言語文化研究会，pp.36-50
- サックス，H.（1989）「会話データの利用法：会話分析事始め」『日常性の解剖学—知と会話—』北澤裕・西阪仰訳，マルジュ社，pp.93-173
（Sacks,H.（1972）An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology, In D. Sudnow (ed.), *Studies in Social Interaction*, The Free Press , pp.31-73)
- サックス，H.・シェグロフ，E.A.・ジェファソン，G.（2010）『会話分析基本論集：順番交替と修復の組織』西阪仰訳 世界思想社
（Sacks,H., Schegloff,E.A., & Jefferson, G.（1974）A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50(4), pp.696-735)
- 佐藤勢紀子・福島悦子（1998）「日本語学習者と母語話者における発話末表現の待遇レベル認識の違い」『東北大学留学生センター紀要』4 東北大学留学生センター，pp.31-40
- 真田信治編（2006）『社会言語学の展望』しおくろ出版
- 篠崎佳恵（2012）「初対面二者間会話におけるスピーチレベルの変遷とその要因—普通体の指標的意味に着目して—」『桜美林言語教育論叢』8 桜美林大学言語教育研究所，pp.15-28
- 芝原里佳（2012）「外国語学習とアイデンティティ—ネイティブ／ノンネイティブから複言語複文化能力保持者へ—」第9回国際交流基金クアラルンプール日本語教育会議，国際交流基金クアラ

ルンプール

(https://researchmap.jp/?action=cv_download_main&upload_id=106370)

- 渋谷勝己(2008)「スタイルの使い分けとコミュニケーション」『言語』
37 (1) 大修館書店, pp.18-25
- 嶋原耕一 (2014)「母語場面及び接触場面の同等初対面会話における
アップシフトについて」『社会言語科学』16 (2) 社会言語科学
会, pp. 66-74.
- 辛銀眞 (2008)「日本国内接触場面のフォリナー・トーク使用に關す
る一考察一非母語話者日本語教師の会話調査を通して一」『早稲
田日本語教育』3 早稲田大学日本語教育研究科, pp.25-38
- 辛銀眞 (2010)『接触場面のフォリナー・トークに關する実証的研究:
国内現職非母語話者日本語教師の言語調整行動』早稲田大学大
学院博士学位論文
- 申媛善 (2007a)「相互行為からみたスピーチスタイルシフト一聞き手
による「同調」に着目して一」『筑波応用言語学研究』14 筑波
大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース,
pp.59-72
- 申媛善 (2007b)「日本語と韓国語における文末スタイル変化の仕組み
一時間軸に沿った敬体使用率の変化に着目して一」『日本語科学』
22 国立国語研究所, pp.173-195
- 申媛善 (2009)「韓国人日本語学習者の文末スタイルの運用一時間軸
に沿った敬体使用率の変化に着目して一」『日本語教育』140 日
本語教育学会, pp.81-91
- 杉原由美 (2003)「地域の多文化間活動における参加者のカテゴリー
化実践一エスノメソドロジーの視点から一」『世界の日本語教
育』13 国際交流基金日本語国際センター, pp.1-18
- 杉原由美 (2006)「留学生・日本人大学生相互学習型活動における共
生の実現をめざして一相互行為に現る非対称性と権力作用の観
点から」リテラシーズ研究会編『WEB 版リテラシーズ』3 (2)
くろしお出版, pp.18-27

- 鈴木睦（1997）「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」田窪行則編『視点と言語行動』くろしお出版， pp.45-76
- 曹大峰（2008）「中国における日本語教科書作成一歩み・現状・課題一」『言語文化と日本語教育』35 お茶の水女子大学日本言語文化学会， pp.1-9
- 高崎みどり・立川和美編（2008）『ここからはじまる文章・談話』ひつじ書房
- 高梨克也（2016）『基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法』ナカニシヤ出版
- 高野照司（2012）「ことばのスタイルを理解し応用する」日比谷潤子編『はじめて学ぶ社会言語学』ミネルヴァ書房， pp.248-269
- 高橋太郎（1993）「省略によってできた述語形式」『日本語学』12（9）明治書院， pp.18-26
- 高橋美奈子・谷部弘子・本田明子（2017）「第三者言語接触場面におけるスピーチレベルシフトの機能—日本語学習者同士の自然談話の分析から—」『ことば』38 現代日本語研究会， pp.46-62
- 高見澤孟・伊藤博文・ハント蔭山裕子・池田悠子・西川寿美・恩村由香子（2004）『基本用語辞典（新・はじめての日本語教育）』アスク出版
- 高宮優実（2017）「普通体を基調とした自然談話に現れる丁寧体について—不満を表明する際のアップシフトに着目して—」『ことば』38 現代日本語研究会， pp.63-82
- 滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社
- 竹田らら（2016）「重複発話から創出される協調性—親疎が異なった日本語相互行為の異ジャンル間比較からの一考察—」『社会言語科学』19（1）社会言語科学会， pp.87-102
- 谷口まや（2004）「日本語の講演の談話におけるスピーチ・レベル・シフトの形態と機能」『早稲田大学日本語教育』4 早稲田大学大学院日本語教育研究科， pp.117-129
- 玉石知佳・武田誠・伊吹香織・岩崎浩与司・杉本美穂・藤本恭子（2016）

- 「初級日本語学習者同士の初対面会話活動における意識—好印象を与える/受ける要因に着目して—」『日本語教育方法研究会誌』23(1) 日本語教育方法研究会, pp.26-27
- 陳新・川口良 (2012)「中国語を母語とする日本語上級学習者の文末スタイルシフトに関する一考察」『言語と文化』25 文教大学言語文化研究科附属言語文化研究所, pp.70-100
- 陳文敏 (2001)「接触場面の会話に見られる「中途終了型発話」—台湾人日本語学習者の場合—」『言葉と文化』2 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻, pp.175-191
- 陳文敏 (2003)「同年代の初対面同士による会話に見られる「ダ体発話」へのシフト—生起しやすい状況とその頻度をめぐって—」『日本語科学』14 国立国語研究所, pp.7-28
- 陳文敏 (2004)「台湾人上級日本語学習者の初対面接触場面会話におけるスピーチレベル・シフト—日本語母語話者同士による会話との比較—」『日本語教育論集』20 国立国語研究所, pp.18-33
- 鄭京姫 (2010)「「二分化された日本語」の問題—学習者が語る「日本語」の意味に注目して」リテラシーズ研究会編『リテラシーズ—ことば・文化・社会の日本語教育へ—』7 くろしお出版, pp.1-10
- 寺尾綾 (2010)「文末形式の運用とスタイル切り換え—日本語を学ぶ中国語母語話者の縦断データから—」『阪大日本語研究』22 大阪大学院文学研究科日本語講座, pp.113-142
- 田鴻儒 (2009)「中国における上級日本語学習者のスピーチレベルの使い分け—初対面会話の年齢に応じて—」『大阪大学言語文化学』18 大阪大学言語文化学会, pp.169-181
- 都恩珍 (2009)「重なり後の発話の中断と修復現象の一側面」『桜花学園大学人文学部研究紀要』11 桜花学園大学, pp.69-77
- 永井涼子 (2007)「看護師による「申し送り」会話の談話交替管理—スタイルシフトを中心に—」『日本語教育』135 日本語教育学会, pp.80-89
- 日本語記述文法研究会編 (2009)『現代日本語 7 第 12 部談話第 13 部

待遇表現』くろしお出版

日本語教育学会（2008）『外国人に対する実践的な日本語教育の研究
開発（「生活者としての外国人」に対する日本語教育事業一報告
書）』平成19年文化庁日本語教育研究委嘱，日本語教育学会
ネウストプニー，J.V.（1995）『新しい日本語教育のために』大修館
書店

長谷川紀子（2005）「日本語学習者の割り込み発話」『千葉大学日本文
化論叢』6 千葉大学文学部日本文化学会，pp.105-90

林宅男（2008）『談話分析のアプローチ—理論と実践—』研究社

春口淳一（2004）「言語ホストとしての上級学習者の自己参加調整ス
トラテジー—第三者言語接触場面における会話参加の一考察—」
『千葉大学日本文化論叢』5 千葉大学文学部日本文化学会，
pp.86-73

日高水穂（2005）「ことばの切りかえ」上野智子・定延利之・佐藤和
之・野田春美編『ケーススタディ日本語のバラエティ』おうふ
う，pp.66-71

日高水穂・伊藤美樹子（2007）「スピーチレベルシフトの表現効果—
シナリオ「12人の優しい日本人」を題材に—」『秋田大学教育文
化学部研究紀要、人文科学・社会科学』62 秋田大学教育文化
学部，pp.1-12

一二三朋子（1995）「母国語話者と非母国語話者との会話における母
国語話者の意識的配慮の検討」『教育心理学研究』43（3）教育
心理学会，pp.277-288

一二三朋子（2000）「日本人との会話における外国人留学生の意識的
配慮の検討」『東京成徳大学研究紀要』7，東京成徳大学文学部・
応用心理学部，pp.21-28

一二三朋子（2003）「意識的配慮の共生的学習に関する因果モデルの
検討—アジア系留学生の場合—」『教育心理学研究』51 教育心
理学会，pp.175-186

一二三朋子（2004）「意識的配慮の共生的学習に関する因果モデルの

- 検討—ボランティア日本語教室アジア系学習者の場合—』『教育心理学研究』52 教育心理学会, pp.93-106
- 一二三朋子 (2010) 「多言語・多文化社会での共生的学習とその促進要因の検討—日本におけるアジア系留学生を対象に—」『日本語教育』146 日本語教育学会, pp.76-89
- ファン, S.K. (1999) 「非母語話者同士の日本語会話における言語問題」『社会言語科学』2 (1) 社会言語科学会, pp.37-48
- ファン, S.K. (2003) 「日本語の外来性 (foreignness) —第三者言語接触場面における参加者の日本語規範及び規範の管理から—」宮崎里司・マリオット, H.編『接触場面と日本語教育—ネウストプニーのインパクト—』明治書院, pp.23-44, pp.3-21
- ファン, S.K. (2006) 「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」国立国語研究所編『日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性—』アルク, pp.120-137
- ファン, S.K. (2010) 「異文化接触—接触場面と言語—」西原鈴木編『言語と社会・教育』朝倉書店, pp.75-99
- ファン, S.K. (2011) 「第三者言語接触場面と日本語教育の可能性」『日本語教育』150 日本語教育学会, pp.42-55
- ファン, S.K. (2016) 「非母語話者同士の日本語会話における言語問題」村岡英裕・ファン, S.K.・高民定編『接触場面の言語学—母語話者・非母語話者から多言語話者へ—』ココ出版, pp.131-152
- 深澤のぞみ (1997) 「会話への積極的参加としての割り込み発話—異文化間コミュニケーションギャップとの関連—」『平成9年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会, pp.147-162
- 福富理恵 (2009) 「接触場面における母語話者と学習者のスピーチレベルの使い分け」『言語文化と日本語教育』37 お茶の水女子大学日本言語文化学会(第37回日本語言語文化学会研究発表要旨), pp.106-109
- 藤井桂子・大塚純子 (1994) 「会話における発話の重なりについて—

- 協力的側面を中心に一」『言語文化と日本語教育』8 お茶の水女子大学日本語言語文化学会， pp.1-13
- 藤井桂子（1995）「発話の重なりについて一分類の試み一」『言語文化と日本語教育』10 お茶の水女子大学日本語言語文化学会， pp.13-23
- ブラウン， P.・レヴィンソン， S.C.（2011）『ポライトネス：言語使用における、ある普遍現象』田中典子監訳， 斎藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子訳， 研究社
（Brown,P.&Levinson,S.（1987） *Politeness : Some Universals in Language Usage*. Cambridge university press）
- 堀口純子（1997）『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 本田明子（1997）「発話の「重なり」と談話進行」現代日本語研究会編『女性のことば（職場編）』， ひつじ書房， pp.197-212
- 本田明子（2016）「自然談話にみられる重なりの諸相一親しい関係の日常談話から一」現代日本語研究会編『談話資料日常生活のことば』 ひつじ書房， pp.295-309
- 前田理佳子（1999）「在日コリアン一世の談話におけるスタイル切り替え一スピーチレベルシフトの様式に着目して一」『待兼山論叢・日本学篇』 33 大阪大学大学院文学研究科， pp.33-48
- 牧野成一（1991）「ACTFLの外国語能力基準およびそれに基づく会話能力テストの理念と問題」『世界の日本語教育』1 国際交流基金日本語国際センター， pp.15-32
- 町田佳世子（2002）「初対面の会話における発話の重なりの効果」『北海道東海大学紀要人文社会科学系』 15 北海道東海大学， pp.189-210
- 水谷信子（1993）「「共話」から「対話」へ」『日本語学』 12（4） 明治書院， pp.4-10
- 水野義道（1988）「中国語のあいづち」『日本語学』 7（12） 明治書院， pp.18-23
- 南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店

- 三牧陽子（1993）「談話の展開としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要 第1部門』42（1）大阪教育大学， pp.39-51
- 三牧陽子（1996）「待遇レベル・シフト」上田功・高見健一・蓮沼昭子・砂川有里子・野田尚史編集『言語探究の領域—小泉保博士古稀記念論文集—』大学書林， pp.437-445
- 三牧陽子（1997）「対談における FTA 補償ストラテジー—待遇レベル・シフトを中心に—」『大阪大学留学生センター研究論集多文化社会と留学生交流』創刊号 大阪大学留学生センター， pp.59-78
- 三牧陽子（2000）「丁寧体基調の談話にみる独話的発話・直接引用・心情の直接表出—「働きかけ方式」のポライトネス・ストラテジーとして—」『大阪大学留学生センター研究論集多文化社会と留学生交流』4 大阪大学留学生センター， pp.37-53
- 三牧陽子（2002）「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示—初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に—」『社会言語科学』5（1）社会言語科学会， pp.56-74
- 三牧陽子（2007）「文体差と日本語教育」『日本語教育』134 日本語教育学会， pp.58-67
- 三牧陽子（2013）『ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ—』くろしお出版
- 三牧陽子（2015）「言いさしに見るポライトネス」『日本語学』34（7）明治書院， pp.26-36
- 宮武かおり（2007）「日本人友人間の会話におけるスピーチレベルの実態」『TUFS 言語教育学論集』2 東京外国語大学大学院地域文化研究科言語教育学講座， pp.19-31
- 宮武かおり（2009）「日本語会話のスピーチレベルを扱う研究の概観」富盛伸夫・峰岸真琴・川口裕司編『コーパスに基づく言語学教育研究報告』1 東京外国語大学大学院地域文化研究科グローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」， pp.305-319

- 村岡英裕（2003）「アクティビティと学習者の参加—接触場面にもとづく日本語教育アプローチのために—」宮崎里司・マリオット，H.編『接触場面と日本語教育—ネウストプニーのインパクト—』明治書院，pp.245-259
- 村岡英裕（2006）「接触場面における問題の種類」村岡英裕編『多文化共生社会における言語管理—接触場面の言語管理研究 vol.4—』（千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 129），千葉大学大学院社会文化科学研究科，pp.103-116
- 村岡英裕編（2010）『接触場面の変容と言語管理—接触場面の言語管理研究 vol.8—』（千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 228）千葉大学大学院社会文化科学研究科
- 村岡英裕（2016）「接触場面研究のパラダイム」村岡英裕・ファン，S.K.・高民定編『接触場面の言語学—母語話者・非母語話者から多言語話者へ—』ココ出版，pp.3-18
- メイナード，泉子・K.（1991）「文末の意味—ダ体とデスマス体の混用について—」『言語』20 大修館書店，pp.75-80
- メイナード，泉子・K.（2001）「心の変化と話しことばのスタイルシフト」『言語』30 大修館書店，pp.38-45
- メイナード，泉子・K.（2004）『談話言語学—日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究—』，くろしお出版
- 八木真奈美（2007）「多言語使用と感情という視点からみる、ある「誤用」—一定住外国人のエスノグラフィーから—」リテラシーズ研究会編『リテラシーズ—ことば・文化・社会の日本語教育へ—』3 くろしお出版，pp.33-46
- 安井永子（2017）「発話と活動の割り込みにおける参与—話し手の振る舞い「について」の描写が割り込む事例から—」片岡邦好・池田佳子・秦かおり編『コミュニケーションをを枠づける—参与・関与の不均衡と多様性』くろしお出版，pp.155-175
- 柳田直美（2015）『接触場面における日本語母語話者のコミュニケー

- シヨン方略—情報やりとり方略の学習に着目して—』ココ出版
 谷部弘子（2015）「日本語のスピーチスタイルに対する学習者の意識—短期留学生へのインタビューから—」『ことば』36 現代日本語研究会， pp.34-47
- 山口和代（2002）「ポライトネスに応じた言語形式と人間関係の認知—中国人ならびに台湾人留学生と日本人母語話者との比較の視点から—」『社会言語科学』5（1）社会言語科学会， pp.75-84
- 楊虹（2005）「中日接触場面の話題転換—中国語母語話者に注目して—」『言語文化と日本語教育』30 お茶の水女子大学日本語文化学会， pp.31-40
- 楊虹（2007）「中日母語場面の話題転換の比較—話題終了のプロセスに着目して—」『世界の日本語教育』17 国際交流基金日本語国際センター， pp.37-52
- 尹智鉉・春口淳一（2017）「多文化社会に寄与しうる接触場面の可能性—「おもてなしの日本語」の概念生成をめざして—」『社会言語科学会第40回大会発表論文集』社会言語科学会， pp.204 - 207
- 李恩美（2008）『日本語と韓国語の初対面二者間会話における対人配慮行動の対照研究—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—』東京外国語大学博士学位論文
- 林君玲（2005）「台湾人学習者の初対面日本語会話におけるスピーチレベルの使用実態」宇佐美まゆみ編『自然会話分析と会話教育—統合的モジュール作成への模索—』言語情報学研究報告6 東京外国語大学大学院地域文化研究科 21世紀COEプログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」， pp.261-280
- 劉佳琿（2011）「会話における発話の重なりについて」『言語と文化』12 名古屋大学大学院国際言語文化研究科， pp.49-66
- 劉佳琿（2012）「会話における割り込みについての分析—日本語母語話者と中国人日本語学習者との会話の特徴—」『異文化コミュニケーション研究』24 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所， pp.1-24

- 劉雅静 (2013) 「友人同士 3 者間会話におけるスピーチレベルシフトについて—上下関係のある親しい友人同士の会話データをもとに—」『言語学論叢』オンライン版 6, pp.34-68
- 芳軼琛・岩崎浩与司・齋藤里衣子・松浦恵子 (2013) 「非母語話者同士の学びを支える実践—韓国・中国・スウェーデンをつなぐ遠隔交流の試み—」『2013 年 WEB 版日本語教育実践研究フォーラム報告』, pp.1-10
- 脇田里子・三谷閑子 (2011) 「「文章表現」と「口頭表現」の連携—超級日本語学習者を対象にした試み—」『同志社大学日本語・日本文化研究』9 同志社大学日本語・日本文化教育センター, pp.59-79
- Fan, S.K. (1994) Contact situations and language management. *Multilingua*, 13(3), pp.237-252
- Ohri, R. (2006) 「母語話者による非母語話者のステレオタイプ構築—批判的談話分析の観点から—」リテラシーズ研究会編『リテラシーズ—ことば・文化・社会の日本語教育へ—』2 くろしお出版, pp.145-163
- Schegloff, E.A. (1987) Recycled turn beginnings : A precise repair mechanism in conversation's turn-taking organization. In Graham Button & John R. E. Lee (eds.), *Talk and Social Organization*, Clevedon/Philadelphia: Multilingual Matters, pp.70-85
- van Lier, L. & Matsuo, N. (2000) Varieties of Conversational Experience : Looking for Learning Opportunities. *Applied Language Learning*, 11 (2), pp.265-287

参考事典

- 『応用言語学事典』(2003) 編集主幹小池生夫, 編集委員井出祥子・河野守夫・鈴木博・田中春美・田辺洋二・水谷修, 研究社

参考教科書

- 『総合日語 (第 1 冊～第 4 冊)』(2007) 彭广陆・守屋三千代編著, 北

京大学出版社

『みんなの日本語初級Ⅰ第2版』（2012）スリーエーネットワーク編著，スリーエーネットワーク

『みんなの日本語初級Ⅱ第2版』（2013）スリーエーネットワーク編著，スリーエーネットワーク

『みんなの日本語中級Ⅰ』（2008）スリーエーネットワーク編著，スリーエーネットワーク

『みんなの日本語中級Ⅱ』（2012）スリーエーネットワーク編著，スリーエーネットワーク

付録

談話資料サンプル

本研究の談話資料は、「宇佐美まゆみ（2015）「BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット（2015年改訂版）」を利用して作成したものである。以下、相手場面と第三者場面の1部を談話資料サンプルとして付す。

「相手場面」の談話資料サンプル

発話文 番号	発話 文終	話者	発話内容
1	*	CNS2	やっほー、久しぶり。
2	*	JNS2	久しぶり。
3	*	CNS2	なんか、今週初めて会ったよね。
4	*	JNS2	あ、そうだね。
5	*	CNS2	<今週会って>{<}>。
6-1	/	JNS2	<日曜日>{>},,
7	*	CNS2	そうそうそう。
6-2	*	JNS2	日曜日面接があったから。
8	*	CNS2	どうだった？。
9	*	JNS2	あら、どこの面接なんだっけかな。
10	*	CNS2	物流会社、また？。
11	*	JNS2	ああ、そう。
12	*	CNS2	え、本当に？<CNS2の笑い>。
13	*	JNS2	そうそうそう、物流しか見てないから。
14	*	CNS2	<CNS2の笑い> そうなんだ。
15	*	JNS2	でも、そこは(うん)、その面接があつて、もし合格だったら、その日のうちか、次の日の朝には連絡がくるの。
16	*	CNS2	ああ、そうなんだ。
17	*	JNS2	合格ですって。
18	*	CNS2	うん。
19	*	CNS2	<それで>{<}>。
20	*	JNS2	<で、その>{>}間のところはまだ来てないから【。
21	*	CNS2	】ああ、じゃあ、また新しい。
22	*	JNS2	落ちたと思う。
23	*	CNS2	そうなんだ。
24	*	CNS2	え、でも、もう内定(うん)1つももらったじゃん。
25	*	JNS2	そう、そこね、中国へ行けなさそう。
26	*	CNS2	ああ、中国に行きたいんだ、<やっぱり>{<}>。
27	*	JNS2	<うん>{>}。
28	*	JNS2	中国じゃなくてもいいけど>{<}>。
29	*	CNS2	<そうですね、中国語>{>}がそんなにうまいから。
30	*	JNS2	マジか[↑]<JNS2の笑い>。
31	*	CNS2	うまい、うまい、うまい。
32	*	JNS2	<いや>{<}>。
33	*	CNS2	<本>{>}当に中国人(いや)らしいよ。
34	*	JNS2	でも、もっとちゃんと勉強したい。
35	*	CNS2	そっか。
36	*	JNS2	中国に帰るんだよね、<「○○」ちゃん>{<}>。
37	*	CNS2	<そうよ>{>}、1ヶ月しかないよ。
38	*	JNS2	あと？。
39	*	CNS2	2ヶ月、本当にもう2ヶ月。
40	*	CNS2	8月の、たぶん、6日ぐらい、(うん)帰る。
41	*	JNS2	夏休み、どっか旅行行く？。

42	*	CNS2	行かない。
43	*	JNS2	京都行った？。
44	*	CNS2	京都行った、もう。
45	*	JNS2	いいなあ。
46	*	CNS2	京都、北海道全部<行ってたし><>。
47	*	JNS2	<あ、そうなの><>？。
48	*	CNS2	あんまり、そう、未練がない<CNS2の笑い>。
49	*	JNS2	あ、マジか[↑]。
50	*	CNS2	そうそうそう、観光地に対して未練がないけど、友達に対しては、まあ…。
51	*	JNS2	ああ、そうだね。
52	*	CNS2	そうよ。
53-1	/	CNS2	最近、なんか、ときどき夜になると、(うん)携帯の中の写真を見て、
54	*	JNS2	えー、かわいい。
53-2	*	CNS2	泣いちゃった。
55	*	JNS2	えー、かわいい。
56	*	CNS2	や、本当に、<なんか><>【】。
57	*	JNS2	】<本当に><>？。
58	*	CNS2	うん。
59	*	JNS2	そうだよね。
60	*	CNS2	“ああ、みんなに離れたくないなあ”って、<ずっと思ってた><>。
61	*	JNS2	<そうだね><>、そうだね。
62-1	/	JNS2	離れた後、
63	*	CNS2	ああ、そうなんだ。
62-2	*	JNS2	離れた後に、携帯を見て、“ああ、楽しかったなあ”って<思う><>。
64	*	CNS2	<そう><>、めちゃくちゃ楽しくかった<>。
65	*	JNS2	<そう><>。
66	*	JNS2	<笑いながら>まだ終わってない。
67	*	CNS2	まだ終わっていないけどね。
68	*	CNS2	今から(そう)想像してたよ、別れの時の場面。
69	*	JNS2	ああ、別れの時はね、ぜんぜん“じゃねー”みたいな(笑い)。
70	*	CNS2	気軽にやる？。
71	*	JNS2	そう。
72	*	CNS2	私、たぶんどできない、<絶対泣く><>。
73	*	JNS2	<そうだよね><>。
74	*	CNS2	そうよ。
75	*	JNS2	別れ会とかなかったし。
76	*	CNS2	ある、私たち。
77	*	JNS2	ああ、そうなんだ。
78	*	CNS2	7月の23日(えー)、私と「〇〇」と「〇〇」さん(共通の友人「CNS3」と「KNS4」)さん、<3人で><>。
79	*	JNS2	<いいね><>。
80	*	JNS2	それはいいね。
81	*	JNS2	わっち？。
82	*	CNS2	わっち《少し間》。

83	*	JNS2	<いいね>{<}>。
84	*	CNS2	<わっち>{>}といっしょに。
85	*	CNS2	たぶん午後の 2 時から夜 2 時まで、<ずっと>{<}>。
86	*	JNS2	<えー>{>}、いいなあ。
87	*	CNS2	たぶん泣きづづけるよ<CNS2 の笑い>。
88	*	CNS2	“みんな、ありがとう”とか。
89	*	JNS2	いいね。
90	*	CNS2	いや…。
91	*	JNS2	すごくあっさり別れた、<中国の時は>{<}>。
92	*	CNS2	<でも、やりたく>{>}ない。
93	*	JNS2	そういうの？。
94	*	CNS2	別れ会とか。
95	*	JNS2	うん、悲しくなっちゃうしね。
96	*	CNS2	そう、めっちゃ悲しくなっちゃう。
97	*	JNS2	帰った後がね、“ああ、中国戻りたいなあ”となる。
98	*	CNS2	ああ、そうなんだ。
99	*	JNS2	そう。
100	*	JNS2	でも、何っていうだろう、留学生って、立場があって、楽しいわけじゃない[↑]。
101	*	CNS2	そうそうそう、それは特別な<日本で>{<}>。
102	*	JNS2	<そうそう>{>}。
103-1	/	JNS2	自由だし、,
104	*	CNS2	自由だし。
103-2	*	JNS2	特にやることもないし。
105	*	CNS2	そう、勉強もなんかあんまりまじめにしないで(そうそうそう)てもいいし<CNS2 の笑い>。
106	*	JNS2	そう(JNS2 の笑い)。
107	*	JNS2	いや、しなければだめ<笑い>、<しなければだめだけど>{<}>。
108	*	CNS2	<私あんまり>{>}勉強していない(うん)けど、この 1 年間。
109	*	JNS2	でも、中国であんまり…。
110	*	JNS2	でも、自然にしゃべれるようになるんじゃない、<しゃべったら>{<}>。
111	*	CNS2	<そうそう>{>}そう。
112	*	JNS2	変な言葉も覚えるし。
113	*	CNS2	中国のどこが好きなの？。
114	*	CNS2	でも、なんか、中国が嫌な日本人(うん)が多いじゃん。
115	*	JNS2	そうだね。
116	*	CNS2	環境もあんまり(うん)好きじゃないし、汚い(うん)から。
117	*	JNS2	なんかね、中国にいる時、けっこう中国の悪口をたくさん言っていたんだ。
118-1	/	JNS2	“なんで隣の中国人が汚いなあ”みたいな<笑い>,,
119	*	CNS2	ああ、そうそう。
118-2	*	JNS2	言ったけど。
120	*	JNS2	なんだろうね。
121	*	CNS2	でも、やっぱり懐か<しい>{<}>。
122	*	JNS2	<うん>{>}、食べ物もおいしかったし。
123	*	CNS2	ああ、そう、それは確かに。
124	*	CNS2	私もなんか、今、写真を(でしよう)見る時、“ああ、食べたい”って<言う>{<}>。

「第三者場面」の談話資料サンプル

発話文 番号	発話 文終	話者	発話内容
1	*	CNS3	もう日本に来て、2ヶ月ぐらい過ぎちゃったよね。
2	*	KNS3	うん、まあ、そろそろ####、もう早い、2ヶ月過ぎちゃった <KNS3の笑い>。
3	*	CNS3	そう、じゃ、日本に来てどこかに旅行に行きたいところがある？。
4	*	KNS3	なんか行きたい、ところが本当にいろいろあるけど、まあとりあ えずお金がないから、それは。
5	*	CNS3	まあ、お金はともかく。
6	*	KNS3	そう、そう、お金はともかく。
7	*	KNS3	まあ、今は一番行きたいところは北海道。
8	*	CNS3	北海道、いいよ。
9	*	KNS3	そう、北海道めっちゃいいよ><。
10	*	CNS3	<北海道>>本当にいいよ。
11	*	CNS3	でも夏じゃなくて、私【。
12	*	KNS3	】冬に行ったの？。
13	*	CNS3	冬に行ったから、(へー)、冬の北海道めちゃうちゃ好き。
14	*	KNS3	えっ、でも、寒くない？、寒そう。
15-1	/	CNS3	3月に、
16	*	KNS3	ああ、<3月か><。
15-2	*	CNS3	<3月に>>行ったけど、そのときめちゃうちゃ寒かった。
17	*	KNS3	そうよね、<北海道に><。
18	*	CNS3	<最初の>>日多分マイナス10ぐらい<あった><。
19	*	KNS3	<へー>>、やっぱ北海道一年の半分ぐらいこれじゃない？。
20	*	CNS3	そうそうそう。
21	*	CNS3	でも、めちゃうちゃきれいだった。
22	*	CNS3	私が行くときはもうちょっと雪が溶け始めたけど、(うん)あ、き れいだった、流氷も見たし。
23	*	KNS3	あ、本当。
24	*	CNS3	流氷。
25	*	KNS3	流氷。
26	*	CNS3	めちゃうちゃきれいだった。
27	*	KNS3	あ、いいね、本当行ってみたい。
28	*	KNS3	あ、牧場‘まきば’とか行った？牧場‘まきば’とか行った？。
29	*	CNS3	牧場‘まきば’？。
30	*	KNS3	その、もくちょうみたいな。
31	*	CNS3	えー？。
32	*	KNS3	ええと、なんか牛とか<KNS3の笑い>。
33	*	CNS3	<笑いながら>牧場‘ぼくちょう’。
34	*	CNS3	行かなかった、冬だし。
35	*	KNS3	あ、確かに牛は冬には無理かなあ。
36	*	CNS3	うん、それに小樽にも行った。
37	*	KNS3	小樽？あ、なんか聞いたことあるかも。
38	*	CNS3	あそこ、あそこ一番お勧め。

39	*	KNS3	お、小樽？。
40	*	CNS3	うん。
41	*	KNS3	いいね。
42	*	KNS3	なんか【】。
43	*	CNS3	【】小樽が、そういうガラス《少し間》。
44	*	KNS3	ガラスの。
45	*	CNS3	ガラス、ガラスの製品とかたくさんあくって>{<}。
46	*	KNS3	<ああ>{>}、それは有名。
47	*	CNS3	めちゃくちゃきれい。
48	*	KNS3	いいね。
49	*	CNS3	それと、旭山‘あさひやま’動物園。
50	*	KNS3	あ、動物園もある。
51	*	CNS3	それは‘あさひやま’。
52	*	KNS3	あさやま？。
53	*	CNS3	旭川‘あさひかわ’、‘あさひやま’かな、旭川市の、うん、動物園で直接ペンギンが歩いているのを(ああ)すぐ近くで見れる。
54	*	KNS3	ああ、なんか聞いたことあるかも>{<}。
55	*	CNS3	<聞いた>{>}ことがくあるよね>{<}。
56	*	KNS3	<そうそう>{>}、そのペンギンくでもめっちゃ有名じゃない>{<}。
57	*	CNS3	<ペンギン分かる？>{>}。
58	*	KNS3	そうそう、<そうそうそうそうそう>{<}。
59	*	CNS3	<めっちゃ有名、うん>{>}。
60	*	KNS3	あ、それも北海道にあったんだ、いいね、本当にいつてみたい。
61	*	KNS3	何泊で行ったんだ？。
62	*	CNS3	7日間。
63	*	KNS3	7日。
64	*	CNS3	7日間で、重井港‘しげいこう’と網走‘あばしり’と、富良野‘ふらの’美瑛‘びえい’、旭山‘あさひやま’、‘あさひかわ’、うん、網走‘あばしり’だけ？。
65	*	KNS3	先、大丈夫、大丈夫(笑いながら)、まあ、いいよ。
66	*	CNS3	小樽おたると札幌。
67	*	KNS3	あ、札幌まで行ったんだ。
68	*	CNS3	うん。
69	*	KNS3	ああ、いいね。
70	*	KNS3	で、3月、あ、でも、本当にあっちこっち行ったんだよね。
71	*	CNS3	そう。
72	*	CNS3	それと、それに、あれ、何だっけ？。
73	*	KNS3	なんか3月なら、その1学期始まるすぐ前に？。
74	*	CNS3	うん。
75-1	/	CNS3	でも、4月ぐらい学期始まるから、
76	*	KNS3	あ、そうだよ。
75-2	*	CNS3	時間余裕だよ。
77	*	CNS3	3月の時北海道と関西に行ったの。
78	*	KNS3	休みがいつか、いつからだんだっけ？。
79	*	CNS3	休みはたぶん本当に、2月はもう休みだと思う。
80	*	KNS3	うん、2月くと3月>{<}。
81	*	CNS3	<本当の>{>}日本の冬休み、春休み、春休みは長い。

82	*	KNS3	2月、3月、2ヶ月ぐらい？。
83	*	CNS3	そう。
84	*	CNS3	で、1月 1月、あ、12月の最後の週と1月の最初の週もく休み><【。
85	*	KNS3	】<本当の>{>}休みだよ、そのクリスマスあたり。
86	*	CNS3	そう、クリスマスから、元日まで(うん)、けっこう…。
87	*	CNS3	休みは本当に長かつ、長かった。
88	*	KNS3	なんか、日本の夏休みは韓国と比べると、あまり長なくて、今、ちょっと寂しい、(うん)、ちょっと悲しくなる。
89	*	CNS3	でも、春休みはめちゃくちゃ長い。
90	*	KNS3	それは良かったね<笑い>。
91	*	CNS3	うん。
92	*	CNS3	まあ、でも、冬休み時、帰るから、そんなに時間できないね。
93	*	KNS3	まあ、私は1月末だ、末なごろに、たぶん帰ると思う。
94	*	CNS3	えっ、あれはもう、だから、春休みはすぐ帰るよね。
95	*	KNS3	うん、たぶんそうだと思うよ。
96	*	KNS3	学期終わったら、すぐ、すぐ帰らなきゃ、その次、その次の、なんか、韓国の受講、受講の申し込みができないから、<すぐ帰らなきゃ><。>
97	*	CNS3	<帰った>{>}ら、4年生？。
98	*	KNS3	ああ、実は、4年の2学期目だよ、4年生の(えー)もうすぐ卒業だよ、考えたくない。
99	*	CNS3	卒論はまだ書い…。
100	*	KNS3	うちの学科は卒論はいらないけど、いないけど。
101	*	KNS3	いや、でも、私中国語、中国語、推薦してるから、中国科、中国語学科は必要だよ、卒論必要だよ。
102	*	CNS3	うん。
103	*	CNS3	なんか、本当に北海道に行くとしたら、まあ、1月もいいかも、雨が降ってるかどうかわからないけど。
104	*	KNS3	そうか、1月が寒すぎ<じゃないか><。>
105	*	CNS3	<ちょうど>{>}冬休みあるよ。
106	*	KNS3	まあ、じゃんと、12月？。
107	*	KNS3	冬に行くのはいいの？=。
108	*	KNS3	=<なんか><。>
109	*	CNS3	<そう>{>}、雪があるから。
110	*	CNS3	夏に行ってもいいよ、ラベンダーがあるから。
111	*	KNS3	ラベンダー、でも、ラベンダーより雪のほうがいいんだけど。
112	*	CNS3	私も。
113	*	KNS3	ははははは<KNS3の笑い>。
114	*	CNS3	それに、北海道に北海道に行くとしたら、ちょうど、その7日間の、なんか、電車のバスがあつて。
115	*	KNS3	あ、ちょうどあるか。
116	*	CNS3	7日間特急とかの売れないやつで、(うん)たぶん1万円ぐらい。
117	*	KNS3	あ、1万円だよ。
118	*	CNS3	7日間だよ。

謝辞

論文の執筆にあたって、多くの方々からご指導、ご協力をいただきました。ここに記し、心から深く感謝申し上げます。

まず、文教大学の指導教官の川口良先生に厚く御礼申し上げます。2010年に修士課程で先生に出会ってから、先生の丁寧なご指導の下で、談話分析という研究手法をはじめ、研究の基本や研究者としての姿勢などに関してもいろいろ学ばせていただきました。先生の、研究などに対する真摯な態度を間近で感じながら研究できたことを、心から幸運に存じます。本稿の執筆中、挫けそうになった時、先生からいただいた貴重なご助言・ご示唆及び温かいお励ましのおかげで、ここまで歩んできたと思います。川口先生の厳しくも温かいご指導の下で、今の私に成長できたと存じます。その感謝の気持ちは、どのような言葉を使っても言い表せるものではありません。

副指導教官の蔣垂東先生、福田倫子先生には、文教大学大学院在学中に、言語研究の基本的な知識や理論について多くのことを教えていただきました。特に、福田先生に言語研究のための統計処理に関する知識などを丁寧に教えていただきました。そして、文教大学名誉教授の加納陸人先生に日本語教育の見方などについていろいろ教えていただきました。文教大学大学院言語文化研究科長の白井啓介先生に常に温かく励ましていただきました。文教大学大学院言語文化研究科言語文化専攻において研究を続けることができたのは、優しく、時に厳しくご指導くださった先生方のおかげとっております。また、論文の審査を行ってくださった文教大学の芦田川祐子先生、お茶の水女子大学の佐々木泰子先生には、それぞれのご専門の立場から貴重なご意見をいただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。

会話録音に協力してくださった調査参加者・調査協力者に御礼申し上げます。皆様のご協力なしには、そもそも研究を行うことはできませんでした。また、文字化に綿密なネイティブチェックをしてくださった同言語文化研究科の関根安亮さん、いつも激励してくださった院

生室の仲間、本当にありがとうございました。

また、アドバイザーの元文教大学総務課の小太刀澄江局長、文教大学名誉教授近藤功様のご一家に、たいへんお世話になりました。経済的に支援して下さった米山記念奨学会、カウンセラーの小暮進勇様をはじめとした越谷東ロータリー・クラブのロータリーアンたちに、御礼申し上げます。

最後に、最大の愛と信頼で私を支え続けてくれた家族にも感謝します。社会人生活を経て、研究の道を志すという私の選択を応援してくれました。家族の精神的な支えがなければ、論文を完成させることはできませんでした。ありがとうございました。

2019年9月1日